一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXIII

鳥取県鳥取市気高町

常松大谷遺跡Ⅱ

2016

鳥取県教育委員会

常松大谷遺跡Ⅱ

二〇一六　鳥取県教育委員会

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXⅢ

鳥取県鳥取市気高町

常松大谷遺跡Ⅱ

２０１６

鳥取県教育委員会

序

山陰自動車道は、鳥取市を起点に国土交通省が整備を進める、延長380キロメートルの自動車専用道路です。

鳥取県内の事業区間である「鳥取西道路」は、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長19.3キロメートルの区間で、その改築事業に伴う事前の発掘調査を平成20年度から当教育委員会が実施しています。平成21年度からは、財団法人鳥取県教育文化財団（平成25年度から公益財団法人に移行）に現地での発掘調査や出土遺物等の整理作業、報告書作成を委託して調査を進めているところです。

常松大谷遺跡は、平成25年度から2箇年をかけて調査を行い、河内川右岸の弥生時代から鎌倉時代を中心とした人々の営みを明らかにしてきました。このうち平成25年度に調査を行った「1－1区」は、『常松大谷遺跡Ⅰ』として平成27年12月に刊行しました。本書では、平成26年度に調査を行った「1－2区」の成果を報告します。平成25年度に引き続き、弥生時代から古墳時代の水田や古墳時代の竪穴建物を検出し、当地の歴史を物語る重要な資料を加えることができました。本書が、この地域の歴史を解明する一助として活用されることを期待するものです。

また現地説明会を開催し、発掘調査成果について、地元を中心とした多くの方々に紹介してまいりました。このような取り組みは、先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝えることとして、現代に生きる私たちの重要な責務と考えております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所並びに地元関係者の皆様をはじめ、多くの方々に多大なる御助言、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成28年12月

鳥取県教育委員会

教育長　山本　仁志

例　言

1　本書は、一般国道９号（鳥取西道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、平成 26 年度に実施した常松大谷遺跡（１－２区）の発掘調査報告書である。

2　常松大谷遺跡（１－２区）は、鳥取市気高町常松字大谷 107－1、109－1、134－1、135、137 に所在する。調査面積は 800㎡である。現地調査は、平成 26 年４月１日から同年９月 22 日まで行い、調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の作成は、平成 28 年 12 月まで行った。

3　本調査の略号は「常松大谷遺跡 14（１－２区）」である。出土品などの注記には「ツネ大 14」の略号を用いた。

4　発掘調査の監理については、公益財団法人鳥取県教育文化財団（以下財団）に委託した。

5　発掘調査に際し、埋蔵文化財発掘調査支援業務委託（常松大谷遺跡・常松普田遺跡）島田組・アイコンヤマト共同企業体の支援を受けた。遺跡での掘削作業、記録作成と測量作業は、財団の指示のもと、共同企業体が実施した。

6　調査で作成した図面の再編集、出土遺物の整理作業や記録作成は財団に委託し、同財団の文化財主事と整理作業員が行った。

7　本書の執筆は財団文化財主事 西山昌孝、同文化財主事 森本のぞみが分担して行い、文末に文責を記した。編集は西山が行った。

8　本調査に係る図面、写真等の記録類や出土遺物は、全て台帳等に登録して収納しており、随時検索できる状態で鳥取県埋蔵文化財センターで保管している。

9　出土した墨書土器の釈読は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の指導を受けた。
墨書土器の釈読にあたっては渡邉晃宏、馬場　基、山本　崇、桑田訓也、山本祥隆、吉岡直人、中村一郎の諸氏に御指導、御助言いただいた。

10　現地調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々、機関から、様々な御指導、御助言、御支援をいただいた。記して感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。

加川　崇、山田真宏、公益財団法人大阪府文化財センター、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、鳥取市埋蔵文化財センター、常松地区自治会
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

凡　例

1　本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づいている。図中のＸ・Ｙ座標は国土座標第Ⅴ系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示している。

2　標高は海抜標高で示した。

3　本報告書に使用した地図は、国土地理院発行（1/25,000、1/200,000 地形図）を縮小、加筆して使用した。また第２図に使用した地図は、測量法第 43 条に基づく複製承認を得て、鳥取市都市計画図を複製したものである（承認番号平成 27 年６月 15 日付け鳥取市指令受都都第 63 号）。

4　本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定した。地層観察用アゼの観察面はシートで被覆するなどして、湿った状態を保つように留意した。また、地層の粒度の記載に関しては、地質学で標準的に用いられる Wentworth の区分を使用した。同一地層内に粒度が幅をもって認められるときには、より主体を占める粒径を先にして、「シルト～粗砂」、「極粗砂～細砂」のように記載した。

5　遺構番号、遺構名の設定の仕方については第１章第２節で詳述した。

6　遺構平面図や断面図の縮尺は統一していないが、挿図ごとにスケールバーと縮尺を示した。

7　遺物実測図の縮尺については、土器・陶磁器を 1/4、1/8、土製品を１/3、石器を１/1、１/3、木製品を 1/4、1/5、１/10 で示した。

8　遺物実測図の断面は、■：須恵器、▒：瓦質土器とし、それ以外のものは白抜きで示した。

9　遺物観察表中の法量にある△は残存高を、（　）は復元径を表す。

目　次

序・例言・凡例
第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の方法と経過 …… 2
第３節　調査の体制 …… 5
第２章　位置と環境
第１節　遺跡の立地と地理的環境 …… 7
第２節　歴史的環境 …… 9
第３章　１－２区の調査
第１節　調査区の概要 …… 14
第２節　基本層序 …… 14
第３節　遺　構
第１項　９面 …… 21
第２項　10面 …… 24
第３項　11面 …… 29
第４項　14面 …… 33
第５項　16面 …… 35
第６項　17・18面 …… 39
第７項　19面 …… 52
第８項　21面 …… 61
第９項　22面 …… 65
第10項　23面 …… 72
第４節　出土遺物
第１項　遺構出土遺物 …… 77
第２項　包含層出土遺物 …… 82
遺物観察表（土器・石器・木器） …… 113
第４章　自然科学分析
第１項　分析試料について …… 121
第２項　分析方法 …… 121
第３項　分析結果 …… 122
第４項　年代測定結果について …… 134
第５項　微化石分析結果に基づく古環境変遷 …… 134
第６項　まとめ …… 141
第５章　総　括
はじめに

第１節　遺構の変遷 …… 149
第２節　常松大谷遺跡出土の墨書土器 …… 153
おわりに
報告書抄録

挿図一覧

第 1 図　鳥取西道路予定地と調査地の位置
第 2 図　調査地位置図
第 3 図　地区割（グリッド）概念図
第 4 図　調査地地区割図
第 5 図　鳥取県と遺跡の所在地
第 6 図　遺跡周辺の地形環境
第 7 図　周辺の遺跡
第 8 図　南東壁土層断面図 (1)
第 9 図　南東壁土層断面図 (2)
第 10 図　南壁土層断面図
第 11 図　中央トレンチ土層断面図
第 12 図　東側拡張部中央トレンチ土層断面図
第 13 図　9 面遺構配置図
第 14 図　1・2・3・4・7 溝、5・6 ピット平面図・断面図
第 15 図　10 面遺構配置図
第 16 図　欅列 1・2 平面図・断面図
第 17 図　東側拡張部ピット群
第 18 図　10 面その他のピット平面図・断面図 (1)
第 19 図　10 面その他のピット平面図・断面図 (2)
第 20 図　10 面その他のピット平面図・断面図 (3)
第 21 図　11 面遺構配置図
第 22 図　50・51 溝平面図・断面図
第 23 図　杭列 1 平面図・断面図
第 24 図　14 面遺構配置図
第 25 図　14 面その他のピット平面図・断面図
第 26 図　16 面遺構配置図
第 27 図　130・131 流路平面図・断面図
第 28 図　132 流路平面図・断面図
第 29 図　129 土坑平面図・断面図
第 30 図　17・18 面遺構配置図
第 31 図　竪穴建物 1 遺構配置図
第 32 図　竪穴建物 1 平面図・断面図 (1)
第 33 図　竪穴建物 1 平面図・断面図 (2)
第 34 図　竪穴建物 1 平面図・断面図 (3)
第 35 図　竪穴建物 1 平面図・断面図 (4)
第 36 図　133 土器溜り出土遺物ドット図
第 37 図　133 土器溜り遺物出土状況図 (1)
第 38 図　133 土器溜り遺物出土状況図 (2)
第 39 図　18 面水田、166・167 溝、143 土坑平面図・断面図
第 40 図　17・18 面その他のピット平面図・断面図 (1)
第 41 図　17・18 面その他のピット平面図・断面図 (2)
第 42 図　19 面遺構配置図
第 43 図　段状遺構 1 平面図・断面図
第 44 図　段状遺構 2 ・3 平面図・断面図
第 45 図　200・201・202・204・205 溝平面図・断面図
第 46 図　198・199・203 溝平面図・断面図
第 47 図　219 土坑、19 面その他のピット平面図・断面図 (1)
第 48 図　19 面その他のピット平面図・断面図 (2)
第 49 図　21 面遺構配置図
第 50 図　21 面直上遺物出土状況図、21 面水田配置図
第 51 図　21 面土器溜り出土遺物ドット図
第 52 図　220 ピット平面図・断面図
第 53 図　22 面遺構配置図
第 54 図　22 面水田配置図、227 水口平面図・断面図
第 55 図　228・229・230 水口平面図・断面図

第 56 図　223 溝、木造構造物平面図・断面図
第 57 図　221 土坑、222・224・225 ピット平面図・断面図
第 58 図　23 面遺構配置図
第 59 図　23 面水田配置図、231 水口平面図・断面図
第 60 図　226 溝平面図・断面図
第 61 図　10・11・14 面出土遺物、16 面出土遺物 (1)
第 62 図　16 面出土遺物 (2)
第 63 図　16 面出土遺物 (3)、17・18 面出土遺物 (1)
第 64 図　17・18 面出土遺物 (2)
第 65 図　17・18 面出土遺物 (3)
第 66 図　17・18 面出土遺物 (4)
第 67 図　17・18 面出土遺物 (5)
第 68 図　17・18 面出土遺物 (6)
第 69 図　17・18 面出土遺物 (7)
第 70 図　17・18 面出土遺物 (8)
第 71 図　19 面出土遺物
第 72 図　21 面出土遺物 (1)
第 73 図　21 面出土遺物 (2)
第 74 図　22 面出土遺物 (1)
第 75 図　22 面出土遺物 (2)
第 76 図　23 面出土遺物
第 77 図　包含層出土土器 (1)
第 78 図　包含層出土土器 (2)
第 79 図　包含層出土土器 (3)
第 80 図　包含層出土土器 (4)
第 81 図　包含層出土土器 (5)
第 82 図　包含層出土土器 (6)
第 83 図　包含層出土土器 (7)
第 84 図　包含層出土土器 (8)
第 85 図　包含層出土土器 (9)・その他の出土土器・石器 (1)
第 86 図　包含層出土石器 (2)
第 87 図　包含層出土木器
第 88 図　包含層出土銭貨
第 89 図　1－1区南壁の花粉ダイアグラム
第 90 図　1－1区 241 溝内の花粉ダイアグラム
第 91 図　1－2区南東壁・中央トレンチの花粉ダイアグラム
第 92 図　1－1区南壁の植物珪酸体ダイアグラム
第 93 図　1－2区南東壁・中央トレンチの植物珪酸体ダイアグラム
第 94 図　1－1区南壁の珪藻ダイアグラム
第 95 図　1－1区南壁の珪藻総合ダイアグラム
第 96 図　1－1区 241 溝内の珪藻ダイアグラム
第 97 図　1－1区 241 溝内の珪藻総合ダイアグラム
第 98 図　1－2区南東壁の珪藻ダイアグラム
第 99 図　1－2区南東壁の珪藻総合ダイアグラム
第 100 図　1－2区中央トレンチの珪藻ダイアグラム
第 101 図　1－2区中央トレンチの珪藻総合ダイアグラム
第 102 図　1－1区の年代値と層序
第 103 図　1－2区の年代値
第 104 図　^{14}C 年代 Phases 解析値
第 105 図　暦年比較正図 (1)
第 106 図　暦年比較正図 (2)
第 107 図　暦年比較正図 (3)
第 108 図　花粉分析
第 109 図　植物珪酸体分析
第 110 図　珪藻分析
第 111 図　主な遺構と遺構面
第 112 図　1－1区掘立柱建物2－2・3平面図・断面図、建物群配置図
第 113 図　鳥取県内墨書土器出土地
第 114 図　当遺跡出土墨書土器と内外面墨書土器
第 115 図　地名墨書土器

挿表一覧

表 1　土器観察表 (1)
表 2　土器観察表 (2)
表 3　土器観察表 (3)
表 4　土器観察表 (4)
表 5　土器観察表 (5)
表 6　土器観察表 (6)
表 7　土器観察表 (7)
表 8　石器観察表
表 9　木器観察表 (1)
表 10　木器観察表 (2)
表 11　分析試料一覧表
表 12　花粉化石組成表
表 13　植物珪酸体化石組成表
表 14　珪藻化石組成表
表 15　年代測定結果
表 16　年代測定 Phases 解析結果

図版一覧

図版 1　調査前、機械掘削
図版 2　9 面、10 面 (1)
図版 3　10 面 (2)、11 面 (1)
図版 4　11 面 (2)
図版 5　14 面、16 面 (1)
図版 6　16 面 (2)
図版 7　17・18 面 (1)
図版 8　17・18 面 (2)
図版 9　17・18 面 (3)
図版 10　17・18 面 (4)
図版 11　17・18 面 (5)
図版 12　17・18 面 (6)
図版 13　17・18 面 (7)
図版 14　17・18 面 (8)
図版 15　19 面 (1)
図版 16　19 面 (2)
図版 17　19 面 (3)
図版 18　21 面 (1)
図版 19　21 面 (2)
図版 20　22 面 (1)
図版 21　22 面 (2)
図版 22　22 面 (3)
図版 23　22 面 (4)
図版 24　23 面 (1)
図版 25　23 面 (2)、完掘
図版 26　16 面出土遺物
図版 27　17・18 面出土遺物 (1)
図版 28　17・18 面出土遺物 (2)
図版 29　17・18 面出土遺物 (3)
図版 30　17・18 面出土遺物 (4)
図版 31　17・18 面出土遺物 (5)
図版 32　17・18 面出土遺物 (6)、19 面・21 面出土遺物 (1)
図版 33　21 面出土遺物 (2)
図版 34　22 面出土遺物
図版 35　包含層出土土器 (1)
図版 36　包含層出土土器 (2)
図版 37　包含層出土土器 (3)
図版 38　包含層出土土器 (4)
図版 39　包含層出土石器・木器

第１章　調査の経緯

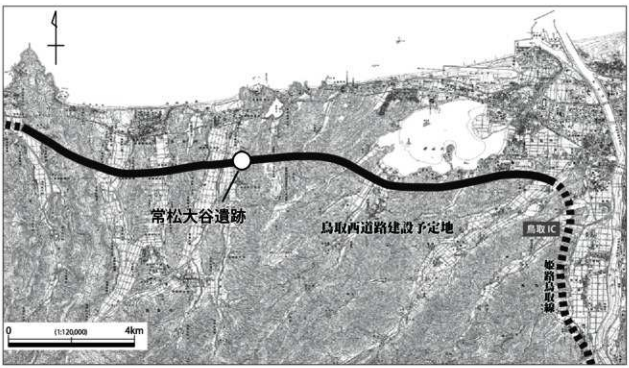
第１節　調査に至る経緯

鳥取県教育員会は、一般国道９号（鳥取西道路）改築工事に伴い、鳥取市常松大字大谷に所在する常松大谷遺跡の発掘調査を平成 25 年度から平成 26 年度にかけて実施した。

山陰地方では、産業経済の発展や観光振興、交通渋滞の解消と緩和、災害時の緊急輸送路の確保を目的として、山陰自動車道等の国土開発幹線道路の整備が進められている。鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長 19.3km の区間の鳥取西道路の整備もその一環であり、山陰自動車道の一部となる事業である。

鳥取西道路の計画地内には、数多くの遺跡が所在している。道路建設工事に先立って国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所（以下国土交通省）、鳥取県、鳥取市により埋蔵文化財の取扱いについて協議が持たれ、まず、計画地内に存在する埋蔵文化財の状況を把握する必要性が確認された。これを受け、平成 17 年度からは計画地内の踏査（分布調査）や鳥取市教育委員会による試掘調査が逐次進められた。

常松大谷遺跡（第１・２図）が位置する常松地区の道路計画地内では、平成 24 年度に鳥取市教育委員会が試掘調査を行い、弥生時代から中世にかけての遺構、遺物が確認された。この結果を受けて、計画地内の埋蔵文化財の取扱いについて国土交通省、鳥取県、鳥取市で協議した結果記録保存のための発掘調査が必要となり、文化財保護法第 94 条による手続きを踏まえ、道路建設工事に掛かる 1,505 ㎡を対象として記録保存のための発掘調査が行われることになり、鳥取県教育委員会（以下県教委）



第１図　鳥取西道路予定地と調査地の位置

は国土交通省の委託を受けて、平成 25 年度に 707㎡（1 － 1 区）、平成 26 年度に 800㎡（1 － 2 区）の発掘調査を実施した。県教委は 1 － 2 区の発掘調査に当たって、現場発掘作業、出土遺物の整理及び報告書の作成を公益財団法人鳥取県教育文化財団（以下財団）に再委託した。財団は、発掘作業、調査記録作業等について、島田組・アイコンヤマト共同企業体に発掘調査支援を委託した。本書で報告するのは平成 26 年度に実施した 1 － 2 区の発掘調査成果である。

なお、平成 25 年度調査分については、平成 27 年度に『常松大谷遺跡Ⅰ』として報告書を刊行した。

第 2 節　調査の方法と経過

第 1 項　調査の方法

1　調査地の地区割

（1）地区割の方法と名称（第 3・4 図）

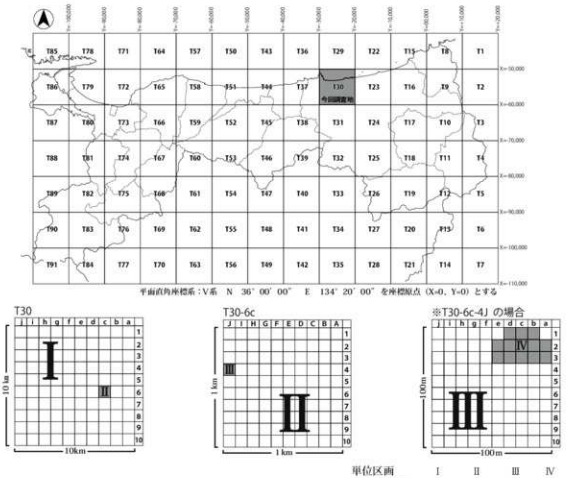
県教委が財団に委託した鳥取西道路関連の発掘調査では、調査成果の標準化を目的として、遺跡や遺構の位置表示や遺物の取上げ等に利用する地区割に、平面直角座標系の第Ⅴ系（世界測地系）を使用している。地区割については、10 m × 10 m（100㎡）の区画を基本的な最小単位とし、その名称（記号）については、以下のように設定した。

第Ⅰ区画　鳥取県の全域に設定した大区画である。10,000 m × 10,000 mで、1 ～ 91 の区画を設け、北東隅からＴ 1 ～Ｔ 91 の記号を付した。

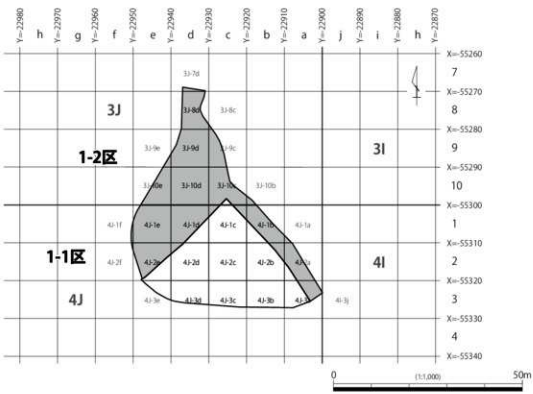
第Ⅱ区画　第Ⅰ区画の 1 区画内を、1,000 m × 1,000 mに 100 分割した区画である。第Ⅱ区画については、1 区画の南北軸に 1 ～ 10、東西軸に a ～ j を付し、1a ～ 10j の記号を付した。

第Ⅲ区画　第Ⅱ区画の 1 区画内を、100 m × 100 mに 100 分割した区画である。第Ⅲ区画については、1 区画の南北軸に 1 ～ 10、東西軸にＡ～ Ｊを付し、１Ａ ～ 10J の記号を付した。

第 2 図　調査地位置図



第３図　地区割（グリッド）概念図



第４図　調査地地区割図

第Ⅳ区画　第Ⅲ区画の１区画内を、10ｍ×10ｍに100分割した区画である。第Ⅳ区画については、１区画の南北軸に１～10、東西軸にａ～ｊを付し、1a～10jの記号を付した。

（２）常松大谷遺跡における地区割

本年度調査の範囲はT30（第Ⅰ区画）－6c（第Ⅱ区画）内に位置する。文中で遺構・遺物の位置について地区割を用いる際には、第Ⅰ区画・第Ⅱ区画の記号を省略し、第Ⅲ区画・第Ⅳ区画のみの記載とした。

２　発掘調査と記録の対象

（１）遺構名称の設定

遺構名称については、検出順に遺構番号を付与し、その性格が分かるものについては遺構番号の後に遺構の種別を組み合わせ、「１土坑、２溝」のように記載した。

遺構の種別は、個別遺構に溝・土坑・柱穴・ピット、集合遺構に竪穴建物・段状遺構・杭列等を使用した。柱穴とピットの区別については、建物の構造に関するものを柱穴、その他をピットとした。また、遺構の形成履歴の理解に必要な場合には、遺構ではないが「谷」という名称を使用した。

（２）図面記録および写真撮影

現地での記録作業は、支援業者の調査員と測量士が監理者の指示・確認を受けながら行った。

遺構全体の平断面図は、トータルステーションを用いた測量と簡易的な写真計測により作図した。

図面は、現地での一次記録である「素図」とこれを整理・統合しデジタル化した「編集図」を作成した。編集図は、主にベクトルデータで構成され、イラストレーターCS5での再編集が可能な形で保存（ai形式）している。なお、各図面には通し番号を付し、登録台帳を作成して管理した。

撮影にあたっては、中型（６×７判）一眼レフカメラと小型（35㎜判）一眼レフカメラを対象によって適宜選択した。また、全ての写真撮影において、デジタル一眼レフカメラ（センサーサイズAPS-C以上、有効画素数1200万画素以上）による撮影を行い、RAW･JPEG両形式で保存している。また、中型･小型一眼レフカメラに使用したフィルムは、富士フイルム社 プロビア100F（リバーサル）、富士フイルム社 ネオパン100ACROS（黒白フィルム）である。

なお、デジタル一眼レフカメラによる撮影にあたっては、撮影対象や日付等の撮影内容を記載した「写真ラベル」も合わせて撮影し、写真の管理に活用している。

（３）出土遺物の取上げ

遺物の取上げは、上記（本節第１項）の地区割に基づき行い、遺物取上カード及び遺物台帳に当該地区名を記入した。取上番号は、取上順に通し番号を付した。

（４）出土遺物の整理と記録

出土遺物については、現地での取上げ後、財団に持ち帰って、以下のような整理作業を行っている。

土器・土製品　洗浄、接合、注記（マーキング）、復元を行い、器種、形状が判明ないし復元できる個体の内から実測の対象を抽出した。

石器　洗浄、接合、注記（マーキング）を行い、器種や用途が判別できるものの他、使用痕が明瞭な個体の内から実測の対象を抽出した。

木製品　洗浄を行い、器種や用途が推定できる資料の内から遺存状況が良好なもの、または特徴的な加工が施されているものの内から実測の対象を抽出した。

金属製品　近世以降と判断されるものを除き実測を行った。

写真撮影　以上の出土遺物を対象に、デジタル一眼レフカメラ（センサーサイズ フルサイズ）で撮影を行った。

保管　図面、写真の記録類、出土遺物は全て台帳に登録して収納作業を行った。

第2項　調査の経過

調査は、4月1日から開始し、同日に基準点設置、水準測量などの事前の測量作業を実施した。

4月22日から重機による表土掘削を開始した。掘削は、東側拡張部の奥側から順次西側の方へ進めた。人力掘削は5月1日から開始した。最初に、谷の縦断方向の地層を確認、記録するための土層観察用アゼを調査区北東側と南側壁面に2本設定し、先行してトレンチを掘り下げて基本層序を把握、下層確認に努めた。前年度の成果から中世の遺構面から調査を始め、5月16日に9層上面の全景を撮影した。以降、各面において精査し、遺構を掘削・記録を行い調査を進め、9月19日に水田遺構を検出した23a面の全景写真を撮影し、9月22日に現地調査を終了した。（西山）

第3節　調査の体制

平成26年度

鳥取県教育委員会

教育長	山本　仁志

鳥取県教育委員会事務局文化財課

課長	木本　美喜
課長補佐	土山　和俊
歴史遺産室長	松井　潔
文化財主事兼係長	野口　良也
文化財主事	岡野　雅則

公益財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	井上　善弘（平成26年6月30日まで）
	野村　勇二（平成26年7月1日から）
事務局長	石本　富正
副主幹	岡田　美津子

調査室

室長	北浦　弘人（※1）
次長兼総務企画課長	中川　眞一（平成26年4月30日まで）
	民本　一美（平成26年5月1日から）
総務係長	川村　悟（※1）
主事	福島　亘（※1）
事務職員	田中　絵里子
	（兼事務局事務職員）
調査企画設計係長	玉木　秀幸（※1）
文化財主事	淺井　達也（※1）

第2工区担当

主幹	西川　徹（※1）
副主幹	駒井　正明（※2）
文化財主事	水村　直人（※1）
文化財主事	西山　昌孝（※1）
文化財主事	森本　のぞみ（※1）

平成26年度発掘調査支援業者

島田組・アイコンヤマト共同企業体	
現場代理人	中川健二
副現場代理人	中西靖憲

支援調査員	島田	裕弘
	藤本	信幸
	國分	篤志
調査補助員	中尾	君則
	結城	香
	小泉	健
	木下	満代
測量士	平井	利尚

平成 27 年度

鳥取県教育委員会

教育長	山本	仁志

鳥取県教育委員会事務局文化財課

課長	木本	美喜
課長補佐	土山	和俊
歴史遺産室長	松井	潔
文化財主事兼係長	野口	良也
文化財主事	北	浩明

公益財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	野村	勇二
事務局長	石本	富正（平成 27 年 6 月 30 日まで）
	畑中	弘子（平成 27 年 7 月 1 日から）
副主幹	岡田	美津子

調査室

室長	北浦	弘人（※1）
次長	民木	一美
総務係長	川村	悟（※1）
主事	西村	あかね（※1）
事務職員	田中	絵里子（兼事務局事務職員）
調査企画設計係長	玉木	秀幸（※1）
文化財主事	淺井	達也（※1）
主幹	西川	徹（※1）
副主幹	駒井	正明（※2）
文化財主事	水村	直人（※1）
文化財主事	西山	昌孝（※1）
文化財主事	森本	のぞみ（※1）

平成 28 年度

鳥取県教育委員会

教育長	山本	仁志

鳥取県教育委員会事務局文化財課

課長	片山	暢博
課長補佐	土山	和俊
歴史遺産室長	山枡	雅美
文化財主事兼係長	野口	良也
文化財主事	北	浩明

公益財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	野村	勇二
事務局長	畑中	弘子
副主幹	岡田	美津子

調査室

室長	牧本	哲雄（※1）
次長	民木	一美
主事	岡	梓
主事	西村	あかね（※1）
事務職員	田中	絵里子
調査企画設計係長	茶谷	満（※1）
副主幹	駒井	正明（※2）
文化財主事	西山	昌孝（※1）

※1　鳥取県教育委員会から派遣

※2　公益財団法人大阪府文化財センターから出向

第２章　位置と環境

第１節　遺跡の立地と地理的環境

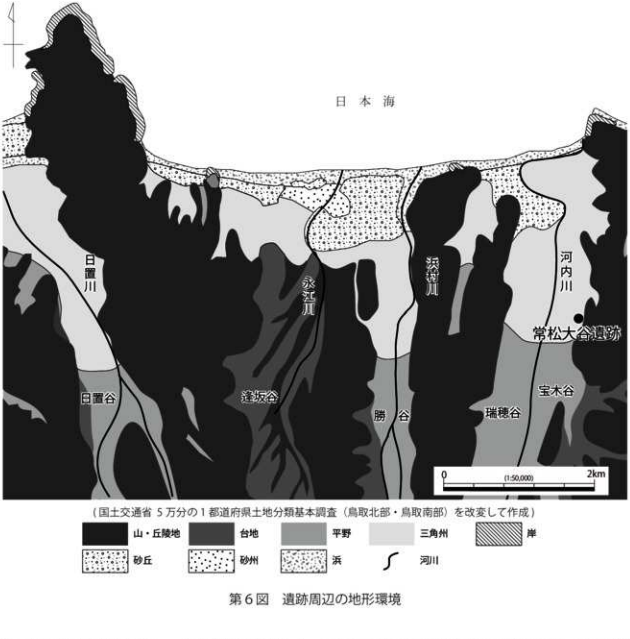
常松大谷遺跡は、鳥取県鳥取市気高町常松字大谷に所在する。鳥取県は中国山地の北部にあり、南北約 60km、東西約 120km と東西に長い県域である。中国山地は、扇ノ山と大山等の火山地、氷ノ山等の非火山地からなる。それらの山地が県土の約８割を占め、残りが沖積低地である。

鳥取県は、律令体制下では県東部を因幡国、中西部を伯耆国と呼称していた。遺跡の所在する鳥取市気高町は県東部にあり、因幡国に属した。昭和 30 年以降、気高町は青谷町・鹿野町と共に気高郡を構成した。平成 16 年には、気高町を含めた周辺の８つの町村と鳥取市は合併した。現在、鳥取市の面積は約 765.31㎢、人口は約 19 万人である（第５図）。

気高町は鳥取市の西部にあり、北は日本海、西は青谷町、南は鹿野町に接する。町内は、主に河川の浸食し残した山地、砂丘、谷筋を埋める沖積平野で構成される。河川の浸食によりできた山地のため、周辺に高峰は存在しない。鹿野町には中国山地の支脈、花崗岩類の基盤を覆った新第三紀鮮新世の安山岩によって形成された、独立峰である鷲峰山（標高 920 m）がそびえる。

気高町域の地質は、まず中生代白亜紀から新生代古第三紀に花崗岩類が形成される。新第三紀中新世になると、大規模な火山活動が起き、河原火砕岩層が堆積した。その後、鮮新世に安山岩質溶岩が噴出し、火砕流や火砕泥流となり堆積したのが白兎礫層である。第四紀更新世には、鉢伏山の火山活

第５図　鳥取県と遺跡の所在地



（国土交通省 5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査（鳥取北部・鳥取南部）を改変して作成）

第６図　遺跡周辺の地形環境

動により安山岩が流れ出し、溶岩台地を形成した。これらの岩石や地層が河流で侵食され、河谷が発達した。更新世中期になると大山が噴火を繰り返し、大山火山灰層が堆積し、河川が侵食してできた平地に土砂が堆積して完新世に沖積平野となる。以降は、海退や海進を繰り返し、後述する河岸段丘や砂丘が発達した。そして、入江が砂丘によって堰き止められ潟湖が形成された地区と、河川の運んだ土砂が埋積してできた沖積平野が広がる地区ができた。また、海岸域は、酒津西の礫浜を除いて、ほとんど砂丘地である。これは、河川により浸食・風化され海まで運び込まれた砂が海岸に打ち寄せられ、風の働きで陸地を覆い形成されたものである。一方、東部には近くの崖を形成する岩石や地層が崩れ落ちてできた礫や粗砂で構成された礫浜がある。

気高町から鹿野町にかけては、南北にわたる細長い丘陵性山地と谷底平野が４列に亘り平行する地形が残る。谷底平野は西から逢坂谷、勝谷（勝見谷）、瑞穂谷（坂本谷）、宝木谷（光元谷）である。勝谷や瑞穂・宝木谷では沖積地が、逢坂谷は大山中部火山灰層（倉吉軽石層）や上部火山灰層が堆積する河岸段丘が広がる。山地と谷底平野の間には、河内川や浜村川、永江川が流れる。鷲峰山の南西

麓に源を発して北流する河内川は、地殻変動に起因する断層線の発達により幾度も流路が変わる。氷河時代には比較的早い速度で逢坂谷を流れていたが、時代が下るにつれ勝谷に流路を変え、現在は瑞穂谷と宝木谷の間を流れる。当遺跡は、その河内川の東岸の丘陵裾にある谷の開口部に位置する（第６図）。

第2節　歴史的環境

気高町は、先述した河内川の度重なる流路変更により形成された谷底平野に所在する。そのため、谷ごとの様相を捉えながら、遺跡周辺の歴史的環境を概観する（第７図）。

【旧石器・縄文時代】

気高町で最も古い遺物は、八束水の砂丘地で槍先形尖頭器が採集されたが、出土経緯や位置は不明である。

鹿野町の柄杓目遺跡（101）で縄文時代早期の押形文土器の出土が知られるが、気高町で本格的な人間の活動が確認できるのは中期以降である。

中期には、河内川中流域の丘陵裾や下流域の砂丘で活動を確認した。瑞穂谷の土居に所在する正寿寺の裏、山麓斜面の土坑状遺構から土器が、短尾遺跡（39）でも土器や石鏃等を採集した。

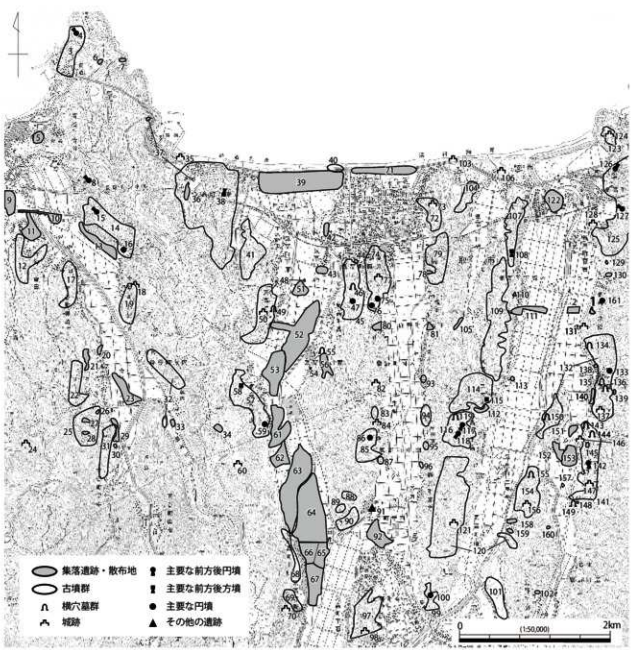
後期になるとさらに活動の場を広げ、逢坂谷の緩やかな傾斜地にある山宮笹尾遺跡（62）では落とし穴や土坑を検出した。この土坑からは後期から晩期の土器、石鏃、蛇紋岩製首飾り等が出土した。さらに高江では打製石斧、黒曜石製石斧を、郡家地内では打製石鏃を、山宮では磨製石斧を、殿では凹石を採集した。宝木谷の宝木高浜遺跡（122）から磨製石鏃と石斧が出土し、瑞穂谷の山裾にある柄杓目遺跡から後期の溝状遺構、晩期の土坑を検出した。

【弥生時代】

弥生時代には、日置谷の先端、勝部川と日置川によって形成された沖積平野に、青谷上寺地遺跡（９）がある。縄文時代終盤の洪水堆積等によって潟湖内に形成した微高地に、弥生時代前期から古墳時代前期に亘って集落が営まれた。その縁辺の溝から木製形代や卜骨、犠牲獣とみられる獣骨等祭祀関連遺物が出土し、集落で様々な祭祀を行ったことが分かる。周辺では水田が営まれ、集落等を自然から守るため、中期以降は区画溝の護岸・砂防柵・土留め柵・区画施設に木造構造物を設けた。生業を示す鋤・鍬類、石包丁等の農工具、漁労具が出土している。なお、気高町内では前期の様相は不明瞭である。

中期には、土坑を検出した上原遺跡（65）があり、常松普田遺跡（２）では玉製作跡を検出し注目される。逢坂谷では、後期まで継続する遺跡が展開する。上原南遺跡（67）、三王尻遺跡（61）、会下・郡家遺跡（52）で中期から後期の竪穴建物を検出した。

後期には、瑞穂谷にある柄杓目遺跡から竪穴建物と袋状土坑を検出した。また、日置谷の青谷町大口第１～３遺跡（26～28）、早牛宝免遺跡（30）、蔵内水船遺跡（33）でも集落が形成する等、分布域が広がる。下坂本清合遺跡（111）では、山裾側平坦面で検出した終末期の焼失竪穴建物から、炭化した垂木や茅等の建築部材が出土した。



１常松大谷遺跡　２常松管田遺跡　３長尾鼻古墳群　４長尾鼻１号墳　５青谷第１遺跡　６青谷第２遺跡　７青谷下和田所在遺跡　８東山古墳
９青谷上寺地遺跡　10 青谷イタラズ遺跡　11 善田御宗ヶ崎遺跡　12 善田古墳群　13 青谷横木遺跡　14 阿古山古墳群　15 阿古山２号墳　16 阿古山22号墳
17 奥崎古墳群　18 小丸山城　19 養郷古墳群　20 大坪イカウ松遺跡　21 大坪天神第２遺跡　22 大坪古墳群　23 大坪大縄手遺跡　24 山田城　25 大口古墳群
26 大口第１遺跡　27 大口第２遺跡　28 大口第３遺跡　29 カヤマ遺跡　30 早牛宝免遺跡　31 早牛古墳群　32 蔵内古墳群　33 蔵内水船遺跡
34 蔵内上長谷第２所在遺跡　35 姫路城跡 36 姫路所在遺跡　37 八束水古墳群　38 八束水７号墳　39 短尾遺跡　40 北短尾墳墓群　41 下原古墳群
42 八幡第１遺跡　43 八幡第２遺跡　44 谷奥所在遺跡　45 谷奥古墳群　46 谷奥横穴　47 谷奥１号墳　48 金下古墳群　49 金下横穴　50 金下城跡
51 金下遺跡　52 金下・郡家遺跡　53 睦逢遺跡　54 郡家遺跡　55 郡家寺ノ上横穴　56 郡家口三谷遺跡　57 睦逢古墳群　58 睦逢１号墳　59 睦逢11号墳
60 稗尾棚跡　61 三王尻遺跡　62 山宮笹尾遺跡　63 山宮笹山畑遺跡　64 山宮阿弥陀森遺跡　65 上原遺跡　66 上原西遺跡　67 上原南遺跡　68 上原古墳群
69 飯里古墳群　70 飯山城跡　71 西浜遺跡　72 浜村古墳群　73 浜村城跡　74 勝見古墳群　75 勝見15号墳　76 勝見17号墳　77 勝山城跡　78 梶掛遺跡
79 梶掛古墳群　80 乙亥正屋敷遺跡　81 乙亥正大角遺跡　82 勝山城跡　83 観音山古墳群　84 観音山城跡　85 西中園古墳群　86 西中園８号墳
87 西中園遺跡　88 谷田遺跡　89 宮谷遺跡　90 寺内古墳群　91 寺内廃寺　92 寺内京南遺跡　93 寄馬場遺跡　94 東中園遺跡　95 石ヶ谷遺跡
96 宮方遺跡　97 馬池古墳群　98 下石城跡　99 神越谷古墳群　100 神越谷６号墳　101 柄杓目遺跡　102 閘野１号墳　103 郷ヶ脇城　104 日光古墳群
105 日光長谷遺跡　106 矢口神屋跡　107 西山古墳群　108 西山１号墳　109 下坂本古墳群　110 下坂本遺跡　111 下坂本清合遺跡　112 二本木第１遺跡
113 二本木第２遺跡　114 二本木古墳群　115 二本木７号墳　116 重高古墳群　117 重高４号墳　118 重高５号墳　119 清谷横穴　120 土居古墳群
121 丸山城跡　122 宝木高浜遺跡　123 酒津古墳群　124 湊山砲跡　125 宝木古墳群　126 宝木１号墳　127 宝木16号墳　128 富吉城跡　129 常松第１遺跡
130 常松第２遺跡　131 堤知光城跡　132 下光元古墳群　133 下光元３号墳　134 持木横穴　135 大杉横穴墓　136 堤谷横穴墓　137 大杉城跡
138 夏ヶ谷遺跡　139 下光元第１遺跡　140 下光元第２遺跡　141 上光古墳群　142 上光10号墳　143 後谷横穴墓　144 高尾口横穴墓　145 上光第１遺跡
146 弥平衛山城跡　147 上垣城跡　148 灰谷遺跡　149 灰谷横穴墓　150 山崎横穴　151 狭間遺跡　152 戸島遺跡　153 馬場遺跡　154 宿古墳群
155 西分横穴　156 熊ヶ坪城跡　157 夏ヶ谷遺跡　158 宿第１遺跡　159 宿第２遺跡　160 熊ヶ坪遺跡　161 常松１号墳

第７図　周辺の遺跡

さらに、上原遺跡で長方形プランの木棺墓、上原南遺跡で方形周溝墓、会下・郡家遺跡で中期から後期の土壙墓、睦逢遺跡（53）で木棺墓を検出した。

【古墳時代】

古墳時代に入っても、会下・郡家遺跡（52）、山宮阿弥陀森遺跡（64）、上原南遺跡で前期の竪穴建物が検出される等、逢坂谷では弥生時代に引き続き集落が営まれた。山宮茶山畑遺跡では、前期から中期の竪穴建物を検出している。その他にも大口第1～3遺跡（26～28）やカヤマ遺跡（29）、鹿野町の寺内京南遺跡（92）等の各谷で前期の集落を形成した。中期の調査は少ないが、瑞穂・宝木谷の常松菅田遺跡で掘立柱建物や溝、当遺跡で建物群を想定する段状遺構がある。後期も常松菅田遺跡で集落から掘立柱建物8棟、当遺跡で竪穴建物や掘立柱建物を検出した。

古墳について見ると、前期は瑞穂・宝木谷に方墳の二本木7号墳（115）がある。地山整形後に盛土しており、墳丘中央から小型器台、周溝から土師器の複合口縁壺が出土した。

中期は古墳の数が増加する。瑞穂・宝木谷では、旧気高郡内最大の古墳である前方後方墳の西山1号墳（全長約47m）（108）・八束水7号墳（38）をはじめ、前方後円墳の重高4・5号墳（117・118）、上光10号墳（142）、宝木1・16号墳（126・127）が出現する。勝見古墳群の箱式石棺には、「V」字状石枕を検出した15号墳（75）、仿製捩文鏡を副葬する17号墳（76）がある。

後期には、丘陵に群集墳を形成する。この地域では、板状節理輝石安山岩（鉢伏山板状安山岩）の巨石で構築した横穴式石室が多く、装飾古墳や横穴墓が混在する。装飾古墳は、勝谷の西中園8号墳（86）で綾杉文、睦逢11号墳（59）で鳥・格子状・綾杉文等の線刻壁画を確認した。西側丘陵にある谷奥1号墳（47）の横穴式石室から、須恵器と銅鏡、金環、金銅製刀装具、有蓋の脚付銅鋺、馬鐸、玉類等が出土した。瑞穂・宝木谷丘陵の古墳群には、横穴墓が集中する。重高古墳群（116）の漆谷横穴（119）は四注式ドーム型天井を有し、石室内には綾杉文の線刻がある。下光元3号墳（133）は、側石の上に割石を小口積みする特殊な箱式石棺で、勝谷の神越谷6号墳（100）は時期が不明であるが同じ構造を持つ。本遺跡北側丘陵にある常松1号墳（161）は、未調査で時期は不明である。

【古代】

律令体制下、気高町は因幡国気多郡に属する。『和名類聚抄』によると大原郷・坂本郷・口沼郷・勝見郷・大坂郷・日置郷・勝部郷の7郷で構成しており、当遺跡は大原郷に属する。7世紀以降官道が整備され、山陰道が設けられた。因幡国内には山埼駅、佐尉駅、敷見駅、気多郡に所在した柏尾駅があり、4つの駅家を経て伯耆国の笏賀駅へと向かう。山陰道と推定する道路状遺構が、青谷横木遺跡や青谷上寺地遺跡で検出している。

当時の政治的拠点である気多郡衙は、逢坂谷に所在する山宮阿弥陀森遺跡と上原遺跡に比定される。8世紀前半以前の古い段階の郡庁があったとする山宮阿弥陀森遺跡は、長大な建物を配置し、「郡家一」、「中」、「智」と記した墨書土器、転用硯等が出土した。9世紀以降の郡庁とされる上原遺跡は、正殿と二面廂付大型掘立柱建物と後殿が設けられ、「郡」、「大領」と記した墨書土器、転用硯、鞆羽口、塼仏、多量の瓦が出土した。上原南遺跡では、7世紀後半から10世紀の郡関連施設と推定する掘立柱建物や柵列を確認した。上原西遺跡（66）で検出した総柱建物は面積が小さく、正倉の一部か否か判然としない。また、青谷横木遺跡（13）では、「日置郷」と記した出挙の返納に関する木簡や「沽

買布納帳」「天暦□年」と記した題箋軸が出土し、正倉別院を伴う郡衙の出先施設と推定される。

気多郡東部には、7世紀後半から8世紀初めの政庁の出先施設とされる戸島遺跡（152）、7世紀末ないし8世紀初めから9世紀頃まで続く出先施設、あるいは正倉別院とされる馬場遺跡（153）がある。会下・郡家遺跡では10世紀頃の大型掘立柱建物群を検出し、それらを区画する溝や道路状遺構から、公的施設の存在が想定される。その南西には、倉庫群を含む掘立柱建物を検出した、豪族の居館とする睦逢遺跡がある。鹿野町では、郡寺と推定する寺内廃寺（91）で塔心礎を検出し、因幡国西部の寺院や上原遺跡と同文の細弁十二葉蓮華文軒丸瓦、藤原宮式軒丸瓦が出土した。この他、上原遺跡群周辺の三王尻遺跡、山宮茶山畑遺跡（63）、山宮笹尾遺跡で集落が営まれた。

当地域では、律令祭祀の様相が明らかになりつつある。カヤマ遺跡では土馬が、大坪イカウ松遺跡（20）・善田傍示ヶ崎遺跡（11）・常松菅田遺跡・常松大谷遺跡では斎串や形代等が、青谷横木遺跡では4,000点以上の木製祭祀具が出土しており、日置谷周辺では律令祭祀が盛んであった。

【中世以降】

瑞穂・宝木谷を流れる河内川西岸に所在する下坂本清合遺跡では、流路を中心に平安時代後期から鎌倉時代の建物群を検出し、銅印や流路から多数の漆器椀が出土した。勝谷の勝見15号墳では、平安時代末から鎌倉時代初め頃、墳丘上に経塚が築かれた。出土した土師質の経筒外容器には、「藤井□□／惣〻甘造候也」の墨書がある。

鎌倉時代には、会下・郡家遺跡で土壙墓と掘立柱建物を検出し、中国・朝鮮の陶磁器類が出土した。その他、上原南遺跡で土壙墓と掘立柱建物、柄杓目遺跡で石組の溝状遺構、寺内京南遺跡では墓域を確認した。南北朝・室町時代の遺跡は少ないが、勝谷にある寺内京南遺跡で土壙墓を検出し、周辺から同時期の宝篋印塔が出土した。

戦国時代に築かれた鹿野城跡は、中世文書では山口県文書館蔵『譜録』永禄6（1563）年を初見とするが、現存する建物礎石や堀は近世段階の遺構である。城の北東側、瑞穂谷にある柄杓目遺跡では、鹿野城の前段階にあたる15世紀末から16世紀の建物施設に付属すると考えられる石組の溝状遺構を検出した。瑞穂谷にある下坂本清合遺跡で段状遺構・地下式坑を検出し、備前四耳壺に納められた大量の埋蔵銭が出土した。

『因幡誌』には、宝木谷に富吉城（128）、勝谷に勝山城（77）等の山城が描かれる。大杉城（137）は山麓の集落の南に堀切や曲輪が見られ、本遺跡南側の丘陵頂部には、大杉城の出城と伝わる堤知光城跡（131）がある。（森本）

参考文献

青谷町教育委員会　1982『カヤマ遺跡試掘調査報告書』
青谷町教育委員会　1989『大口遺跡群発掘調査報告書』
青谷町教育委員会　1995『大口第3遺跡発掘調査報告書』
青谷町教育委員会　1995『青谷町内遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
勝見15号墳発掘調査団　1978『勝見15号墳発掘調査報告書』気高町教育委員会
気高町教育委員会　1975『二本木7号墳発掘調査報告書』

気高町教育委員会　1977『気高町誌』気高町
気高町教育委員会　1979『鳥取県気高郡上原遺跡発掘調査概報』
気高町教育委員会　1981『北見尾遺跡発掘調査報告書』
気高町教育委員会　1982『逢坂地域遺跡群発掘調査報告書』
気高町教育委員会　1985『逢坂地域遺跡群発掘調査報告書』
気高町教育委員会　1987『気高町埋蔵文化財発掘調査報告書』
気高町教育委員会　1988『気高町埋蔵文化財発掘調査報告書』
気高町教育委員会　1988『上光遺跡群発掘調査報告書』
気高町教育委員会　1993『馬場遺跡発掘調査報告書』
気高町教育委員会　1998『山宮 14 号墳発掘調査報告書』
（独）奈良文化財研究所　2003『上原遺跡群発掘調査報告書－古代因幡国気多郡衙推定地－』気高町教育委員会
鹿野町教育委員会　1982『鹿野城跡調査概報』
鹿野町教育委員会　1988『鹿野町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
鹿野町教育委員会　1989『柄杓目遺跡Ⅰ』
鹿野町教育委員会　1990『柄杓目遺跡Ⅱ』
鹿野町教育委員会　1991『鹿野町内遺跡発掘調査報告書』
関西大学文学部考古学研究室　1979『寺内廃寺発掘調査概報Ⅰ』鹿野町教育委員会
関西大学文学部考古学研究室　1979『寺内廃寺発掘調査概報Ⅱ』
関西大学文学部考古学研究室　1982『寺内廃寺発掘調査概報Ⅲ』鹿野町教育委員会
関西大学文学部考古学研究室　1982『寺内京南遺跡発掘調査報告』－ほ場整備に伴う調査－鹿野町教育委員会
新修気高町誌編纂委員　2006『新修 気高町誌』
鳥取県教育委員会　2002『鳥取県中世城館分布調査報告書』1（因幡編）
鳥取県埋蔵文化財センター　2014『青谷上寺地遺跡 13』第 13・14 次発掘調査報告書
鳥取県埋蔵文化財センター　2015『下坂本清合遺跡―焼失住居一般公開資料―』
鳥取県埋蔵文化財センター　2015『埋蔵文化財専門職員研修「遺物調査検討課程」』
（公財）鳥取県教育文化財団　2015『常松普田遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会
（公財）鳥取県教育文化財団　2016『下坂本清合遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会
（財）鳥取市文化財団　2007『大坪イカウ松遺跡』（第１分冊）
（公財）鳥取市文化財団　2014『常松大谷遺跡（丘陵部）』
（公財）鳥取市文化財団　2014『善田傍示ヶ崎遺跡』
豊島吉則他　1993『鳥取県のすぐれた自然－地形・地質編－』鳥取県衛生環境部自然保護課
錦織　勤　2013『古代中世の因伯の交通』鳥取県史ブックレット 12
平凡社地方資料センター　1992『鳥取県の地名』平凡社
山枡雅美・濵　隆造・岩垣　命　2014「青谷平野における律令的祭祀－因幡国－」『古代文化』66－３（公財）古代学協会

第３章　１－２区の調査

第１節　調査区の概要

調査地は、鳥取市気高町の南から北へ開く開析谷である宝木谷の東側丘陵より、西へ向って開く大谷と呼ばれる小開析谷に位置する。

前年度（１－１区）の調査では、中･近世の田畑を始め、鎌倉時代の建物や溝･土坑、平安時代の建物、奈良時代の祭祀遺物を含む破堤堆積層、古墳時代後期の建物、古墳時代前期の土坑、そして弥生時代後期の水田を検出し、狭小な谷内に重層的な遺構面を検出した。

今年度（１－２区）の調査では、１－１区から続いて遺構が広がると考え、前年度の中世以降に遺構面を設定し調査を行った。その結果、古墳時代後期の竪穴建物や土器溜り、古墳時代前期から弥生時代後期の水田等を検出した。（西山）

第２節　基本層序

今年度調査では、前年度調査との整合を図りながら層序を決定した。調査区は谷の開口部に位置するため、前年度と同様に同一層でも谷部と高台部ではかなり層相は異なった。土層はａ層（氾濫堆積物を母材とする土壌層）とｂ層（自然堆積層）に区別し、１ａ～31ｂ層に分層した。

1a 層～ 3a 層　今年度調査では対応層はない。

4a 層　東側の丘陵裾を除いた、中央調査区全域に堆積する耕作土である。5YR6/2 灰褐色砂質シルトで、厚さ約５～ 12cm を測る。粘性は弱く、締まりも弱い。径５～７cm 大の角礫～亜円礫が混じる。土師器・須恵器・瓦質土器が出土した。

5a 層　今年度調査で対応層はない。

6a 層　６－１ａ層は、中央調査区の南東に存在する耕作土である。5YR5/2 灰褐色砂質シルトで、厚さ約５～ 18cm を測る。粘性はなく、締まりはややある。中～粗粒砂が混じる。南東壁断面で確認できたものの、平面的な堆積状況は不明である。６－２ａ層は、10YR8/2 灰白色砂質シルトで、厚さ約 10cm を測る。粘性は弱く、締まりはややある。６ａ層下面では、溝５条とピット２基を検出した。土師器・須恵器・瓦質土器が出土した。

7a・8a 層　今年度調査で対応層はない。

9 層　９ａ層は、南東壁で確認できるものの、調査区全体には広がらない。5YR4/8 赤褐色砂質シルトで、厚さ約 15cm を測る。粘性はなく、締まりはややある。中～粗粒砂が混じる。

９－１ａ～９－６ａ層は、中央調査区北西側の谷開口部から北側の高台部にのみ堆積し、耕作段差を構成する層である。いずれも東部に向かうにつれ、収斂する。９－１ａ層は 5YR6/2 灰褐色砂質シルトで厚さ約 10cm を測る。粘性はややあり、締まりもややある。９－２ａ層は 7.5YR6/2 灰褐色砂質シルトで、厚さ約 10cm を測る。粘性はややあり、締まりもややある。９－３ａ層は 5YR5/1 褐灰

色砂質シルトで、厚さ約4～12cmを測る。粘性はややあり、締まりもややある。9層内で最も暗色を呈す。9－4a層は7.5YR7/1明褐灰色砂質シルトで、厚さ約20cmを測る。粘性はややあり、締まりもややある。当層は、橙色シルトブロックをまばらに含む。9－5a層は7.5YR6/1褐灰色砂質シルトで、厚さ約5cmを測る。粘性はややあり、締まりもややある。9－6a層は10YR7/1灰白色砂質シルトで、厚さ約5～35cmを測る。粘性はややあり、締まりもややある。9－2a層～6a層下面で溝2条と杭列を検出した。9層全体から土師器・須恵器・瓦質土器・青磁・白磁・銭貨「開元通宝」（初鋳621年）が出土した。

10a層　中央調査区の南東壁周辺で部分的に確認した土壌層である。7.5YR6/8橙色砂質シルトで、厚さ約5cmを測る。粘性はややあり、締まりもややある。10a層上面では、東側拡張部にてピットを検出した（10面）。

11a層　中央調査区では10～15cm、東側拡張部では最厚約56cmを測る土壌層である。7.5YR6/4にぶい橙色砂質シルトで、粘性は弱く、締まりも弱い。中～粗粒砂が混じる。中央調査区の南西側に向かって収束する。11a層下面でピット3基を検出した（14面）。土師器・須恵器・黒色土器・瓦質土器が出土した。

12a・13a層　今年度調査では対応層はない。

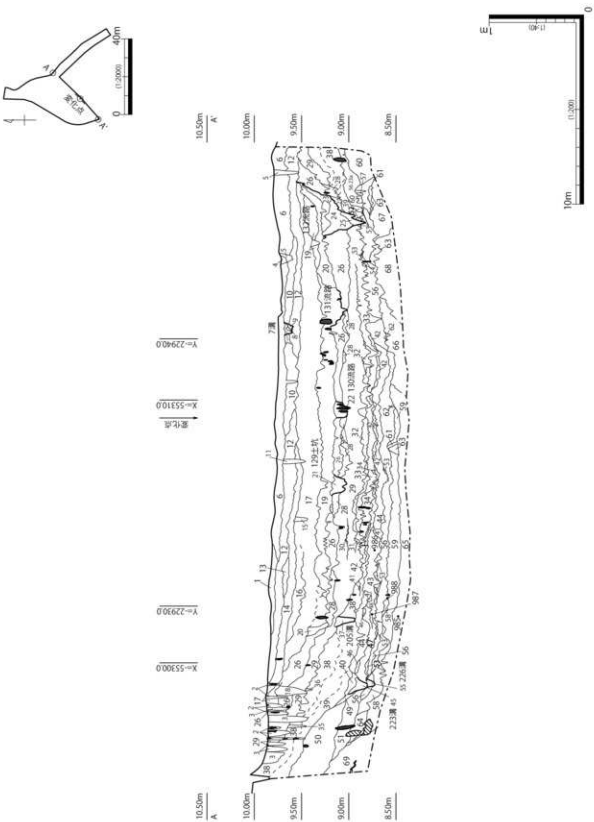
14－1a層　約20～40cmで、谷部にのみ存在する土壌層である。7.5YR6/6橙色シルト質細～中粒砂で、最厚約50cmを測る。粘性があり、締まりもややある。中央調査区北東の丘陵際に向かって、橙色シルトブロックを多く含み色調が明るくなる。土師器・須恵器が出土した。特筆すべき遺物に、当遺跡所在地の字名と同じ「大谷」と墨書された8世紀代の須恵器高台付杯の破片がある。

15－3b層　前年度調査区でも確認された、中央調査区の南東から北西方向に向かって流れこむ破堤堆積層である。東側拡張部と中央調査区の高台部を除く、谷部の広範囲にて確認できる。7.5Y7/1灰白色細～粗粒砂で、厚さ約8～40cmを測る。粘性はなく、締まりもない。径2～10cmの角礫を多く含み、淘汰は悪い。層を構成する砕屑物は、場所によって様相が異なる。谷部の中央付近では、角礫や粗粒砂等比較的粒径の大きいものが多いが、中央調査区の北東側にある中央トレンチ付近では細粒化し、シルト質が強くなる。15－3b層下面で溝3条、土坑1基を検出した（16面）。土師器・須恵器が出土した。

16a層　中央調査区全域に堆積する暗色化が進んだ土壌層である。5YR2/1黒褐色砂質シルトで、5～40cmを測る。粘性があり、締まりはややある。谷部ではグライ化が進み粘性があるが、東側拡張部や丘陵側部分では、赤褐色や橙色系の明るい色調が強くなり、粘性も弱まる。16a層下面で竪穴建物を1棟とこれに関連するピット・土器溜り等を検出した（17・18面）。竪穴建物1は貼床が施されており、その上面と下面で主柱穴を確認した。そのため、少なくとも1回の建て替えがあったと考える。掘立柱建物1の南東側には133土器溜りがあり、古墳時代後期の土師器・須恵器・竈等が出土した。

17a層　最も残りの良い中央調査区北西部で厚さは約50cmを測るが、南東壁では壁面の中央付近で5cm程度の厚さで堆積する土壌層である。10YR6/1褐灰色砂質シルトで、粘性があり、締まりもある。中央調査区西側では約40cmの厚さで堆積するが、上層からの削平のため、中央調査区中程以東にはほとんど存在しない。土師器・須恵器が出土した。

18'a層　中央調査区西部の谷部で、部分的に残る水田耕作土である。N6/0灰色砂質シルトで、厚



第８図　南東壁土層断面図 (1)

1	4a 層	5YR6/2 灰褐色砂質シルト	粘性弱い　締まり弱い　径５～7cm 大の角礫～亜円礫混じる
2	ピット	5PB4/1 暗青灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い
3	ピット	10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト	粘性弱い　締まり弱い
4		5P6/1 紫灰色砂質シルト	粘性なし　締まりなし　中～粗粒砂混じる
5		7.5YR4/6 褐色砂質シルト	粘性なし　締まりややあり　細～粗粒砂混じる
6	6-1a 層	5YR5/2 灰褐色砂質シルト	粘性弱い　締まりややあり　中粒砂～粗粒砂混じる
7	7 溝	7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト	粘性なし　締まりややあり　細～中粒砂混じる
8	7 溝	7.5YR5/3 にぶい褐色砂質シルト	粘性弱い　締まりややあり　中～粗粒砂混じる
9	7 溝	2.5YR4/1 赤灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
10	6-2a 層	10YR8/2 灰白色砂質シルト	粘性弱い　締まりややあり
11	ピット	5YR5/2 灰褐色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり 10YR6/1 褐灰色粘土ブロック混じる
12	9a 層	5YR4/8 赤褐色砂質シルト	粘性なし　締まりあり　中～粗粒砂混じる
13	10a 層	7.5YR6/8 橙色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
14	11a 層	7.5YR6/4 にぶい橙色砂質シルト	粘性弱い　締まり弱い　中～粗粒砂多く混じる
15	ピット	7.5YR7/4 にぶい橙色砂質シルト	粘性弱い　締まり弱い　中～粗粒砂多く混じる
16		7.5YR7/3 にぶい橙色シルト質細～中粒砂	粘性あり　締まりややあり
17	14-1a 層	7.5YR6/6 橙色シルト質細～中粒砂	粘性あり　締まりややあり
18		5YR4/4 にぶい赤褐色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
19	15-3b 層	7.5Y7/1 灰白色細～粗粒砂	粘性なし　締まりなし　径２～10cm の礫多く含む　破堆堆積
20		7.5Y7/1 灰白色細～粗粒砂	粘性なし　締まりなし　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土ブロック混じる
21	129 土坑	7.5Y7/1 灰白色細～粗粒砂	粘性あり　締まりややあり　16a 層を含む
22	130 流路	7.5Y6/1 灰色シルト質細粒砂・5Y8/1 灰白色細粒砂・2.5Y8/1 灰白色中～極粗粒砂（約 5cm の礫混じる）の互層	粘性なし　締まりなし
23	132 流路	10YR6/1 褐灰色シルト質中～細粒砂	粘性なし　締まりあり
24	132 流路	10YR8/2 灰白色シルト質細粒砂～粗粒砂	粘性なし　締まりあり
25	132 流路	7.5Y7/1 灰白色細～粗粒砂	粘性なし　締まりなし　３～10cm の角礫多く含む　破堆堆積
26	16a 層	5YR2/1 黒褐色砂質シルト	粘性あり　締まりややあり
27		5YR4/1 褐灰色砂質シルト	粘性あり　締まりややあり　細粒砂混じる
28	17a 層	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	粘性あり　締まりあり
29	18a 層	10BG3/1 暗青灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりなし
30		5Y7/3 浅黄色シルト質中粒砂	粘性ややあり　締まりなし　10BG3/1 暗青灰色シルト混じる
31		5Y7/3 浅黄色シルト質中粒砂	粘性ややあり　締まりなし　10BG6/1 青灰色シルト混じる
32		10BG6/1 青灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりなし
33		10YR3/1 黒褐色シルト	粘性ややあり　締まりなし 5B4/1 暗青灰色砂質シルトブロック混じる
34		5Y7/3 浅黄色シルト質中粒砂	粘性ややあり　締まり弱い　径３～5mm の礫混じる
35	ピット	10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
36	ピット	10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
37	205 溝	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性ややあり　締まりなし 7.5YR8/6 浅黄橙色細粒砂ブロック混じる
38	19a 層	10G2/1 緑黒色砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い
39		10Y6/1 灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりあり　炭化物混じる
40	20b 層	10Y6/1 灰色砂質粘土	粘性ややあり　締まりあり
41		5Y8/1 灰白色シルト	粘性なし　締まりなし
42		5PB7/1 明青灰色シルト	粘性なし　締まりなし
43	21a 層	5GY7/1 明オリーブ灰色砂質シルト	粘性弱い　締まり弱い
44	21b 層	10R6/2 灰赤色中～極粗粒砂	粘性なし　締まりなし　２～3mm の礫混じる
45	223 溝	2.5GY7/1 明オリーブ灰色シルト～細粒砂	粘性なし　締まりなし　１～３cm の礫少し混じる
46		10YR7/3 にぶい黄橙色シルト質中粒砂	粘性なし　締まりなし
47	22a 層	5G6/1 緑灰色砂質シルト	粘性弱い　締まりややあり
48	22b 層	5G5/1 緑灰色シルト質中粒砂	粘性弱い　締まりなし
49		2.5YR5/1 赤灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い
50		10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト	粘性あり　締まりあり
51		2.5Y5/1 黄灰色シルト	粘性ややあり　締まり弱い　径５～10mm の礫混じる
52		7.5Y8/1 灰白色細粒砂	粘性なし　締まりなし
53		5BG7/1 明青灰色シルト	粘性なし　締まりなし
54		5B5/1 青灰色シルト	粘性なし　締まりなし
55	226 溝	10Y7/1 灰白色シルト質中～粗粒砂	粘性弱い　締まりなし
56	23a 層	5B4/1 暗青灰色シルト質粗粒砂～砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い
57	ピット	5B6/1 青灰色砂質シルト	粘性なし　締まり弱い　5B4/1 暗青灰色シルト質粗粒砂混じる
58		10Y4/1 灰色シルト質砂	粘性あり　締まりややあり
59	23b 層	10G6/1 緑灰色細粒砂	粘性なし　締まりなし
60		10YR8/3 浅黄橙色中～粗粒砂	粘性なし　締まりなし
61		5B6/1 青灰色砂質シルト	粘性なし　締まり弱い
62		5B3/1 暗青灰色細～中粒砂	粘性なし　締まり弱い
63		10YR7/6 明黄褐色中～粗粒砂	粘性なし　締まりややあり
64		10GY6/1 緑灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い
65	27b 層	10BG6/1 青灰色砂質シルト	粘性あり　締まりなし　腐植土混じる
66	28b 層	5G6/1 緑灰色シルト	粘性あり　締まりなし
67	29b 層	7.5YR7/6 橙色中～粗粒砂	粘性なし　締まりなし　径 5cm の礫・腐植土混じる
68	30b 層	5Y5/1 灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い　径３～5mm の礫・腐植土混じる
69	31b 層	10Y6/2 オリーブ灰色シルト	粘性あり　締まりややあり

第９図　南東壁土層断面図 (2)

さ約５cm を測る。粘性は弱く、締まりも弱い。自然科学分析の結果、大量のプラントオパールを含み、下面で溝２条を検出した（18 面）。土師器・須恵器が出土した。前年度調査で対応層はない。

18a 層　調査区のほぼ全域に堆積する土壌層である。10BG3/1 暗青灰色砂質シルトで、厚さ約 15 ～ 40cm を測る。粘性はややあり、締まりはない。南東壁では、厚さ数 cm の間層を確認した。また、層下部では下層を攪拌している様子が観察できる。丘陵際に向かって、橙色系の色調を帯びる。18a 層下面で段状遺構３基・溝８条・ピット等を検出した（19 面）。土師器・須恵器が出土した。

19a 層　中央調査区北部から東側拡張部の高台部にかけて、厚さ 40cm 程度で存在し、遺物を多量に含む層である。10G2/1 緑黒色砂質シルトで、厚さ約 20 ～ 55cm を測る。粘性はややあり、締まりは弱い。19a 層下面から土坑１基を検出した。弥生土器・土師器が出土した。

20b 層　東側拡張部から南東壁の北東部で確認した、北側高台部に存在する自然堆積層である。10Y6/1 灰色砂質粘土で、厚さ約 10 ～ 25cm を測る。粘性はややあり、締まりもある。

21a 層　谷北半部を中心に見られる水田耕作土層である。5GY7/1 明オリーブ灰色砂質シルトで、厚さ約 10cm を測る。粘性は弱く、締まりも弱い。20b 層の下層にある 5PB7/1 明青灰色シルトの自然堆積に覆われた、古墳時代前期の水田を検出した（21 面）。弥生土器・古墳時代前期の土師器が出土した。

21b 層　南東壁で部分的に確認した自然堆積層である。10R6/2 灰赤色中～極粗粒砂で、厚さ約 10cm を測る。粘性はなく、締まりもない。径２～３mm の礫が混じる。

22a 層　谷部の東側に残る水田耕作土層である。5G6/1 緑灰色砂質シルトで、厚さ約 10 ～ 15cm を測る。粘性は弱く、締まりはややある。21b 層の下層にある 10YR7/3 にぶい黄橙色シルト質中粒砂の自然堆積層に覆われた、古墳時代前期の水田を検出した（22 面）。弥生土器・土師器が出土した。

22b 層　谷部全域に広がる自然堆積層である。5G5/1 緑灰色シルト質中粒砂で、中央トレンチの中程では厚さ約 10cm を測る。南東部では上層からの攪拌が進んでおり、ほとんど存在しない。

23a 層　中央調査区全域に堆積する水田耕作土層である。5B4/1 暗青灰色シルト質粗粒砂～砂質シルトで、厚さ約 10 ～ 20cm を測る。粘性はややあり、締まりは弱い。22b 層の下層にある５BG7/1 明青灰色シルト、5B5/1 青灰色シルト等の自然堆積層に覆われた、弥生時代後期の水田を検出した（23 面）。弥生土器が出土した。自然科学分析を行い、年代測定 Phases 解析で暦年較正年代 AD25 ～ 102 年（２σ）の結果を得た。

23b 層　10G6/1 緑灰色細粒砂で、厚さ約 10cm を測る。粘性はなく、締まりもない。本層以下は自然堆積層が連続しており、遺物は出土しなかった。

27b 層　10BG6/1 青灰色砂質シルトで、厚さ約 20cm 以上を測る。粘性はあり、締まりはない。腐食土が多く混じる。自然科学分析を行い、年代測定 Phases 解析で暦年較正年代 BC231 ～ 168 年（２σ）の結果を得た。

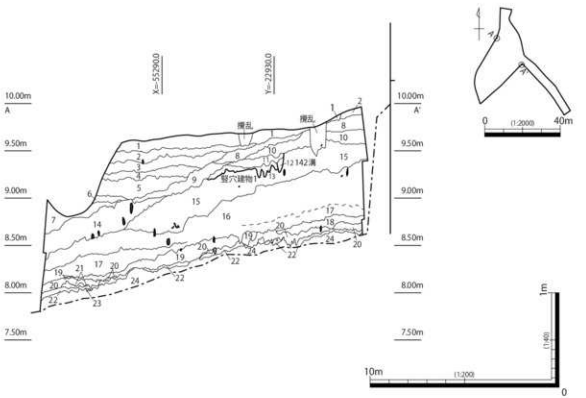
28b 層　5G6/1 緑灰色シルトで、厚さ約 20cm 以上を測る。粘性はあり、締まりはない。

29b 層　7.5YR7/6 橙色中～粗粒砂で、厚さ約 25cm 以上を測る。粘性はなく、締まりもない。径５cm 程度の礫や腐植土が混じる。

30b 層　5Y5/1 灰色砂質シルトで、厚さ約 25cm 以上を測る。粘性はややあり、締まりは弱い。径３～５mm 程度の礫や腐植土が混じる。

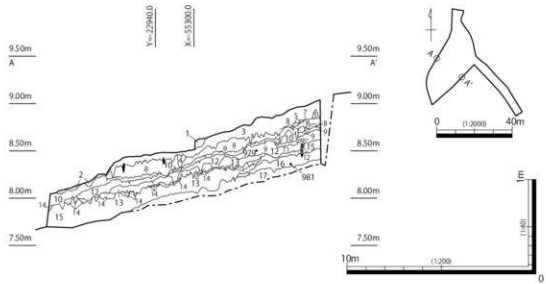
31b 層　10Y6/2 オリーブ灰色シルトで、厚さ約 45cm 以上を測る。粘性はあり、締まりはややある。

（森本）



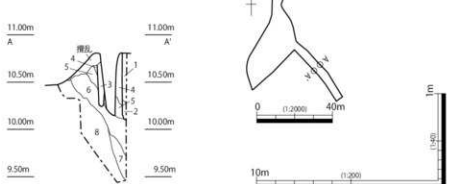
1	4a 層	5YR6/2 灰褐色砂質シルト	粘性弱い　締まり弱い 5 ～ 7cm 大の角礫～亜円礫混じる
2	9-1a 層	5YR6/2 灰褐色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
3	9-2a 層	7.5YR6/2 灰褐色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
4	9-3a 層	5YR5/1 褐灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
5	9-4a 層	7.5YR7/1 明褐灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
6	9-5a 層	7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
7	9-6a 層	10YR7/1 灰白色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
8	11a 層	7.5YR6/4 にぶい橙色砂質シルト 中～粗粒砂多く混じる	粘性弱い　締まり弱い
9	15-3b 層	7.5Y7/1 灰白色細～粗粒砂	粘性なし　締まりなし 3 ～ 10cm の角礫多く含む　破堤堆積
10	16a 層	5YR2/1 黒褐色砂質シルト	粘性あり　締まりややあり
11	竪穴建物１	7.5YR4/4 褐色砂質シルト	粘性あり　締まりなし
12	142 溝（竪穴建物１壁溝）	7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い
13	竪穴建物１　貼床	5YR6/1 褐灰色砂質シルト	粘性なし　締まりややあり
14	17a 層	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	粘性あり　締まりあり
15	18a 層	10BG3/1 暗青灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりなし
16	19a 層	10G2/1 緑黒色砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い
17		2.5Y5/1 黄灰色シルト	粘性ややあり　締まり弱い 5 ～ 10mm の礫混じる
18	23a 層	5B4/1 暗青灰色シルト質粗粒砂～砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い
19		5B4/1 暗青灰色シルト質粗粒砂～砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い 10Y5/2 オリーブ灰色中～ 粗粒砂ブロック多く混じる
20		10Y4/1 灰色シルト質中粒砂	粘性あり　締まりややあり
21		7.5Y6/3 オリーブ黄色シルト質中粒砂	粘性なし　締まりなし
22		10YR2/3 黒褐色シルト	粘性あり　締まりなし　腐植土
23		10YR2/3 黒褐色細粒砂	粘性あり　締まりなし　腐植土
24	27b 層	10BG6/1 青灰色砂質シルト	粘性あり　締まりなし　腐植土混じる

第 10 図　南壁土層断面図



1	17a 層	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	粘性あり　締まりあり　砂が少ない
2	18'a 層	N6/0 灰色砂質シルト	粘性弱い　締まり弱い
3	18a 層	10YR3/1 黒褐色シルト	粘性ややあり　締まりなし
4		10YR3/1 黒褐色シルト	粘性ややあり　締まりなし　径３～5cm の礫混じる
5		10YR6/6 明黄褐色中粒砂	粘性なし　締まりなし　18a 層・径３～10cm の礫混じる
6		10YR4/1 褐灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりなし
7		10YR7/2 にぶい黄橙色シルト質細～中粒砂	粘性なし　締まりなし　10YR4/1 褐灰色砂質シルト混じる
8		5Y7/3 浅黄色シルト質中粒砂	粘性ややあり　締まり弱い　径３～5mm の礫混じる
9		5PB7/1 明青灰色シルト	粘性なし　締まりなし
10	21a 層	5GY7/1 明オリーブ灰色砂質シルト	粘性弱い　締まり弱い
11		10YR7/3 にぶい黄橙色シルト質中粒砂	粘性なし　締まりなし
12	22a 層	5G6/1 緑灰色砂質シルト	粘性弱い　締まりややあり
13	22b 層	5G5/1 緑灰色シルト質中粒砂	粘性弱い　締まりなし
14		5BG7/1 明青灰色シルト	粘性なし　締まりなし
15	23a 層	5B4/1 暗青灰色シルト質砂～砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い
16	25b 層	10G6/1 緑灰色細粒砂	粘性なし　締まりなし
17	27b 層	10BG6/1 青灰色砂質シルト	粘性あり　締まりなし　腐植土

第 11 図　中央トレンチ土層断面図



1	24 ピット	7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
2	24 ピット	N5/0 灰色砂質粘土	粘性あり　締まり弱い　7.5YR3/4 暗褐色砂質シルトブロック混じる
3	47 ピット	7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり
4	11a 層	7.5YR6/4 にぶい橙色砂質シルト	粘性弱い　締まり弱い　中～粗粒砂多く混じる
5	16a 層	5YR2/1 黒褐色シルト	粘性あり　締まりややあり
6	19a 層	10G2/1 緑黒色砂質シルト	粘性ややあり　締まり弱い
7	20b 層	10Y6/1 灰色砂質粘土	粘性ややあり　締まりあり
8	31b 層	10Y6/2 オリーブ灰色シルト	粘性あり　締まりややあり

第 12 図　東側拡張部中央トレンチ土層断面図

第３節　遺　構

前年度（１－１区）と同様、調査区は谷にあり、丘陵上から同じ土が何度も堆積したため土質の変化が少なく、遺構の検出は困難であった。そのため、明らかに帰属する遺構面で検出できず下面で検出した場合は、本来帰属していた遺構面の遺構に戻して記述した。しかし、帰属する遺構面が明確でない場合は、検出した遺構面で記述する。

第１項　９面（第13図、図版２）

１　概　要

９面は、６ａ層の砂質シルトを除去して検出した遺構面である。１－１区の調査では、本面で中世の掘立柱建物を検出した。今年度の調査でも中世の遺構が検出される可能性が高く、同一面で精査を行ったが、建物は検出できなかった。しかし、これに関連すると考える溝を確認した。遺構は溝５条・ピット２基を検出した。

２　調査の成果

（１）溝　（第14図）

１・２・３溝

3J－10d グリッドに位置する。並行する３条の溝で、１溝は幅 0.21m、２溝は幅 0.19 ～ 0.56m、３溝は幅 38 ～ 60m、深さはそれぞれ 2cm を測る。上層からの耕作溝と考える。遺物は出土しなかった。

４溝

4J－10e・d、4J－1e・d グリッドに位置する。幅 0.50 ～ 0.84 m、深さ２cm を測る。軸線はＮ－47°－Ｅを示し１－１区の掘立柱建物１と並行する方位にある。弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器が出土した。

７溝

4J－2e グリッドに位置する。１－１区より続く溝で、幅 0.13 ～ 0.37m、深さ約２cm を測る。上層からの遺構と考える。遺物は出土しなかった。

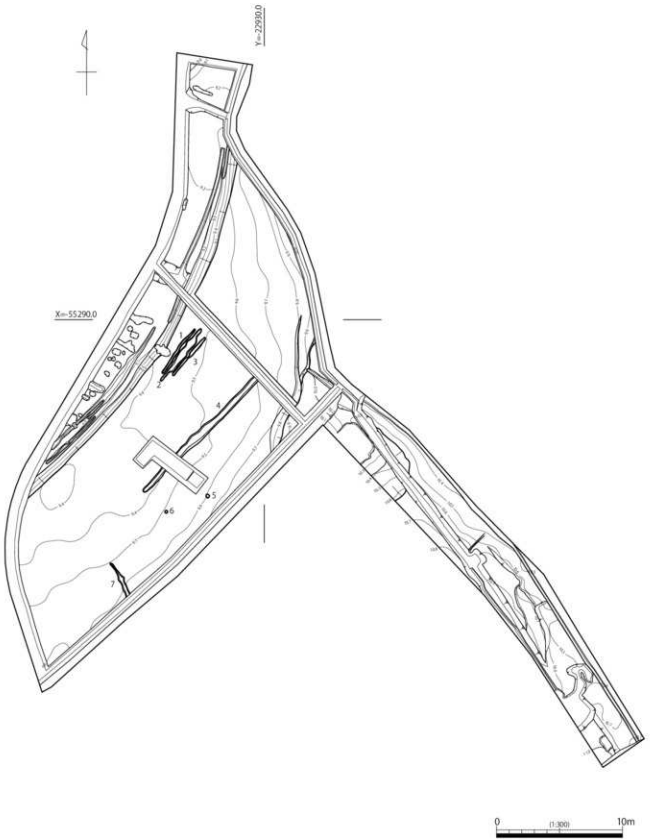
（２）ピット　（第14図）

５ピット

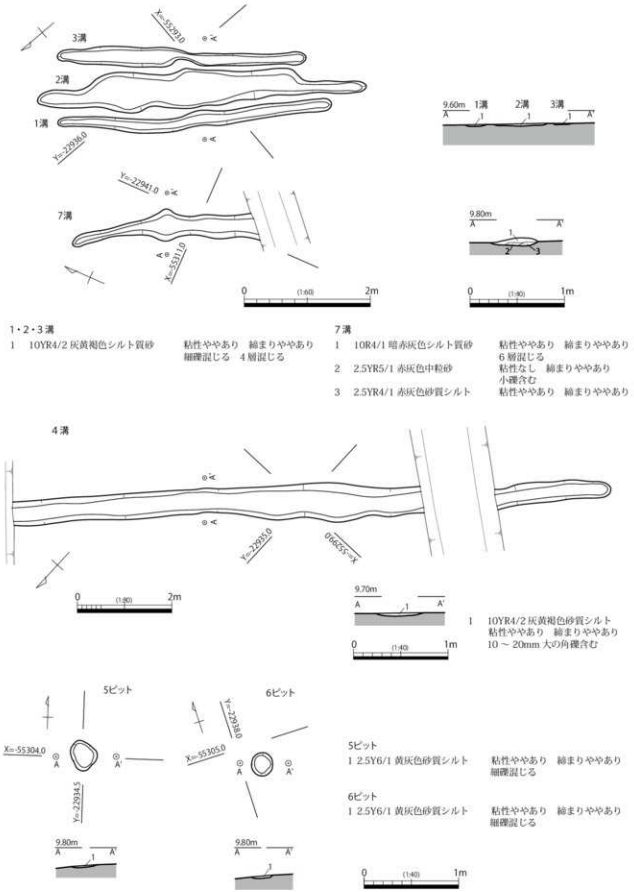
4J－1d グリッドに位置する。掘方は楕円形で径約 30cm、深さは浅く 2cm を測る。遺物は出土しなかった。

６ピット

4J－1d グリッドに位置する。掘方は円形で径 22cm、深さ 2cm を測る。５ピットと同じ様に非常に浅い。遺物は出土しなかった。　（西山）



第 13 図　９面遺構配置図



1・2・3溝

1	10YR4/2 灰黄褐色シルト質砂	粘性ややあり　締まりややあり 細礫混じる　4 層混じる	

7溝

1	10R4/1 暗赤灰色シルト質砂	粘性ややあり　締まりややあり 6 層混じる
2	2.5YR5/1 赤灰色中粒砂	粘性なし　締まりややあり 小礫含む
3	2.5YR4/1 赤灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり

1	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり 10 ～ 20mm 大の角礫含む

5ピット

1	2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり 細礫混じる

6ピット

1	2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト	粘性ややあり　締まりややあり 細礫混じる

第 14 図　１・２・３・４・７溝、５・６ピット平面図・断面図

第２項　10面（第15図、図版２）

１　概　要

10面は、９－１a層の砂質シルトを除去して検出した遺構面である。１－１区の調査では、本面で古代の掘立柱建物を検出しており、今年度の調査でも、これに対応する遺構を確認した。遺構はピット35基・柵列２条を検出した。

２　調査の成果

（１）柵　列　（第16図、図版３）

東側拡張部内で連続するピット列が検出できたが、並行するピット列がなく、建物として復元できない。２間以上に延びるものはないが、斜面に位置するため柵列として報告する。時期は、棚列の遺構ではないが、39ピットより平安時代前期の甕が出土したことから古代の遺構と考える。

柵列１

3J－10b、4J－1bグリッドに位置する。14・15・16ピットで構成する柵列である。軸線はN－58°－Wを示し掘方は円形で径25～38cm、深さ４～10cmを測る。遺物は出土しなかった。

柵列２

4J－2aグリッドに位置する。37・38・40ピットで構成する柵列である。軸線はN－35°－Wを示し、径22～26cmを測る。深さは攪乱下面の検出のため明確ではないが、検出面より約7～25cm、底面の高さは標高10.42～10.45mを測る。遺物は37・38ピットから土師器が出土した。

（２）ピット　（第17～20図）

稜線の斜面下にある東側拡張部で検出した。この部分は１－１区の柱穴群に続く位置にある。東側拡張部の北西側はすぐに斜面がせまっており、建物を建てる空間はなく、柱穴群の端にあたる。

11ピット

4J－1bグリッドに位置する。溝状の攪乱内から検出した。掘方は楕円形で長径49cm、短径43cm、深さ61cmを測る。柱痕が観察できる。土師器が出土した。

12ピット

4J－1bグリッドに位置する。溝状の攪乱内から検出した。掘方は円形で径43cm、残存する深さ48cmを測る。柱痕が観察できる。土師器が出土した。

18ピット

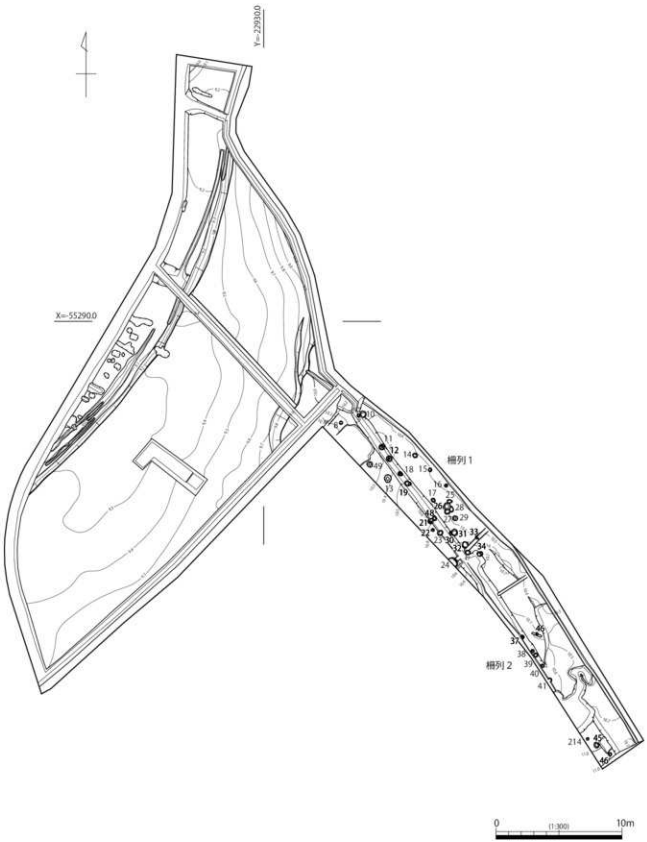
4J－1bグリッドに位置する。溝状の攪乱底から検出したため、ほぼ柱痕の部分しか残っていない。掘方は楕円形で長径37cm、短径31cm、残存する深さ28cmを測る。遺物は出土しなかった。

21ピット

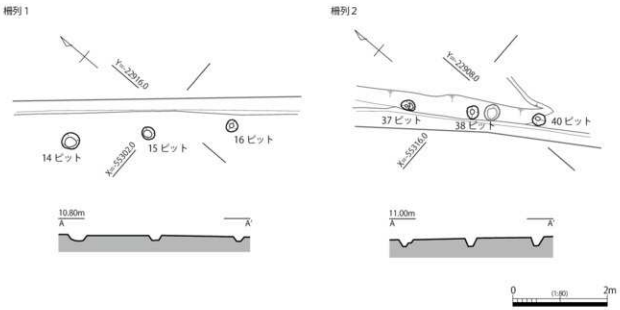
4J－1bグリッドに位置する。掘方は楕円形で長径43cm、短径38cm、攪乱を受けていない部分で深さ46cmを測る。柱痕が観察できる。土師器が出土した。

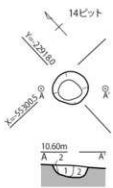
23ピット

4J－1bグリッドに位置する。掘方は楕円形で長径45cm、短径34cm、攪乱を受けていない部分で深さ56cmを測る。土師器（Po1）が出土した。

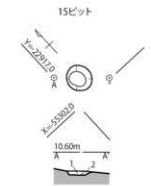


第 15 図　10 面遺構配置図

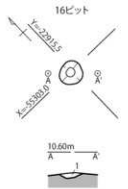




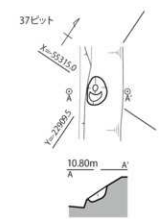
1 5Y7/2 灰白色砂質粘土
粘性あり　締まりあり
2 5YR5/4 にぶい赤褐色砂質粘土
粘性あり　締まり弱い



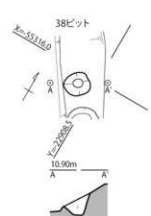
1 5Y7/2 灰白色砂質粘土
粘性あり　締まりあり
2 5YR5/4 にぶい赤褐色砂質粘土
粘性あり　締まり弱い



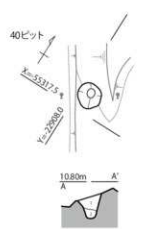
1 5Y7/2 灰白色砂質粘土
粘性あり　締まりあり



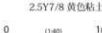
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト
粘性あり　締まりなし
2.5Y7/8 黄色粘土質砂ブロック混じる



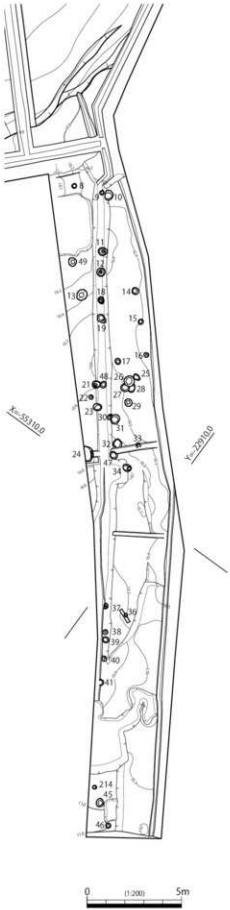
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト
粘性あり　締まりなし
2.5Y7/8 黄色粘土質砂ブロック混じる



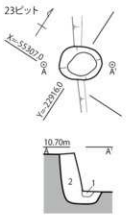
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト
粘性あり　締まりなし
2.5Y7/8 黄色粘土質砂
ブロック混じる
2 5YR5/1 褐灰色粘土
粘性あり　締まりなし



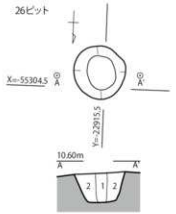
第 16 図　柵列１・２平面図・断面図



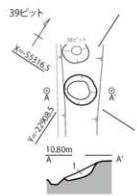
第 17 図　東側拡張部ピット群



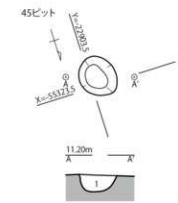
1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト　粘性ややあり
締まりややあり 10YR6/1 褐灰色シルト質
中粒砂ブロック混じる
2 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト　粘性ややあり
締まりややあり　2.5YR6/6 橙色砂質シルト
ブロック混じる



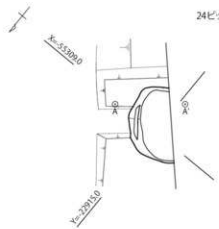
1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト　粘性ややあり
締まりややあり
2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト　粘性や
ややあり　締まりややあり



1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト　粘性ややあり
締まりややあり 10YR6/1 褐灰色シルト質
中粒砂ブロック混じる



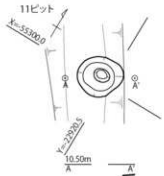
1 2.5Y4/1 黄灰色シルト　粘性あり
締まりなし　2.5Y7/8 黄色粘土質砂
ブロック混じる



1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト　粘性ややあり　締まりややあり
2 N5/0 灰色砂質粘土　粘性あり　締まり弱い
7.5YR3/4 暗褐色砂質シルトブロック混じる

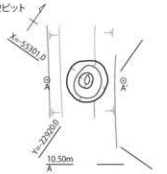
第 18 図　10 面その他のピット平面図・断面図 (1)

11ピット



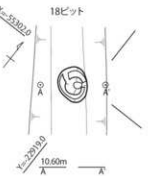
1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり

12ピット



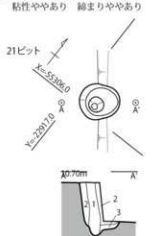
1 N5/0 灰色砂質粘土
　粘性あり　締まり弱い
2 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
4 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり

18ピット



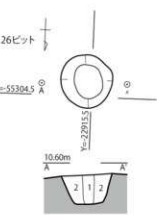
1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり

21ピット



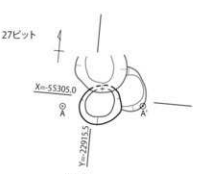
1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
　10YR6/1 褐灰色シルト質中粒砂
　ブロック混じる
2 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
　2.5YR6/6 橙色砂質シルトブロック混じる
3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり

26ピット



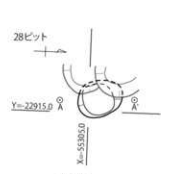
1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり

27ピット



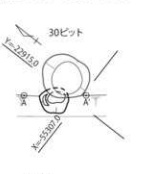
1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
2 N5/0 灰色砂質粘土
　粘性あり　締まり弱い
　7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト
　ブロック混じる

28ピット

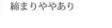


1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
　10YR6/1 褐灰色シルト質 中粒砂ブロック混じる
2 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり

30ピット



1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり



第 19 図　10 面その他のピット平面図・断面図 (2)

第 20 図　10 面その他のピット平面図・断面図 (3)

24 ピット

4J － 1b グリッドに位置する。掘方は楕円形で径約 77cm、深さ 74cm を測る。南西側は１－１区へ延びる。古墳時代の土師器・須恵器（Po2）が出土した。

26 ピット

4J － 1b グリッドに位置する。掘方は円形で径約 54cm、深さ 35cm を測る。柱痕が観察できる。須恵器が出土した。

31 ピット

4J － 1b グリッドに位置する。掘方は円形で径 46cm、深さ 36cm を測る。柱痕が観察できるが、痕跡は掘方底面まで達しない。土師器が出土した。

39 ピット

4J － 2a グリッドに位置する。掘方は円形で径約 35cm、最も深い部分で深さ 18cm を測る。平安時代前期の土師器甕（Po3）が出土した。

45 ピット

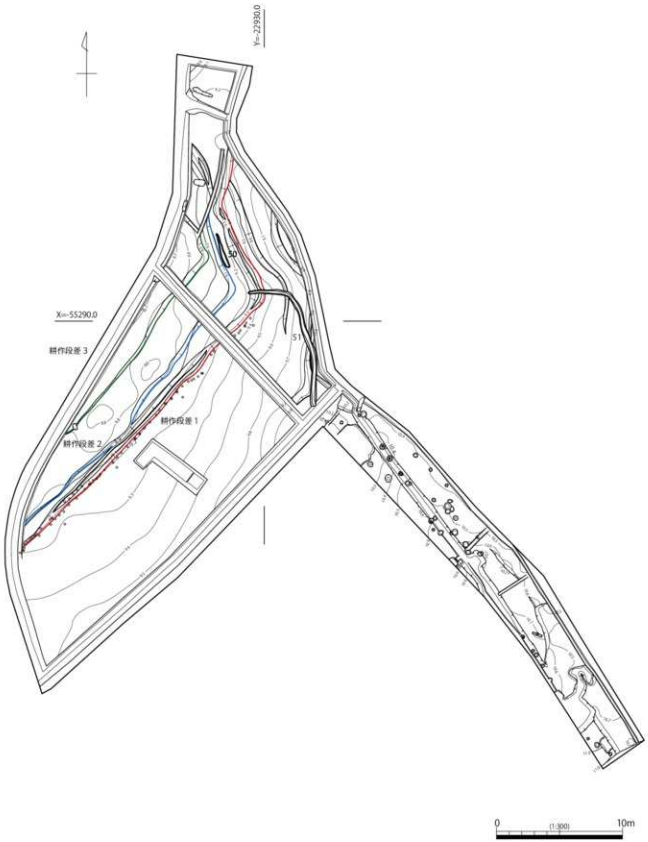
4J － 3a グリッドに位置する。掘方は円形で径約 40cm、深さ 17cm を測る。弥生土器（Po4）が出土した。　（西山）

第３項　11 面（第 21 図、図版３）

１　概　要

11 面は、10a 層の砂質シルトを除去して検出した遺構面である。１－１区の調査では、本面で杭列を検出した。遺構は耕作面と溝２条・杭列を検出した。

なお、当初は耕作段差上面の部分にある包含層を 10a 層と考えたが、本面掘削中に出土遺物に中世の遺物が混じっており、10 面の掘り残しであることが分かった。そのため、本面の耕作段差は 10 面に帰属し、一部の包含層も、中世の包含層である９－２～ 6a 層に変更した。　（西山）



第 21 図　11 面遺構配置図

２　調査の成果

（１）耕作段差　（第 21 図）

耕作段差１～３は、中央調査区西部にあり、ほぼ一直線状にＮ－40～43°－Ｅ方向へ延び、先端を北西へ「Ｌ」字状に屈曲する。耕作段差１・２は谷地形を踏襲し、谷部にあたる部分が周囲より 10cm 程度低くなる。他の耕作段差と比べると、耕作段差３の標高はほぼ一定である。

耕作段差１

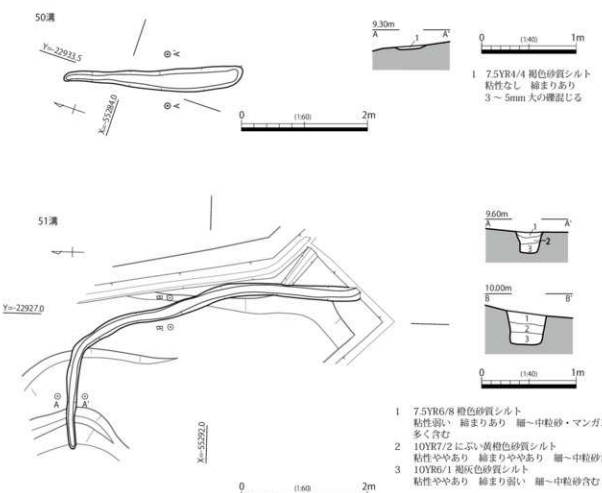
3J－8d・9d・10d、4J－1e グリッドに位置する。埋土は９－２a・３a 層である。調査区北西部を区画するように「L」字形を呈す。耕作段差１の中央付近は周囲より 10cm 程度低く、谷地形をほぼ踏襲する。この東側には後述する杭列がある。土師器・須恵器・瓦質土器・白磁が出土した。

耕作段差２

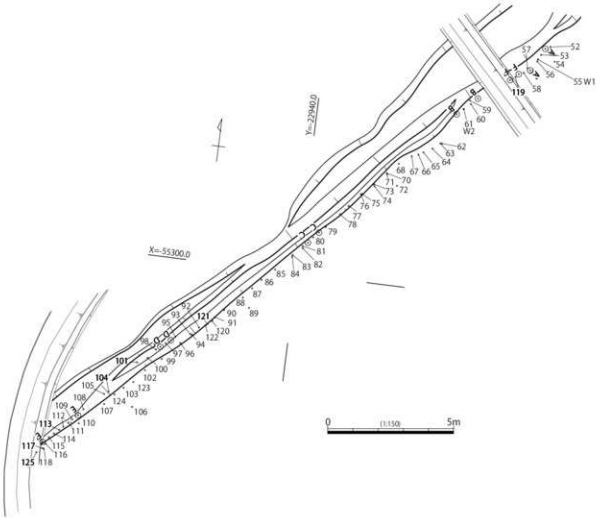
3J－9d・10d、4J－1e グリッドに位置する。形状は「L」字形を呈し、埋土は９－４ a 層である。耕作段差１とは 30cm 程度の比高差がある。土師器、須恵器、瓦質土器が出土した。

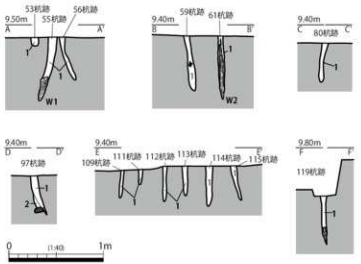
耕作段差３

3J－9d・10d・10e グリッドに位置する。形状は「L」字形を呈し、埋土は９－５ a 層である。耕



第 22 図　50・51 溝平面図・断面図





1　5P6/1 紫灰色砂質粘土　　粘性あり　締まり弱い　極細粒砂混じる
2　5P6/1 紫灰色中～粗粒砂　　粘性あり　締まりなし

第 23 図　杭列１平面図・断面図

作段差2とは20～40cm程度の比高差がある。土師器・須恵器・瓦質土器が出土した。　（森本）

（2）溝　（第22図）

耕作に関連する可能性がある小規模な50溝と、耕作には伴わない長大な51溝の計2条を検出した。

50溝

3J－9dグリッドに位置し、長さ2.85m、幅15～30cm、深さ3cmの北西から南東方向の小規模な溝である。埋土は褐色砂質シルトの単層である。耕作段差1と2の境界に位置し、主軸方位は耕作段差1の短軸方位に近似する。そのため耕作段差1に伴う耕作溝の可能性が高い。遺物は出土しなかった。

51溝

3J－9d・9c・10cグリッドに位置し、長さ6m以上、幅約20cm、深さ20～35cmで、南側はトレンチに切られ全体は不明であるが、L字形を呈す溝である。耕作段差1に交差し、軸方向が異なることから、当面の遺構ではない可能性がある。土師器と須恵器が出土した。　（森本）

（3）杭　列　（第23図、図版4）

杭列1

3J－9d・10d・e、4J－1eグリッドに位置する。直線距離は約26mに亘り、耕作段差1に平行し、北東―南西方向を主軸とする杭跡を74基検出した。これらは東西2列で構成される。耕作段差1のやや東に位置する、1m未満の比較的狭い間隔で杭を打設する一群と、さらに東側の6～7m間隔の広い間隔で杭を打設する一群がある。いずれも、腐朽した杭の間隙を主に紫灰色砂質粘土が充填する。この粘土の下部から、先端を尖らせた杭の先端部分（W1・2）を数カ所で検出した。

前年度調査で同面の高台部で杭列を検出したが、当調査で検出したものより軸が東に振れる。杭列間の距離もまばらであり、当遺構との関連は認められない。

以上のような耕作段差と杭列の位置関係から、杭列は横板等を用いて土留めの役割を果たしていた可能性が考えられる。ただし、杭列からは時期の分かる遺物は出土しておらず、杭列間の打設時期に差があるのか否かは不明である。　（森本）

第4項　14面（第24図、図版5）

1　概　要

14面は、11a層の砂質シルト、谷1の上層に堆積する12a層の砂質シルトと斜面下に堆積する13a層のシルト質砂を除去して検出した遺構面である。遺構はピット3基を検出した。

2　調査の成果

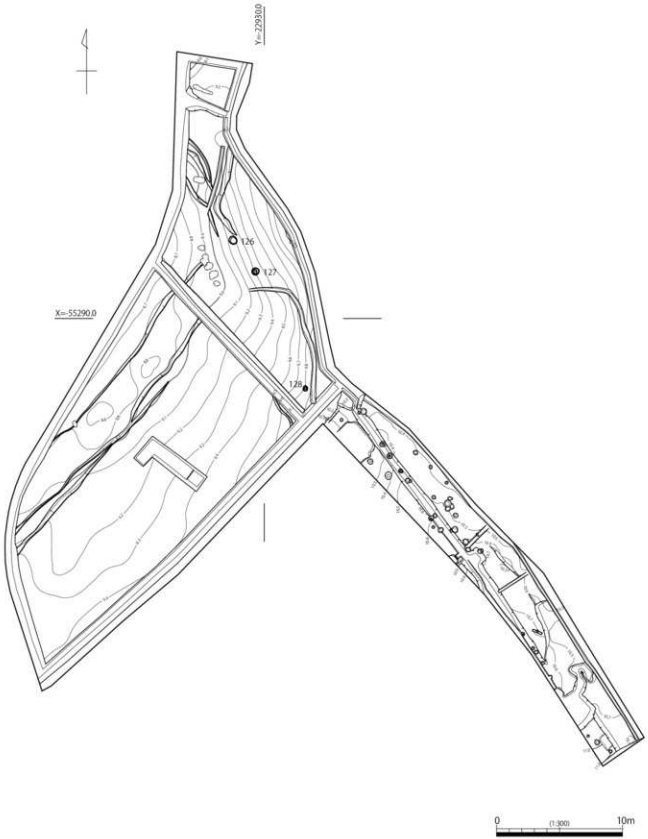
（1）ピット　（第25図）

126ピット

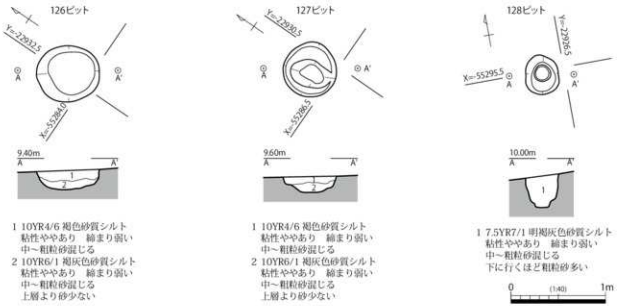
3J－9dグリッドに位置する。掘方は円形で径67cm、深さ22cmを測る。土師器（Po5）等が出土した。

127ピット

3J－9dグリッドに位置する。掘方は円形で径56cm、深さ18cmを測る。土師器が出土した。



第 24 図　14 面遺構配置図



第 25 図　14 面その他のピット平面図・断面図

128 ピット

3J － 10c グリッドに位置する。掘方は楕円形で径約 40cm、深さ 32cm を測る。土師器・石器が出土した。（西山）

第５項　16 面（第 26 図、図版５）

１　概　要

16 面は、15 － 3b 層の細～粗粒砂を除去して検出した遺構面である。１－１区の調査では、本面で８世紀ごろの破堤堆積やその下面で溝を検出しており、今年度の調査でも、これに対応する遺構を確認した。遺構は流路３条・土坑１基を検出した。（西山）

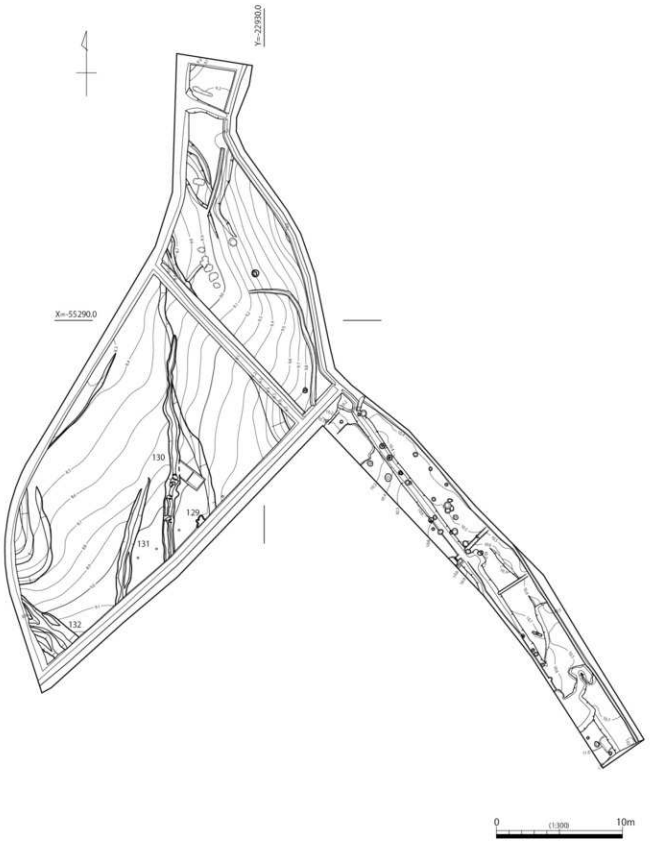
２　調査の成果

（１）流　路　（第 27・28 図、図版５・６）

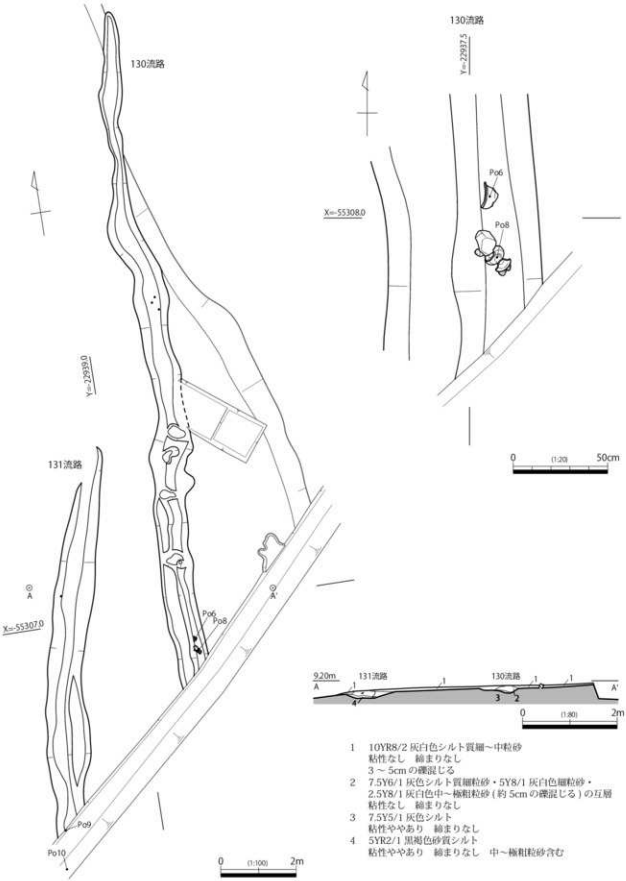
今年度調査で検出した 130･132 流路は、前年度調査で検出した 256 流路･257 溝 から続く流路である。130・131 流路はほぼ南北方向へ延びるが、132 流路は南東から北西に向かい、主軸が異なる。南東壁断面では、131 流路から溢流した埋土が 130・132 流路を被覆する様子を確認した。

130 流路

3J － 10d・6c － 4J － 1d グリッドに位置する。前年度調査で検出した 257 溝から続くものである。ほぼ南北方向へ延び、長さ 18 m以上、幅 80cm、深さは 10cm である。埋土は２層に分かれ、灰色シルトの上層に５cm 程度の礫を含む灰白色中～極粗粒砂、細粒砂とシルトの互層が堆積する逆級化の様相を呈する。古代の土師器（Po6）・須恵器（Po7・8）・木製品（W3・4）が出土した。

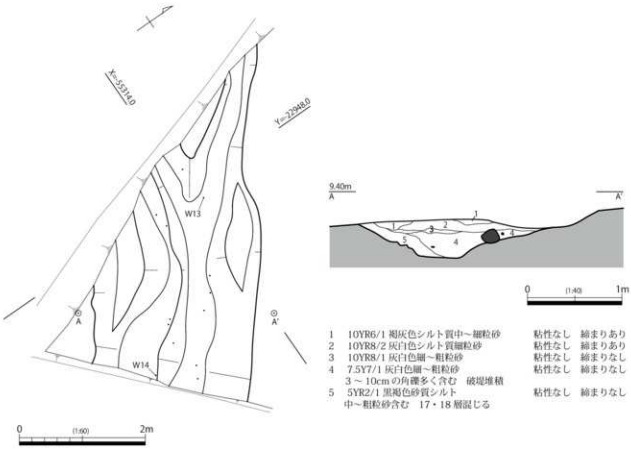


第 26 図　16 面遺構配置図



1　10YR8/2 灰白色シルト質細～中粒砂
　粘性なし　締まりなし
　3～5cmの礫混じる
2　7.5Y6/1 灰色シルト質細粒砂・5Y8/1 灰白色細粒砂・
　2.5Y8/1 灰白色中～極粗粒砂（約5cmの礫混じる）の互層
　粘性なし　締まりなし
3　7.5Y5/1 灰色シルト
　粘性ややあり　締まりなし
4　5YR2/1 黒褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりなし　中～極粗粒砂含む

第 27 図　130・131 流路平面図・断面図



第 28 図　132 流路平面図・断面図

遺構の時期は須恵器杯(Po7)から、7 世紀末から 8 世紀前半頃と考える。　（森本）

131 流路

4J － 1d・e、2e グリッドに位置する。前年度調査では、対応する溝は検出していない。当流路はほぼ南北へ延び、長さ 10m 以上、幅 1.1 m、深さ 14cm である。南東壁では、灰白色細～粗粒砂に 2～10cm の角礫が混じる。流路の北側や第 28 図 A － A' 断面付近に向かうにつれ、層下部では灰色シルトが堆積する、逆級化の様相である。また、131 流路から溢流した埋土が 130・132 流路を被覆する。そのため、131 流路は他の流路に比べ新しい。古代の土師器・須恵器（Po9・10）が出土した。

遺構の時期は 130 流路よりも新しいことから、8 世紀代と考える。　（森本）

132 流路

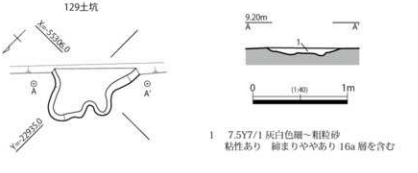
4J － 2e グリッドに位置する。前年度調査で検出した 256 流路から続く流路である。南東から北西へ延び、長さ 5.6 m以上、幅 2.5 m、深さ 40cm である。埋土は 5 層に分かれる。最下層は黒褐色砂質シルト層であり、下層の 17・18 層が混じる。その後に 3～10cm の角礫を多く含む灰白色細～粗粒砂が、その後に粒子の細かいシルト質砂が堆積する。以上のように複数回流れを変えたと考える。当流路からは他の流路に比べ、木製品が多数出土する。古代の土師器・須恵器・木製祭祀具が出土した。

130～132 流路から越流した破堤堆積から出土した遺物は、6 世紀末から 7 世紀前半の杯蓋（Po11）、燃えさし（W19）、火鑽臼（W20）、杭（W21）、板状木製品（W22）等がある。　（森本）

（2）土　坑　（第29図）

129土坑

4J－1dグリッドに位置する。長径70cm以上、短径65cm、深さは7cmである。主軸はほぼ南北を向き、不整楕円形を呈すと考えられる。ただし、トレンチによる撹乱で全体の形状は不明である。埋土の主体は灰白色細～粗粒砂で、一部16a層を含む。前年度調査では、当面の谷部において人為的掘り込みは確認できなかったため新知見である。土師器と須恵器が出土した。　（森本）



第29図　129土坑平面図・断面図

第6項　17・18面（第30図、図版7）

1　概　要

17・18面は、16a層の砂質シルトを除去して検出した遺構面である。1－1区で厚さ22cmの堆積があった17a層は、1－2区では薄く、狭い範囲にしか遺存しない。ほとんどの遺構を18a層上面で検出したため、調査面は17・18面とする。

1－1区の調査では、本面で古墳時代後期の竪穴建物を検出しており、今年度の調査でも、この時期に対応する遺構を確認した。遺構は竪穴建物1棟・土器溜り1基・水田・溝3条・土坑2基・ピット24基を検出した。　（西山）

2　調査の成果

（1）建　物　（第31～35図、図版7～10）

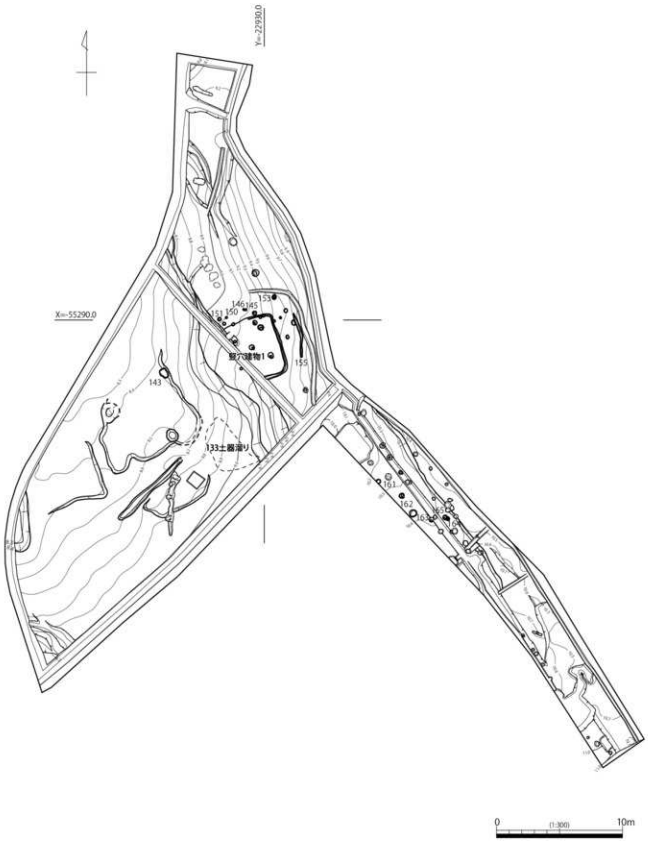
竪穴建物1

3J－9・10c・dグリッド、中央調査区北側に位置する。建物は丘陵裾にあり、等高線とほぼ平行する。検出面は南西に下り、上層からの削平を受ける。後述する133土器溜りより、標高が30～50cm高い場所にある。

検出規模は南北5.2m×東西3.6m、全体を復元すると一辺5.2mの隅丸方形と考える。埋土は褐色砂質シルトの単層である。これを除去すると橙色シルトブロックをまばらに含む灰色砂質シルトの貼床が、5cm程度堆積する。

竪穴建物1を構成する遺構としては、主柱穴と焼土坑、壁溝がある。主柱穴は、貼床上面と除去面で検出した。そのため、少なくとも1回の建て替えが想定できる。以下では、貼床上面・除去面で各々検出した遺構について述べる。

貼床上面　134・139・157・160柱穴、152焼土坑を検出した。134・139柱穴の径は40～50cm、検出面からの深さは20～30cmを測る。いずれも埋土は4層に分かれ、柱痕跡が確認できる。134柱穴の南西には157柱穴が存在する。埋土は単層で、柱穴径は約20cm、検出面からの深さは約15cmと、

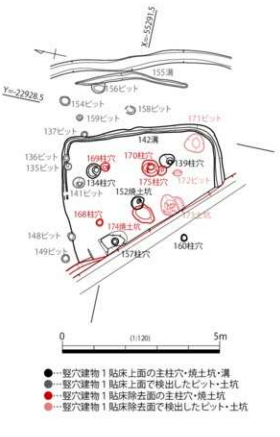


第 30 図　17・18 面遺構配置図

柱穴径は他の２基に比べ小規模である。柱間は、134柱穴－139柱穴間は2.4m、134柱穴－157柱穴間は2.35mを測る。トレンチを挟んで160柱穴が存在するが、160柱穴―139柱穴間は2.6m、160柱穴―157柱穴間は2.1mとなり、やや歪な四角形を呈す。

なお、建物南西隅、160柱穴の周辺では、他に遺構は検出できなかった。これは16層堆積時の削平が18層まで達していたことを示しており、壁溝や貼床は検出できなかったと考える。

建物のほぼ中央には、152焼土坑がある。円形を呈しており、各柱穴からの距離は134柱穴から1.75m、139柱穴から1.65m、157柱穴から1.4m、160柱穴から1.8mに位置する。埋土は暗赤褐色砂質シルトの単層で、径42cm、深さは５～８cmである。土坑底面には、火を燃やしたことにより、基盤層自体が被熱した部分を２～３cmの厚さで確認できる。その上部には、焼土塊と灰・炭等が密に混じる部分が、５cm程度の厚さで土坑内に広がる。



第 31 図　竪穴建物１遺構配置図

壁溝（142溝）は、貼床上面から掘り込まれており、幅20～30cm、検出面からの深さ５～10cmで巡る。埋土は褐灰色砂質シルトの単層である。北西側は、削平され確認できなかった。

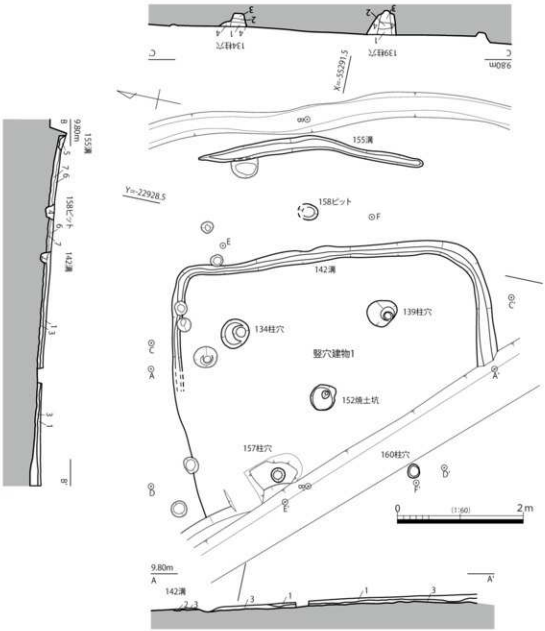
竪穴建物外側には、壁溝と平行する155溝がある。埋土は褐灰色砂質シルトの単層で、長さ3.6m、深さ7～10cmである。当該箇所周辺にはピットが複数存在する。

竪穴建物の埋土から須恵器杯身（Po15）・土師器甕（Po16）が出土した。また、貼床中から出土した土師器椀（Po17）は、内面に一部赤彩が残る。

貼床上面の時期は、須恵器杯身（Po15）から古墳時代後期と考える。

貼床除去面　168・169・170・175柱穴、174焼土坑を検出した。柱穴径は20～55cm、検出面からの深さは７～25cmである。埋土は単層、または２層に分かれる。柱穴径は、169・175柱穴はほぼ同規模である。168柱穴－169柱穴間は1.7m、169柱穴－170柱穴間は1.45m、169柱穴－175柱穴間は1.8mである。そのため、柱穴間隔によると168・169・175柱穴が主柱穴となる可能性が高い。また、170柱穴に関しては、他の柱穴と比べて２倍程径が大きい。そのため、これと対になる主柱穴が竪穴建物南西側に存在した可能性がある。175柱穴から土師器甕（Po18）が出土した。

竪穴建物１のやや西側に存在する174焼土坑は、埋土が灰色砂質シルトの単層で、検出面からの深さは15cmである。埋土上部には焼土塊、全体には炭が混じるものの、152焼土坑とは異なり被熱による基盤層への変色はない。このことから、灰や焼土を土坑内に廃棄したと想定される。各柱穴からの距離は168柱穴から1.45m、169柱穴から1.95m、170柱穴から1.45m、175柱穴から1.5mである。小片ではあるが、土師器甕の口縁部が出土した。

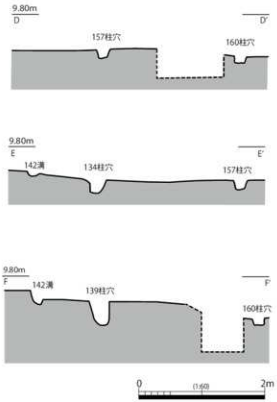


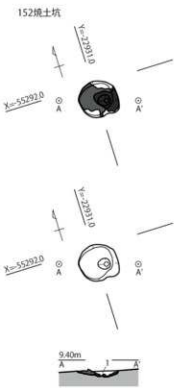
134 柱穴
1　2.5YR6/3 にぶい橙色砂質シルト　粘性なし　締まりややあり
2　5YR5/3 にぶい赤褐色砂質シルト　粘性ややあり　締まりあり　2.5YR6/8 橙色シルトブロック混じる
3　N6/0 灰色砂質シルト　粘性ややあり　締まり弱い　シルト多い　層下部に 5P7/1 明紫色シルト混じる
4　5Y7/2 灰白色砂質シルト　粘性ややあり　締まり弱い

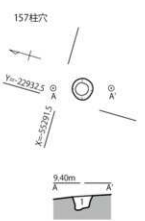
139 柱穴
1　2.5YR6/3 にぶい橙色砂質シルト　粘性なし　締まりややあり
2　5YR5/3 にぶい赤褐色砂質シルト　粘性ややあり　締まりあり　2.5YR6/8 橙色シルトブロック混じる
3　N6/0 灰色砂質シルト　粘性ややあり　締まり弱い　シルト多い　層下部に 5P7/1 明紫灰色シルト混じる
4　5Y7/2 灰白色砂質シルト　粘性ややあり　締まり弱い

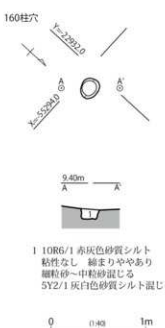
竪穴建物 1(142 溝含む)・158 ピット・155 溝
1　7.5YR4/4 褐色砂質シルト　粘性あり　締まりなし
2　142 溝　7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト　粘性ややあり　締まりややあり
3　貼床　5Y6/1 灰色砂質シルト　粘性なし　締まりあり　2.5YR6/8 橙色シルトブロック混じる
4　158 ピット　2.5YR5/4 にぶい赤褐色砂質シルト　粘性ややあり　締まりややあり　5YR6/8 橙色シルトブロック混じる
5　155 溝　5YR6/2 灰褐色砂質シルト　粘性なし　締まりややあり　炭混じる
6　10R5/2 灰赤色砂質シルト　粘性なし　締まりややあり
7　5YR5/4 にぶい赤褐色砂質シルト　粘性ややあり　締まりややあり

第 32 図　竪穴建物 1 平面図・断面図 (1)

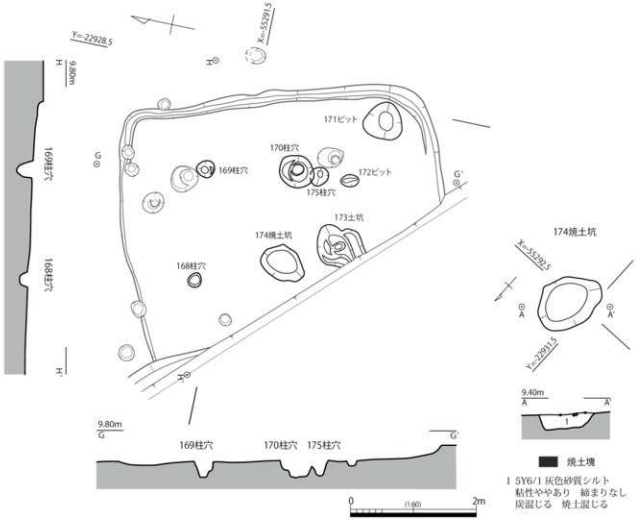


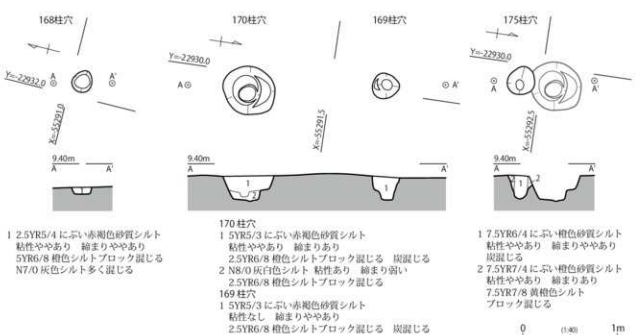




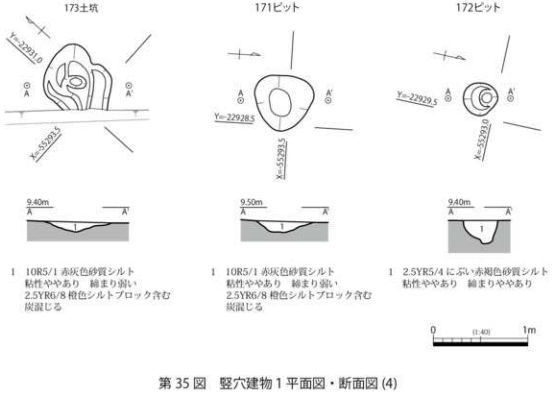


第 33 図　竪穴建物 1 平面図・断面図 (2)





第 34 図　竪穴建物 1 平面図・断面図 (3)



第 35 図　竪穴建物１平面図・断面図 (4)

壁溝は、貼床上面と除去面で同じ142溝を利用した可能性を考えたが、壁溝は貼床上面の建物（134－139柱穴）と平行に掘られており、貼床除去面で検出した建物とは方位が異なる。このことから、当初に存在した溝は、建替えに伴い削平された可能性が高い。

貼床除去面で検出したその他の遺構に、173土坑、171・172ピットがある。173土坑は、長径70cm以上、短径74cm、深さ12cmである。主軸は北東を向き、不整楕円形を呈す。ただし、トレンチに切られ、全体の形状は不明である。埋土は赤灰色砂質シルトの単層で、橙色シルトブロックと炭を含む。遺物は出土しなかった。

171ピット・172ピットは主柱穴と同規模、またはそれ以上の大きさのピットである。ピットの径は26～60cm、検出面からの深さは10～23cmを測る。いずれも埋土は単層で、171ピットは橙色シルトブロックを含み、炭が混じる赤灰色砂質シルト、172ピットはにぶい赤褐色砂質シルトである。各ピットから土師器の小片が出土した。

貼床除去面の時期は、除去面直上から古墳時代前期の土師器甕(Po19)は出土したが、遺構の基盤層である18a層は多くの古墳時代中期の遺物を含むことから、前期まで遡る事はできない。そのため、貼床上面と大差なく古墳時代後期と考える。　（森本）

（２）土器溜り　（第 36 ～ 38 図、図版 11 ～ 14）

133 土器溜り

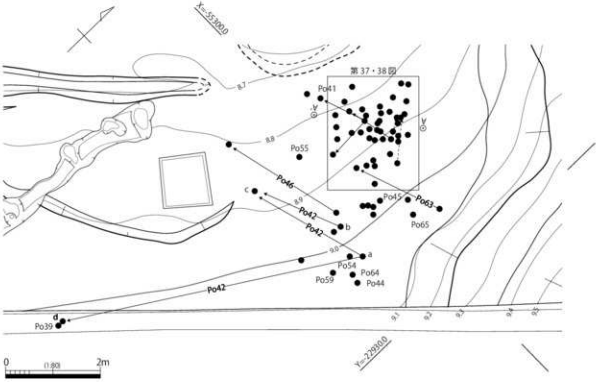
3J－10c･d、4J－1c･d に位置する。土器は斜面下に堆積し、範囲は長幅５m、短幅３m に広がる。

遺構の中心に土師器の竈、その周辺から土師器の甕・椀、須恵器の蓋杯等が出土した。

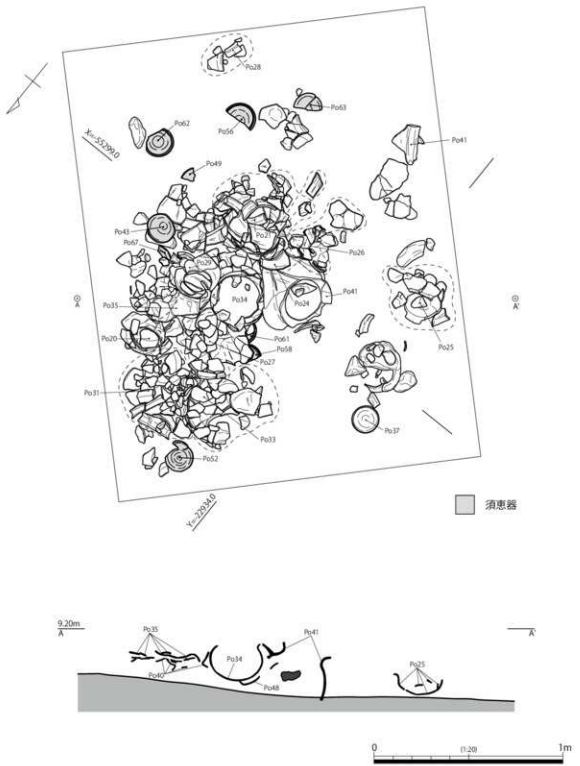
なお、本土器溜りの周囲には、さらに土器が広く散乱する。17a 層の堆積は薄く、18a 層上に直接 16a 層が堆積し、16a 層と 18a 層の遺物が接合した。このことから、遺物の取上げは 18a 層内の上位堆積を遺構面の土壌化した部分だと考え、本面出土の遺物として取り扱う。土師器の甕・椀・甑・竈、須恵器の蓋杯・高杯・甕、石製紡錘車が出土した。なお、安山岩の川原石が出土したが、顕著な使用痕は確認できない。

土器溜りの中心には２つの竈があり、中型竈（Po41）は焚口を丘陵側の北へ向け、正位置で出土した。丘陵斜面を伝った土砂に押されてやや傾き、焚口の一部は西南西側と南側へ散乱する。この上には、東側に土師器甕が５個体（Po21 ～ 24・32）、西側に土師器甕（Po26）が重なる。焚口の前に須恵器の杯身が２つ（Po58・61）、杯蓋（Po48）が１つあり、２つの杯身の上から土師器甕（Po27）、反転した杯蓋の上から口縁を上にして、竈の庇に引っ掛かるように土師器甕（Po34）が出土した。中型竈の東側にある小型竈は掛口を南に向けて大破し、この上に土師器甕（Po29）と須恵器杯蓋（Po43）が重なる。周辺から出土した土師器甕（Po20・29・30・33）が口縁を下にして出土した状況は、土砂に押されたことによる２次的な移動である。

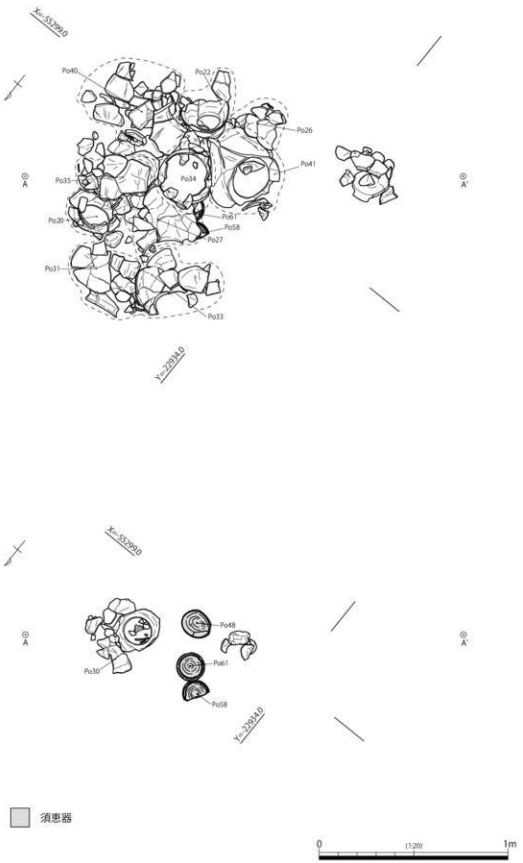
さらに細かく出土状況を観察すると、遺物の散乱に方向性が認められる。前述した中型竈の他に小型竈も同じ方向に散乱する。遺物は高い方から低い方へ散乱すると考えると、須恵器杯身（Po63）は西南西側へ約 1.9m、須恵器杯蓋（Po46）も同じ方向へ約 2.5 m 移動したことになる。大型竈は出土地点が４地点に分かれる。a 地点から西南西へ 2.7m、b 地点から西南西へ 2.0m 移動する。移動先の c 地点の出土状況は、形態が判別できる程まとまって出土することから、破片となって移動したのではなく、ある程度形が保たれた状態で転落、移動し、その後破片となったと考える。d 地点は a



第 36 図　133 土器溜り出土遺物ドット図



第 37 図　133 土器溜り遺物出土状況図 (1)



第38図　133土器溜り遺物出土状況図(2)

地点より南南西側へ6.44m離れ、土器溜りの最も外側にあたる。c地点より高い位置からの出土であり、c地点からの移動は考えられない。これらの一群は移動した距離も似ており、同じ原因で、かつ同時に移動したと考える。他の遺物の移動は少なく、移動しても距離が短いこと、大型甕は18a層上面の土壌化層からの出土した部位が多いことから、この移動は土器溜りの内でも、早い時期の堆積とすることができる。

土器溜りの中心である竈とその中心部は、遺構の下部から陶邑Ⅱ－2・3（TK10・MT85）、上部から陶邑Ⅱ－2（TK10）併行の須恵器蓋杯が出土した。遺物の間や周辺部からは陶邑Ⅱ－4～5（TK43～209）の蓋杯が出土することから、遺構が埋没するまでに時期を経ていることが分かる。

遺構の時期は古墳時代後期の中頃から後半で、後半の間に埋没したと考える。（西山）

（3）水　田（第39図、図版14）

3J－9d・e、10d・e、4J－1eグリッドに位置する。18a層の上面に薄く締まりの弱い砂質シルトの堆積が見られ、これを除去して遺構を検出した。

前述のとおり、現地調査では薄く、狭い範囲にしか17a層が堆積していないため、17面は設定しなかった。17層を除去後、精査を行ったがピットや畦畔等の遺構は検出できず、記録を行った後、17a層と18a層間にある間層として除去した。しかし、堆積を観察すると、淘汰はあまり良くないが人為的と思われる撹拌があり、水田の可能性があることから、土壌サンプルを採取し自然科学分析を行った。その結果、土壌に大量のプラントオパールを含むことから、間層は耕作土であり水田遺構であることが分かった（第4章参照）。従って、調査では耕作土を除去した状況、水田下面で検出したことになる。耕作土下で検出した166・167溝は、水田耕作に関連する遺構と考える。土師器・須恵器が出土した。

出土遺物には6世紀末から7世紀前半の須恵器杯蓋が出土したが、本層は9a層・14a層や6世紀後半から7世紀の遺物を多く含む破堤堆積（15－3b層）に接することから上層からの混入の可能性がある。しかし、古墳時代後半の土師器甕や移動式竈片が出土し、遺構面の基盤になる18a層は古墳時代中期を中心に前後の遺物を含むことから、遺構の時期を古墳時代後期と考える。（西山）

（4）溝　（第39図、図版14）

166溝

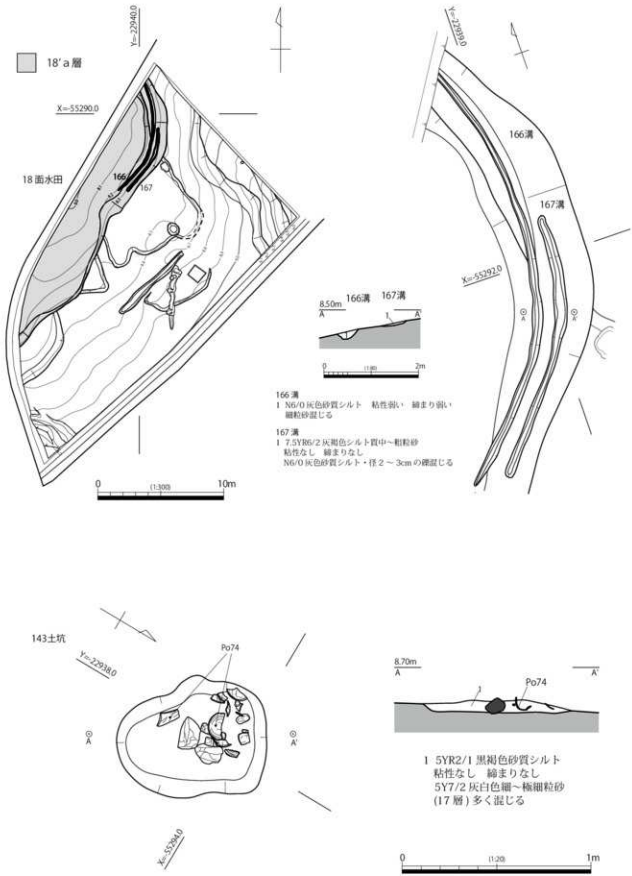
3J－9d・e、10 d・eグリッドに位置する。167溝の内側を並行して弧を描き、幅0.11～0.23m、深さ約10cmを測る。弧の内側やその周辺には18'a層が堆積し、遺構の埋土も同じである。耕作土直下の遺構であることから、水田耕作に伴う遺構と考える。弥生土器・土師器が出土した。

遺構の時期は18'a層の耕作土より古墳時代後期と考える。

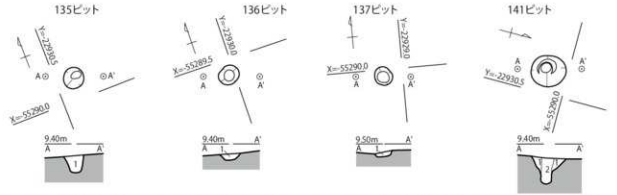
167溝

3J－9d・e、10 d・eグリッドに位置する。166溝の外側を並行して弧を描き、幅0.13～0.28m、深さ約6cmを測る。埋土は166溝や18'a層とはやや異なるが、18'a層が混じる事から同一包含層の遺構と考える。土師器が出土した。

遺構の時期は、166溝と同時期、古墳時代後期と考える。（西山）



第 39 図　18 面水田、166・167 溝、143 土坑平面図・断面図

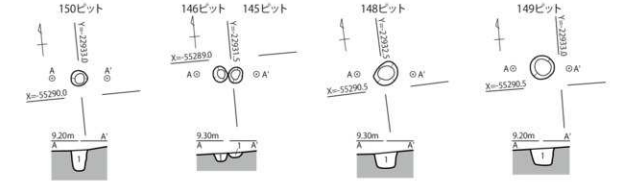


1　5YR6/2 灰褐色砂質シルト
　粘性なし　締まりややあり
　細粒砂～中粒砂混じる
　5RP6/1 紫灰色シルト混じる
　炭混じる　2.5YR6/8 橙色
　シルトブロック混じる

1　5YR6/2 灰褐色砂質シルト
　粘性なし　締まりややあり
　細粒砂～中粒砂混じる
　5RP6/1 紫灰色シルト混じる
　炭混じる　2.5YR6/8 橙色
　シルトブロック混じる

1　7.5YR7/3 にぶい橙色砂質シルト
　粘性なし　締まりややあり
　極細粒砂～細粒砂混じる

1　2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト
　粘性なし　締まりややあり
　極細粒砂～細粒砂混じる 炭混じる
2　5YR5/1 褐灰色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
　細粒砂～中粒砂混じる 炭混じる

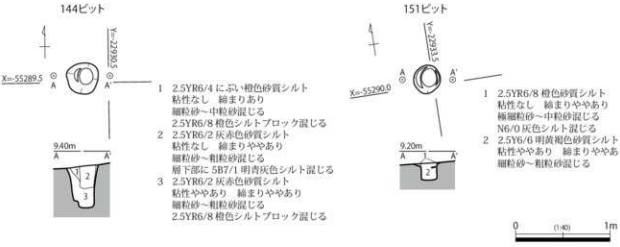


1　2.5YR6/8 橙色砂質シルト
　粘性なし　締まりややあり
　極細粒砂～中粒砂混じる
　N6/0 灰色シルト混じる

1　2.5YR6/8 橙色砂質シルト
　粘性なし　締まりややあり
　極細粒砂～中粒砂混じる
　N6/0 灰色シルト混じる

1　2.5YR6/8 橙色砂質シルト
　粘性なし　締まりややあり
　極細粒砂～中粒砂混じる
　N6/0 灰色シルト混じる

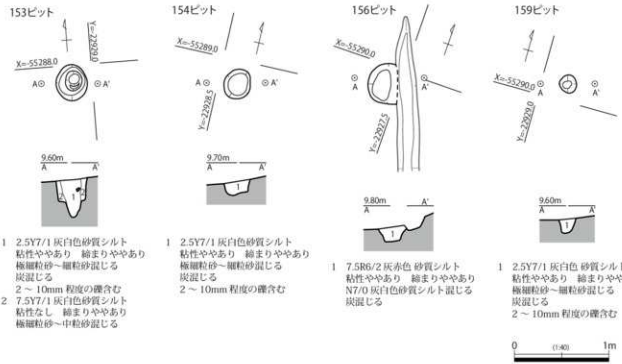
1　2.5YR6/8 橙色砂質シルト
　粘性なし　締まりややあり
　極細粒砂～中粒砂混じる
　N6/0 灰色シルト混じる



1　2.5YR6/4 にぶい橙色砂質シルト
　粘性なし　締まりあり
　細粒砂～中粒砂混じる
　2.5YR6/8 橙色シルトブロック混じる
2　2.5YR6/2 灰赤色砂質シルト
　粘性なし　締まりややあり
　細粒砂～粗粒砂混じる
　層下部に 5B7/1 明青灰色シルト混じる
3　2.5YR6/2 灰赤色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
　細粒砂～粗粒砂混じる
　2.5YR6/8 橙色シルトブロック混じる

1　2.5YR6/8 橙色砂質シルト
　粘性なし　締まりややあり
　極細粒砂～中粒砂混じる
　N6/0 灰色シルト混じる
2　2.5Y6/6 明黄褐色砂質シルト
　粘性ややあり　締まりややあり
　細粒砂～粗粒砂混じる

第 40 図　17・18 面その他のピット平面図・断面図 (1)



第 41 図　17・18 面その他のピット平面図・断面図 (2)

（５）土　坑　（第 39 図、図版 14）

143 土坑

3J－10d グリッドに位置する。不定形で長辺 79cm、短辺 64cm、深さ 22cm を測る。遺物と自然石を一括投棄した状況で検出した。須恵器の壺（Po74）が出土した。

遺構の時期は古墳時代後期と考える。　（西山）

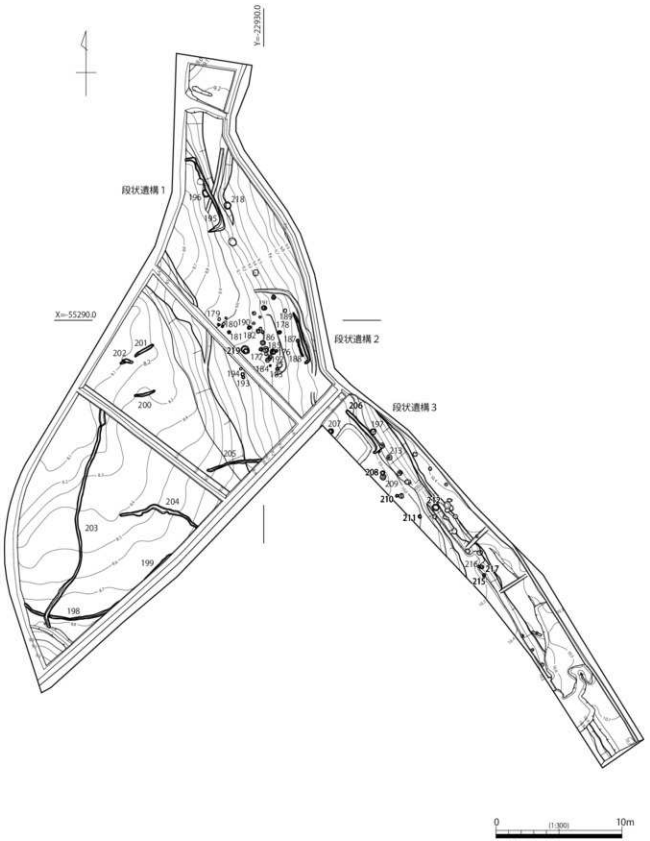
（６）ピット　（第 40 ～ 41 図）

竪穴建物周辺、3J－9・10c・9・10d グリッドで 16 基のピットを検出した。埋土は単層から３層、規模は主柱穴に相当する大規模なものと、15 ～ 20cm 程度の小規模のものとに大別できる。その中でも柱痕跡が認められるものも存在する。遺物は、141・144・145・146・149・150・151・153・154・156・159 ピットより土師器が出土した。153 ピットからは１点のみではあるが、須恵器も出土した。　（森本）

第７項　19 面（第 42 図、図版 15）

１　概　要

19 面は、17a 層の砂質シルトと 18a 層のシルトを除去して検出した遺構面である。本面は、１－１区の調査では明確な遺構がなく調査面でない。しかし、今年度の調査では段状遺構等の遺構を確認し、調査を行った。遺構は段状遺構３基・溝８条、ピット 29 基を検出した。　（西山）



第 42 図　19 面遺構配置図

２　調査の成果

（1）段状遺構（第43～44図、図版16）

丘陵斜面で等高線に沿い、先端を斜面の下に向って短く直角に屈曲する、人工的な溝を３条検出した。ほとんどは斜面崩壊により残っていないが、溝が囲む内側に遺構が存在したと考え段状遺構とした。（西山）

段状遺構１

3J－8･9d グリッドに位置する。段状遺構を構成する遺構は 195 溝のみで、主軸はＮ－25°－Ｗ、長軸約 6.20 ｍ、短軸約 1.40 ｍを測る。（西山）

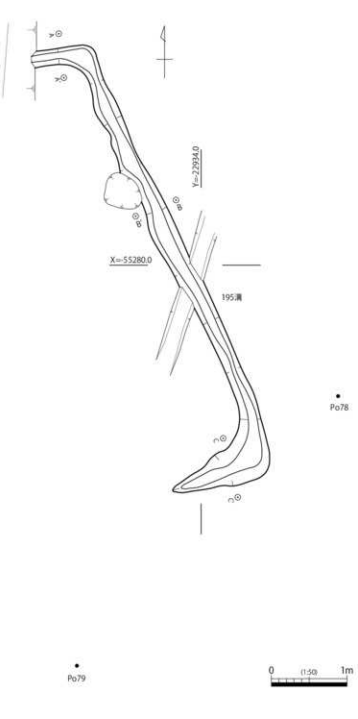
195溝は残存長7.75ｍ、幅30～60cm、深さ10～20cmである。調査区北東部の丘陵斜面を切る、「コ」字状を呈す溝である。埋土は２層に分かれ、周囲よりも暗色を呈す。断面形は逆台形である。溝で区画した内側に竪穴建物の存在も考えたが、削平され柱穴等は確認できなかった。弥生土器(Po75～77)が出土した。

この他、本遺構の周辺から弥生土器壺（Po78）、古墳時代前期と考える山陰型甑形土器（Po79）が出土した。（森本）

段状遺構２

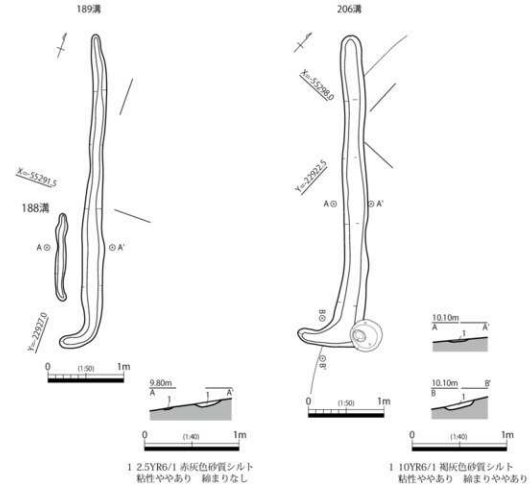
3Ｊ－9c･10c グリッドに位置する。段状遺構を構成する遺構は溝２条で、主軸はＮ－18°－Ｗ、長軸約 4.15 ｍ、短軸約 0.60 ｍを測る。（西山）

188 溝は長さ 1.15 ｍ、幅 10～20cm、深さ２cm である。埋土は赤灰色砂質シルトの単層である。今回検出した中では比較的小規模な溝で、遺物は出土しなかった。189 溝



1　10YR6/6 明黄褐色砂質シルト　　粘性なし　締まりややあり
2　10YR6/1 褐灰色砂質シルト　　粘性ややあり　締まりややあり

第 43 図　段状遺構１平面図・断面図



第 44 図　段状遺構２・３平面図・断面図

は残存長 4.3 m、幅約 30cm、深さ 4 cm で、「L」字形を呈す。埋土は 188 溝と同様であり、同時期に掘削されたものである可能性が高い。土師器が出土した。　（森本）

段状遺構３

3J － 10c・4J － 1c に位置する。段状遺構を構成する遺構は溝１条で、主軸は N － 44° － W、長軸約 4.15 m、短軸約 0.90 m を測る。　（西山）

206 溝は残存長 4.6 m、幅 32cm、深さは約２～ 10cm で、「L」字形を呈す。埋土は褐灰色砂質シルトである。206 溝で区画された内側から柱穴等は確認できなかった。土師器甕（Po80･81）が出土した。

遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期以降と考える。　（森本）

（２）溝　（第 45・46 図、図版 15）

等高線に沿った人工的な溝（198 ～ 202 溝）と、直行する雨裂によりできたと考える溝（203 ～ 205 溝）を検出した。　（西山）

198 溝

4J － 2e グリッドに位置する。長さ６m以上、幅約 20cm、深さ５～８cm である。埋土は、A － A' 断面付近では浅黄橙色細粒砂ブロック混じりの黒褐色シルト層と明緑灰色シルトブロック混じりの黒

褐色シルト層の2層に分かれる。標高が低くなるB－B′断面付近では、浅黄橙色細粒砂混じりの黒褐色シルト層の単層となる。土師器が出土した。

199溝

4J－1d・2dグリッドに位置する。トレンチに切られ、全体は明らかではないが、長さ7m以上、幅10cm以上、深さ4cmである。埋土は、198溝の北東部で確認した明緑灰色シルトブロック混じりの黒褐色シルトである。そのため、198溝と一連の溝である。土師器が出土した。

200溝

3J－10d・eグリッドに位置する。北東方向に主軸を持ち、長さ約1.65m、幅約20cm、深さ6cmである。埋土は浅黄橙色細粒砂ブロック混じりの黒褐色シルトの単層である。以下で述べる201・202溝と近接している。土師器が出土した。

201溝

3J－10d･eグリッドに位置する。北東方向に主軸を持ち、長さ1.75m、幅約20cm、深さ5cmである。埋土は200溝と同様である。

202溝

3J－10eグリッドに位置する。ほぼ東西方向に軸を取り、西に向かって分岐し、長さ1m以上、幅15～30cm、深さ4cmである。埋土は200溝と同様である。土師器が出土した。

203溝

3J－10d・eに位置する。長さ18.4m以上で、幅8～26cm、深さ5～8cm、ゆるやかに蛇行しながら北流する。切り合いより、198溝よりも新しい溝である。埋土は明緑灰色シルトブロック混じりの青灰色シルトである。土師器が出土した。

204溝

4J－1d・eに位置する。北西方向に軸を持ち、長さ6.7m以上で、幅10～36cm、深さ5～10cmである。埋土は浅黄橙色細粒砂ブロック混じりの赤灰色シルトである。1－1区で検出した241溝と繋がる同一遺構である。土師器が出土した。

205溝

4J－1dに位置する。ほぼ東西方向に軸を持ち、長さ4.3m以上で、幅約20cm、深さ約10cmである。埋土は204溝と同様である。前年度調査区では検出していない。土師器が出土した。　（森本）

（3）土　坑　（第47図、図版17）

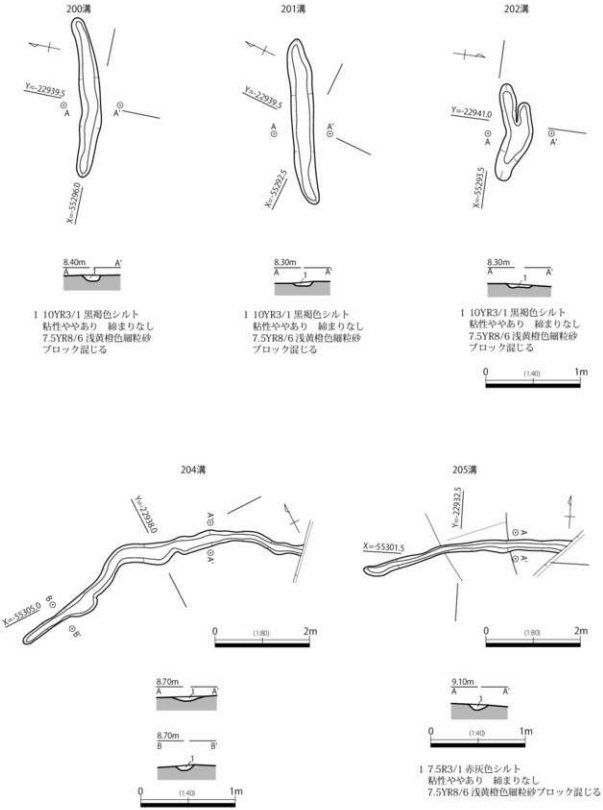
219土坑

3J－10dグリッドに位置する。楕円形を呈し、長径66cm、短径64cm、深さ4～8cmである。埋土は褐灰色シルト質中粒砂～粗粒砂で充填される。ただし、検出面は17・18面と19面の間に当たる。土師器高杯（Po82）・小型丸底壺（Po83）が出土した。

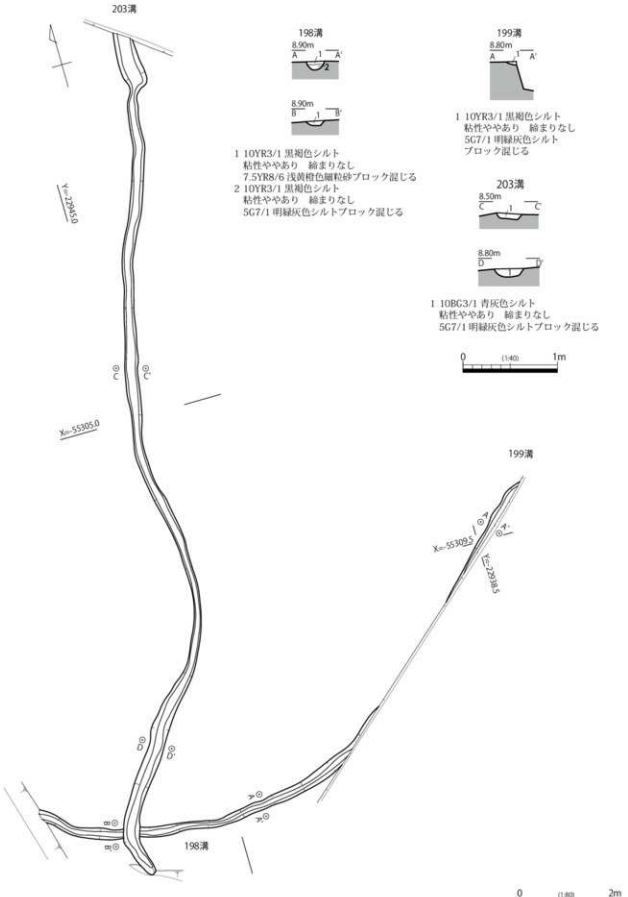
遺構の時期は出土遺物より古墳時代前期以降と考える。　（森本）

（4）ピット　（第47・48図）

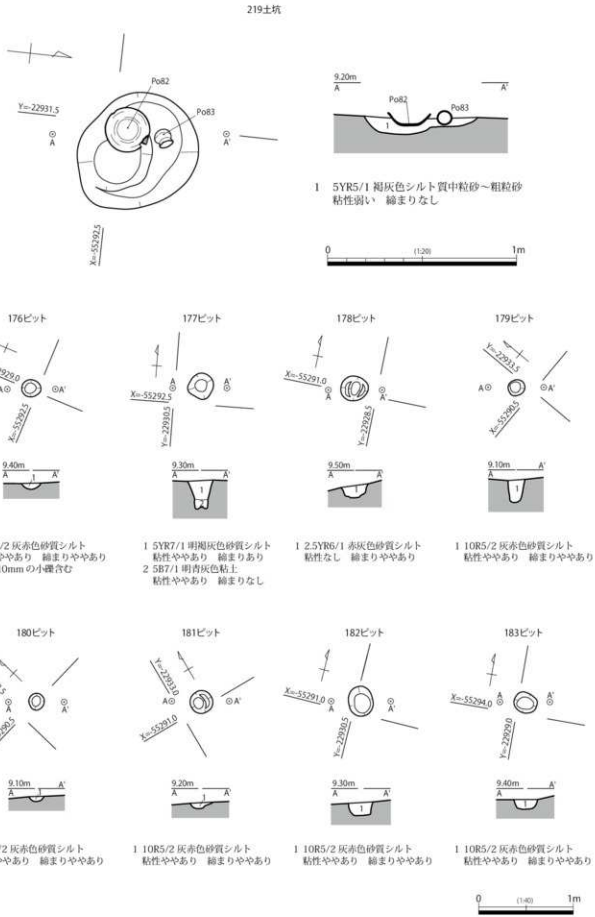
段状遺構1周辺のピットは1基（218ピット）、段状遺構2周辺のピットは17基（176・177・



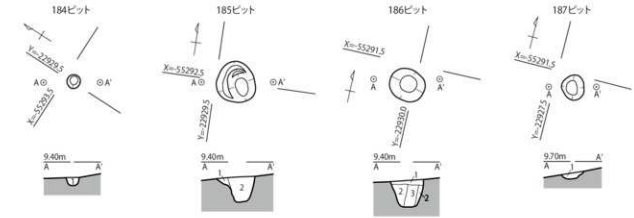
第 45 図　200・201・202・204・205 溝平面図・断面図



第 46 図　198・199・203 溝平面図・断面図



第 47 図　219 土坑、19 面その他のピット平面図・断面図 (1)

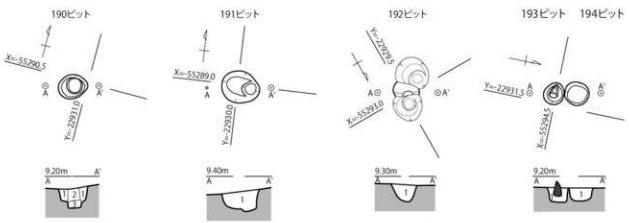


1 10R5/2 灰赤色砂質シルト
粘性ややあり　締まりややあり

1 5YR7/2 明褐灰色砂質シルト
粘性なし　締まりややあり
2 5YR6/2 灰褐色砂質シルト
粘性なし　締まりややあり
7.5YR7/8 黄橙色シルト
ブロック混じる

1 5YR7/3 にぶい橙色砂質シルト
粘性ややあり　締まりややあり
7.5YR7/8 黄橙色シルトブロック混じる
N5/0 灰色シルト混じる
2 5YR7/2 明褐灰色砂質シルト
粘性なし　締まりややあり　炭混じる
3 5B6/1 青灰色粘土　粘性あり　締まりなし
7.5YR7/8 黄橙色シルトブロック混じる

1 2.5YR6/1 赤灰色砂質シルト
粘性なし　締まりややあり

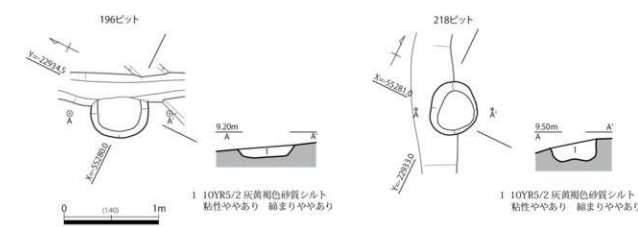


1 5YR7/1 明褐灰色砂質シルト
粘性ややあり　締まりあり
2 7.5YR7/2 明褐灰色砂質シルト
粘性ややあり　締まりややあり
3 5B7/1 明青灰色シルト
粘性あり　締まりなし
5YR7/6 橙色シルトブロック混じる

1 2.5YR4/4 にぶい赤褐色シルト質砂
粘性なし　締まりややあり

1 10YR6/1 褐灰色砂質シルト
粘性なし　締まり弱い
5YR7/6 橙色シルトブロック混じる
炭混じる

1 5YR5/2 灰褐色砂質シルト
粘性ややあり　締まりややあり



1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
粘性ややあり　締まりややあり

1 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
粘性ややあり　締まりややあり

第 48 図　19 面その他のピット平面図・断面図 (2)

178・179・180・181・182・183・184・185・186・187・190・191・192・193・194）である。埋土は単層から3層に、色調は赤褐色系と灰褐色系に分かれ、いずれも砂質シルトである。段状遺構2の周辺は17・18面で検出した竪穴建物1の下層にあたることから、竪穴建物1に関連するピットの可能性もある。ピットの中には径40～50cmで柱痕跡や柱当たりがあるものもあったが、配置に規則性は確認できなかった。178・182～184・186・187・191・193・196・218ピットから土師器が出土した。（森本）

東側拡張部では11基を検出した。埋土は、これまで上面で調査したピットと大きな違いはなく、上層からの遺構と考える。197・209・211～213・215～217ピットから土師器が出土した。（西山）

第8項　21面（第49図、図版18）

1　概　要

21面は、19a層のシルト、20b層の砂質粘土を除去して検出した遺構面である。調査区の北東側から南東拡張部にかけては、この掘削で地山にまで達した。

1－1区では、土層観察より21面から連続する水田遺構の存在を確認していたが、遺構の残りが悪いため、もっとも残りの良い23a面のみを調査の対象とした。しかし、1－2区では連続する水田を面的に捉えることができ、各面で調査を行った。本面は1面目の水田で、遺構は水田13枚、土器溜り3ヵ所を検出した。（西山）

2　調査の成果

（1）　水　田　（第50図、図版18）

3J－10d・e、4J－1d・e、2d・eグリッドに位置する。水田面直上の一部に薄く明青灰色シルトの自然堆積が見られ、これを除去して水田面を検出した。ただし、明青灰色シルトを除去すると水田面より下層が現われる部分があり、この層が堆積するまでに、ある程度削られていた事が分かる。

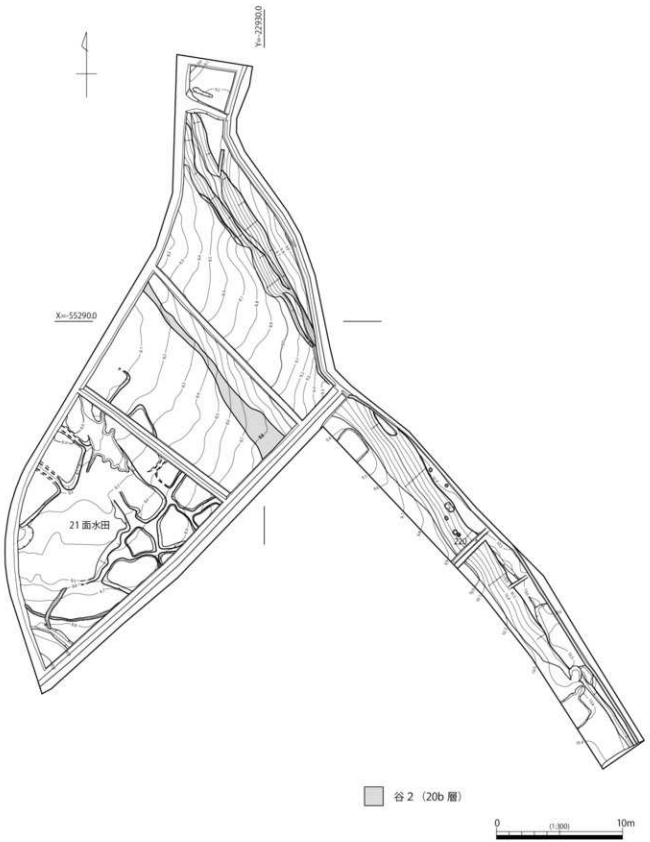
中央トレンチ南西側に平行して、1－1区の谷2に対応する20b層の砂が堆積する。土層観察では次面で検出した22面の223溝の上面まで20b層が堆積し、遺構に蓋をする様な形になる。さらにこの上に19a層が堆積し、20b層を削平した。この様な度重なる削平のため、この周辺は本面耕作土の21a層は残っておらず、水田面の状況は確認できない。全面が検出できた水田は1枚のみで、一部の検出にとどまるものを含めると13枚の水田を検出した。

水田の面積は約2.9～7㎡である。谷の北側、開口部にある水田の面積はやや大きい。本面直上から出土した土師器壺(Po84)は、口縁部に18a層、頸部以下に20b層に対応する堆積を確認した。この他、耕作土中から弥生土器・土師器（Po85・86）が出土した。

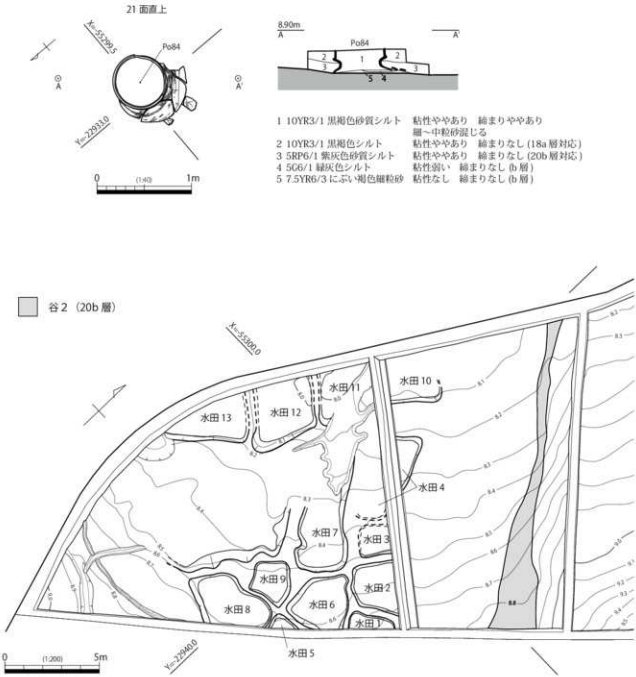
遺構の時期は、本面直上で出土した大型の土師器壺（Po84）が水田廃絶時以降を示すことから、古墳時代前期と考える。

水田3

4J－1dグリッドに位置する。中央トレンチに切られるが方形の水田で、標高8.48ｍにあり南北幅1.4m、東西残存幅1.5ｍを測る。南畦畔は幅68cm、高さ6cm、西畦畔は幅90cm、高さ3cmを測る。約2.1㎡の最も小さい水田である。



第49図　21面遺構配置図



第 50 図　21 面直上遺物出土状況図、21 面水田配置図

水田６

4J－1d グリッドに位置する。トレンチに切られるが五角形の水田で標高 8.53 mにあり南北残存幅 2.6m、東西幅 2.9 mを測る。南畦畔は幅 60cm、高さ 4cm、東畦畔は幅 50cm、高さ 2cm を測る。

水田７

4J－1e･d グリッドに位置する。方形の水田で標高 8.43 mにあり南北幅 5.0m、東西幅約 2.3 mを測る。南畦畔は幅 70cm、高さ 7cm、東畦畔は幅 110cm、高さ 2cm を測る。谷底の中心にある南北に長い水田で、北西端は撹乱されている。水田内の高低差が大きく、南側の畦畔の凹凸から、間に小畦畔があったと考える。

水田９

3J － 10c・d グリッドに位置する。五角形の水田で標高 8.53m にあり南北残存幅 1.65m、東西幅 1.70m、面積 2.9㎡を測る。水田６に接する南畦畔は幅約 76cm、高さ 4cm、水田８に接する南畦畔は幅 40cm、高さ 2cm を測る。北畦畔は凹凸が激しい。

水田 12

3J － 10c・4J － 1e グリッドに位置する。調査区外へ延びるが方形と考えられる水田で標高 8.02m にあり南北残存幅 2.7m、東西幅 2.9m を測る。東畦畔は幅 55cm、高さ 1cm、西畦畔は幅約 70cm、高さ 6cm を測る。水田 13 と共有する西畦畔と水田 11 と共有する東畦畔は平行しており、軸線は N － 53° － W を測る。水田 10 ～ 13 は調査区外へ延びるが、谷底幅が広くなることから面積は大きく、他の水田より安定した水田と考える。（西山）

（２）土器溜り　（第 51 図、図版 19）

本面で検出した土器溜りは、本遺跡の立地を特徴付ける遺構である。谷が埋没する過程で、谷奥や丘陵から流入した土砂は、周辺に存在していた遺構や遺物包含層の崩壊土である。これらのうち、遺物の残存状態が良く、まとまりのある一群を土器溜りとして検出した。

なお、19a 層に想定する時期より古い遺物が出土するが、これは丘陵に存在した遺構が崩壊した過程で発生した状況を示し、崩壊した時期を示さない。そのため、出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の時期幅があるが、遺構が形成した時期、崩壊土が発生した時期は、古い遺物の時期と関係なく古墳時代前期と考える。

232 土器溜り

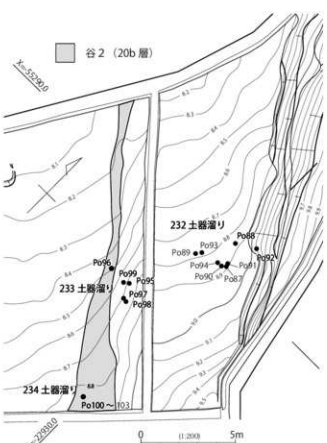
3J － 9c・d、10c・d グリッドに位置する。長幅 4.0 m～短幅 1.6 mの範囲に、丘陵上から点々と列をなすように、ある程度のまとまりを持って出土した遺物群で、この様な出土状況は転落する遺物を示す。層位は 19a 層内に相当する土器溜りである。弥生土器甕（Po87 ～ 92）・器台（Po93・94）が出土した。

233 土器溜り

3J － 10d グリッドに位置する。長幅 2.2 m～短幅 1.0 mの範囲に、丘陵上から安山岩と思われる自然石と共に転落、堆積した遺物群で、層位は 19a 層内に相当する。土師器甕（Po95 ～ 98）・低脚杯（Po99）が出土した。

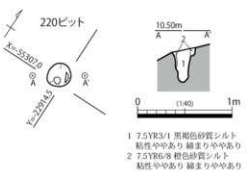
234 土器溜り

3J － 10c グリッドに位置する。出土地点は、１－１区の調査で谷２とした 20b 層内に相当する土器溜りである。この堆積は谷奥から続く堆積で出土位置も集中し、単純に丘陵上からの転



第 51 図　21 面土器溜り出土遺物ドット図

落であるとは断定できない。出土地点はｂ層であるが、１ヵ所から折り重なるように４個体の土器がまとまって出土しており、20b 層内からの出土であるが、上層からの遺物群と考える。すべての土器は大型で、土師器壺（Po100・101）・甕（Po102・103）が出土した。



第 52 図　220 ピット平面図・断面図

（３）ピット　（第 52 図）

本面でのピットの検出は少なく、前面までの掘り残しの可能性がある。

220 ピット

4J － 1b グリッドに位置する。掘方は円形で径 26cm、深さ 33cm を測る。古墳時代初め頃の土師器甕の小片が出土した。　（西山）

第９項　22 面（第 53 図、図版 20）

１　概　要

22 面は 21a 層の砂質シルト、21b 層の中～粗粒砂を除去して検出した遺構面である。調査区北東側の丘陵斜面と谷側は、223 溝を境に遺構の様相が異なる。遺構は丘陵斜面で土坑１基・ピット３基、谷側は２面目の水田で水田 10 枚・水口４基・溝１条を検出した。

なお、水口の内、３基は耕作土や畦畔の下から検出した下面遺構である。

２　調査の成果

（１）水　田　（第 54・55 図、図版 20 ～ 22）

3J － 10c・d・e、4J － 1c・d・e グリッドに位置する。水田面の直上の極一部に薄くにぶい黄橙色シルト質中粒砂の自然堆積が見られ、これを除去して水田面を検出した。

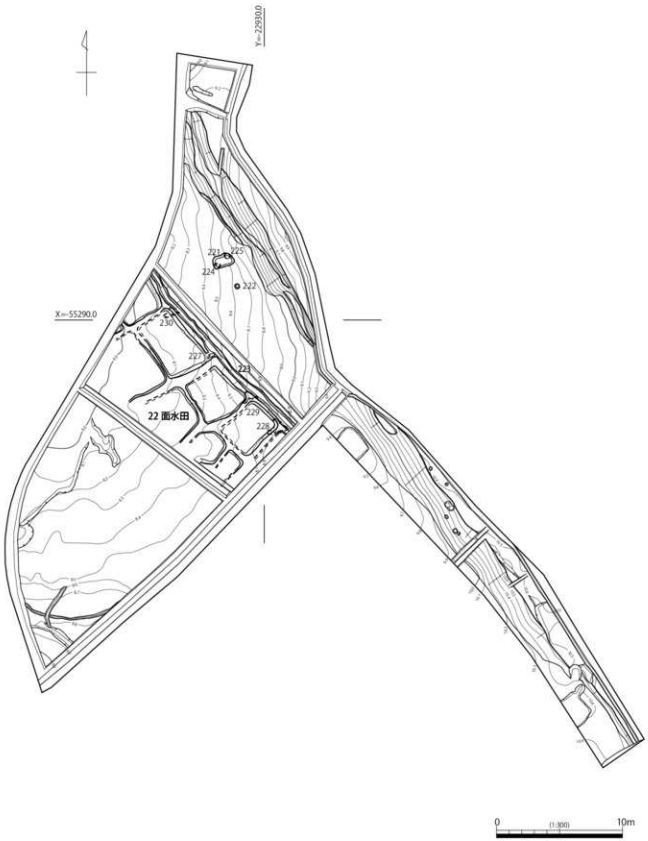
調査区南西の畦畔が検出できなかった部分は、上面の耕作が深く行われたため、攪拌され残っていない。畦畔が検出できた部分は、上面の耕作土の母材である 21b 層が厚く堆積する。21 面と同じように、調査区中央の水田は、高くなっていたと考える。

水田の面積は約 2.6 ～ 13.4㎡である。谷の北側、開口部に向かって面積は大きくなる。223 溝から円滑に水田へ湛水できる工夫か、溝と畦畔の取付け角度は直角ではなく、約 10°北に振っている。水田の形態が方形でないところを除くと、小畦畔はほぼ直線である。北側の畦畔は削平を受け、水田面との境が明確でない。耕作土中から弥生土器（Po107・108）・土師器（Po104 ～ 106）等が出土した。

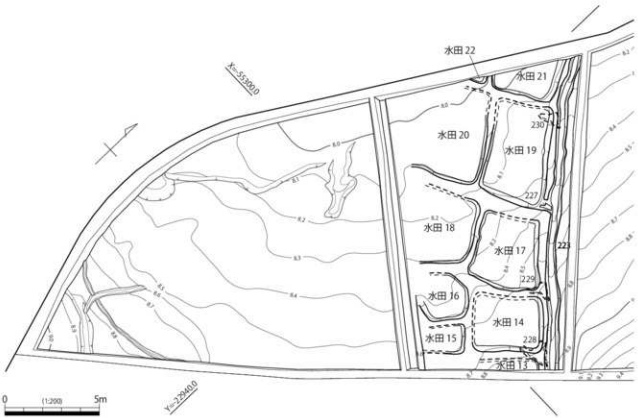
弥生時代後期の遺物を含むが、古墳時代前期の遺物が出土することから、遺構の時期は１面目の水田と大差なく、概ね古墳時代前期と考える。

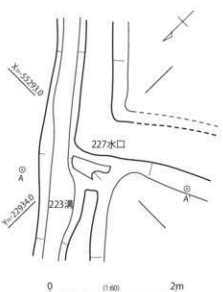
水田 14

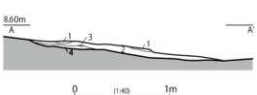
3J － 10c・d、4J － 1c・d グリッドに位置する。方形の水田で標高 8.62 ｍにあり、南北幅 2.4m、東西幅 3.5 m、面積 8.6㎡を測る。223 溝の堤を兼ねる東畦畔と南畦畔の交点にある 228 水口は、耕作土の除去後に検出した下面遺構である。南畦畔は幅 80cm、高さ 11cm、東畦畔は幅 60cm、高さ



第53図　22面遺構配置図







1　5PB3/1 暗青灰色砂質シルト　粘性ややあり　締まりややあり
　中粒砂混じる
2　2.5GY7/1 明オリーブ灰色シルト～細粒砂　粘性なし　締まりなし
　1～3cm の礫少し混じる
3　5GY8/1 灰白色シルト　粘性なし　締まりなし
4　5PB4/1 暗青灰色粘土　粘性あり　締まりあり　炭化物混じる

第 54 図　22 面水田配置図、227 水口平面図・断面図

14cm を測る。北・西畦畔と水田面との境が明確でない。

水田 16

3J － 10c・d、4J － 1c・d グリッドに位置する。西側が残っていないが五角形、または六角形の水田で標高 8.38 mにあり南北幅 2.3m、東西幅 2.2 mを測る。南畦畔は幅 50cm、高さ 7cm、東畦畔は幅 60cm、高さ 8cm を測る。水田 17・18 以降の水田が規則的な区画であるに比べ、畦畔の方向が乱れ、区画が変形する。水田 15・16 の部分だけが区画が小さく、本面で四角形を超える多角形の水田は、本水田のみである。

水田 17

3J － 10c・d グリッドに位置する。方形の水田で標高 8.38 mにあり南北幅 3.5m、東西幅 2.9 m、面積 10.4㎡を測る。223 溝の堤を兼ねる東畦畔と南畦畔の交点にある 229 水口は、耕作土の除去後に検出した下面遺構である。南畦畔は幅 60cm、高さ 17cm、東畦畔は幅 80cm、高さ 13cm を測る。北畦畔と水田面との境が明確でない。

水田 19

3J － 9c・d、10e グリッドに位置する。長方形の水田で標高 8.13 mにあり南北幅 4.7m、東西幅 2.7 m、面積 13.4㎡を測る。223 溝の堤を兼ねる東畦畔と南畦畔の交点に 227 水口がある。東畦畔にある 230 水口は、耕作土の除去後に検出した下面遺構である。南畦畔は幅 120cm、高さ 12cm、東畦畔は幅 80cm、高さ 11cm を測る。北畦畔・西畦畔北側と水田面との境が明確でない。223 溝に沿った堤、東畦畔の基部から下方に向ってやや斜めに刺さった状態で杭（W23）を検出した。これは単独の遺構で、水田 20 の杭とは異なり、畦畔の保護のために打設したとは考えられない。

水田 20

3J － 9c・d、10e グリッドに位置する。西側は攪拌される。標高 8.03 mにあり南北幅 4.7m を測る。南畦畔は幅 90cm、高さ 8cm、東畦畔は幅 50cm、高さ 4cm を測る。北畦畔・東畦畔北側と水田面との境が明確でない。東畦畔の南側裾で杭の根部を検出した。畦畔を保護するために打設したと考えられるが、１ヵ所しか確認できない。

227 水口

3J － 10d グリッドに位置する。水田面上で検出した、223 溝より水田 19 へ移水するための水口で、幅 55cm、深さ約 8 cm を測る。底面は標高 8.37m、口水口の標高は 8.21m で比高差は 0.16m あり、水田へ移水することが可能であるが、尻水口は標高 8.34m とやや低い。遺物は出土しなかった。

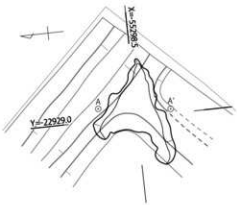
228 水口

3J － 10c グリッドに位置する。畦畔の下から検出した下面遺構である。223 溝より水田２へ移水するための水口で、痕跡は水田 14 の南東隅から放射状に拡がり、幅約 60cm、深さ約 6cm を測る。底面は標高 8.84m、口水口の標高は 8.67m で比高差は 0.23m あり、水田へ移水することが可能であるが、尻水口は標高約 8.71m と低い。遺物は出土しなかった。

229 水口

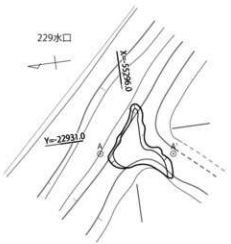
3J － 10d グリッドに位置する。畦畔の下から検出した下面遺構である。223 溝より水田５へ移水するための水口で、痕跡は水田 17 の南東隅から放射状に拡がり、幅約 82cm、深さ約 2cm を測る。底面は標高 8.71m、口水口の標高は 8.53m で比高差は 0.18m あり、水田へ移水することが可能であるが、尻水口は標高約 8.65m と低い。遺物は出土しなかった。

228水口



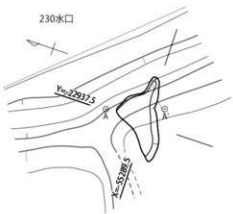
1　7.5YR6/2 灰褐色細粒砂　粘性なし　締まりなし
2　5B4/1 暗青灰色砂質シルト　粘性ややあり　締まりなし　細粒砂混じる

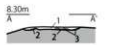
229水口



1　7.5YR6/2 灰褐色細粒砂　粘性なし　締まりなし
2　5B4/1 暗青灰色砂質シルト　粘性ややあり　締まりなし　細粒砂混じる

230水口





1　7.5YR6/2 灰褐色細粒砂　粘性なし　締まりなし
2　10BG7/1 明青灰色シルト　粘性なし　締まりなし
3　5B4/1 暗青灰色砂質シルト　粘性ややあり　締まりなし　細粒砂混じる

第 55 図　228・229・230 水口平面図・断面図

230 水口

3J－9d グリッドに位置する。畦畔の下から検出した下面遺構である。223 溝より移水するための水口で、痕跡は水田 19 の東畦畔の北よりから放射状に拡がり、幅約 80cm、深さ約 3 cm を測る。底面は標高 8.13m、口水口の標高は 8.12m で比高差はほとんどない。尻水口は標高約 8.20m で水口より高い。遺物は出土しなかった。

本遺構の前に水田 19 北畦畔があることから、水を入れるための水口としては疑問が残る。畦畔の下から検出した水口であることを考慮すると、掘削時には水田 19 北畦畔は検出時より南側にあり、の後に北側へ移動したと復元することができる。これらのことから、本水口は水田 21 へ移水するための遺構と考える。（西山）

（2）溝　（第 56 図、図版 20）

223 溝

3J－9e、10c･d グリッドに位置する。水田の北東端にあり幅 0.46 ～ 0.56m、深さ約 7 cm を測る。溝底の勾配は 4.3%（2.4°）あり、ほぼ直線の溝で軸線は N－43°－W を示すが、先端はやや北へ曲がる。水田側に溝底面から高さ約 6 ～ 11cm の堤状盛土があるが、丘陵側にはない。溝は 22 面水田と共に機能しており、堤状盛土は畦畔と共有し、227・228・229・230 水口を設ける。水口の位置は溝底面より水田が低い所に設置していることから、用水機能を持った溝と考える。土師器（Po109）・木器の腰掛脚部（W24）や火鑽臼（W25）が出土した。

遺構の時期は、22 面の水田と同時期、古墳時代前期と考える。（西山）

（3）土　坑　（第 57 図、図版 23）

221 土坑

3J－9d グリッドに位置する。楕円形を呈し、長径 1.7 m、短径 95cm、深さ約 5 cm である。埋土は明灰色砂質シルトの単層で、炭化物や細粒砂が混じる。後述する 224・225 ピットの上面遺構である。弥生土器（Po110・111）が出土した。

（4）ピット　（第 57 図、図版 23）

222 ピット

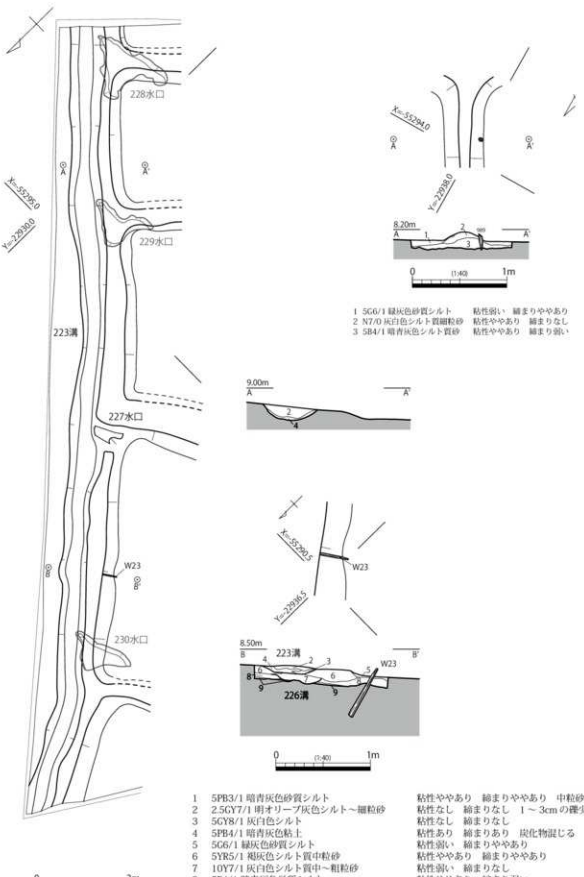
3J－9d グリッドに位置する。ほぼ正円形で、径約 36cm、深さ約 28cm である。埋土は明オリーブ灰色シルトと黒褐色泥炭質中粒砂の 2 層に分かれる。埋土上層には炭化物が混じる。埋土下層内には、木製品と石がピット内の北東隅でまとまって出土した。224 ピットの項で詳述するが、W26 が出土した。

224 ピット

3J－9d グリッドに位置し、221 土坑内の南東にある。楕円形を呈し、長径 55cm、短径 42cm、深さ 14 ～ 20cm である。222 ピットと同様の埋土で、自然石と木製品（W26 ～ 28）が出土した。木製品の一部は 222 ピットから出土した木製品と接合し、同一個体（W26）である。

225 ピット

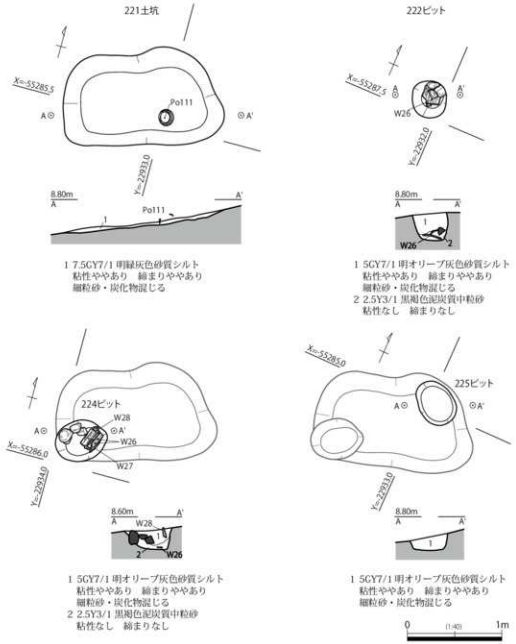
3J－9d グリッドに位置し、221 土坑内の北東にある。楕円形を呈し、長径 50cm、短径 36cm、



1　5G6/1 緑灰色砂質シルト　　粘性弱い　締まりややあり
2　N7/0 灰白色シルト質細粒砂　粘性ややあり　締まりなし
3　5B4/1 暗青灰色シルト質砂　粘性ややあり　締まり弱い

1	5PB3/1 暗青灰色砂質シルト	粘性ややあり	締まりややあり　中粒砂混じる
2	2.5GY7/1 明オリーブ灰色シルト～細粒砂	粘性なし	締まりなし　1～3cmの礫少し混じる
3	5GY8/1 灰白色シルト	粘性なし	締まりなし
4	5PB4/1 暗青灰色粘土	粘性あり	締まりあり　炭化物混じる
5	5G6/1 緑灰色砂質シルト	粘性弱い	締まりややあり
6	5YR5/1 褐灰色シルト質中粒砂	粘性ややあり	締まりややあり
7	10Y7/1 灰白色シルト質中～粗粒砂	粘性弱い	締まりなし
8	5B4/1 暗青灰色砂質シルト	粘性ややあり	締まり弱い
9	5YR2/1 黒褐色シルト	粘性あり	締まりなし　腐植土

第 56 図　223 溝、木造構造物平面図・断面図



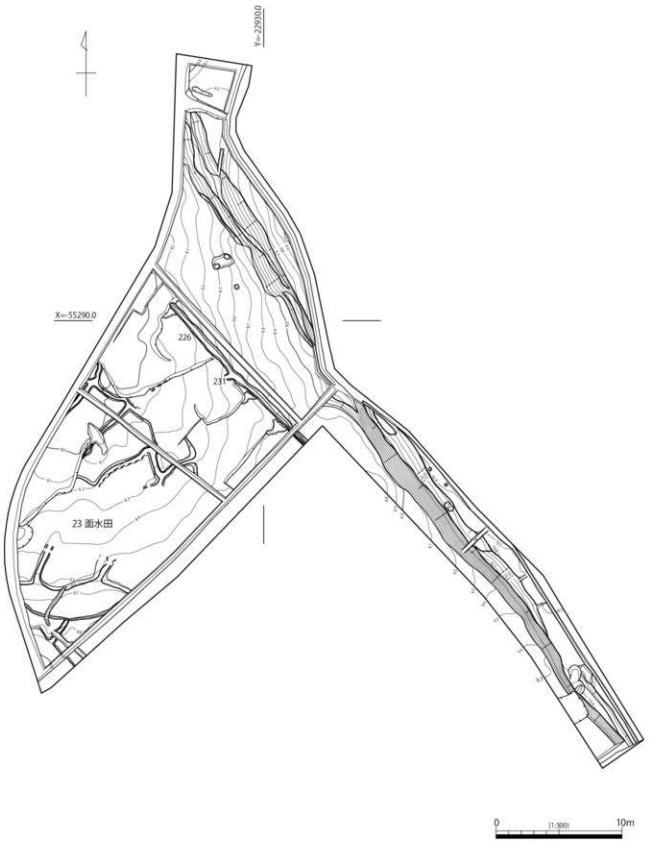
第 57 図　221 土坑、222・224・225 ピット平面図・断面図

深さ 10 ～ 15cm である。埋土は明オリーブ灰色シルトの単層である。炭化物がやや混じるものの、遺物は出土しなかった。（森本）

第 10 項　23 面（第 58 図、図版 24）

1　概　要

23 面は、22a 層の砂質シルト、22b 層のシルト質中粒砂を除去して検出した遺構面である。３面目の水田で、前年度に検出した１－１区の水田と同一面である。南東側は 21a 層の耕作による撹拌と 21b 層の堆積による撹乱、北西側は 22a 層による撹拌のため、23 面の遺存状態は悪い。遺構は水田 15 枚・水口１基・溝１条を検出した。



第 58 図　23 面遺構配置図

２　調査の成果

（１）水　田　（第59図、図版24・25）

3J－10c・d・e、4J－1c・d・eグリッドに位置する。水田面の直上に薄く明青灰色シルトの堆積が見られ、これを除去して水田面を検出した。

検出できた水田は谷の中央、調査区南側にある２段の水田である。調査区中央の西側は上面の耕作が深く攪拌され、南西側の畦畔が検出できなかった部分は、22面と同様21b層の堆積で削られ残っていない。畦畔が検出できたところは、上面の耕作土の母材である22b層が厚く堆積する。南端で畦畔が残っていたところは、18a～19a層の間に堆積した間層が覆っている。この部分は１段高く水田直上の薄層が残っており、21面・22面ともにこの段差を踏襲したと考える。

全面が検出できた水田はなく、面積は判らない。幹線小畦畔は乱れているが部分的に残る支線小畦畔から推定すると、谷の中央は等高線に平行して長い。弥生土器（Po112～120）が出土した。

遺構の時期は弥生時代後期後葉と考える。

水田24

3J－10d・4J－1dグリッドに位置する。概ね方形の水田で標高8.29ｍにあり南北幅1.55m、東西幅2.8ｍを測る。南畦畔は幅53cm、高さ3cmを測る。北畦畔は検出できなかったが、幹線小畦畔の西畦畔が北西隅で鍵状に屈曲することから畦畔の交差点が分かり、水田29北畦畔に続くとすることができ、復元すると約3.6㎡になる。

水田30

3J－10d・e、4J－1d・eグリッドに位置する。畦畔が屈曲する部分は多いが、概ね方形の水田で標高8.11ｍにあり南北幅は約2.9m、東西幅6.5ｍを測る。南畦畔は幅60cm、高さ9cm、北畦畔は幅54cm、高さ1cmを測る。北西隅が撹乱が撹乱されるが復元すると約17㎡あり、同じ様に東西に長い水田が連続する。

水田34

4J－1d・eグリッドに位置する。東畦畔は検出できなかったが、方形の水田で標高8.43ｍにあり南北幅4.3m、東西幅3.0ｍを測る。東畦畔は検出できず、北畦畔は幅6.4cm、高さ3cm、南畦畔は幅約100cm、高さ約10cmを測る。

水田36

4J－2eグリッドに位置する。標高8.83ｍにあり残存する東西幅約2.3ｍを測る。北畦畔は幅52cm、高さ1cmを測る。水田33・34間の畦畔の延長線上にあたるが、東側は検出できなかった。

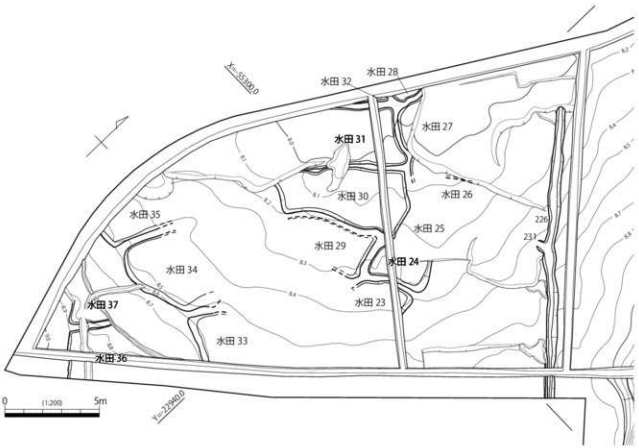
231水口

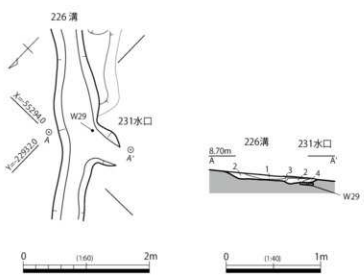
3J－10cグリッドに位置する。水田面上で検出した226溝より水田へ移水するための水口で、幅54cm、深さ約7cmを測る。226溝から水口へ向かって流れ込んだ状況で、木器（W29）が出土した。

（２）溝　（第60図、図版24）

226溝

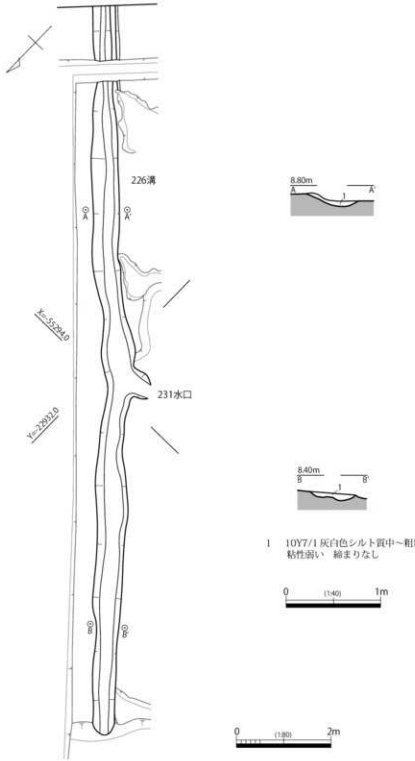
3J－9e、10c・dグリッドに位置する。223溝よりやや南西にずれ、幅0.50～0.58m、深さ約２～９cmを測る。溝底の勾配は5.1％（2.9°）あり、直線の溝で軸線はN－43°－Wを示す。231水口を検出したが、23面水田と共に機能した堤状盛土が確認できたのは南東端のみである。水田側の堤状





1　10Y7/1 灰白色シルト質中～粗粒砂
　粘性弱い　締まりなし
2　5G4/1 暗緑灰色シルト質中～粗粒砂
　粘性弱い　締まり弱い
3　10Y5/2 オリーブ灰色中～粗粒砂
　粘性なし　締まりなし
　径１～ 3cm の礫混じる
4　5B4/1 暗青灰色シルト
　粘性弱い、締まり弱い

第 59 図　23 面水田配置図、231 水口平面図・断面図



第 60 図　226 溝平面図・断面図

盛土は溝底面から高さ約６cm を測る。22 面の耕作で攪拌されたと考える。弥生土器（Po121 ～ 125）が出土した。

出土遺物の時期は弥生土器後期前葉から後葉の幅があるが、遺構の時期は 23 面の水田と同時期、弥生時代後期後葉と考える。（西山）

第4節　出土遺物

第1項　遺構出土遺物

（1）10面　（第61図）

23ピット出土遺物

Po1は壺である。口縁端部に面がある。

26ピット出土遺物

Po2は杯身である。立上がりは細く、やや外反する。古墳時代後期と考える。

39ピット出土遺物

Po3は甕である。小型で口縁部のみを大きく外反し、頸部が明瞭でない寸胴の体部を持つ。平安時代前期と考える。

45ピット出土遺物

Po4は甕である。小型で口縁部に3条の凹線を施す。弥生時代後期と考える。　（西山）

（2）11面　（第61図）

杭列1出土遺物

W1（55杭跡）・W2（61杭跡）は杭である。杭列1の内、残りの良いものを図化した。　（森本）

（3）14面　（第61図）

126ピット出土遺物

Po5は甕である。口縁端部に面はなく、帯下端の突出は鋭い。多条平行沈線文は施さないことから、時期は弥生時代終末期と考える。　（西山）

（4）16面　（第61～63図、図版26）

130流路出土遺物

Po6は甕である。7世紀後半と考える。

Po7は杯で、口縁部が短く外反する出雲型の杯（川原2010）で、7世紀末から8世紀前半頃と考える。Po8は高杯である。7世紀後半と考える。

W3は燃えさし、W4は建築部材である。

131流路出土遺物

Po9は透かしを2ヵ所施す高杯である。2ヵ所とも焼成時に透かしが塞がる。Po10は口縁部が短く外反する甕である。

132流路出土遺物

W5は片側に抉りを入れた刀形、W6～10は燃えさし、W11は火鑽臼、W12･13は先端を加工した杭、W14～17の板状木製品、W18の角材がある。その中でも、W14の板状木製品は側面にやや抉れた箇所があり、紐等を掛けた痕跡の可能性がある。　（森本）

破堤堆積出土遺物

Po11 は６世紀末から７世紀前半、Po12 は６世紀前半の杯蓋である。

W19 は燃えさし、W20 は火鑽臼、W21 は杭、W22 は棒状木製品である。　（森本）

（５）17・18 面　（第 63 ～ 70 図、図版 27 ～ 32）

竪穴建物１埋土１出土遺物

Po15は口縁端部に面がない、立上がりが短い杯身である。陶邑II-4～5（TK43～209）併行と考える。

Po16 は口縁部は外反し、内外面ナデ調整する甕で、岩吉Ⅵ（古）期と考える。　（森本）

竪穴建物１貼床出土遺物

Po17 は、内面に一部赤彩が残る椀である。　（森本）

175 柱穴出土遺物

Po18 は外面に煤が残り、内面には粘土貼り付け痕跡が顕著な甕で、岩吉Ⅵ期と考える。　（森本）

竪穴建物１貼床除去面出土遺物

Po19 は口縁端部を平坦に仕上げ、ナデ調整を施す甕である。岩吉Ⅴ（新）期と考える。　（森本）

133 土器溜り出土遺物

Po20 ～ 35 は甕である。口縁部と体部の形態から４つに大別できる。Po20 ～ 24、Po32 は口縁部に古い形態を残す。Po23 は口縁部に複合口縁の名残りの段がある。Po20・22・24・32 も同様に複合口縁の名残りがあるが、口縁部の調整が異なる。Po20 は明確に括れた頸部から一度やや肥厚させ、次に先端に向けて細くヨコナデする。Po21 は端部に面があり、上方に小さく折り曲げる。Po24 は肥厚させるところまでは Po20 に似るが、端部を外へ小さく折り曲げる。肩が張ることも異なる。Po32 も Po20 に似るが、端部を内へ小さく折り曲げる。Po25、33 は口縁部が直線的に外傾し、体部はほぼ球形で肩が張る。Po25 は体部径に比べて口径が大きい。Po33 は体部はほぼ球形で、口径は小さく頸部の括れが明瞭である。Po26 ～ 28、Po34 は口縁部が緩く外反し、体部最大径が下方にあり肩がやや張る。Po26 は端部を丸く収める。口径は大きく、体部内面に強いヘラケズリを行うため、頸部が肥厚する。Po29 ～ 31、Po35 は口縁部が緩く外反する。外見上は頸部が明確ではなく、体部最大径が下方にあり肩が張らない。Po29 は器壁が厚く、頸部の括れがやや明瞭である。Po35 は大型であるが形態は Po29 と同じである。Po30 は口縁端部に面がある。Po31・35 は内面のヘラケズリが特に強い。Po36 は高杯の杯部である。底部の接合部からやや内湾しながら外傾する。Po37・38 は椀である。口縁端部がやや内湾し、Po37 は深い。Po39 は甑である。把手の位置は左右対称でなく、ややずれる。

Po40 ～ 42 は竈である。小型の Po40 は、やや上窄まりの円筒形で、右側に向って歪む。掛口を「く」字状に屈曲、緩く外反させ、逆「U」字状の焚口から約 1.5cm 離してやや幅広の庇を貼り付ける。庸は前に大きく張り出し、左右は幅が狭くなるが底部まである。掛口・庇端部は共にヨコナデを施すが、面は庇の一部にしかない。体部外面のハケメ調整は、最終は下から上に向って何度も行い、その前段階は横方向に施す。とくに、庇・胎土の接合部分は入念にハケメを施す。内面は、頸部と体部の接合部、底部付近にハケメ痕を残す。その間は、ハケメを施した後に縦方向は下から上、横方向は左回りのヘラケズリを行う。

中型の Po41 は小型の Po40 と同じ様にやや上窄まりの円筒形で、右側に向って歪む。掛口を「く」字状に屈曲し、逆「U」字状の焚口から約 2.5cm 離してやや幅広の庇を貼り付ける。庸は前に大きく

張り出し、左右は幅が狭くなるが底部まである。掛口・庇端部は共にヨコナデを施すが、面は庇の一部にしかない。体部外面のハケメ調整は、最終は下から上に向って何度も行い、ハケメの回数を重ねたため、一見、全面に薄く胎土を貼り付けた様に見える。薄い表面の胎土が剥がれた部分から、前段階に横方向に施したことが確認できる。とくに、庇や胎土の接合部分は入念にハケメを施し、多い部分では5回を数える。内面はハケメにより接合痕を均した後にヘラケズリを行う。焚口の内側周辺にハケメが残る。ヘラケズリは縦方向が上から下、頸部の接合部と底部付近の横方向は左回りに削る。上から下へ向かって削ることは難しく、掛口より手を入れて調整したものではない。焚口、もしくは反転して底部より調整したと考える。

大型のPo42は、Po40・41と比べて焼成が非常によく堅く焼け締り、形態は似ているがやや直線的である。体部はやや肩の張る上窄まりの円筒形で、掛口を「く」字状に屈曲する。方形に開けた焚口に沿って、間を空けずに幅広の庇を貼り付ける。廂の上側はやや外反しており、左右は特に直線的で、幅が狭くなり底部まである。掛口・庇端部は共にヨコナデを施すが、掛口部には明瞭な面がある。体部外面のハケメ調整は、最終は下から上に向って何度も行い、その前段階は横方向に施す。とくに、庇・胎土の接合部分は入念にハケメを行う。内面は、頸部と体部の接合部にハケメ痕を残す。底部の一部にハケメ痕が残っており、Po41と同様にハケメの後にヘラケズリの順で調整を行う。しかし、ヘラケズリの方向は異なり、横方向に上側に弧を描く。ヘラケズリは体部一帯に均一に行うことから、焚口から手を入れて行ったと考える。体部下端には製作過程で内外面に至る亀裂が生じたと思われ、内面に補修痕と考えられる粘土の貼付けが確認できる。補修は内面のヘラケズリを行った後、調整の最終段階で行う。亀裂が生じたと想定する外側の部分には、明瞭な亀裂の痕跡や粘土の貼付け痕はないがハケメが何度も行われており、亀裂が外面まで至っていたことを表す。

3つの竈が前のめりに歪む原因は、焚口の空間が空いていることによる。Po40・41は、内面の調整が異なるが形態が同一で胎土・焼成、横へ歪む方向も同じであることから、同一工人が製作したと考える。3つの竈は古墳時代後期と考えるが、形態や調整を考慮すると、Po40・41はPo42より後出する。

Po43 ～ 54は杯蓋である。Po43・46 ～ 49、Po52 ～ 54は口縁端部に面や段があり、天井部に稜を施す。稜は鈍く、器高の高いものと低いものがある。Po49・53・54は稜を意識するが、明瞭でない。Po49は焼け歪み、天井部から稜の間が陥没した影響で、とくに稜が鈍い。Po44・45・51は口縁端部に面や段がない。Po50・51は稜がなく、新しい傾向を示す。Po55 ～ 68は杯身である。Po56・59・60・61、Po63 ～ 65は口縁端部に段や面がある。Po59は口径が小さく、口縁部が内湾する。Po64は大きく焼け歪む。Po55・57・62、Po66 ～ 68は口縁端部に面や段はない。Po62・66・67は器壁が特に薄い。Po68は焼け歪みのため浅く、底部に粗いハケメが残る。Po69・70は有蓋高杯である。Po69は中央が陥没した小型つまみを貼り付けた蓋である。天井部のヘラケズリの範囲は狭く、稜はない。内面の口縁からやや上側に浅い沈線を巡らす。Po70は杯部が浅く、口縁端部に面や段はない。脚部は廻の頸部から口縁部を反転させた形態で、脚柱部に円形の孔を穿ち、裾部との境に沈線を巡らす。Po71は無蓋高杯の杯部である。器壁は薄く直立する口縁部を持ち、稜とその上に巡る沈線の間に刺突文を施す。Po72は壺の口縁部で、端部に内傾する面がある。Po73は皿付鉢である。底部に穿孔はなく、口縁部は外反し端部に面があり、平面が楕円形のやや膨らんだ体部に3条の沈線を広めの間隔を開けて巡らす。本来は口縁部と体部の境はなく直線的に外傾する器形であるが、焼き歪のため頸部があるよう変形したと考える。

S1は紡錘車である。滑石を使用しており、中心に約7mmの円孔を穿ち、細かい鋸歯文様を陰刻する。上面の一部に漆が付着し、側面の一部に使用による削痕、底部に磨滅痕がある。

143 土坑出土遺物

Po74は壺の体部である。器壁は薄く、下半まで回転ヘラケズリを施す。（西山）

（6）19面　（第71図、図版32）

195 溝出土遺物

Po75・76は器台の受部である。Po76は内外面にミガキを施しており、北近畿からの搬入品の可能性がある。Po77は5条の凹線を施した器壁の厚い甕である。口縁端部を下垂させる。いずれも弥生時代後期と考える。

段状遺構1周辺出土遺物

Po78は弥生土器壺、Po79は山陰型甑形土器で古墳時代前期と考える。

206 溝出土遺物

Po80・81は口縁部が外反し、端部を平坦に仕上げる甕である。いずれも古墳時代前期と考える。

219 土坑出土遺物

Po82は有段の杯部を持つ高杯で、内面にはハケメ後の縦方向ミガキが顕著である。内外面には赤彩が施される。Po83は体部に丸みを持つ小型丸底壺で、胎土はやや粗く、調整は不明瞭である。いずれも古墳時代前期と考える。（森本）

（7）21面　（第72・73図、図版32・33）

21 面耕作土出土遺物

Po84は壺である。大型で複合口縁の端部を小さく折り返し、上端に面を持つ。口縁下端の突出は明瞭で、頸部に刺突文、肩部にハケメを施す。古墳時代前期中葉と考える。Po85は甕、Po86は低脚杯の杯部で、古墳時代前期と考える。

232 土器溜り

Po87～92は甕である。Po87・88は口縁帯に凹線文を施すが、Po89は一部をナデ消す。Po92は大型で口縁帯が幅が広く外傾し凹線文を、体部肩部に刺突文を施す。Po93・94は鼓形器台である。Po93の脚柱部は短く、3段の竹管による刺突文を施し、4方向に「I」字状の切込みを穿孔する。しかし、切込みは焼け歪みのため癒着し貫通しない。Po94は脚台部が長く、穿孔はない。弥生時代後期中葉から後葉と考える。

233 土器溜り

Po95～98は甕である。4つの甕に共通して、体部と複合口縁の口縁帯を接合した部分の内面、凸帯裏の上側に強いナデの痕跡が巡る。口縁帯外面に多条平行沈線文はなく、器壁は薄い。Po97の体部は倒卵形で、底部は丸底である。Po99は深い低脚杯である。古墳時代前期と考える。

234 土器溜り

Po100・101は壺である。外反する複合口縁を持ち、端部をさらに小さく外反する。Po100の複合口縁下端は接合部分の突出が殆どなく、倒卵形の体部で底部は丸底である。Po102・103は甕である。大型で口縁端部の外面は小さく外反し、先端に向って肥厚、上端に面がある。古墳時代前期前葉と考

える。Po103の口縁端部は外反するがPo102程の外反せず、口縁帯下端を小さく垂下する。（西山）

（8）22面　（第74・75図、図版34）

22面耕作土出土遺物

Po104～108は甕である。Po104～106は口縁帯に多条平行沈線文がなく、口縁端部に面がない。古墳時代前期と考える。Po107は口縁帯が発達し大きく外反し、外面に多条平行沈線文、頸部内面に細かくヘラミガキを施す。弥生時代後期後葉と考える。Po108は口縁帯が狭く内傾しすることから、弥生時代後期前葉と考える。（西山）

水田19出土遺物

W23は杭状の木造構造物である。やや厚い木製品で、長方形の枘孔を2つ穿ち、表面には多くの加工痕があり滑らかに仕上げる。製品を再利用したと考えるが、杭として使用するため下端を先突状等に再加工した痕跡はない。（西山）

223溝出土遺物

Po109は甕である。器壁が薄く、口縁帯に多条平行沈線文はなく、古墳時代前期と考える。

W24は腰掛である。長方形で横長の枘孔を穿つ別材を組み合せた指物腰掛の脚部で約1/3を欠失する。上端を円頂とし、脚部中央を一度括れさせた後、下端に向って厚さを増し、裾が広がる。脚内面には枘孔に続いて座板の厚さ分の溝を穿ち、座板の枘を挿入し端部をはめ込んだ重枘とする。枘孔は高く、厚い枘・座板が用いられたと考える。脚内面枘孔の下には斜めと水平方向の彫り窪めがあるが、用途は不明である（注2）。指物腰掛は脚板上端を枘差しで結合するものが多いが、常松普田遺跡2区22溝からも同様に脚板面へ枘差しで結合する構造の腰掛が出土した（注3）。W25は円形の括れがあり火鑽臼と考えるが、焼痕はない。（西山）

222・224ピット出土遺物

W26は、天板下面の端付近に溝を穿ち、はめ込む構造を持った机の脚部である。下部中央を台形状に刳込み、その両側に2つの孔を穿ち、1つには木片を挿入する（注4）。その他、W27・28が出土した。これらは接合せず、別個体と想定した。W28は先端を尖らせており、杭と考える。（森本）

221土坑出土遺物

Po110・111は甕である。Po110は2条の凹線、口縁端部はナデ調整を施す。肩部には刺突文、体部が最大径をとり、外面に一部ミガキが残る。Po111は8条の平行沈線を施し、口縁下端部はやや内側に下垂する。いずれも弥生時代後期と考える。（森本）

（9）23面　（第76図、図版34）

23面耕作土出土遺物

Po112～117は甕である。Po112の口縁部はやや外傾する。Po113～115は口縁帯に多条平行沈線文を施すが、Po116は施さない。Po118は装飾壺の体部で、ハケメの後に刺突文を施す。Po119は器台である。弥生時代後期後葉と考える。

231水口出土遺物

W29は杭である。下端を先突状に加工し、コゲ痕がある。上端にも相欠継状の刳り込み状の加工があり、製品の再利用と考える。

226 溝出土遺物

Po121 ～ 123 は甕である。Po121 は口縁帯下端が垂下するが幅が狭く、弥生時代後期前葉と考える。Po122 は内傾する口縁帯に凹線文を施し、弥生時代後期中葉と考える。外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリを施し、端部を下方に摘み出す。Po124 は器台の脚部である。Po125 は高杯の脚部である。（西山）

第２項　包含層出土遺物

本遺跡は、谷という遺跡の立地上、上・下層に含まれる遺物が紛れ込み、包含状況はその時期を単純には表してくれない。しかし、掘り下げる程紛れ込みは少なくなり、大まかな時代の変遷はみることができる。とくに、同一層位内の出土遺物の時期差が顕著で、遺構との関係を考える資料となりうることから、18a 層は古墳時代前期・中期・後期、19a 層は弥生時代後期・古墳時代前期の時期に分けて記述する。

（１）土　器　（第 77 ～ 85 図、図版 35 ～ 38）

14a 層出土土器

Po131 は高台付杯の高台部である。高台だけを残して体部を打ち欠き、見込み部と高台を貼り付けた底面の両面に「大谷」と墨書する。底部は平底で体部が内湾気味に立上がり、高台は直立気味で高い。この杯の形態は山陰地域特有のもので、出雲坏Ⅱ A 類の A4b 型式で奈良時代と考える（注 5）。Po133 は杯身である。立上がりは高く、古相を示すが口縁端部に面がない。Po135 は甕である。体部外面は縦にタタキメを施し、内面に小さな当具痕を残す。

16a 層出土土器

Po126 ～ 129 は甕である。Po126・127 は肩が張らず、口縁部が直線的で外反しない。Po126 は口縁部が直線的に外傾する甕で、頸部の括れが強い。Po128 は口縁部が緩く外反する甕である。口径は大きく、端部を丸く収める。体部内面に強いヘラケズリを行うため、頸部が肥厚する。しかし、外見上は頸部が明確ではなく、肩は張らない。Po129 は直立した短い複合口縁を持つ。体部から立ち上げた口縁部に貼り付けを行い、端部を小さく折り返す。体部外面のハケメも粗い。Po126 ～ 128 は古墳時代後期、Po129 は古墳時代中期と考える。

Po132 は杯身である。立上がりは高く、端部に面を施す。器高は高く、受部の張出しは小さい。陶邑Ⅱ－２（TK10）併行と考える。Po134 は有蓋の高杯で、見込みは深く、やや器高が高い。脚部は飁の口縁部に似た形態で、脚部に３方向の円孔を穿つ。脚柱部と脚底部の間は比較的なだらかで、通常施す沈線はない。

18a 層出土土器

Po136 ～ 150 は古墳時代後期の土器である。Po136 ～ 142 は甕である。Po139・140・142 は口縁が直線的に外傾する。Po139 は小型で、肩が張らない。Po140 は口縁端部に面があり、頸部が明瞭で肩が張る。Po137 は古い形態の口縁で、複合口縁の名残りがある。Po141 は口縁部が緩く外反し、体部の肩が張らない。Po138 は球形の体部から立上がる、比較的長めの「く」字口縁の上に、直立した短い口縁部を貼り付ける。焼成は悪くやや軟質で、端部に面を施し器壁は薄いがシャープな感じはない。

Po143 ～ 150 は蓋杯である。Po143・144 は杯蓋である。Po143 は口縁端部に面はなく、鈍い作り

で器壁が厚い。天井部には稜があり、外面に赤彩を施し、内面に漆痕を残す。Po144は口径の割に器高は低く、沈線で稜を表す。口縁端部に面があり、外側へ小さく折り返す。焼成は良く、シャープな作りである。Po145～150は杯身である。Po145は高い立上がりを持つが、口縁端部に面はない。Po149は底部外面に板目痕を残す。器壁は厚く、太く短い立上がり端部には面がある。法量・胎土や焼成の状態からPo143とセットと考える。Po146・148・150は器壁が薄い。Po148は口径と比べて、見込みが深い。Po150は内面に当具痕を残す。焼成時の歪みで立上がりは低いが、口径が大きいことからPo146と同じ頃と考える。

Po151～166は古墳時代中期の土器である。Po151～155は甕である。Po151～155は体部から短く立上がり、器壁の厚い口縁を貼り付ける。端部に面を持ち、小さく外側へ折り返す。Po152はやや肩の張った胴長の丸底で、体部外面のハケメ、内面のヘラケズリが粗い。Po156・157は直口壺である。Po156は頸部が直線的に立上がり、口縁端部が小さく外反する。頸部内径が小さく、器壁は頸部に向って肥厚する。底部は残っていないが、体部最大径は下方にあり、全体的に器壁が厚い。Po157は頸部が短く、緩く外反する。肩部は高い位置にあり、Po156とは形態が異なる。Po158～162は高杯である。杯部に稜はなく、Po158・159は見込みが深く、他は浅い。Po159は、杯部内面にヨコミガキの後、タテミガキを施す。Po161は歪みが大きく、手捏ね感がある。Po162は内外面ともハケメを施す。Po163は脚付椀である。椀部の見込みは深く体部は内湾して立上がり、口縁端部内側に内傾する面を持つ。椀部外面にヘラミガキ、全面に赤彩を施す。Po164～166は小型丸底壺である。Po164は口縁部が比較的長く、横長である。Po165は口縁部が短い。Po166は縦長で、口縁部の貼付けが拙く、器壁が厚い。

Po167～182は古墳時代前期の土器である。Po167～169は壺である。複合口縁で形態は良く似ており、口縁部を大きく外反する。Po167・168は口縁端部を小さく折り返す。Po169は大型のためかやや器壁が厚く、口縁端部の折り返しは鈍い。Po170～172は甕である。Po173は鼓形器台で、脚台部を欠失する。内面受部を丁寧にヘラミガキし、脚台部はヘラケズリを行う。Po174～176は高杯である。Po174・175は杯部に稜があり、脚部を欠失する。Po174は外面に赤彩を施す。Po175は見込み部にヨコミガキ、一部にタテミガキが残る。Po176は強く内傾する杯部を持つ、ブランデーグラス形の杯部で、脚部を欠失する。杯部外面の一部と内面にヘラミガキを施す。Po177は低脚杯である。杯部は浅く広がり、内外面共にヘラミガキを施す。Po178は小型器台である。脚部内外面にハケメが残る。Po179は直口壺である。器壁は薄くシャープな作りで、口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。Po180・181は小型丸底壺である。Po180は全面に赤彩を施す。Po180はPo179と形態が酷似し、体部に比べてやや口縁部が大きいが、ほぼ1/2の大きさである。Po181は複合口縁で、器壁が非常に薄い。口径は体部径を上回る。Po182は山陰型甑である。凸帯は上面に面があり、端部との間隔が短く貼付け痕が確認できる。

19a 層出土土器

Po183～212は古墳時代前期の土器である。Po183・184は壺である。Po185～193は甕である。Po186は口縁端部に面があり、倒卵形の体部を持つ。Po192・193は大型で口縁端部に面がある。口縁部の外傾度合いは異なるが、ほぼ同じものと考える。Po194～199は高杯である。Po195・196は口縁部を外反する。Po197はワイングラス型で、内面にハケメを施す。Po198・199は小型で形態が異なる。Po198は杯部に対して脚裾部が大きく広がる庄内系の高杯である。Po199はコップ状の杯部を持つ。Po200～204は器台である。受部・底部を外反する。Po205は複合口縁の直口壺である。

Po209・210は複合口縁の小型丸底壺である。形態や調整が異なり、Po210は口径が体部径を大きく上回る。Po211・212はミニチュア土器で、外面に粗くナデ上げた調整痕やユビオサエが残る。

Po213～226は弥生時代後期の土器である。Po213は壺である。外傾する複合口縁に多条平行沈線文を施し、頸部と体部の境に凸帯を巡らす。弥生時代後期後葉と考える。Po215～220は甕である。Po215は外傾する口縁帯に縦方向のヘラミガキを施す。弥生時代後期後葉と考える。Po216～218は口縁帯が直立する。Po216の口縁帯に多条平行沈線文等がないが、頸部の括れは小さい。弥生時代後期中葉と考える。Po219・220は口縁帯が内傾する。口縁帯の幅は狭く、端部を小さく摘み上げる。頸部の括れは小さく、弥生時代後期前葉と考える。Po221・222は高杯である。Po223～225は器台である。Po225は受部端部に面、内面に段があり、内外面に赤彩を施す。北近畿からの搬入品である。Po226は蓋である。

22a層対応層出土土器

Po227は高杯である。口縁部は強く外反し、やや丸い杯底部を持つ。丁寧な作りで、口縁部の立上がりはやや短く、脚柱部が細い。弥生時代後期中葉と考える。Po228は装飾壺の肩部で、外面に沈線、貝殻腹縁による刺突文を施す。穿孔したと思われる痕があり、注水の可能性がある。体部は丸みをおびておらず、弥生時代後期中葉と考える。Po229・230は鼓形器台である。両方とも上部を欠失しており、形態は異なる。Po229は頸部以上を欠失するが脚台部との接点は細く、脚台部上端にキザミメを施す。弥生時代後期後葉と考える。Po230は脚柱部が太く、脚部に凹線を施す。弥生時代後期中葉と考える。

その他の出土土器

Po231・232は蓋杯である。Po231は杯蓋で歪みが大きく、低平である。口縁端部に面があり、天井部との境にある稜を上下2条の沈線で強調する。Po232は杯身で口縁部の立上がりが高く、端部に面がある。焼成はややあまいが、形態は古相を示す。

（2）石　器　（第85・86図、図版39）

S2～5は敲石である。輝石・角閃石を含む安山岩で、川原石を使用する。S3は打点のほか、一部に被熱痕がある。S4は風化度合いが異なり、挟雑物の粒子が少なく、細かい。S6の石材は多孔質の軽石を使用する。表面に螺旋状の溝があり、幅4～8mm、深さは約1.5mm測る。用途は不明である。

（3）木　器　（第87図、図版39）

W30は台形状木製品である。短辺の木口に3ヵ所穿孔し割を入れ、長辺側の側面端に方形の切込みを入れる。台形状の形態と短辺の穿孔から、上面に接合するものがあったと考える。机の脚部の可能性がある。W31は方形の棒状木製品で、2面を加工する。

（4）銭　貨　（第88図）

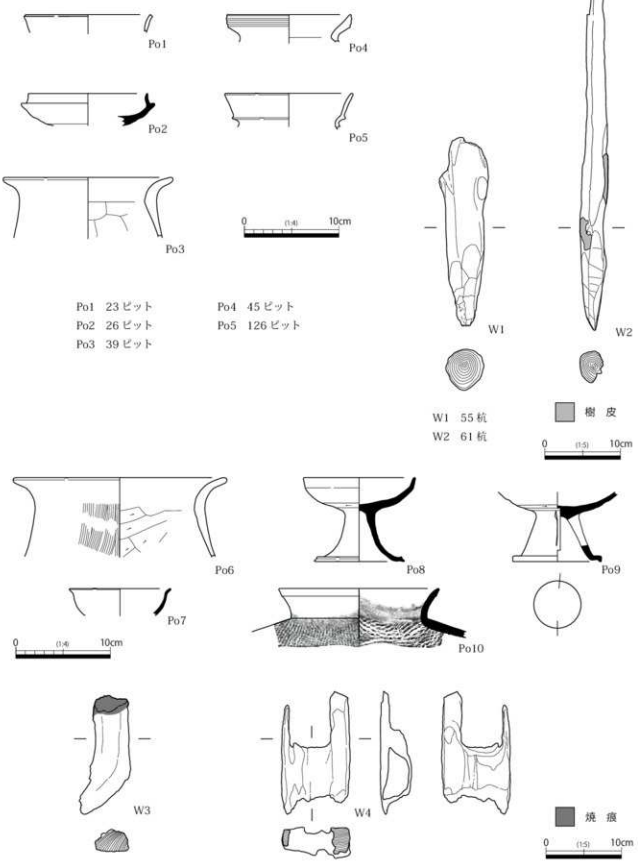
Z1は銭貨である。約1/3を欠失する。「開元通寶」は唐銭で、初鋳は621年である。　（西山）

注

1．水田を囲む畦畔は煩雑を避けるため谷の開口部の方向である北西側の畦畔を北畦畔とし、四方はこれに準ずる。
2．（奈文研 1993）p.197・201 参照。
3．（鳥県財 2015a）参照。
4．B 形式（奈文研 1993）p.201・205 参照。
5．出雲Ⅲ期～Ⅳ A 期に該当する。（島古セ 2010）

参考文献

加藤裕一　2005「２．移動式竈について」『名和中畝遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
島根県古代文化センター　2010『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』
（財）鳥取県教育文化財団　2002『小畑古墳群』
（公財）鳥取県教育文化財団　2015a『常松普田遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会
（公財）鳥取県教育文化財団　2015b『常松大谷遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会
奈良国立文化財研究所　1993『木器集成図録』近畿原始篇（解説）
光本　順　2010「第５章　考察　土器溜まり考」『鹿田遺跡 6』岡山大学埋蔵文化財センター
川原和人　2010「出雲地方における律令時代の須恵器の特色とその背景」『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』



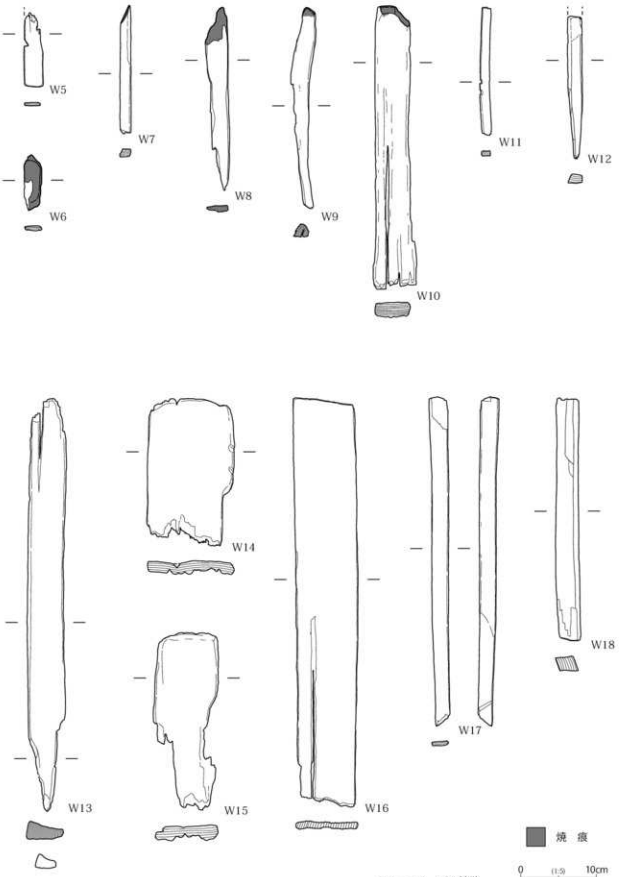
Po1　23ピット
Po2　26ピット
Po3　39ピット

Po4　45ピット
Po5　126ピット

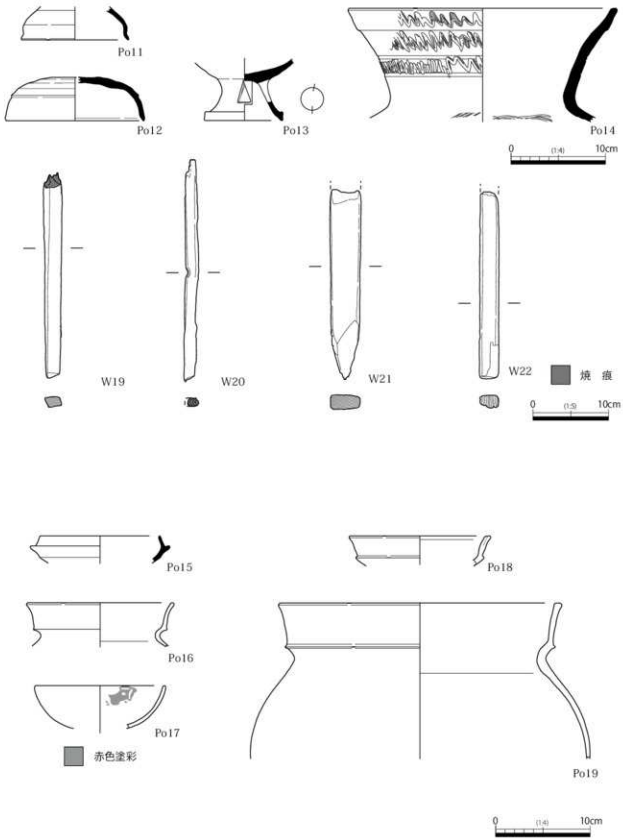
W1　55杭
W2　61杭

Po6・7・8、W3・4　130流路
Po9・10　131流路

第61図　10・11・14面出土遺物、16面出土遺物(1)

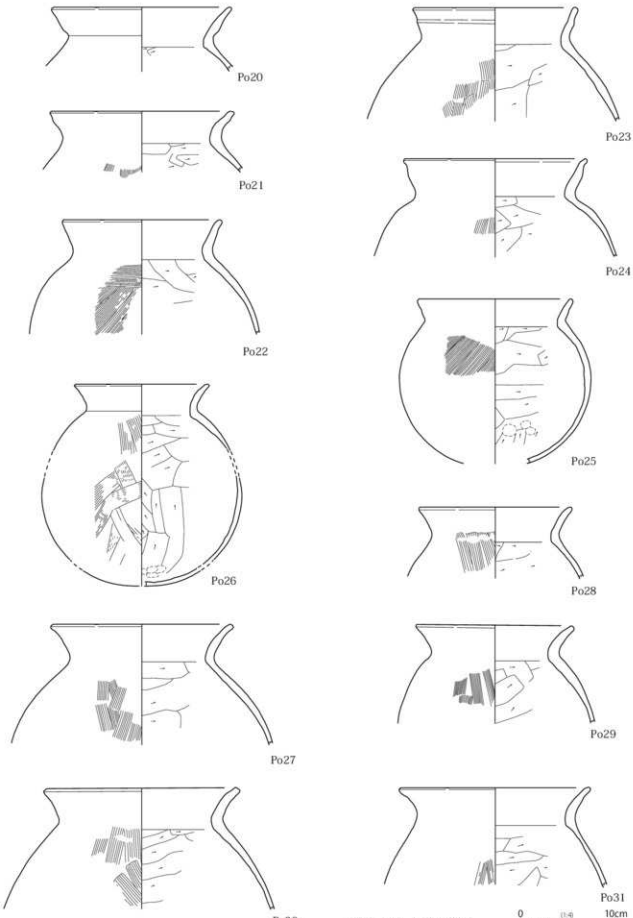


第 62 図　16 面出土遺物 (2)

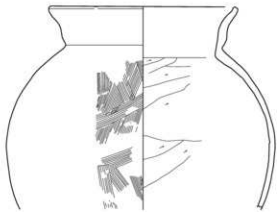


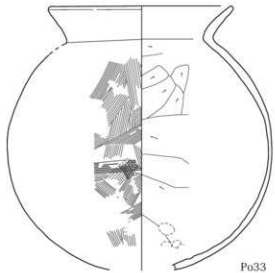
Po11～14、W19～22　礫堤堆積　　Po15・16　竪穴建物1埋土1
Po17　竪穴建物1埋土3（貼床）　Po18　竪穴建物1 175柱穴　Po19　竪穴建物1貼床除去面

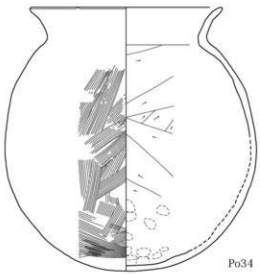
第63図　16面出土遺物(3)、17・18面出土遺物(1)

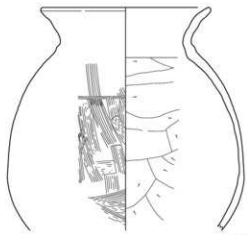


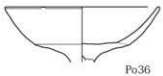
第 64 図　17・18 面出土遺物 (2)


Po32


Po33

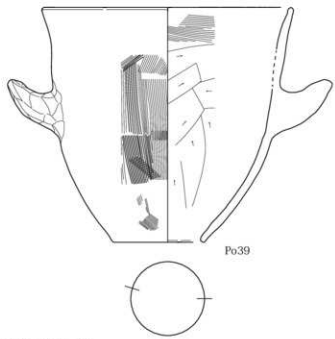

Po34


Po35


Po36

Po37

Po38


Po39

0　(1:4)　10cm

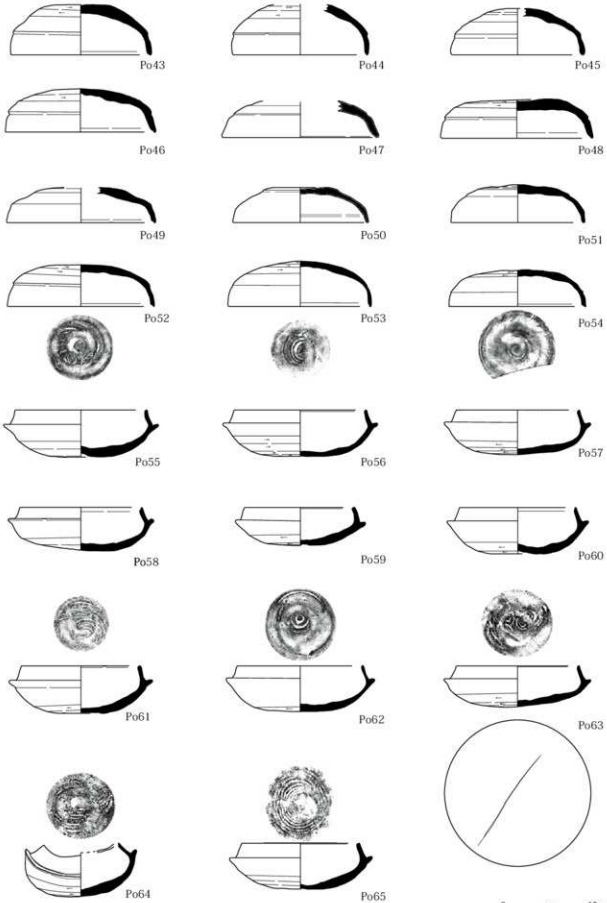
Po32～39　133 土器溜り

第65図　17・18面出土遺物 (3)

第 66 図　17・18 面出土遺物 (4)

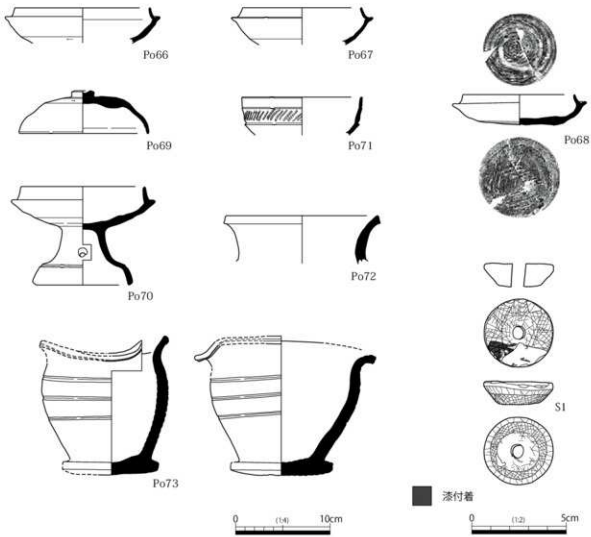
第 67 図　17・18 面出土遺物 (5)

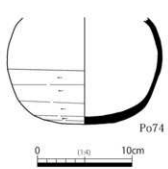
第 68 図　17・18 面出土遺物 (6)



Po43～65　133 土器溜り

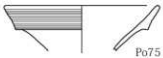
第 69 図　17・18 面出土遺物 (7)





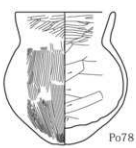
Po66～73、S1　133 土器溜り
Po74　143 土坑

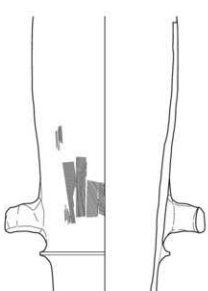
第 70 図　17・18 面出土遺物 (8)


Po75

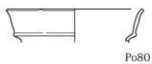
Po76

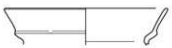
Po77

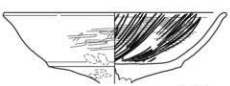

Po78


Po79

0　(1:4)　10cm


Po80

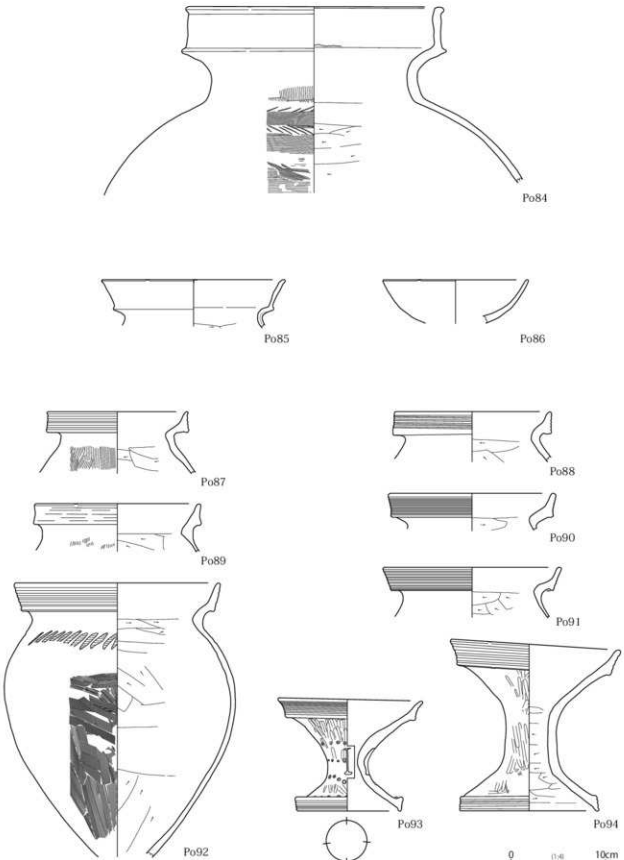

Po81


Po82

Po83

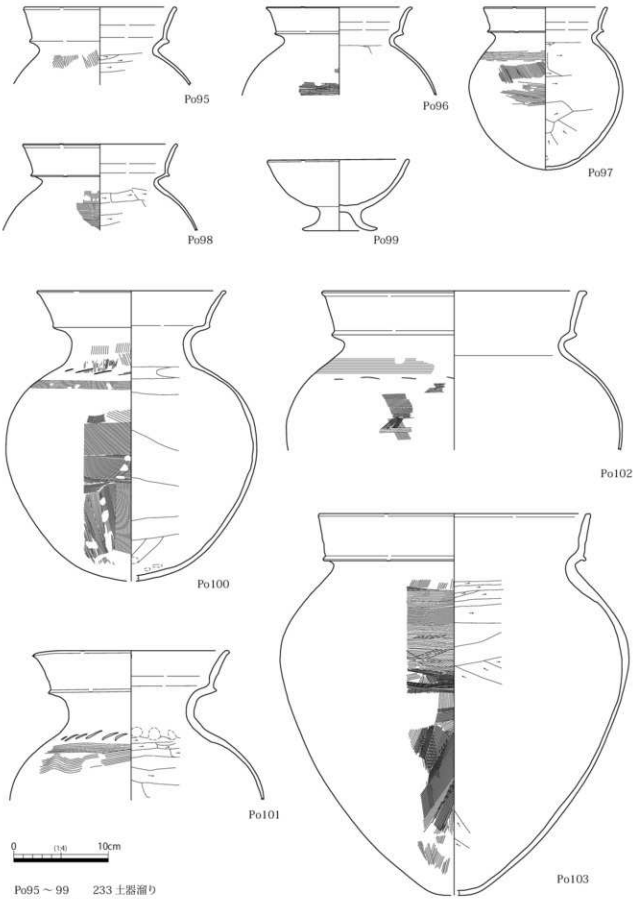
Po75 ～ 77　195 溝
Po78・79　段状遺構 1 周辺
Po80・81　206 溝
Po82・83　219 土坑

第 71 図　19 面出土遺物



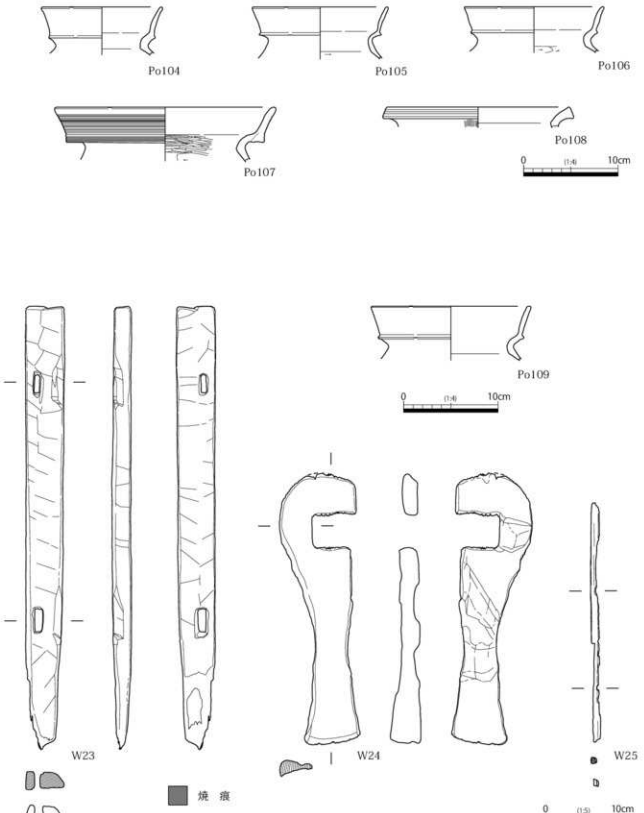
Po84　21 面直上　　Po85・86　21 面耕作土　　Po87 ～ 94　232 土器溜り

第 72 図　21 面出土遺物 (1)



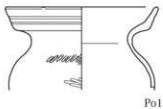
Po95～99　233 土器溜り
Po100～103　234 土器溜り

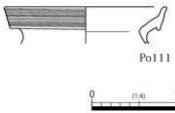
第 73 図　21 面出土遺物 (2)

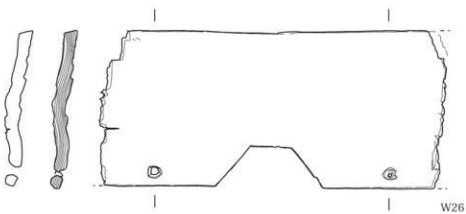


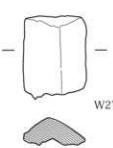
Po104 ～ 108　22 面耕作土
W23　水田 19
Po109、W24・25　223 溝

第 74 図　22 面出土遺物 (1)



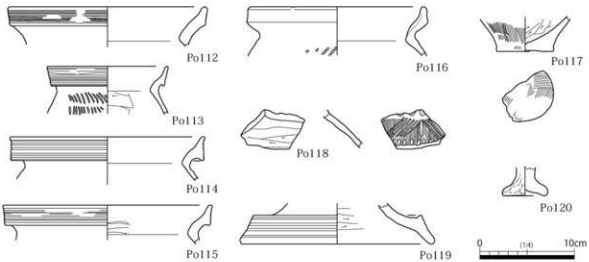


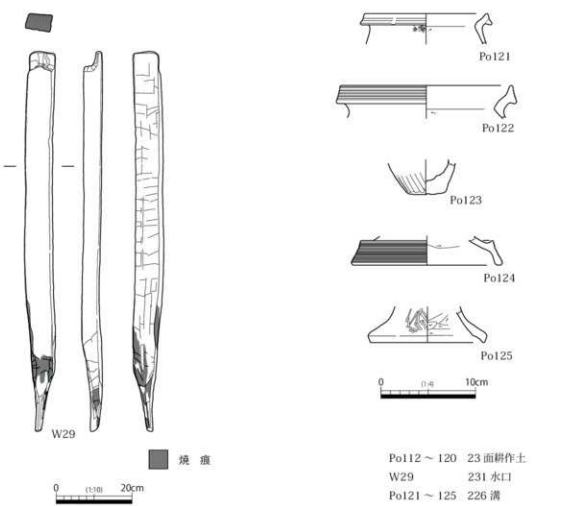




Po110・111　221 土坑
W26　222・224 ピット
W27・28　224 ピット

第 75 図　22 面出土遺物 (2)





Po112～120　23 面耕作土
W29　231 水口
Po121～125　226 溝

第 76 図　23 面出土遺物

Po126

Po127

Po130

Po128

Po129

Po132

Po131

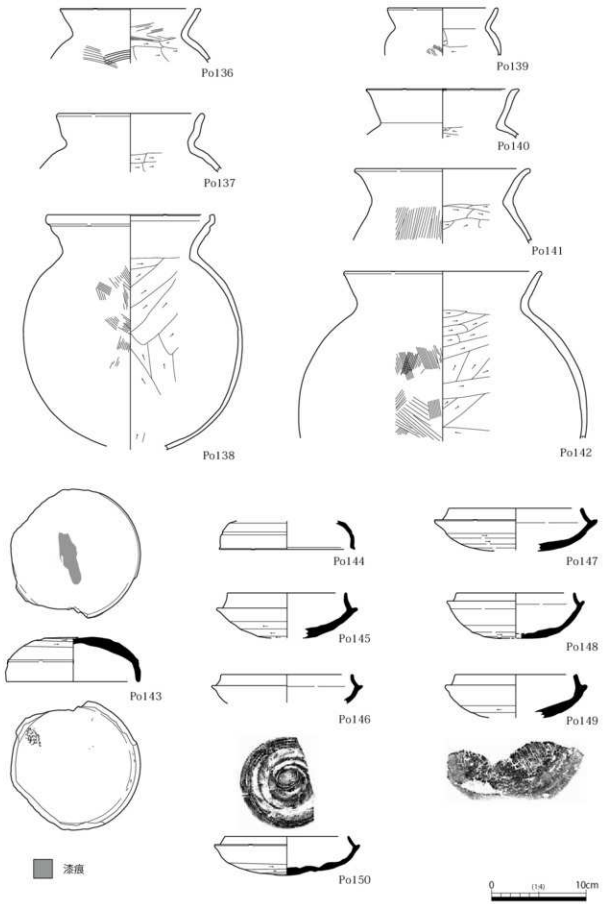
Po133

Po134

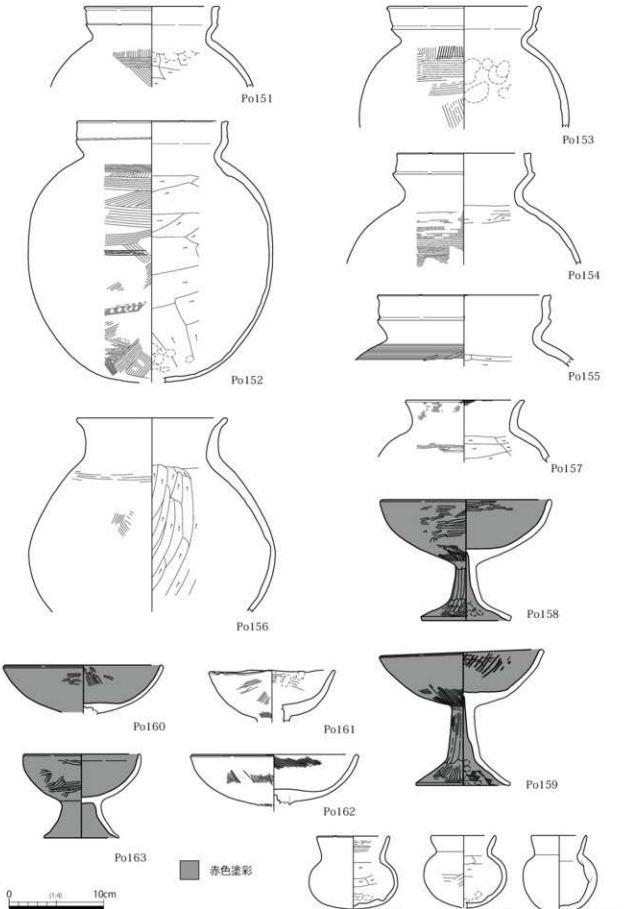
Po135

Po131・133・135　　14a層
Po126～130、132・134　16a層

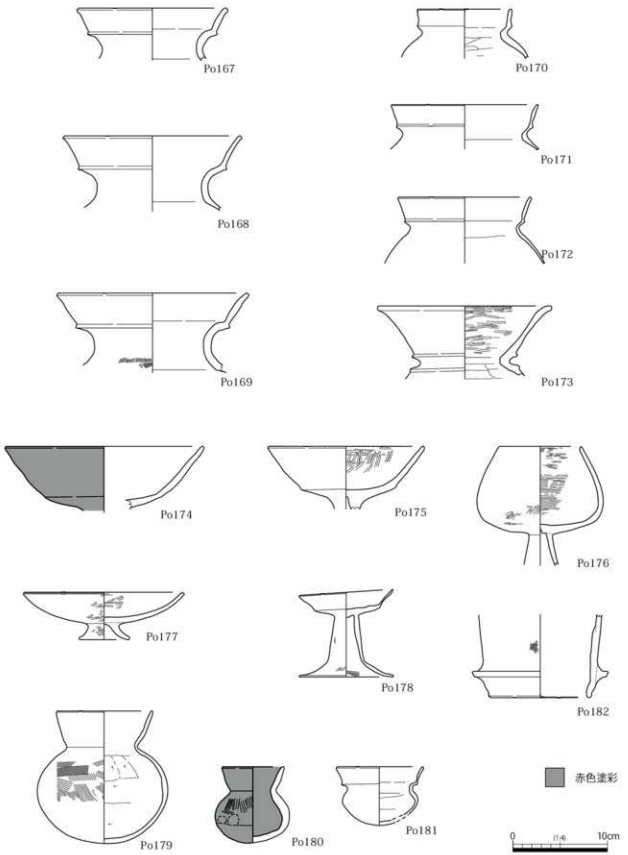
第77図　包含層出土土器(1)



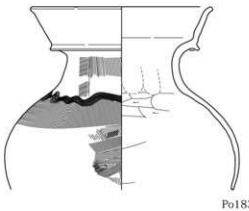
第 78 図　包含層出土土器 (2)

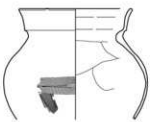


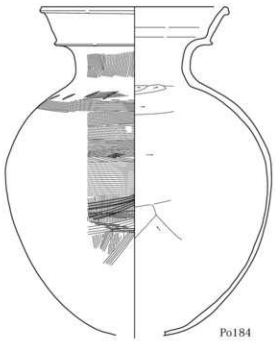
第 79 図　包含層出土土器 (3)

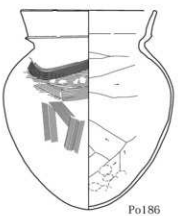


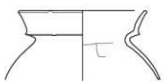
第 80 図　包含層出土土器 (4)

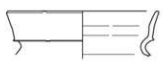

Po183

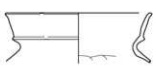

Po185

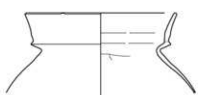

Po184

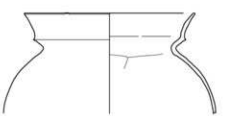

Po186

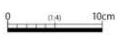

Po187


Po188

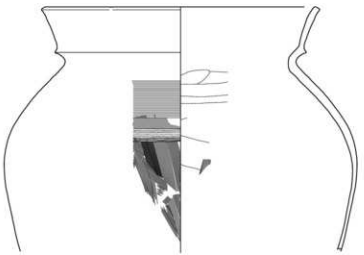

Po189

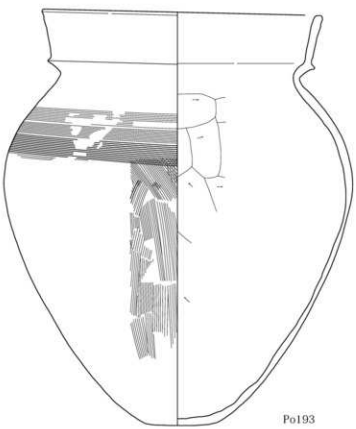

Po190


Po191

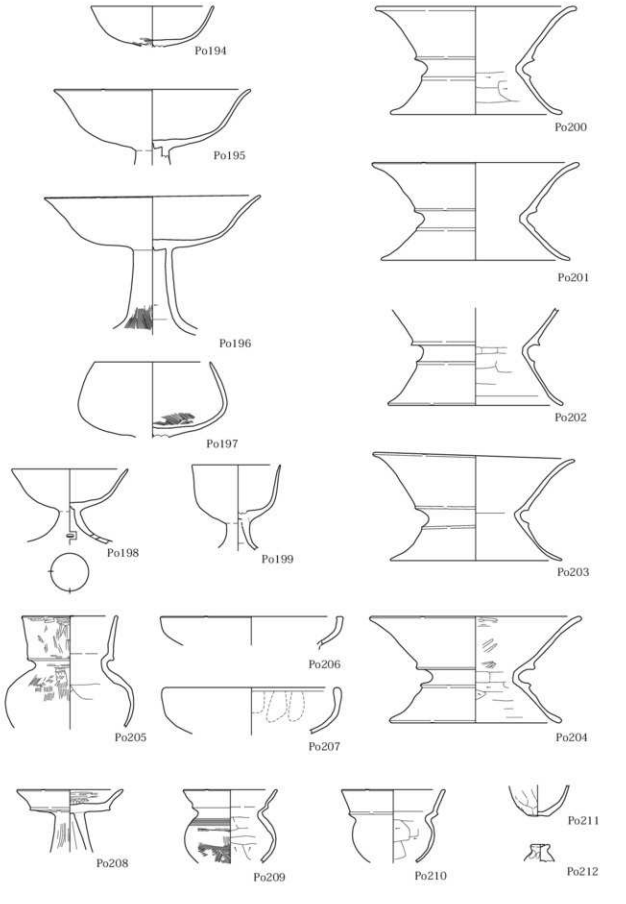


第 81 図　包含層出土土器 (5)

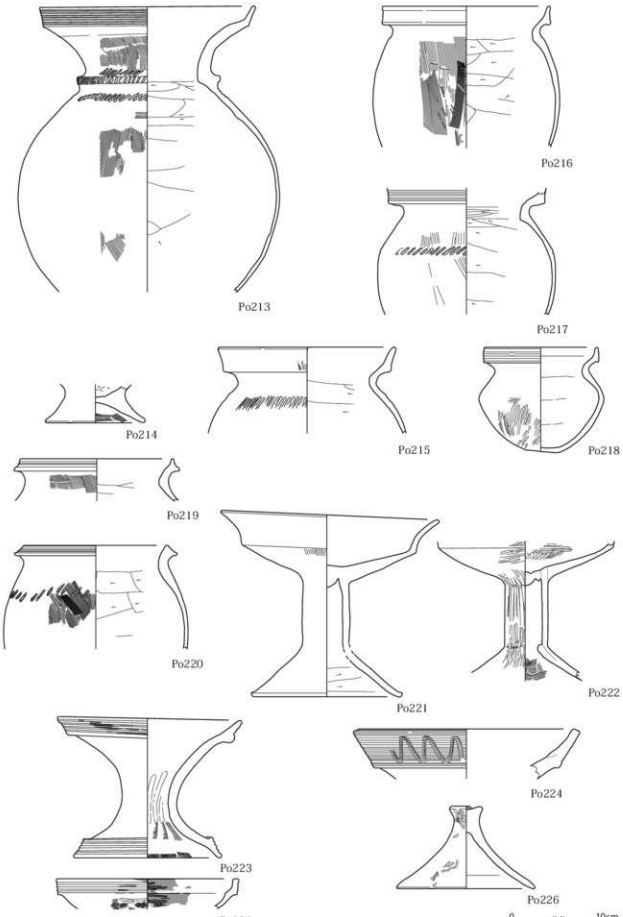




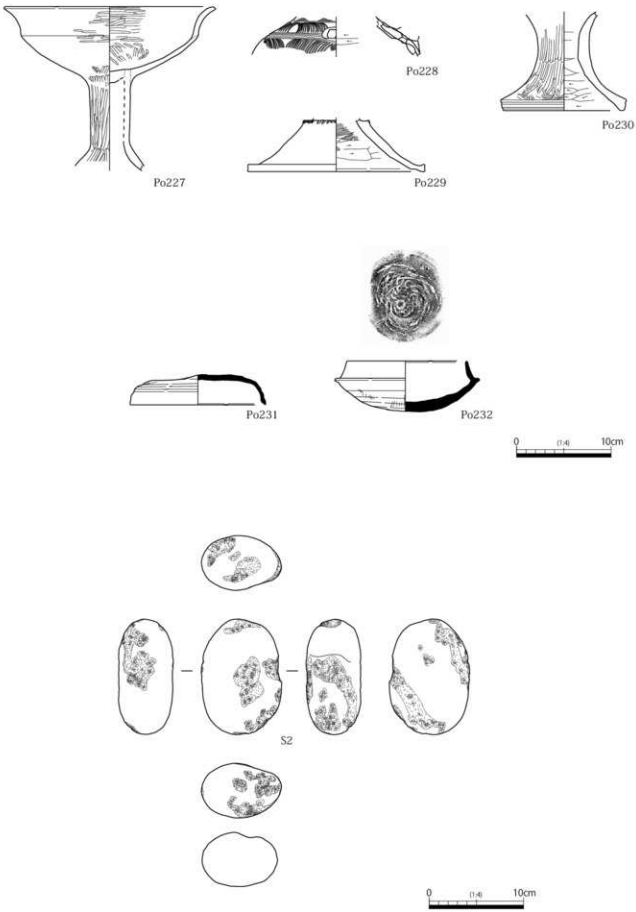
第 82 図　包含層出土土器 (6)



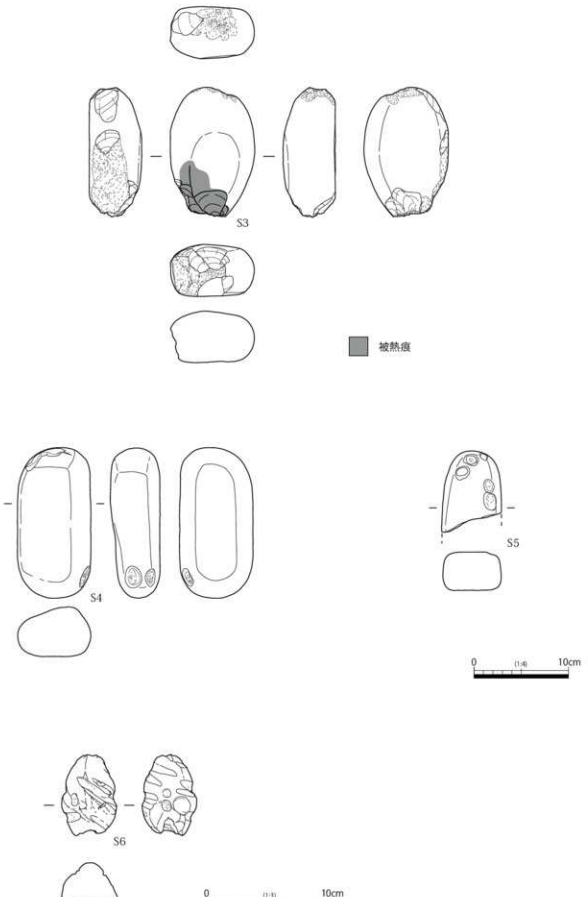
第 83 図　包含層出土土器 (7)



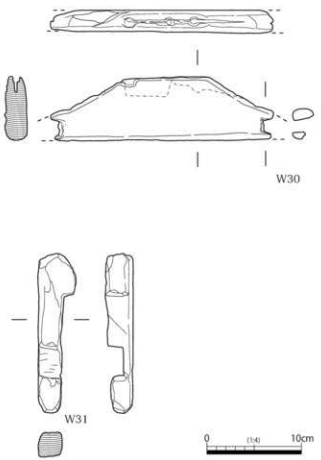
第 84 図　包含層出土土器 (8)



第 85 図　包含層出土土器 (9)・その他の出土土器・石器 (1)



第 86 図　包含層出土石器 (2)



第87図　包含層出土木器

第88図　包含層出土銭貨

遺物観察表（土器・石器・木器）

表１　土器観察表 (1)

掲載番号	挿図番号	地区	遺構・層位名	器種		法量（cm）	調　整	胎土	焼成	色　調	備　考
1	61	4J-1b	23ピット	土師器	皿	高：△1.9 口：(13.2)	内外面：ヨコナデ	密	良好	内外面：7.5YR7/4にぶい橙	
2	61	4J-1b	26ピット	須恵器	杯身	高：△3.4 口：(12.5)	外面：回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	不良	内外面：2.5GY7/1明オリーブ灰	
3	61	4J-2a	39ピット	土師器	甕	高：△6.4 口：(17.7)	外面：風化により調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR5/2灰黄褐 内面：10YR6/2～4/2灰黄褐	
4	61	4J-3a	45ピット	弥生土器	甕	高：△2.9 口：(13.1)	外面：口縁部3条の凹線、ヨコナデ 内面：風化のため調整不明	やや密	良好	外面：10YR6/3にぶい黄橙 内面：7.5YR8/6浅黄橙	
5	61	3J-9d	126ピット	弥生土器	甕	高：△3.8 口：(13.3)	内外面：ヨコナデ	密	良好	外面：7.5YR8/3浅黄橙 内面：2.5YR6/6橙	
6	61	4J-1d	130流路	土師器	甕	高：△8.4 口：(22.3)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR7/2にぶい黄橙 内面：10YR7/3にぶい黄橙	
7	61	4J-1d	130流路	須恵器	杯	高：△2.8 口：(10.7)	内外面：回転ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	
8	61	4J-1d	130流路	須恵器	高杯	高：8.9 口：(11.6) 底：(9.4)	外面：杯部口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、脚部回転ナデ 内面：杯部口縁部回転ナデ、底部ナデ、脚部回転ナデ	密	良好	内外面：5B7/1明青灰	
9	61	4J-2e	131流路	須恵器	高杯	高：△6.7 底：(9.4)	外面：杯部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、脚部回転ナデ 内面：杯部回転ナデ、底部ナデ、脚部回転ナデ	密	良好	内外面：5PB5/1青灰	
10	61	4J-2e	131流路	須恵器	甕	高：△5.2 口：(16.8)	外面：口縁部回転ナデ、体部タタキ 内面：口縁部回転ナデ、体部当て具痕	密	良好	外面：5PB7/1明青灰 内面：5PB6/1青灰	
11	63	4J-2e	[illegible]堆積	須恵器	杯蓋	高：△3.5 口：(11.3)	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	外面：5PB7/1明青灰～5/1青灰 内面：5PB6/1青灰	
12	63	4J-1d	[illegible]堆積	須恵器	杯蓋	高：4.6 口：(14.6)	外面：回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：N6/0灰	
13	63	4J-1d	[illegible]堆積	須恵器	高杯	高：△6.5 底：8.2	外面：回転ナデ、三角形透かし窓2方向 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：5PB7/1明青灰～6/1青灰	
14	63	4J-2e	[illegible]堆積	須恵器	甕	高：△12.0 口：(28.4)	外面：口縁部回転ナデ、沈線2条、波状文3条、体部タタキ 内面：回転ナデ、体部当て具痕	密	良好	外面：5B5/1青灰～N7/0灰白 内面：5B6/1青灰～N7/0灰白	南壁アゼ内
15	63	3J-10c	竪穴建物1(埋土1)	須恵器	杯身	高：△2.9 口：(12.6)	外面：口縁～体上部回転ナデ、体下部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	外面自然釉付着
16	63	3J-10d	竪穴建物1(埋土1)	土師器	甕	高：△4.7 口：(15.8)	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR7/4にぶい黄橙 内面：10YR8/2灰白	
17	63	3J-10c	竪穴建物1 175柱穴	土師器	甕	高：3.2 口：(14.8)	内外面：ヨコナデ	密	良好	内外面：2.5Y7/2灰黄	外面煤付着
18	63	3J-10d	竪穴建物1(貼床)	土師器	椀	高：△4.5 口：(13.7)	内外面：表面摩滅のため調整不明	密	良好	外面：7.5YR8/4浅黄橙 内面：7.5YR7/4にぶい橙	赤彩
19	63	3J-10d	竪穴建物1(貼床除去面)	土師器	甕	高：△16.4 口：(29.6)	外面：口縁～肩部ヨコナデ、体部調整不明 内面：風化のため調整不明	密	やや良	内外面：10YR8/3浅黄橙	
20	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△6.8 口：18.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR6/1褐灰 内面：10YR6/2灰黄褐～7/2にぶい黄橙	外面煤付着
21	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△6.4 口：18.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	口縁部黒斑、外面煤付着
22	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△12.1 口：16.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	外面煤付着 体部黒斑あり
23	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△12.0 口：16.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	外面：10YR5/2灰黄褐 内面：10YR7/3にぶい黄橙	外面口縁～肩部黒斑あり
24	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△10.4 口：18.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	外面：10YR7/3にぶい黄橙 内面：10YR8/3浅黄橙	
25	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△12.4 口：16.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、ユビオサエ	やや密	良好	外面：7.5YR7/4にぶい橙 内面：7.5YR7/4にぶい橙～5/2灰褐色	外面煤付着
26	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△21.3 口：(13.9)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、底部ユビオサエ	やや粗	良好	外面：7.5YR7/4にぶい橙～6/3にぶい褐 内面：7.5YR6/2灰褐	体部黒斑あり
27	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△12.7 口：(19.0)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	内外面：7.5YR7/4にぶい橙	外面煤付着、内面体部黒斑あり
28	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△7.6 口：(15.9)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	内外面：10YR6/3にぶい黄褐	外面煤付着
29	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△10.4 口：(16.4)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	外面：5Y5/1灰 内面：5Y6/1灰	
30	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△13.0 口：20.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR8/3浅黄橙 内面：2.5Y7/1灰白	
31	64	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△15.0 口：19.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR8/2灰白	
32	65	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△21.5 口：19.4	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：7.5YR7/3にぶい橙 内面：2.5Y7/2灰黄～7.5YR7/2明褐灰	体部黒斑あり、煤付着
33	65	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△27.9 口：(19.1)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ、ユビオサエ	やや粗	良好	外面：10YR7/3にぶい黄橙～6/2灰黄褐 内面：7.5YR8/2灰白～7/6橙	外面煤付着 体部黒斑あり
34	65	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：27.9 口：(21.0)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ、ユビオサエ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	体部黒斑あり
35	65	3J-10d	133土器溜り	土師器	甕	高：△23.6 口：(17.6)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	外面：10YR7/3にぶい黄橙～5YR7/3にぶい橙 内面：10YR7/2にぶい黄橙	外面煤付着
36	65	3J-10d	133土器溜り	土師器	高杯	高：△5.8 口：(16.2)	外面：杯部口縁部ヨコナデ、底部ナデ 内面：杯部口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密	良好	外面：2.5Y6/1黄灰～10YR6/4にぶい黄橙 内面：2.5Y7/2灰黄	
37	65	3J-10d	133土器溜り	土師器	椀	高：6.3 口：13.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部風化のため調整不明 内面：ヘラミガキ	密	やや不良	内外面：5YR6/6橙	内外面ともに体部に黒斑あり
38	65	3J-10d	133土器溜り	土師器	椀	高：△5.4 口：(15.2)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	密	良好	内外面：5YR6/8橙	

表2　土器観察表(2)

掲載番号	挿図番号	地区	遺構・層位名	器種		法量（cm）	特徴	胎土	焼成	色調	備考
39	65	4J-1d	133土器溜り	土製品	甑	高：24.8 口：26.4 底：9.5	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、把手部ヘラケズリ、底部ヨコナデ 内面：口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10Y7/2灰白～7.5YR7/2明褐灰 内面：10Y7/2灰白	把手２方向 口縁部黒斑
40	66	3J-10d	133土器溜り	土製品	竈	高：33.6 口：22.2 幅：36.1	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、底部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR7/2にぶい黄橙－7/1灰白 内面：10YR8/2灰白～5/1褐灰	内面煤付着
41	67	3J-10d	133土器溜り	土製品	竈	高：38.9 口：26.1 底：40.	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、底部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ヘラケズリ	やや密	良好	内外面：2.5Y8/1灰白	内面煤付着
42	68	4J-1d	133土器溜り	土製品	竈	高：41.0 口：26.1 底：47.1	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメの後ヘラケズリ	やや密	良好	外面：2.5Y8/1灰白－7.5YR6/4にぶい橙、6/1褐灰 内面：10YR8/2灰白～7/2にぶい黄橙	外面黒斑点、内面煤付着、補修痕
43	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯蓋	高：5.3 口：14.8	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：口縁部回転ナデ、天井部ナデ	やや密	不良	内外面：5Y7/1灰白	
44	69	4J-1d	133土器溜り	須恵器	杯蓋	高：△5.4 口：(14.2)	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：口縁部回転ナデ、ナデ	やや密	不良	内外面：7.5YR7/4にぶい橙～8/4浅黄橙	
45	69	4J-1d	133土器溜り	須恵器	杯蓋	高：4.9 口：(13.9)	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：口縁部回転ナデ、ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	
46	69	4J-1d	133土器溜り	須恵器	杯蓋	高：4.6 口：15.8	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	粗	不良	外面：N8/0灰白 内面：5Y8/1灰白～N8/0灰白	
47	69	4J-1d	133土器溜り	須恵器	杯蓋	高：△3.8 口：(16.2)	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	やや密	不良	内外面：7.5Y7/1灰白	
48	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯蓋	高：4.1 口：16.0	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：口縁部回転ナデ、天井部ナデ	やや粗	良好	内外面：5PB7/1明青灰	
49	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯蓋	高：△3.7 口：(15.9)	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	やや密	良好	外面：5PB7/1明青灰～N8/0灰白 内面：5PB7/1明青灰	
50	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯蓋	高：4.6 口：15.8	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：5B5/1青灰	
51	69	3J-10d	133土器溜り付近	須恵器	杯蓋	高：4.0 口：(14.0)	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	
52	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯蓋	高：4.4 口：(15.5)	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、天井部当て具痕	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	
53	69	4J-1d	16層	須恵器	杯蓋	高：4.8 口：(15.0)	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、天井部当て具痕	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	
54	69	4J-1d	133土器溜り	須恵器	杯蓋	高：3.8 口：14.4	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、天井部当て具痕	密	良好	外面：5PB6/1青灰～4/1暗青灰 内面：5PB6/1青灰	
55	69	4J-1d	133土器溜り	須恵器	杯身	高：5.0 口：(13.9)	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	
56	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯身	高：4.9 口：(13.9)	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	
57	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯身	高：4.7 口：13.0	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	
58	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯身	高：5.1 口：12.8	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	外面体部自然釉付着、歪み大きい
59	69	4J-1d	16層	須恵器	杯身	高：4.1 口：11.6	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部ナデ	やや粗	不良	外面：5Y6/1灰～7/1灰白 内面：2.5Y7/2灰黄	
60	69	4J-1d	16層	須恵器	杯身	高：4.9 口：(12.3)	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	粗	良好	外面：5PB4/1暗青灰～5/1青灰 内面：5PB5/1青灰	
61	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯身	高：5.0 口：12.5	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部当て具痕	やや粗	やや良	内外面：5Y8/1灰白	
62	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯身	高：4.9 口：13.2	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部当て具痕	密	良好	内外面：5PB5/1青灰	
63	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯身	高：△4.6 口：12.9	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部当て具痕	密	良好	内外面：5PB5/1青灰	ヘラ記号
64	69	4J-1d	133土器溜り	須恵器	杯身	高：5.7 口：(7.9)	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部当て具痕	やや粗	良好	内外面：5PB5/1－6/1青灰	自然釉付着、歪み大きい
65	69	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯身	高：4.8 口：(12.4)	外面：口縁部ヨコナデ、底部回転ナデ、当て具痕 内面：ヨコナデ	やや粗	やや不良	内外面：N7/0灰白	
66	70	4J-1d	16層	須恵器	杯身	高：△3.9 口：(14.3)	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	外面：5PB7/1明青灰～5/1青灰 内面：5PB6/1青灰	自然釉付着
67	70	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯身	高：△3.9 口：(12.6)	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	
68	70	3J-10d	133土器溜り	須恵器	杯身	高：3.2 口：(11.7)	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、板目痕 内面：回転ナデ、底部当て具痕	密	良好	外面：2.5GY6/1オリーブ灰～5PB5/1青灰 内面：5PB6/1青灰	
69	70	3J-10d	133土器溜り	須恵器	高杯蓋	高：4.5 口：(13.6)	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ部回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、天井部ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	
70	70	3J-10d・4J-1d	133土器溜り	須恵器	高杯	高：10.4 口：(13.0) 底：9.8	外面：杯部口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、脚部回転ナデ、3カ所の円孔、1条の沈線 内面：回転ナデ	密	不良	内外面：7.5YR5/2灰褐～7/3にぶい橙	
71	70	4J-1d	133土器溜り	須恵器	高杯(杯部)	高：△4.0 口：(12.6)	外面：回転ナデ、刺突文 内面：回転ナデ	密	良好	外面：5RP7/1明紫灰～5P5/1紫灰 内面：5P6/1紫灰	自然釉付着
72	70	3J-10d 4J-1d	133土器溜り	須恵器	壺	高：△5.1 口：(16.0)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	やや不良	内外面：2.5GY7/1明オリーブ灰	
73	70	3J-10d・4J-1b	133土器溜り	須恵器	鉢	高：14.7 口：(19.1) 底：(9.8)	外面口縁～体部回転ナデ、底部ナデ、体部3条の沈線 内面：回転ナデ	やや密	良好	内外面：5PB7/1明青灰～6/1青灰	円盤付、外面に自然釉付着、歪み大きい
74	70	3J-10d	143土坑	須恵器	壺	高：△11.2	外面：体部上半回転ナデ、下半回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	外面自然釉付着
75	71	3J-8・9d	195溝	弥生土器	器台	高：△4.8 口：(16.2)	外面：口縁部6条の凹線、ヨコナデ、風化のため調整不明 内面：ナデ	やや粗	良好	内外面：7.5YR6/6橙	

表3　土器観察表 (3)

掲載番号	挿図番号	地区	遺構・層位名	器種		法量（cm）	特　　徴	胎土	焼成	色　　調	備　考
76	71	3J-8・9d	195溝	弥生土器	器台	高：△5.3	外面：口縁部3条の凹線、ヨコナデ、体部ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密	良好	外面：2.5Y7/2灰黄 内面：2.5Y4/1黄灰	外面煤付着
77	71	3J-8・9d	195溝	弥生土器	甕	高：△6.3 口：(26.9)	外面：口縁部5条の凹線、ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや粗	良好	内外面：10YR5/2灰黄褐	
78	71	3J-9d	段状遺構1周辺	土師器	壺	高：14.0 口：10.3 底：1.1	外面：口縁部ヘラミガキ、体部ハケメ、底部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：7.5YR6/4にぶい橙 内面：7.5YR7/6橙～4/1褐灰	黒斑あり
79	71	3J-9d	段状遺構1周辺	土製品	甑	高：△29.9 口：(10.6)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：表面剥減	密	良好	内外面：10YR7/6～6/6明黄褐	山陰型
80	71	3J-10c	206溝	土師器	甕	高：△3.5 口：(14.0)	内外面：ヨコナデ	密	良好	内外面：2.5Y8/2灰白	
81	71	3J-10c	206溝	土師器	甕	高：△3.9 口：(17.0)	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：7.5YR8/4浅黄橙	
82	71	3J-10d	219土坑	土師器	高杯	高：△7.5 口：22.7	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、指オサエ 内面：ハケメ後ヘラミガキ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	内外面赤彩
83	71	3J-10d	219土坑	土師器	小型丸底壺	高：8.5 口：7.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	やや粗	内外面：2.5Y6/3にぶい黄	体部黒斑あり
84	72	3J-10d	21面直上	土師器	壺	高：△19.7 口：26.4	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、刺突文2条 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：7.5Y8/2灰白	
85	72	3J-9d	21層	土師器	甕	高：△5.1 口：(19.2)	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：2.5Y7/2灰黄	
86	72	3J-10d	21層	土師器	低脚杯（杯部）	高：△4.6 口：(14.5)	内外面：ヨコナデ	密	良好	内外面：7.5YR8/4浅黄橙	
87	72	3J-9c	232土器溜り	弥生土器	甕	高：△6.5 口：14.8	外面：口縁部4条の凹線、ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや粗	良好	外面：10YR7/2にぶい黄橙～5/1褐灰 内面：10YR8/2灰白～2.5Y8/2灰白	外面煤付着
88	72	3J-9d	232土器溜り	弥生土器	甕	高：△5.3 口：17.5	外面：口縁部5条の凹線、口縁部～頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR7/3にぶい黄橙	外面煤付着
89	72	3J-10d	232土器溜り	弥生土器	甕	高：△5.1 口：17.3	外面：口縁部凹線、ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	外面：7.5YR4/4褐～3/2黒褐 内面：10YR5/3～4/3にぶい黄褐	煤付着
90	72	3J-9c	232土器溜り	弥生土器	甕	高：△4.0 口：17.4	外面：口縁部9条の沈線、ナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	外面：7.5YR7/3にぶい橙～10YR7/4にぶい黄橙 内面：10YR8/3浅黄橙～2.5Y7/2灰黄	
91	72	3J-9c	232土器溜り	弥生土器	甕	高：△5.3 口：19.8	外面：口縁部8条の沈線、ナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内面：10YR4/1褐灰～6/3にぶい黄橙 外面：2.5Y8/2灰白～10YR5/2灰黄褐	外面煤付着
92	72	3J-9c・9d・10d	232土器溜り	弥生土器	甕	高：△29.0 口：21.4	外面：5条の凹線、ヨコナデ、肩部刺突文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内面：10YR6/2灰黄褐～3/1黒褐 外面：10YR3/1～2/1黒褐	内外面煤付着
93	72	3J-10d	232土器溜り	弥生土器	鼓形器台	高：11.9 口：(15.1) 底(10.8)	外面：口縁部6条の凹線、筒部竹管文・4方向の工字形透かし、脚端部3条の凹線 内面：筒部ヨコナデ、ナデ	密	やや粗	外面：10YR8/1灰白～6/1褐灰 内面：10YR8/2～8/1灰白	
94	72	3J-9c	232土器溜り	弥生土器	鼓形器台	高：12.1 口：17.7 底：14.6	外面：受部4条・脚部3条の凹線・ヨコナデ、接合部ハケ後ヘラミガキ 内面：受部・脚部ヨコナデ、接合部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	
95	73	3J-10d	233土器溜り	土師器	甕	高：△8.2 口：15.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR7/2にぶい黄橙 内面：2.5Y7/2灰黄	
96	73	3J-10d	233土器溜り	土師器	甕	高：△9.3 口：(15.2)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR8/1～8/2灰白 内面：10YR8/2灰白	外面煤付着
97	73	3J-10d	233土器溜り	土師器	甕	高：17.2 口：12.9	外面：口縁部ヨコナデ、肩部クシガキ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ・ユビオサエ	密	良好	外面：10YR7/3にぶい黄橙～5YR7/6橙 内面：10YR7/3にぶい黄橙～4/1褐灰	外面煤付着
98	73	3J-10c	233土器溜り	土師器	甕	高：△9.1 口：(16.2)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR7/2にぶい黄橙～4/1褐灰 内面：10YR7/2にぶい黄橙	
99	73	3J-10d	233土器溜り	土師器	低脚杯	高：7.5 口：14.8 底：(6.9)	内外面：表面剥離のため調整不明	密	良好	内外面：7.5YR8/3浅黄橙	
100	73	3J-10d	234土器溜り	土師器	壺	高：△30.7 口：19.8	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、肩部クシガキ・刺突文、体部ハケメ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ、底部ユビオサエ	密	良好	内外面：2.5Y8/1灰白	外面黒斑あり
101	73	3J-10d	234土器溜り	土師器	壺	高：△10.8 口：20.3	外面：口縁部ヨコナデ、肩部刺突文、体部波状文 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、ユビオサエ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：2.5Y8/2灰白	口縁部・体部黒斑あり
102	73	3J-9c	234土器溜り	土師器	甕	高：△16.8 口：(27.4)	外面：口縁部ヨコナデ、肩部波状文・刺突文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：2.5Y8/1灰白～10YR6/1褐灰	口縁部黒斑あり
103	73	3J-10d	234土器溜り	土師器	甕	高：40.3 口：(28.6)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外面：10YR8/2灰白～6/1褐灰 内面：10YR8/2灰白～8/3浅黄橙	外面煤付着
104	74	3J-10d	22a層	土師器	甕	高：△5.1 口：(12.6)	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR8/2灰白	
105	74	3J-10d	22a層	土師器	甕	高：△5.5 口：(14.2)	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：5YR7/3にぶい橙 内面：10YR8/2灰白	
106	74	3J-10d	22a層	土師器	甕	高：△4.8 口：(14.6)	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR8/3浅黄橙	
107	74	3J-10c	22a層	弥生土器	甕	高：△5.7 口：(23.1)	外面：口縁部12条の多条平行沈線文、ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：2.5Y7/2灰黄～10YR5/2灰黄褐 内面：7.5YR7/3にぶい橙～8/1灰白	
108	74	3J-10c	22a層	弥生土器	甕	高：△2.2 口：(19.2)	外面：口縁部2条の凹線、ヨコナデ、頸部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：7.5YR6/4にぶい橙 内面：2.5Y6/3にぶい黄	
109	74	3J-10c	223溝	土師器	甕	高：5.7 口：(16.8)	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：2.5Y7/2灰黄	外面煤付着
110	75	3J-9d	221土坑	弥生土器	甕	高：△8.7 口：(15.8)	外面：口縁部2条の凹線、ヨコナデ、肩部刺突文、体部ヘラミガキ 内面：風化のため調整不明	粗	良好	外面：2.5YR6/4にぶい橙 内面：2.5YR7/3淡赤橙	二次焼成を受ける
111	75	3J-9d	221土坑	弥生土器	甕	高：△3.9 口：17.0	外面：口縁部8条の多条平行沈線文、ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR 7/3にぶい黄橙	外面煤付着
112	76	3J-10d	23a層	弥生土器	甕	高：△4.2 口：(20.6)	外面：口縁部7条の多条平行沈線文、ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR6/3にぶい黄橙	

表４　土器観察表 (4)

掲載番号	挿図番号	地区	遺構・層位名	器種		法量（cm）	特　　徴	胎土	焼成	色　　調	備　考
113	76	3J-10c	23a層	弥生土器	甕	高：△5.1 口：(12.7)	外面：口縁部7条の多条平行沈線文、ヨコナデ、肩部2条の刺突文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR6/3にぶい黄橙	外面煤付着
114	76	3J-10c	23a層	弥生土器	甕	高：△4.6 口：(20.3)	外面：口縁部5条の凹線、ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR6/3にぶい黄橙	外面煤付着
115	76	3J-10d	23a層	弥生土器	甕	高：△4.1 口：(22.0)	外面：口縁部5条の凹線、ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR6/3にぶい黄橙	
116	76	3J-10c	23a層	弥生土器	甕	高：△5.2 口：(18.4)	外面：口縁部ヨコナデ、体部刺突文 内面：口縁部ヨコナデ	密	良好	内外面：10YR7/3にぶい黄橙	外面煤付着
117	76	3J-10c	23a層	弥生土器	底部	高：△3.7 底：(5.9)	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	やや密	良好	内外面：2.5Y7/2灰黄	外面黒斑あり
118	76	3J-10d	23a層	弥生土器	壺	高：△4.0	外面：肩部刺突文、肩部ハケメ後櫛描文 内面：ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	
119	76	3J-10d	23a層	弥生土器	器台	高：△4.3 底：(20.2)	外面：脚端部4条の多条平行沈線文、ヨコナデ 内面：脚柱部ヘラケズリ、脚端部ヨコナデ	密	良好	外面：10YR6/2灰黄褐 内面：5Y2/1黒	
120	76	3J-10c	23a層	弥生土器	脚部	高：△3.0 底：4.4	内外面：ナデ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	手捏ね
121	76	3J-10d	226溝	弥生土器	甕	高：△3.2 口：(12.9)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR5/1褐灰 内面：10YR4/1褐灰	
122	76	3J-10d	226溝	弥生土器	甕	高：△3.5 口：(18.0)	外面：口縁部5条の凹線、ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：7.5YR7/3にぶい橙	
123	76	3J-10d	226溝	弥生土器	底部	高：△3.7 底：4.1	外面：体部ヘラケズリ、底部ナデ、工具痕 内面：ナデ	密	良好	内外面：2.5Y5/2暗灰黄	黒斑あり
124	76	3J-10d	226溝	弥生土器	器台	高：△3.1 底：(15.6)	外面：口縁部13条の多条平行沈線文、ヨコナデ 内面：ヘラケズリ、脚端部ヨコナデ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	
125	76	3J-10d	226溝	弥生土器	高杯 (脚部)	高：△3.8 底：(12.0)	外面：ヘラミガキ、脚端部ヨコナデ 内面：ヘラケズリ、脚端部ヨコナデ	密	良好	内外面：2.5Y6/3にぶい黄	
126	77	3J-10d	16a層	土師器	甕	高：△5.4 口：(13.9)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	外面煤付着
127	77	4J-1d	16a層	土師器	甕	高：△7.2 口：15.9	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：2.5Y8/2灰白	
128	77	4J-1d	16a層	土師器	甕	高：△11.0 口：(18.7)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR7/3にぶい黄橙 内面：10YR7/1灰白～6/1褐灰	南東畦アゼ内 外面煤付着
129	77	3J-10d	16a層	土師器	甕	高：△10.0 口：(13.2)	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：5Y8/1～7/1灰白	外面黒斑あり
130	77	3J-10d	16a層	土師器	小型 丸底壺	高：△6.2 口：(7.4)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR3/1黒褐 内面：2.5Y6/1～4/1黄灰	
131	77	4J-1e	14a層	須恵器	高台付杯 (底部)	高：△1.5 底：7.1	外面：高台部ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ	密	良好	内外面：5Y8/1灰白	内外面に墨書 「大谷」
132	77	3J-10d	16a層	須恵器	杯身	高：4.4 口：(13.0)	外面：口縁部回転ナデ、底部ヘラケズリ 内面：口縁部回転ナデ、底部ナデ	やや粗	やや不良	内外面：N7/0灰白	
133	77	3J-10c	14a層	須恵器	杯身	高：4.9 口：(13.3)	外面：口縁部回転ナデ、底部ヘラケズリ 内面：口縁部回転ナデ	密	良	内外面：5PB5/1青灰	
134	77	3J-1d	16a層	須恵器	高杯	高：12.4 口：(13.0) 底：10.5	外面：杯部口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、脚部回転ナデ、 3カ所の円孔 内面：口縁部回転ナデ、脚部回転ナデ	やや粗	不良	内外面：7.5YR7/4にぶい橙	南東畦アゼ内 土師質
135	77	4J-1e	14a層	須恵器	甕	高：△7.1 口：(18.5)	外面：口縁部ヨコナデ、体部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部当て具痕	密	良好	外面：5B7/1明青灰 内面：5PB5/1青灰	
136	78	4J-1d	18a層～ トレンチ	土師器	甕	高：△5.7 口：(34.8)	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、ハケメ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	体部黒斑あり 外面煤付着
137	78	3J-10d	18a層	土師器	甕	高：△6.2 口：(15.2)	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部以下ヘラケズリ	密	良好	内外面：2.5Y7/2灰黄	
138	78	4J-1d	18a層	土師器	甕	高：△24.9 口：17.6	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	内外面：10YR8/2灰白	外面煤付着
139	78	3J-10c	18a層	土師器	甕	高：△5.0 口：(11.5)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR7/3にぶい黄橙～6/2灰黄褐 内面：10YR8/2灰白～7/2にぶい黄橙	外面煤付着
140	78	3J-10d	18a層	土師器	甕	高：△5.2 口：(16.0)	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR8/2灰白 内面：2.5YR8/2灰白	
141	78	3J-10d	18a層	土師器	甕	高：△7.9 口：(18.4)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：2.5Y7/3浅黄 内面：2.5Y7/2灰黄	外面煤付着
142	78	4J-1d	18a層	土師器	甕	高：△17.6 口：(20.8)	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや粗	良好	外面：10YR5/2灰黄褐～7/2にぶい黄橙 内面：10YR8/2灰白	黒斑あり
143	78	4J-1d	18a層	須恵器	杯蓋	高：4.7 口(13.9)	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	やや粗	不良	内外面：2.5G7/1明オリーブ灰	天井部外面に赤彩、(化粧土または記号)、内面に漆付着＊
144	78	4J-1d	18a層	須恵器	杯蓋	高：△3.0 口：(14.2)	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、1条の沈線 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	外面自然釉付着
145	78	3J-10d	18面精査	須恵器	杯身	高：△4.8 口：(12.6)	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：口縁部回転ナデ、底部ナデ	やや粗	やや不良	外面：2.5Y6/2灰黄 内面：7.5YR7/2明褐灰	
146	78	4J-1d	18a層	須恵器	杯身	高：△3.1 口：(13.8)	内外面：回転ナデ	密	良好	内外面：5PB5/1青灰	
147	78	4J-1d	18a層	須恵器	杯身	高：4.5 口：14.2	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：5PB6/1青灰	
148	78	4J-1d	18a層	須恵器	杯身	高：4.8 口：12.6	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	外面：N6/0～N7/0灰白 内面：N6/1灰白	
149	78	4J-1d	18a層	須恵器	杯身	高：△4.6 口：(13.0)	外面：口縁部～底部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：口縁部～底部回転ナデ、底部ナデ	やや粗	やや不良	内外面：5Y8/1灰白	底部外面板目？
150	78	3J-10d	18a層	須恵器	杯身	高：4.1 口：(13.0)	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、底部当て具痕	密	良好	内外面：5PB5/1青灰	
151	79	3J-10d	18a層	土師器	甕	高：△8.5 口：14.1	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ユビオサエ・ヘラケズリ	密	良好	内外面：2.5Y7/2灰黄	

表５　土器観察表 (5)

掲載番号	挿図番号	地区	遺構・層位名	器種		法量（cm）	特　　徴	胎土	焼成	色　　調	備　考
152	79	3J-10d	18a層	土師器	甕	高：△27.6 口：15.9	外面：口縁部ヨコナデ，ハケメ後ナデ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ，体部ヘラケズリ，底部ナデ，ユビオサエ	密	良好	外面：2.5Y8/1灰白～7.5YR7/4にぶい橙 内面：2.5Y8/1灰白～6/1黄灰	黒斑あり，体部下半外面煤付着
153	79	3J-10d	18a層	土師器	甕	高：△12.8 口：(15.7)	外面：口縁部ヨコナデ，体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ナデ・ユビオサエ	やや粗	良好	内外面：2.5Y6/3にぶい黄	
154	79	3J-10d	18a層	土師器	甕	高：△11.7 口：(14.0)	外面：口縁部～頸部ヨコナデ，体部ハケメ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	やや密	良好	内外面：2.5Y8/2～7/2灰黄	外面黒斑あり
155	79	4J-1d	18a層	土師器	甕	高：△7.6 口：(18.2)	外面：口縁部ヨコナデ，クシガキの上に刺突文 内面：口縁部～頸部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	密	良好	外面：5Y6/1～5/1灰 内面：2.5Y7/2灰黄～6/1黄灰	
156	79	4J-1d	18a層	土師器	甕	高：△20.5 口：(14.8)	外面：口縁部～頸部ヨコナデ，ハケメ後ナデ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	やや粗	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙～6/2灰黄褐	外面煤付着 体部黒斑あり
157	79	3J-10d	18a層	土師器	壺	高：△6.6 口：12.4	外面：口縁部ヨコナデ，体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ヨコナデ，体部ヘラケズリ	やや粗	良好	内外面：10YR7/4にぶい黄橙	口縁部赤彩あり
158	79	4J-1d	18a層	土師器	高杯	高：12.8 口：17.6 底：9.2	外面：杯部口縁部ヘラミガキ，ヨコナデ，杯部と脚部の接合部ハケメ，脚部ハケメ，ヘラケズリ，ヘラミガキ 内面：杯部口縁部ヘラミガキ，ヨコナデ，脚部ユビオサエ	密	良好	内外面：10YR7/3にぶい黄橙	内外面赤彩
159	79	3J-10d	18a層	土師器	高杯	高：14.4 口：16.9 底：9.9	外面：杯部口縁部ヘラミガキ，ヨコナデ，接合部ハケメ，脚部ハケメ，ヘラケズリ，ヘラミガキ 内面：杯部口縁部ヘラミガキ，ヨコナデ，脚部ユビオサエ，ハケメ	密	良好	外面：10YR6/2灰黄褐 内面：10YR7/3にぶい黄橙	内外面赤彩 外面黒斑
160	79	3J-10d	18a層	土師器	高杯 (杯部)	高：△5.2 口：16.6	外面：ヘラミガキ，ヨコナデ 内面：ヘラミガキ，ヨコナデ	密	良好	外面：7.5YR8/3浅黄橙 内面：10YR8/3浅黄橙	赤彩，黒斑
161	79	4J-1d	18a層	土師器	高杯 (杯部)	高：△5.5 口：13.2	外面：ハケメ後ナデ，ユビオサエ 内面：口縁部ハケ後ユビオサエ，底部ナデ	密	良好	内外面：10YR6/3～7/3にぶい黄橙	
162	79	3J-10d	18a層	土師器	高杯 (杯部)	高：△5.4 口：17.4	外面：口縁部ハケメ後ナデ，底部表面剥離のため調整不明，接合部ハケメ 内面：口縁部ハケメ後ナデ，底部ナデ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	一部赤彩 外面黒斑
163	79	4J-1d	18a層	土師器	台付椀	高：8.9 口：△12.2 底：△8.0	外面：杯部ヘラミガキ，脚部ヨコナデ，ナデ 内面：ヨコナデ，ナデ	密	良好	外面：7.5YR8/2灰白 内面：10YR8/2灰白	赤彩
164	79	4J-1d	18a層	土師器	小型 丸底壺	高：7.7 口：(9.5)	外面：風化のため調整不明 内面：口縁部ハケメ後ナデ，体部ヘラケズリ，底部ユビオサエ	やや密	良好	内外面：2.5Y8/2～7/1灰白	
165	79	3J-10d	18a層	土師器	小型 丸底壺	高：△7.6 口：6.7	外面：口縁部ヨコナデ，体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリ，底部ユビオサエ	密	良好	内外面：10YR8/2灰白～2.5YR7/6橙	
166	79	3J-10d	18a層	土師器	小型 丸底壺	高：8.2 口：5.8	外面：表面剥離のため調整不明 内面：口縁部ヨコナデ，体部ナデ	やや粗	良好	内外面：7.5YR6/6橙～5/4にぶい褐	内面粘土接合痕
167	80	4J-1d	18a層	土師器	壺	高：△5.5 口：(15.6)	外面：ヨコナデ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR7/3にぶい黄橙	黒斑
168	80	3J-10c	18a層	土師器	壺	高：△7.9 口：(18.6)	外面：ヨコナデ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR8/4浅黄橙	
169	80	4J-1d	18a層	土師器	壺	高：△8.4 口：(20.0)	外面：口縁部～頸部ヨコナデ，体部ハケメ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：5Y8/1灰白	口縁部黒斑
170	80	3J-10d	18a層	土師器	甕	高：△5.2 口：(9.8)	外面：口縁部ヨコナデ，体部ナデ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ，体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	内外面：2.5Y8/2灰白	
171	80	3J-10c	18a層	土師器	甕	高：△4.8 口：(15.5)	外面：口縁部ヨコナデ，体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR8/4浅黄橙	黒斑あり
172	80	3J-10c	18a層	土師器	甕	高：△7.0 口：(14.0)	外面：口縁部ヨコナデ，体部表面剥離のため調整不明 内面：口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外面：7.5YR8/4～8/3浅黄橙 内面：7.5YR8/4浅黄橙～7/4にぶい橙	
173	80	3J-8d	18a層	土師器	器台	高：△7.7 口：18.2	外面：ヨコナデ，ナデ 内面：受部ヘラミガキ，脚部以下ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR8/1～8/2灰白	
174	80	3J-10d	18a層	土師器	高杯 (杯部)	高：△6.6 口：20.8	外面：ヨコナデ 内面：表面剥離のため調整不明	やや粗	良好	外面：10YR7/2にぶい黄橙～7.5YR5/3にぶい褐 内面：10YR8/3浅黄橙～5YR6/6橙	外面赤彩 黒斑
175	80	3J-10d	18a層	土師器	高杯 (杯部)	高：△6.6 口：16.3	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ，底部表面剥離のため調整不明	密	良好	外面：2.5YR6/4にぶい橙～5/4にぶい赤褐 内面：2.5YR6/4にぶい橙～6/6橙	外面煤付着か
176	80	3J-9d	18a層	土師器	高杯	高：△12.6 口：(8.6)	外面：表面剥離，一部ヘラミガキ残る 内面：口縁部ハケメ後ミガキ，ハケメ，ナデ	密	良好	内外面：2.5Y8/2灰白	
177	80	4J-1d	18a層～トレンチ	土師器	低脚杯	高：△5.0 口：(16.8) 底：(5.2)	外面：ヘラミガキ 内面：杯部内面ヘラミガキ，脚部ヨコナデ	密	良好	内外面：10YR8/2灰白	
178	80	3J-10c	18a層	土師器	小型 器台	高：14.3 口：9.9 底：9.9	外面：口縁部ヨコナデ，脚台部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデナデ，脚台部ハケメ	密	良好	外面：10YR8/4浅黄橙～7/3にぶい黄橙 内面：10YR8/2灰白～7/3にぶい黄橙	黒斑
179	80	3J-10d	18a層	土師器	壺	高：9.0 口：10.0	外面：口縁部ヨコナデ，体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外面：7.5YR7/4にぶい橙～10YR8/2灰白 内面：7.5YR7/6橙～8/3浅黄橙	外面煤付着
180	80	3J-10d	18a層	土師器	小型 丸底壺	高：8.1 口：6.4	外面：口縁部ヨコナデ，体部ハケメ，ユビオサエ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ナデ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	内外面赤彩
181	80	3J-10d	18a層	土師器	小型 丸底壺	高：6.2 口：(9.1)	外面：口縁部ヨコナデ，体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリ，底部ナデ	密	良好	内外面：10YR8/2灰白	
182	80	3J-8d	18a層	土製品	甑	高：△8.8 口：(10.4)	外面：口縁部ヨコナデ，体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ナデ	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	山陰型
183	81	3J-10d	19a層	土師器	壺	高：△19.3 底：18.9	外面：口縁部ヨコナデ，頸部・体部ハケメ，肩部波状文 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	内外面：10YR8/2灰白	口縁部黒斑 外面煤付着
184	81	4J-1d	19a層	土師器	壺	高：△34.7 口：19.5	外面：口縁部ヨコナデ，頸部～肩部ハケメ後ナデ，肩部刺突文・クシガキ，体部ハケメ，底部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	内外面：2.5Y8/1灰白	口縁部黒斑
185	81	3J-10d	19a層	土師器	甕	高：△11.7 口：11.9	外面：口縁部コナデ，肩部表面剥離のため調整不明，体部ハケメ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：2.5Y8/2灰白	外面煤付着
186	81	3J-10d	19a層	土師器	甕	高：21.1 口：14.2	外面：口縁部ヨコナデ，肩部波状文，体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリ後ナデ，底部ユビオサエ	密	良好	外面：10YR7/3にぶい黄橙 内面：10YR7/2にぶい黄橙	外面煤付着

表６　土器観察表 (6)

掲載番号	挿図番号	地区	遺構・層位名	器種		法量（cm）	特徴	胎土	焼成	色調	備考
187	81	3J-10d	19a層	土師器	甕	高：△7.3 口：(13.4)	外面：口縁部ヨコナデ、体部表面剥離のため調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：5YR7/3にぶい橙 内面：5YR7/2明褐灰～10YR6/1褐灰	
188	81	3J-10c	19a層	土師器	甕	高：△4.7 口：15.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：2.5Y8/2灰白 内面：2.5Y8/1灰白	
189	81	3J-10d	19a層	土師器	甕	高：△5.3 口：15.3	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：5YR7/4にぶい橙	
190	81	3J-10d	19a層	土師器	甕	高：△8.4 口：(15.8)	外面：口縁部ヨコナデ、体部表面剥離のため調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR8/3浅黄橙～2.5YR5/4にぶい赤褐 内面：10R6/6赤橙～6/4にぶい赤橙	
191	81	3J-10c	19a層	土師器	甕	高：△10.6 口：(16.0)	外面：口縁部ヨコナデ、体部表面剥離のため調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR7/4にぶい黄橙	
192	82	3J-10c	19a層	土師器	甕	高：△25.9 口：(28.6)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外面：2.5Y8/2灰白～10YR6/2灰黄褐 内面：10YR6/2灰黄褐	外面煤付着
193	82	3J-10c	19a層	土師器	甕	高：44.0 口：29.3 底：7.5	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、肩部ケシガキ、体部ハケメ、底部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	やや粗	良好	外面：2.5Y8/2灰白～7/3浅黄 内面：2.5Y8/2灰白	外面煤付着
194	83	3J-10d	19a層	土師器	高杯(杯部)	高：△4.3 口：(12.8)	外面：表面剥離のため調整不明、接合部ハケメ 内面：表面剥離のため調整不明	密	良好	内外面：7.5YR8/3浅黄橙	
195	83	3J-9d	19a層	土師器	高杯(杯部)	高：△7.9 口：(20.6)	内外面：風化のため調整不明	密	良好	内外面：2.5Y6/1黄灰～7/2灰黄	
196	83	3J-10d	19a層	土師器	高杯	高：△14.6 口：(22.6)	外面：表面剥離のため調整不明、脚部一部ハケメ 内面：杯部口縁部ヨコナデ、底部ナデ、脚部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR7/4にぶい黄橙	
197	83	3J-10d	19a層	土師器	高杯(杯部)	高：△7.9 口：12.2	外面：風化のため調整不明 内面：杯部口縁部風化のため調整不明、底部ハケメ。	密	良好	内外面：10YR7/2にぶい黄橙	
198	83	3J-10d	19a層	土師器	高杯	高：△7.9 口：(12.2)	内外面：表面剥離のため調整不明、２ヶ所円孔	密	良好	内外面：2.5Y8/2灰白	
199	83	3J-10d	19a層	土師器	高杯	高：△9.0 口：(9.3)	外面：表面剥離のため調整不明 内面：杯部表面剥離のため調整不明、脚部ヘラケズリ、ナデ	密	良好	内外面：10YR8/3浅黄橙	
200	83	3J-10d	19a層	土師器	器台	高：11.4 口：(20.8) 底：(17.7)	外面：ヨコナデ 内面：受部ヨコナデ、上半ヘラケズリ後ナデ、下半ヘラケズリ、裾部ヨコナデ	密	良好	内外面：2.5Y8/3淡黄	
201	83	3J-9d	19a層	土師器	器台	高：10.3 口：(21.4) 底：(19.8)	内外面：表面剥離のため調整不明	密	良好	内外面：10YR8/2灰白	
202	83	3J-10d	19a層	土師器	器台	高：△10.3 底：(18.3)	外面：ヨコナデ 内面：上半ヘラケズリ後ナデ、下半ヘラケズリ、裾部ヨコナデ	密	良好	外面：7.5YR8/3浅黄橙 内面：10YR8/3浅黄橙	外面黒斑
203	83	3J-10d	19a層	土師器	器台	高：△11.1 口：(20.9) 底：(18.0)	内外面：表面剥離のため調整不明	密	良好	外面：10YR8/2灰白～7.5YR7/3にぶい橙 内面：10YR7/3にぶい黄橙	
204	83	3J-10d	19a層	土師器	器台	高：11.3 口：21.9 底：17.8	外面：ヨコナデ 内面：上台部ヘラミガキ、下台部ヘラケズリ、裾部ヨコナデ	密	良好	内外面：10YR7/3にぶい黄橙	
205	83	3J-9d	19a層	土師器	長頸壺	高：△11.8 口：9.8	外面：口縁部ヘラミガキ、体部ヘラミガキ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：2.5Y8/2灰白	
206	83	3J-9c	19a層	土師器	鉢？	高：△2.1 口：(18.9)	内外面：ヨコナデ	密	良好	外面：7.5YR6/4にぶい橙 内面：7.5YR7/6橙	外面煤付着
207	83	3J-10d	19a層	土師器	鉢？	高：△4.9 口：(18.2)	内外面：ナデ	密	良好	外面：5Y7/2灰白 内面：2.5Y7/2灰黄	
208	83	3J-10d	19a層	土師器	小型器台	高：△6.6 口：11.1	外面：口縁部ヨコナデ、脚部ハケメ 内面：上台部ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ	密	良好	内外面：2.5Y7/3浅黄	
209	83	4J-1d	19a層	土師器	小型丸底壺	高：△7.7 口：(10.9)	外面：口縁部～頸部ヨコナデ、肩部ケシガキ、体部ハケメ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	内外面：10YR6/2～5/2灰黄褐	内外面煤付着
210	83	3J-10c	19a層	土師器	小型丸底壺	高：△7.7 口：(10.8)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：2.5Y5/1黄灰～10YR8/2灰白 内面：7.5YR7/4にぶい橙～10YR8/3浅黄橙	口縁部～体部黒斑、外面煤付着
211	83	3J-10d	19a層		ミニチュア土器	高：△3.3 底：2.1	内外面：ナデ	密	良好	内外面：2.5Y6/2灰黄	外面黒斑
212	83	3J-9c	19a層		ミニチュア土器	高：△1.8 幅：(1.9)	内外面：ユビオサエ、ナデ	密	良好	外面：10YR6/1褐灰 内面：10YR6/1褐灰～8/2灰白	つまみ？
213	84	3J-8d	19a層	弥生土器	壺	高：△30.3 口：22.5	外面：口縁部８条の多条平行沈線文、頸部ハケメ、刺突文、貼り付け突帯上端刺突文、体部ハケメ、底部ハケメ後ナデ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	やや密	良好	内外面：5YR6/6橙～4/3にぶい赤褐	
214	84	3J-9d	19a層	弥生土器	台付壺	高：△4.1 底：10.3	外面：体部ナデ、台部ヨコナデ 内面：体部ヘラケズリ、ユビオサエ、台部ハケメ	密	良好	外面：10YR5/3にぶい黄褐 内面：10YR5/1褐灰、台内面N2/黒	
215	84	3J-9d	19a層	弥生土器	甕	高：△9.1 口：(18.6)	外面：口縁部ヨコナデ、ハケメ、肩部刺突文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	密	良好	外面：7.5YR4/3～4/4褐 内面：7.5YR6/4にぶい橙	外面煤付着
216	84	3J-9c	19a層	弥生土器	甕	高：△14.9 口：(17.6)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR7/2にぶい黄橙～5/2灰黄褐 内面：7.5YR7/3にぶい橙	
217	84	4J-3a	19a層	弥生土器	甕	高：△13.4	外面：口縁部４条の凹線、体部刺突文、ハケ後ナデ消し 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：2.5Y4/1黄灰 内面：10YR6/2灰黄褐	外面煤付着
218	84	3J-10c	19a層	弥生土器	甕	高：11.0 口：12.0 底：3.7	外面：口縁部３条の凹線、ヨコナデ、体部ヘラミガキ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	やや密	良好	内外面：5YR7/6橙	煤付着
219	84	3J-9d	19a層	弥生土器	甕	高：△4.5 口：(16.0)	外面：口縁部２条の凹線、口縁部～頸部ヨコナデ、頸部以下ハケメ 内面：口縁部～頸部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	外面：2.5Y4/1黄灰 内面：2.5Y5/2暗灰黄～4/1黄灰	
220	84	4J-1b	19a層	弥生土器	甕	高：△11.0 口：(15.2)	外面：口縁部３条の凹線、ヨコナデ、体部ハケメ、刺突文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良好	外面：7.5YR6/6橙～4/3褐 内面：7.5YR7/3にぶい橙	外面煤付着
221	84	3J-9d	19a層	弥生土器	高杯	高：14.2 口：(22.8) 底：15.6	外面：杯部口縁部ヨコナデ、ハケメ、脚部表面剥離のため調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、脚部ナデ、ヘラケズリ、裾部ヨコナデ	やや粗	やや良	外面：10YR8/2灰白 内面：7.5YR8/2灰白	脚部黒斑
222	84	4J-3a	19a層	弥生土器	高杯	高：△14.7	外面：ヘラミガキ 内面：杯部ヘラミガキ、脚柱部ナデ、脚裾部ハケメ	密	良好	内外面：10YR8/2灰白	

表７　土器観察表 (7)

掲載番号	種別番号	地区	遺構・層位名	器種	法量（cm）	特徴	胎土	焼成	色調	備考
223	84	3J-9d	19a 層	弥生土器	器台	高：14.9 口：19.3 底：15.4	外面：受部・脚部４条の凹線、ヨコナデ、ナデ、長面調整のため裏整不明 内面：受部ヨコナデ、上手ナデ・ユビオサエ、下手ヘラケズリ、脚部板状工具によるケズリ	やや粗	良好	内外面：7.5YR7/4 にぶい橙	受部～部赤彩
224	84	3J-10d	19a 層	弥生土器	器台	高：△5.3 口：22.8	外面：口縁部９条の凹線後波状文、ナデ 内面：ヨコナデ	やや粗	良好	外面：5YR5/8 明赤褐 内面：5YR6/6 橙～5/8 明赤褐	内面黒鉱
225	84	4J-2c	19a 層	弥生土器	器台	高：△3.2 口：19.2	外面：口縁部３条の凹線、ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密	良好	内外面：10YR8/2 灰白	内外面赤彩
226	84	3J-9d	19a 層	弥生土器	蓋	高：△8.7 つまみ：2.8 底：14.4	外面：ハケ後ヘラミガキ 内面：ナズリ後ナデ、端部ヨコナデ	密	良好	外面：10YR8/2 灰白～7.5YR3/1 黒褐 内面：10YR7/3 にぶい黄橙～3/2 黒褐	外面～部黒付着
227	85	3J-10c	22a 層	弥生土器	高杯	高：△17.3 口：(22.0)	外面：杯部口縁部ヨコナデ、ナデ、脚部ヘラミガキ 内面：杯部ヘラミガキ、脚部ナデ	密	良好	内外面：10YR7/3 にぶい黄橙 脚内面：2.5Y8/2 灰白	
228	85	3J-10c	22a 層	弥生土器	壺	高：△4.3 脚径：18.4	外面：脚部・脚部３条の沈線、目殻脚部による刺突文 内面：ヘラケズリ	密	良好	外面：10YR6/3 にぶい黄橙 内面：10YR3/1 黒褐	外面煤付着
229	85	3J-10c	22a 層	弥生土器	器台	高：△5.7 底：(18.6)	外面：脚部上端キザミメ 内面：ハケメ、ヘラケズリ、端部ヨコナデ	密	良好	内外面：7.5YR7/4 にぶい橙	脚端部煤付着
230	85	3J-10c	22a 層	弥生土器	器台	高：△10.4 底：(12.6)	外面：脚杯部ヘラミガキ、端部２条の凹線 内面：上手ナデ、下手ヘラケズリ	密	良好	内外面：7.5YR7/6 橙	
231	85	4J-1d	トレンチ	須恵器	杯蓋	高：△3.2 口：(14.2)	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、１条の沈線 内面：回転ナデ	密	良好	内外面：N5/0 灰	高重焼、外面口縁部付着
232	85		微孔	須恵器	杯身	高：5.3 口：12.7	外面：口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、当て具痕	密	良好	内外面：7.5GY7/1 明緑灰	

表８　石器観察表

掲載番号	種別番号	地区	遺構・層位名	種別	石種	法量(cm)	重さ（g）	備考
S1	70	4J-1d	133 上器溜り	砕錐車	溜石	最大長：3.6 最大幅：3.7 最大厚：1.25	23.67	上面溜付着
S2	85	3J-9d	18 層	磁石		最大長：12.3 最大幅：8.5 最大厚：5.8	730	
S3	86	3J-1d	19・20 層	磁石		最大長：13.7 最大幅：8.9 最大厚：5.5	865	
S4	86	3J-10d	19・20 層	磁石		最大長：15.9 最大幅：7.8 最大厚：5.3	1203	
S5	86	3J-9d	19・20 層	磁石	安山岩	最大長：8.5 最大幅：6.3 最大厚：4.1	350	
S6	86	3J-6d	21 層	不明	軽石	最大長：6.4 最大幅：4.4 最大厚：3.2	13.15	螺旋状の沈線、細等を巻きつけた＊

表９　木器観察表 (1)

掲載番号	種別番号	地区	遺構・層位名	種別	法量(cm)	年輪（/3cm）	木取り	備考
W1	61	3J-10d	55 抗跡	杭	長：25 幅：6.4 厚：5.3	9		
W2	61	3J-10d	61 抗跡	杭	長：4.6 幅：3.5 厚：4.1	15		
W3	61	4J-1d	130 流路	燃えさし	長：15.7 幅：5.1 厚：2.9	16		
W4	61	4J-1d	130 流路	建築部材	長：16.2 幅：9.1 厚：4.1	17		
W5	62	4J-2d	132 流路	形代	長：9.8 幅：2.5 厚：0.4	15		刻形帆部
W6	62	4J-2e	132 流路	燃えさし	長：7.3 幅：2.3 厚：0.7	18		
W7	62	4J-2e	132 流路	燃えさし	長：16.9 幅：1.4 厚：1.1	18		

表 10　木器観察表 (2)

掲載番号	挿図番号	地区	遺構・層位名	種　別	法　量 mm	年　輪 (/3cm)	木取り	備　考
W8	62	4J-2e	132 流路	燃えさし	長：242 幅：29 厚：09	27		
W9	62	4J-2e	132 流路	燃えさし	長：266 幅：25 厚：18	24		
W10	62	4J-2e	132 流路	燃えさし	長：275 幅：57 厚：21	15		
W11	62	4J-2e	132 流路	火箸状	長：169 幅：13 厚：07	15		
W12	62	4J-2d	132 流路	杭？	長：188 幅：19 厚：12	18		下部
W13	62	4J-2e	132 流路	杭	長：546 幅：50 厚：24	21		
W14	62	4J-2e	132 流路	板状木製品	長：194 幅：113 厚：18	12		
W15	62	4J-2e	132 流路	板状木製品	長：224 幅：84 厚：21	12		
W16	62	4J-2e	132 流路	板状木製品	長：54 幅：82 厚：10	9		
W17	62	4J-2e	132 流路	板状木製品	長：435 幅：25 厚：07	18		
W18	62	4J-2e	132 流路	角材	長：321 幅：30 厚：19	8		
W19	63	4J-1e	15-3b 層	燃えさし	長：272 幅：24 厚：14	18		コゲあり
W20	63	4J-1d	15-3b 層	火箸状	長：294 幅：18 厚：12	42		コゲなし
W21	63	4J-1e	15-3b 層	杭	長：252 幅：41 厚：20	18		
W22	63	4J-1e	15-3b 層	棒状木製品	長：247 幅：25 厚：17	15		
W23	74	3J-10d	22 面	木製品	長：583 幅：52 厚：25	18		転用。柄穴あり。
W24	74	3J-10d	223 溝	擬似餌	長：359 幅：101 厚：41	13		
W25	74	3J-10d	223 溝	火箸状	長：317 幅：12 厚：10	30		
W26	75	3J-9d	222・224 ピット	base 部材	長：458 幅：216 厚：21	21		2 点接合
W27	75	3J-9d	224 ピット	木片	長：110 幅：83 厚：37	13		
W28	75	3J-9d	224 ピット	木片	長：108 幅：83 厚：64	19		
W29	76	3J-10d	231 水口	杭	長：1003 幅：73 厚：50	17		
W30	87	4J-1e	14 層	台形状木製品	長：256 幅：40 厚：24	14		面取アゼ
W31	87	3J-10e	18 層	棒状木製品	長：169 幅：40 厚：26	18		
W32		3J-10d	18 層	杭	長：458 幅：54 厚：33	18		
W33		3J-10d	18 層	杭	長：430 幅：54 厚：38	11		

第４章　自然科学分析

はじめに

常松大谷遺跡は、鳥取県東部の鳥取市気高町常松に所在する。沖積平野である気高平野東縁の小谷内に位置する。

本報告は、イネ科植物の栽培を含む遺跡周辺地域の植生、堆積環境（水域環境）等、遺跡周辺の自然環境を推定するとともに、確定していない遺構の年代について明らかにするために、公益財団法人鳥取県教育文化財団が文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した、自然科学分析（花粉分析、植物珪酸体分析、珪藻分析、放射性炭素年代測定）の報告である。

第１項　分析試料について

分析試料はすべて公益財団法人鳥取県教育文化財団により採取・保管されていた試料から、提供を受けたものである。表 11 に分析試料一覧表を示す。また、各微化石分析結果（ダイアグラム）中に模式柱状図を示し、層相、試料相互の関係を示した。

第２項　分析方法

（１）花粉分析

渡辺（2010a）に従って、分析処理を行った。花粉化石の同定は、光学顕微鏡下（400 ～ 1000 倍）

表 11　分析試料一覧表

調査区	分析項目	整理No.	遺構名ほか			取上No.	出土年月日	分析項目			
			地区名	遺構名	層　序			花　粉	植物珪酸体	珪藻	年代測定
1-1区	微化石	1	T306		17-1a 層	1136	20131122	○	○	○	－
		2	T306		18-1a 層	1132	20131122	○	○	○	－
		3	T306		20b 層	1126	20131122	○	○	○	－
		4	T306		21a 層	1139	20131122	○	○	○	－
		5	T306		23 層上層	1140	20131122	○	○	○	－
		6	T306		23 層下層	1141	20131122	○	○	○	－
		7	T306		27b 層	1142	20131122	○	○	○	－
		8	T306		281 溝 1 層	1130	20131121	○	○	○	－
		9	T306		281 溝 2 層	1123	20131121	○	○	○	－
	年代測定	1	T306		27b 層	1122	20131122	－	－	－	○
		2	T306		a 層	1124	20131122	－	－	－	○
		3	T306		23a 層	1125	20131122	－	－	－	○
		4	T306		b 層	1126	20131122	－	－	－	○
		5	T306		28b 層	1127	20131122	－	－	－	○
		6	T306		18-2b 層	1128	20131122	－	－	－	○
		7	T306		17-2b 層	1129	20131122	－	－	－	○
		8	T306		16a 層	1131	20131122	－	－	－	○
		9	T306		25b 層	1131	20131122	－	－	－	○
		10	T306		30b 層	1132	20131122	－	－	－	○
		11	T306		27b 層	1134	20131122	－	－	－	○
		12	T306		23a 層	1135	20131122	－	－	－	○
1-2区	微化石	1	T306e-3J-10e		18a 層	737	20140625	○	○	○	－
		2	T306e-4J-1d		23a 層	986	20140915	○	○	○	－
		3	T306e-4J-1c		22a 層	987	20140915	○	○	○	－
		4	T306e-4J-1d		23a 層	988	20140915	○	○	○	－
	年代測定	1	T306e-3J-10d	133 土器溜 3	16a 層	580	20140729	－	－	－	○
		2	T306e-3J-10c	竪穴建物 1 貼床		583	20140729	－	－	－	○
		3	T306e-4J-1d		23a 層下 b 層	985	20140915	－	－	－	○
		4	T306e-4J-1c		27b 層	985	20140915	－	－	－	○
合　計								13	13	13	16

で観察し、200粒以上の木本花粉化石の検定、計数を試みた。また、イネ科花粉について、栽培種であるイネを含む可能性が高いイネ科（40ミクロン以上）と、可能性の低いイネ科（40ミクロン未満）（中村, 1974）に分けた。

（２）植物珪酸体分析

藤原（1976）のグラスビーズ法に従って、分析処理を行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いた。同定に当たり、イネ科機動細胞由来の分類群のほか、母植物の明らかな植物珪酸体を対象とした。また計数は、同時に計数したグラスビーズの個数が300を超えるまで計数を行った。

（３）珪藻分析

渡辺（2010b）に従って、分析処理を行った。珪藻化石の同定は、珪藻プレパラートを光学顕微鏡下（400～1000倍）で観察し、200粒以上の珪藻化石の検定、計数を試みた。また、粒径処理を確実にし、処理過程の再現性を高めるために、自然沈降法を１μｍ振動マイクロフィルター法に変更している。

（４）放射性炭素年代測定

前処理として、1.2N塩酸による酸洗浄の後に1.0N水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度1.2N塩酸による酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。^{14}Ｃ濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.2.4（Bronk Ramsey：2008、2009a、2009b、Bronk Ramsey. & Lee：2013）を用いてINTCAL13（Reymer et al., 2013）を利用している。また今回は、OxcalのPhases解析（Sequential）を行った。

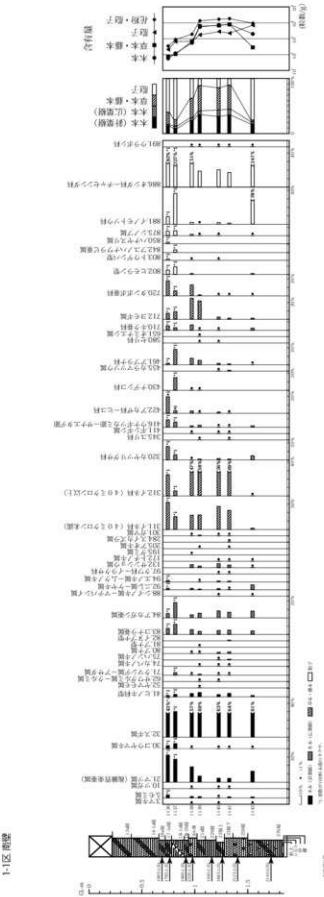
第３項　分析結果

（１）花粉分析結果

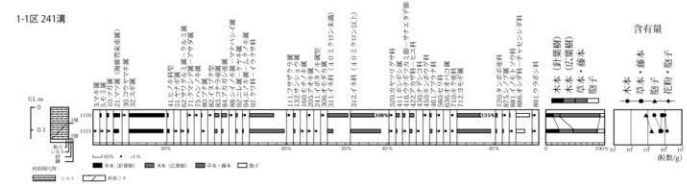
分析結果を、第89～91図及び表12に示す。ほとんどの試料で花粉（胞子）の含有量が多く、木本花粉で200粒を越える量の計数を行ったが、１－１区 南壁 No.1136、1137では含有量が少なく、検出量が200粒に達しなかった。

第89～91図の花粉ダイアグラムでは、計数した花粉、胞子の総数を基数にし、各々の花粉と胞子について百分率を算出してスペクトルで表した（木本（針葉樹）、木本（広葉樹）、草本・藤本花粉、胞子の分類ごとに、スペクトル内のハッチを変えている）。また、木本（針葉樹）、木本（広葉樹）、草本・藤本花粉、胞子の割合を示すグラフと、花粉（胞子）の含有量を示すグラフも示している。

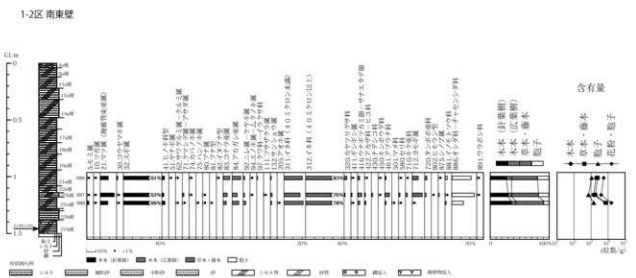
木本花粉ではいずれの試料でもスギ属が高率を示すが、１－１区 241溝ではクワ属－イラクサ属がスギ属に迫る値を示す。草本花粉ではイネを含む可能性が高いイネ科（40ミクロン以上）（中村, 1974）が、高率を示す。また、１－１区 南壁の上下端の試料（1136、1137、1142）では、胞子の割合が、極めて高かった。

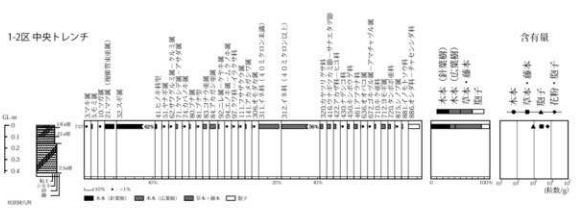


第 89 図　１－１区南壁の花粉ダイアグラム



第 90 図　１－１区 241 溝内の花粉ダイアグラム





第 91 図　１－２区 南東壁・中央トレンチの花粉ダイアグラム

表 12　花粉化石組成表

調査区		1-1区									1-2区			
地点		水路							241溝		中央トレンチ	東水路		
整理No		107(1a層)	208(1a層)	303(b層)	403(a層)	502(層上)	602(層下)	702(b層)	801(層)	902(層)	1036(a層)	221(a層)	322(b層)	422(b層)
分析No		1136	1137	1138	1139	1140	1141	1142	1120	1121	237	986	987	988
3 *Podocarpus*	マキ属			1 0%		1 0%		2 1%		1 0%	1 0%			
5 *Abies*	モミ属	2 4%		4 2%	5 2%	2 1%	4 1%	3 1%	4 2%	2 1%	3 1%	2 1%	2 1%	5 2%
10 *Tsuga*	ツガ属			2 1%		1 0%	1 0%		6 2%	1 0%	1 0%	2 1%	2 1%	1 0%
21 *Pinus(Diploxylon)*	マツ属（複維管束亜属）	18 32%	9 27%	40 18%	21 7%	12 5%	13 5%	28 13%	17 7%	16 6%	22 11%	24 9%	54 15%	17 8%
30 *Sciadopitys*	コウヤマキ属	2 4%	2 6%	2 1%		1 0%	2 1%	2 1%	2 1%			4 1%	2 1%	2 1%
32 *Cryptomeria*	スギ属	24 43%	10 30%	125 57%	196 69%	157 62%	179 64%	134 61%	95 39%	101 38%	130 62%	166 61%	221 63%	132 60%
41 Cupressaceae type	ヒノキ科型	1 2%	1 3%	9 4%	15 5%	7 3%	12 4%	4 2%	4 2%	7 3%	4 2%	8 3%	8 2%	7 3%
52 *Myrica*	ヤマモモ属				1 0%					1 0%	1 0%	2 1%		
62 *Pterocarya-Juglans*	サワグルミ属－クルミ属				1 0%	1 0%				1 0%	2 1%	1 0%		1 0%
71 *Carpinus-Ostrya*	クマシデ属－アサダ属		1 3%	1 0%	4 1%	2 1%	2 1%		2 1%	4 1%	5 2%		6 2%	1 0%
74 *Betula*	カバノキ属				1 0%	1 0%	1 0%				2 1%	2 1%	1 0%	
75 *Alnus*	ハンノキ属					2 1%	3 1%		1 0%					1 0%
80 *Fagus*	ブナ属			1 0%	2 1%	4 2%	6 2%		3 1%	2 1%	3 1%		2 1%	1 0%
81 *Fagus crenata* type	ブナ型				1 0%						2 1%			1 0%
82 *Fagus japonica* type	イヌブナ型						3 1%		1 0%			1 0%		
83 *Quercus*	コナラ亜属	4 7%	4 12%	13 6%	11 4%	12 5%	15 5%	10 5%	12 5%	8 3%	9 4%	20 7%	16 5%	7 3%
84 *Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属	3 5%	6 18%	8 4%	16 6%	21 8%	19 7%	18 8%	14 6%	5 2%	14 7%	26 10%	20 6%	15 7%
88 *Castanopsis-Pasania*	シイノキ属－マテバシイ属					2 1%		1 0%	2 1%					
92 *Ulmus-Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	1 2%		4 2%	3 1%	4 2%	2 1%	13 6%	5 2%	5 2%	3 1%	5 2%	6 2%	6 2%
94 *Aphananthe-Celtis*	エノキ属－ムクノキ属	1 2%			1 0%	3 1%	3 1%		1 0%	3 1%	2 1%	1 0%	1 0%	
97 Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科					2 1%	1 0%		65 27%	105 39%	1 0%	3 1%		
111 *Euptelea*	フサザクラ属								1 0%		1 0%		2 1%	
132 *Zanthoxylum*	サンショウ属			8 4%	6 2%	12 5%	9 3%	2 1%	5 2%	5 2%		3 1%	7 2%	3 1%
141 *Mallotus*	アカメガシワ属										3 1%			
160 *Ilex*	モチノキ属									1 0%				
172 *Aesculus*	トチノキ属					1 0%	1 0%	1 0%						
195 *Elaeagnus*	グミ属			1 0%										
205 *Aucuba*	アオキ属				1 0%		1 0%		1 0%	1 0%				1 0%
241 *Ligustrum* type	イボタノキ属型									1 0%				
284 *Lonicera*	スイカズラ属						1 0%							
301 *Typha*	ガマ属			2 1%	2 1%	1 0%	1 0%							
306 *Sagittaria*	オモダカ属								1 0%		1 0%			
311 Gramineae(<40)	イネ科（40ミクロン未満）	18 32%	5 15%	37 17%	49 17%	68 27%	63 22%	4 2%	56 23%	17 6%	47 22%	55 20%	62 18%	43 21%
312 Gramineae(>40)	イネ科（40ミクロン以上）	14 25%	2 6%	102 47%	161 56%	138 56%	192 69%	1 0%	260 108%	91 33%	118 56%	225 83%	285 78%	158 76%
320 Cyperaceae	カヤツリグサ科	9 16%	2 6%	2 1%	3 1%	4 2%	3 1%	11 5%	1 0%	1 0%	7 3%	8 3%	4 1%	
345 Liliaceae	ユリ科				1 0%		1 0%							
411 *Rumex*	ギシギシ属			1 0%		2 1%	1 0%		10 4%	4 1%		1 0%	4 1%	2 1%
416 *Echinocaulon-Persicaria*	ウナギツカミ節－サナエタデ節	5 9%	2 6%	4 2%	7 2%	2 1%	2 1%	4 2%	7 3%	1 0%	9 4%	6 2%	16 5%	5 2%
422 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	11 20%	1 3%	6 3%	2 1%	4 2%	3 1%		12 5%	8 3%	6 3%	1 0%	4 1%	3 1%
430 Caryophyllaceae	ナデシコ科		5 15%	1 0%	1 0%					1 0%	1 0%		5 1%	
450 Ranunculaceae	キンポウゲ科								1 0%		5 2%	1 0%	1 0%	
455 *Thalictrum*	カラマツソウ属					1 0%	3 1%							
463 Cruciferae	アブラナ科	1 2%	6 18%	17 8%	15 5%	4 2%	3 1%	1 0%	4 2%	7 3%	8 4%	4 1%	18 5%	3 1%
501 Leguminosae	マメ科													1 0%
590 Umbelliferae	セリ科				1 0%	1 0%			2 1%	1 0%		1 0%	5 1%	1 0%
636 *Plantago*	オオバコ属									1 0%	1 0%			
651 *Patrinia*	オミナエシ属				1 0%									
672 *Actinostemma-Gynostemma*	ゴキヅル属－アマチャヅル属										1 0%			
710 Carduoideae	キク亜科	3 5%	1 3%	14 6%	1 0%	1 0%		6 3%	1 0%	1 0%	3 1%	1 0%	8 2%	
712 *Artemisia*	ヨモギ属	4 7%	3 9%	55 25%	62 22%	7 3%	4 1%	3 1%	326 130%	101 37%	30 5%	18 7%	39 11%	2 1%
720 Cichorioideae	タンポポ亜科	10 18%	2 6%	29 13%	4 1%	1 0%	1 0%	1 0%	5 2%	4 1%	6 3%	7 3%	6 2%	
802 *Urostachys sieboldii* type	ヒモラン型	3 5%	3 9%	3 1%				3 1%					2 1%	
803 *Urostachys serratum* type	トウゲシバ型	1 2%		1 0%		1 0%								
842 *Subgenus Sceptridium*	ハナワラビ亜属		1 3%											
850 *Ophioglossum*	ハナヤスリ属	1 2%												
855 *Davallia*	シノブ属	3 5%	2 6%	4 2%	1 0%	1 0%		1 0%	1 0%	4 1%	2 1%	1 0%	4 1%	
861 Pteridaceae	イノモトソウ科	5 9%	12 36%	5 2%	1 0%	5 2%	4 1%	171 78%	3 1%	2 1%	3 1%	7 3%	3 1%	3 1%
886 Aspid-Athyr	オシダ科－チャセンシダ科	46 82%	75 227%	111 51%	54 19%	51 21%	48 17%	540 247%	37 15%	27 10%	26 12%	58 21%	87 25%	26 12%
891 Polypodiaceae	ウラボシ科			1 0%	1 0%	2 1%	1 0%	2 1%	1 0%	1 0%		1 0%	3 1%	
898 MONOLATE-TYPESPORE	単条溝胞子	40 71%	33 100%	58 26%	14 5%	12 5%	8 2%	27 12%	13 5%	11 4%	19 9%	30 11%	26 7%	4 2%
899 TRILATE-TYPESPORE	三条溝胞子	109 196%	55 167%	92 42%	19 7%	25 10%	18 6%	25 11%	24 10%	27 10%	22 11%	30 11%	51 15%	10 5%
木本花粉総数		56 17%	33 14%	219 29%	283 41%	248 43%	278 44%	219 27%	241 24%	272 47%	209 41%	270 36%	350 36%	202 44%
草本花粉総数		75 22%	29 12%	270 35%	315 46%	234 40%	276 44%	31 3%	686 68%	238 41%	223 44%	328 44%	437 45%	218 47%
胞子総数		208 61%	180 74%	275 36%	90 13%	97 17%	77 12%	769 70%	79 8%	72 12%	72 14%	147 20%	176 18%	43 9%
総数		339	243	764	688	579	631	1019	1005	582	504	745	963	463
含有量（粒数/g）		344	803	1913	13449	16808	18308	9364	9949	13491	6223	5488	3865	15561

左よりカウント粒数、百分率

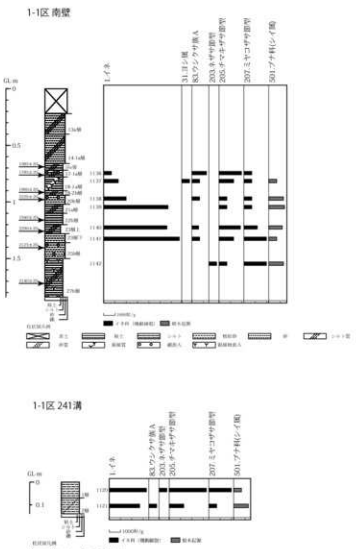
（２）植物珪酸体分析結果

分析結果を、第 92・93 図及び表 13 に示す。栽培関連では「イネ」が検出できた。

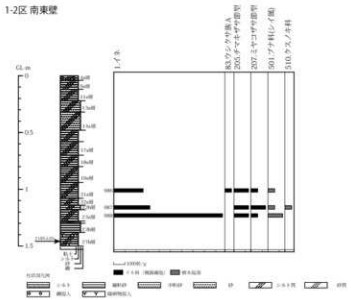
第 92・93 図の植物珪酸体ダイアグラムでは、1g あたりの含有量に換算した数を検出密度として、分類群毎にスペクトルで示した。

（３）珪藻分析結果

分析結果を、第94～101図及び表14に示す。全ての試料から珪藻化石が検出されたものの、含有量が少なかった。このため、プレパラート全面を検鏡しても、ほとんどの試料で検鏡数が200個体に至らなかった。また、ほとんどの個体が破片であったために、種レベルでの同定ができなかったものが多かった。



第 92 図　１－１区 南壁の植物珪酸体ダイアグラム



第 93 図　１－２区 南東壁・中央トレンチの植物珪酸体ダイアグラム

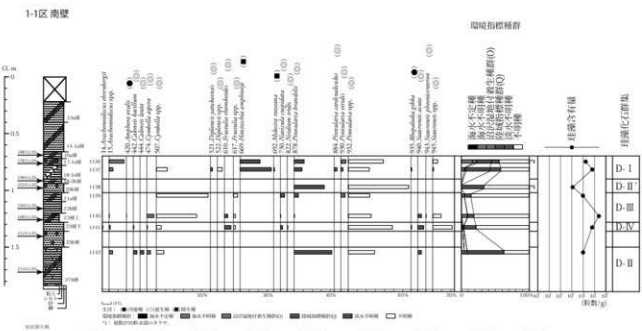
表 13　植物珪酸体化石組成表

調査区	1-1区									1-2区			
地点	南壁							241溝		中央トレンチ	南東壁		
層位	1d17-1a層	2d18-1a層	3d20b層	4d21a層	5d23層上	6d23層下	7d27b層	8d 層	9d 層	10d8a層	1d21a層	2d22b層	4d23a層
試料No.	1136	1137	1138	1139	1140	1141	1142	1143	1123	737	986	987	988
1　イ　ネ	1	2	3	8	9	10	–	5	4	4	4	5	15
	7	13	20	57	56	67	–	33	27	24	26	32	96
	0.19	0.04	0.59	1.67	1.64	1.96	–	0.98	0.79	0.71	0.76	0.95	2.82
31　ヨシ属	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	–	7	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
	–	0.43	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
83　ウシクサ族A	2	1	1	–	1	1	–	–	1	1	1	–	–
	13	7	7	–	6	7	–	–	7	6	6	–	–
	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
203　ネザサ節型	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–
	–	–	–	–	–	–	–	7	7	–	–	–	–
	–	–	–	–	–	–	–	0.03	0.03	–	–	–	–
205　チマキザサ節型	3	2	1	1	3	2	1	3	2	5	2	2	2
	20	13	7	7	19	13	7	33	13	30	13	13	13
	0.13	0.1	0.05	0.05	0.14	0.1	0.05	0.25	0.1	0.23	0.1	0.1	0.1
207　ミヤコザサ節型	1	1	1	1	2	3	3	3	2	3	1	2	1
	7	7	7	7	12	20	20	20	7	18	6	13	6
	0.05	0.05	0.05	0.05	0.09	0.06	0.06	0.06	0.05	0.05	0.05	0.09	0.05
501　ブナ科（シイ属）	–	1	2	2	2	1	2	1	2	1	1	1	2
	–	7	13	14	12	7	13	7	13	6	6	6	13
	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
510　クスノキ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1	–
	–	–	–	–	–	–	–	–	–	6	–	6	–
	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
プラント・オパール総数	7	8	9	12	17	17	7	12	10	10	9	11	20
カウントガラスビーズ数	455	447	446	424	488	447	459	450	447	492	468	463	473
カウント総数	462	455	455	436	505	464	466	463	457	507	477	474	493
試料重量（× 0.0001g）	7011	6991	7007	7025	6999	6994	7025	6992	7036	7000	7005	7002	6997
ガラスビーズ重量（× 0.0001g）	132	133	133	134	134	132	134	133	134	132	133	133	134

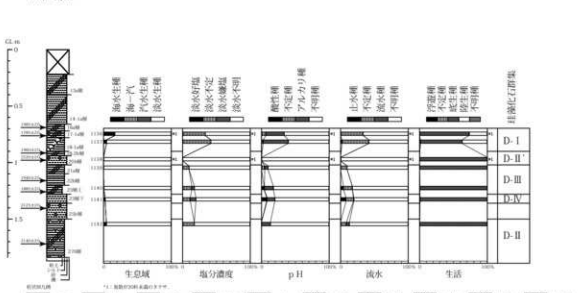
上段　検出粒数
中段　検出密度（単位：× 100 粒 /g）
下段　推定生産量（単位：kg /㎡ · cm）

第 94・96・98・100 図の珪藻ダイアグラムでは、分類群ごとに検出総数を基数とした百分率を算出し、スペクトルで表した。また、小杉（1988）、安藤（1990）にしたがって、環境指標種群ごとにスペクトルのハッチを変えている。第 95・97・99・101 図の珪藻総合ダイアグラムのうち、左端の「生息域別グラフ」は同定したすべての種類を対象にそれぞれの要因（生息域）ごとに累積百分率で示している。そのほかの４つのグラフは、淡水種について要因ごとに累積百分率として示している。

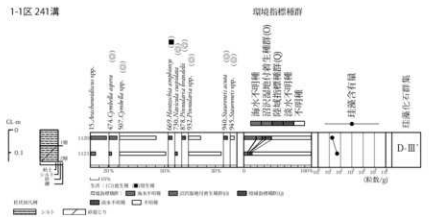
ほとんどの試料で海水生種の *Arachonoidiscus ehrenbergii*（あるいは *Arachonoidiscus* spp.）が検出されるが、調査地の標高、土地条件から、二次堆積した可能性が高い。



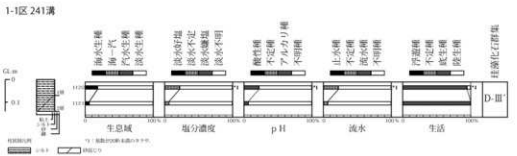
第 94 図　１－１区 南壁の珪藻ダイアグラム



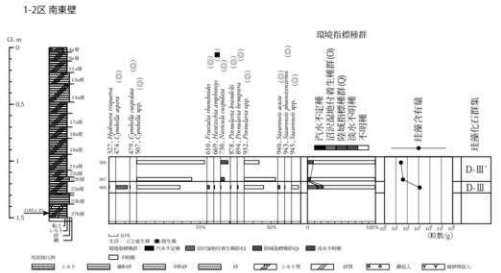
第 95 図　１－１区 南壁の珪藻総合ダイアグラム



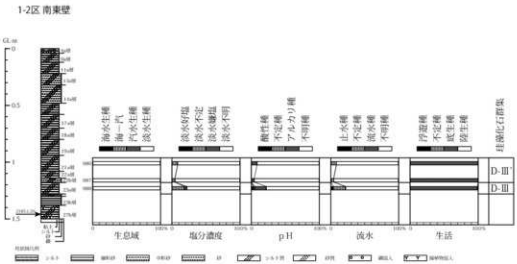
第 96 図　１－１区 241 溝内の珪藻ダイアグラム



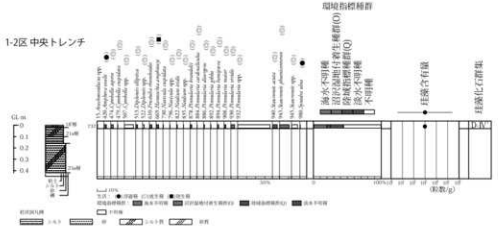
第 97 図　１－１区 241 溝内の珪藻総合ダイアグラム



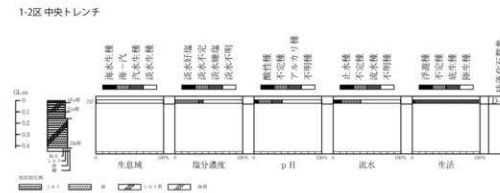
第 98 図　１－２区 南東壁の珪藻ダイアグラム



第 99 図　１－２区 南東壁の珪藻総合ダイアグラム



第 100 図　１－２区 中央トレンチの珪藻ダイアグラム



第 101 図　１－２区 中央トレンチの珪藻総合ダイアグラム

表14　珪藻化石組成表

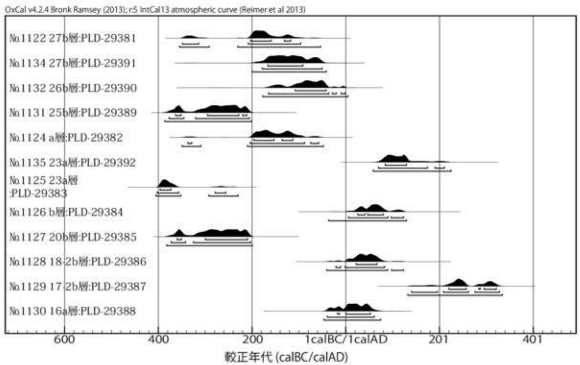
コード	学名		生息域 水域	塩分濃度	Ph	流水	生活	1-1区 南壁 1(17-1a層)	2(18-1a層)	3(20b層)	4(21a層)	5(23層上)	6(23層下)	7(27b層)	241溝 8(1層)	9(2層)	1-2区 中央トレンチ 1(18a層)	南東壁 2(21a層)	3(22b層)	4(23a層)
								1136	1137	1138	1139	1140	1141	1142	1120	1121	737	986	987	988
14	*Arachnoidiscus*	*ehrenbergii*	海水										1 1%							
15	*Actinoptychus*	spp.	海水					3 17%	4 4%			1 0%	2 2%	1 4%	4 18%	2 6%	1 0%			
327	*Hydrosera*	*triquetra*	汽水																	1 0%
420	*Amphora*	*ovalis*	淡水	不定	アルカリ	止水	浮遊					1 0%					6 3%			
442	*Caloneis*	*bacillum*	淡水	不定	アルカリ	流水	底生						1 1%	1 4%						
444	*Caloneis*	*lauta*	淡水	不定	不明	不明	底生							1 4%						
474	*Cymbella*	*aspera*	淡水	不定	アルカリ	不定	底生					17 8%	1 1%	1 4%	2 9%	1 3%	6 3%			27 13%
479	*Cymbella*	*cuspidata*	淡水	不定	不定	不定	底生										1 0%			1 0%
507	*Cymbella*	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生		11 12%		12 57%	95 45%	7 6%	2 8%	9 41%	17 52%	21 10%	18 75%	14 61%	99 48%
513	*Diploneis*	*elliptica*	淡水	不定	不定	止水	底生										4 2%			
521	*Diploneis*	*yatukaensis*	淡水	不定	不明	止水	底生		2 2%											
522	*Diploneis*	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生		5 6%								4 2%			
610	*Frustulia*	*rhomboides*	淡水	嫌塩	酸性	止水	底生					8 4%	9 7%				6 3%			6 3%
617	*Frustulia*	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生				1 5%	5 2%	3 2%							
669	*Hantzschia*	*amphioxys*	淡水	不定	アルカリ	不定	陸生	4 22%	31 34%						1 5%		6 3%			2 1%
692	*Melosira*	*roeseana*	淡水	不明	不明	不明	陸生		1 1%											
730	*Navicula*	*cuspidata*	淡水	不定	アルカリ	不定	底生				1 5%	1 0%	3 2%			1 3%	1 0%	2 8%	1 4%	1 0%
796	*Navicula*	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生										1 0%			
822	*Neidium*	*iridis*	淡水	嫌塩	不定	止水	底生						1 1%				2 1%			
835	*Neidium*	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生										1 0%			
878	*Pinnularia*	*brandelii*	淡水	不明	不明	不明	底生	2 11%	8 9%	1 33%	1 5%	1 0%		10 42%	1 5%		4 2%			1 0%
881	*Pinnularia*	*cardinaliculus*	淡水	不明	不明	不明	底生		3 3%								1 0%			
886	*Pinnularia*	*divergens*	淡水	嫌塩	酸性	不明	底生										2 1%			
892	*Pinnularia*	*gibba*	淡水	不定	酸性	不定	底生										1 0%			
894	*Pinnularia*	*hemiptera*	淡水	嫌塩	不定	止水	底生										3 1%			2 1%
908	*Pinnularia*	*maior*	淡水	不定	酸性	止水	底生										4 2%			
930	*Pinnularia*	*viridis*	淡水	不定	不定	不定	底生	1 6%	2 2%		1 5%						9 4%			
932	*Pinnularia*	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	7 39%	21 23%	2 67%	5 24%	54 25%	61 49%	7 29%	3 14%	12 36%	74 36%	4 17%	8 35%	45 22%
935	*Rhopalodia*	*gibba*	淡水	不定	アルカリ	不定	浮遊		1 1%				1 1%							
940	*Stauroneis*	*acuta*	淡水	不定	アルカリ	不定	底生					9 4%	8 6%	1 4%	1 5%		11 5%			5 2%
943	*Stauroneis*	*phoenicenteron*	淡水	不定	不定	不定	底生					1 0%					22 11%			1 0%
945	*Stauroneis*	spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	1 6%	1 1%			20 9%	27 22%		1 5%		14 7%			16 8%
980	*Synedra*	*ulna*	淡水	不定	アルカリ	不定	浮遊										1 0%			
			海水産種合計					3 17%	4 4%	0 0%	0 0%	1 0%	3 2%	1 4%	4 18%	2 6%	1 0%	0 0%	0 0%	0 0%
			海〜汽水産種合計					0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
			汽水産種合計					0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	1 0%
			淡水産種合計					15 83%	86 96%	3 100%	21 100%	212 100%	122 98%	23 96%	18 82%	31 94%	205 100%	24 100%	23 100%	206 100%
			合　計					18	90	3	21	213	125	24	22	33	206	24	23	207
			含有量（粒数/㎖）合計					16,770	63,738	1,186	9,528	243,663	61,235	9,858	18	49	973	28	42	1,247
			完形率				完形数	2	19	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	2
							%	11%	21%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	1%

（4）放射性炭素年代測定結果

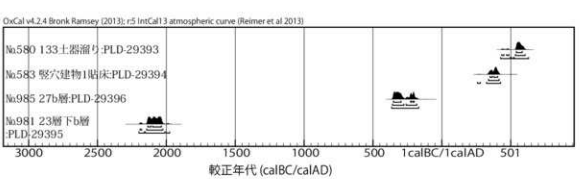
表15に年代測定結果を示す。また第102・103図に、年代測定結果と層準の関係を示した。

表15　年代測定結果

調査区	整理No.	出土遺構ほか	取上No.	種類	重量(g)	前処理	$\delta^{13}C$ (‰)	$\delta^{13}C$補正無年代 (yrBP±1σ)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲 1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	3σ暦年代範囲	測定番号 PLD
11区	1	T304 27b層 20131122	1122	木片	0	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-25.39±0.16	2213±20	2140±20	2140±20	BC204-160(58.8%) BC133-118(9.4%)	BC349-316(12.9%) BC209-87(82.5%)	BC355-283(14.6%) BC231-54(85.1%)	29381
	2	T304a層 20131122	1124	炭化物(土付)	11	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-26.54±0.16	2200±20	2125±20	2125±20	BC197-154(45.7%) BC135-114(22.5%)	BC336-328(1.2%) BC205-88(91.0%) BC76-58(3.2%)	BC350-310(3.3%) BC210-49(96.4%)	29382
	3	T306 23a層 20131122	1125	炭化物(土付)	1	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-27.92±0.19	2339±20	2291±20	2290±20	BC397-374(68.2%)	BC403-357(89.2%) BC279-257(6.2%)	BC406-353(90.1%) BC285-230(9.6%)	29383
	4	T306b層 20131122	1126	炭化物(土付)	0	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-30.23±0.17	2029±22	1942±22	1940±20	AD26-42(17.4%) AD47-85(50.8%)	AD6-91(85.0%) AD98-124(10.4%)	BC30-AD130(99.7%)	29384
	5	T304 28b層 20131122	1127	炭化物(土付)	10	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-22.18±0.18	2256±20	2222±20	2220±20	BC361-351(6.5%) BC300-208(61.7%)	BC373-202(94.2%) [illegible](1.2%)	BC380-200(99.7%)	29385
	6	T306 18-2b層 20131122	1128	炭化物(土付)	17	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-26.10±0.16	2011±20	1960±20	1960±20	AD23-69(68.2%)	BC23-11(2.0%) BC2-AD86(93.4%)	BC41-AD90(98.1%) AD98-124(1.6%)	29386
	7	T304 17-2b層 20131122	1129	炭化物(土付)	22	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-26.95±0.21	1817±19	1784±19	1785±20	AD221-256(29.4%) AD283-288(1.6%) AD296-322(37.2%)	AD141-197(11.9%) AD209-263(48.8%) AD276-329(34.8%)	AD133-339(99.7%)	29387
	8	T306 16a層 20131122	1130	炭化物(土付)	11	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-31.47±0.17	1957±19	1965±19	1965±20	BC18-14(3.3%) AD1-58(64.9%)	BC40-AD62(95.4%)	BC47-AD75(99.7%)	29388
	9	T304 28b層 20131122	1131	炭化物(土付)	22	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-32.79±0.22	2258±20	2229±20	2230±20	BC364-353(8.8%) BC296-229(53.8%) BC221-212(5.6%)	BC373-346(30.6%) BC321-206(64.8%)	BC387-201(99.7%)	29389
	10	T304 26b層 20131122	1132	木片(土付)	31	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-28.57±0.23	2122±20	2062±20	2065±20	BC109-40(68.2%)	BC166-[illegible] BC29-21(1.4%) BC11-2(2.2%)	BC176-AD50(99.7%)	29390
	11	T304 27b層 20131122	1134	木片(土付)	39	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-32.73±0.21	2227±20	2098±20	2100±20	BC167-92(68.2%)	BC179-50(95.4%)	BC201-42(99.7%)	29391
	12	T306 23a層 20131122	1135	炭化物	0	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-11.87±0.16	1669±19	1883±19	1885±20	AD86-130(68.2%)	AD70-179(90.5%) AD186-213(4.9%)	AD59-225(99.7%)	29392
12区	1	T304c-3J-10層 III上面部 20140529	960	炭化物	0	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-30.36±0.16	1602±19	1512±19	1510±20	AD541-584(68.2%)	AD435-451(2.3%) AD471-487(1.3%) AD534-605(91.8%)	AD427-495(9.8%) AD506-520(1.0%) AD526-620(88.9%)	29393
	2	T304c-3J-10c 柱穴遺物1周辺 20140529	963	炭化物	0	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-28.07±0.16	1719±19	1668±19	1670±20	AD351-367(20.8%) AD379-405(47.4%)	AD330-417(95.4%)	AD260-281(1.3%) AD325-423(98.4%)	29394
	3	T304c-4J-14 23層下b層 20140915	961	炭化物	0	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-27.35±0.21	3737±22	3697±21	3695±20	BC2134-2113(27.9%) BC2101-2037(40.3%)	BC2196-2168(10.2%) BC2145-2020(85.2%)	BC2200-2160(3.7%) BC2153-2016(94.6%) BC2001-1977(1.3%)	29395
	4	T304c-4J-1c 27b層 20140915	965	木片(土付)	2	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N,水酸化ナトリウム1.0N,塩酸1.2N）	-29.61±0.18	2263±20	2186±20	2185±20	BC352-295(15.2%) BC228-221(5.8%) BC211-166(47.2%)	BC358-278(41.4%) BC260-165(54.0%)	BC365-166(99.7%)	29396



第 102 図　１－１区の年代値と層序



第 103 図　１－２区の年代値

第４項　年代測定結果について

年代測定値は、実際の堆積年代に比べ、古く算出されることが一般的である。このことは、樹木を例に取ると理解しやすい。年代測定値は年輪が形成された時期を示すが、樹木の場合には、髄（中心）と樹皮直下（最外層）で数十年以上の差があることが一般的で、数百年の差があることも珍しくない。しかし、分析試料としての樹木片が、年輪のどの部分であるかを知る術はない。また、最外層であったとしても、木片として堆積するまでに要した年数を知る術もない。従って、得られた年代測定値は、堆積した時期より古いとしか、捉えようがない。これに対し、実際の堆積年代に比べ、新しい値が得られることもある。この場合には、生物擾乱による「沈み込み」や、「予期せぬ混入」により生じたケースが多い。以下では、前後関係から、年代測定値の可否判断が比較的容易な「堆積層」について、年代測定結果の可否を判定し、地層の堆積時期を推定する。また、可否判断の困難な「遺構」については、出土遺物から推定される遺構の時期との関係を示した。

（１）堆積層

各層（１－１区、１－２区とも）で測定した年代を概観すると（第 102・103 図）、前後関係から、１－１区では№1131（25b 層）、№1125（23a 層）、№1127（20b 層）、№1130（16a 層）、１－２区では№981(23 層下ｂ層）の値が、明らかに実年代より古く求められていることが分かる。Phases 解析（Sequential）を実行すると、それぞれの年代値は、第 104 図、表 16 のようになる。また第 104 図、表 16 から、№1126（b 層）、1128（18 － 2b 層）についても、実年代よりやや古く求められている可能性が指摘できる。

第 104 図及び表 16 から、27b 層～ a 層は弥生時代中期、23a 層～ 17 － 2b 層は弥生時代後期頃に堆積したものと推定できる。

（２）遺　構

133 土器溜り（取上№580 T30 － 6c － 3J － 10d）

出土遺物から６世紀中頃の遺構と考えられていた。年代測定値はσで６世紀中頃、３σでは５世紀中頃から７世紀中頃と、ほぼ一致する値であった。

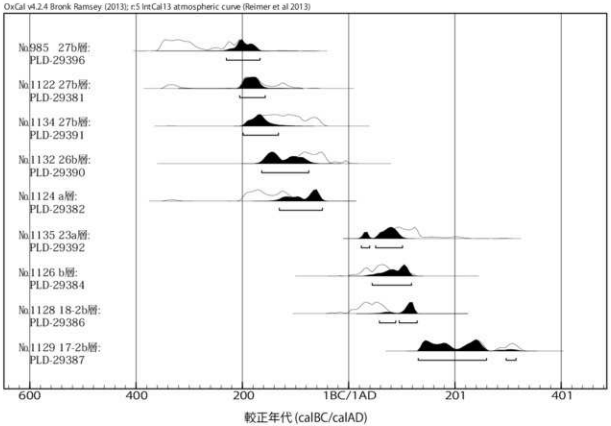
竪穴建物１貼床（取上№583 T30 － 6c － 3J － 10c）

古墳時代前期の竪穴建物と考えられていた。年代測定値はσで４世紀中頃から５世紀初頭、３σでは３世紀中頃から５世紀中頃と、古墳時代前期にほぼ一致する値であった。

第５項　微化石分析結果に基づく古環境変遷

年代測定結果に基づく弥生時代中期（27b 層）、後期（23a 層～ 17 － 2b 層）の堆積時期に加え、出土遺物から推定される古墳時代前期（１－１区 241 溝）ごとに、微化石分析結果から、古環境について考察した。

弥生時代中期には、27b 層のみが対応した。後述の様に沼沢湿地での堆積が推定できることから、（１）堆積環境及び近辺の植生、（２）周辺地域の森林植生のテーマについて、考察を行った。



第 104 図　^{14}C 年代 Phases 解析値

表 16　年代測定 Phases 解析結果

調査区	整理№	出土遺構ほか	取上№	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲 2 σ 暦年代範囲	測定番号 PLD
1-2 区	4	T30-6c-4J-1c 27b 層 20140915	985	BC231(95.4%)168	29396
1-1 区	1	T30-6 27b 層 20131122	1122	BC206(95.4%)158	29381
	11	T30-6 27b 層 20131122	1134	BC199(95.4%)133	29391
	10	T30-6 26b 層 20131122	1132	BC164(95.4%)76	29390
	2	T30-6 a 層 20131122	1124	BC131(95.4%)50	29382
	12	T30-6 23a 層 20131122	1135	AD25(95.4%)102	29392
	4	T30-6 b 層 20131122	1126	AD45(95.4%)119	29384
	6	T30-6 18-2b 層 20131122	1128	AD59(95.4%) 130	29386
	7	T30-6 17-2b 層 20131122	1129	AD132(95.4%)316	29387

弥生時代後期の分析層準（試料）は中期に比べ多く、変化に富んでいたことから、珪藻化石群集に従った区分ごとに、（１）堆積環境及び近辺の植生、（２）水田耕作、（３）周辺地域の森林植生のテーマについて、考察を行った。

古墳時代前期には、１－１区241溝のみが対応した。ここでは、（１）遺構の年代観、（２）堆積環境及び近辺の植生、（３）周辺地域の森林植生のテーマについて、考察を行った。

１．弥生時代中期（27b層）

（１）堆積環境及び近辺の植生

最下位の27b層では、*Pinnularia brandelii*、*Pinnularia* spp.等の淡水・底生種の割合が高く、僅かに淡水・流水種の*Caloneis bacillum*が検出され（珪藻化石群種：Ｄ－Ⅱ）、僅かに水が流れ込む水深が浅い沼沢湿地で堆積した可能性が指摘できる。一方、花粉化石群集では胞子の割合が高いことが特徴である。一時的に水位が下がり、27b層上面が乾燥し、多くの花粉が劣化消滅した可能性が指摘できる。

湿性草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が検出される。植物珪酸体化石群集では、イネ科に限るとササ類が検出されるのみであるが、湿地内にはヨシやマコモ（以上イネ科）、スゲ類やホタルイ類（以上カヤツリグサ科）等の湿性植物が生育していたと考えられる。

一方植物珪酸体が検出されるササ類は、沼沢湿地の周辺に繁茂していたと考えられる。このほか、花粉化石が検出されるタデ類や、キク類も沼沢湿地の周辺に繁茂していたと考えられる。

（２）周辺地域の森林植生

木本花粉ではスギ属が高率を示す。スギは湿気の多い環境を好むことから、谷筋や低湿な場所に生育する傾向にある。このことから、調査地から背後の丘陵を刻む谷筋や、気高平野内にスギ林を成していた可能性が高い。また、鳥取県東部の花粉分析結果（青谷上寺地遺跡：文化財調査コンサルタント(株)，2012、桂見鍋山遺跡：パリノ・サーヴェイ(株)，2015等）では、弥生時代はスギ属の高率出現で特徴付けられている。今回の調査地である気高平野は、鳥取平野と青谷平野の中間に位置し、これらの結果と調和的である。一方、アカガシ亜属や僅かに検出されるシイノキ属－マテバシイ属は背後から気高平野周囲の丘陵上に分布する照葉樹林に由来したと考えられる。植物珪酸体でもシイ属が検出され、このことが追従できる。このほか花粉分析では、マキ属、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、ヒノキ科(型)、等の針葉樹種が僅かに検出される。これらは、照葉樹林に混淆していたほか、中国山地から遠方飛来した可能性が指摘できる。マツ属（複維管束亜属）、コナラ亜属等は、二次植生として照葉樹林内のギャップを埋めるように、丘陵上に点在したと考えられる。ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属は、平野内を流れる河内川沿いの自然堤防上に、河畔林を成していたと考えられる。

２．弥生時代後期（23a層～17－2b層）

（１）堆積環境及び近辺の植生

１－１区23層下

珪藻分析では*Pinnularia* spp.、*Stauroneis* spp.等の淡水・底生種の割合が高く、淡水・浮遊種の*Rhopalodia gibba*や淡水・流水種の*Caloneis bacillum*が僅かに検出され（珪藻化石群種：Ｄ－Ⅳ）、

水の流入が認められる水深が浅い沼沢湿地で、27b 層に比べやや水深が増した堆積した可能性も指摘できる。

植物珪酸体化石ではイネが 6700 粒 /g と高密度で検出される。また、草本花粉ではイネを多く含むイネ科（40 ミクロン以上）や、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、タデ科等の水田雑草に由来する可能性のある種類が、検出される。これらのことから、調査地が水田であった可能性が指摘できる。

一般に水田からは、沼沢湿地環境を示唆する珪藻化石群種が検出されることから、本層は水田作土であったと考えられる。

調査地ではイネが栽培され、イヌビエ類（イネ科）、テンツキ類やホタルイ類（以上カヤツリグサ科）、ウナギツカミ類（タデ科）等の水田雑草が、生育していたと考えられる。一方植物珪酸体が検出されるササ類やウシクサ族 A 型（チガヤ類）が、水田の周辺に繁茂していたと考えられる。このほか、花粉化石が検出されるタデ類や、アカザ類（あるいはヒユ類）、アブラナ類、キク類も、水田の周辺に繁茂していたと考えられる。

1－1 区 23 層上、21a 層

珪藻分析では *Cymbella* 属（*Cymbella aspera*、*Cymbella* spp.）や *Pinnnularia* spp. 等の、恐らく淡水・底生種がほとんどを占める（珪藻化石群種：D－Ⅲ）。下位の 23 層上からは淡水・浮遊種の *Amphora ovalis* が 1 個体のみ検出されるが、水深が浅い沼沢湿地で堆積したと考えられる。

下位の 23 層下同様に、植物珪酸体化石ではイネが 5000 粒 /g を越える高密度で検出される。また、草本花粉ではイネを多く含むイネ科（40 ミクロン以上）や、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、タデ科、ナデシコ科、セリ科等の水田雑草に由来する可能性のある種類が、検出される。これらのことから、調査地が水田であった可能性が指摘できる。

前述の様に、水田からは沼沢湿地環境を示唆する珪藻化石群種が検出されることから、本層は水田作土であったと考えられる。

調査地では 23 層下堆積時期と同様にイネが栽培され、イヌビエ類（イネ科）、テンツキ類やホタルイ類（以上カヤツリグサ科）、ウナギツカミ類（タデ科）、ハコベ類（ナデシコ科）、セリ類、チドメグサ類（以上セリ科）等の水田雑草が、生育していたと考えられる。一方植物珪酸体が検出されるササ類やウシクサ族 A 型（チガヤ類）が、水田の周辺に繁茂していたと考えられる。このほか、花粉化石が検出されるタデ類や、アカザ類（あるいはヒユ類）、アブラナ類、ヨモギ類やタンポポ類（以上キク科）等も水田の周辺に繁茂していたと考えられる。

1－2 区 23a 層、22b 層、21a 層

23a 層の珪藻分析では、*Cymbella* 属（*Cymbella aspera*、*Cymbella* spp.）や *Pinnnularia* spp. 等の、恐らく淡水・底生種がほとんどを占める（珪藻化石群集：D－Ⅲ）。22b 層、21a 層では珪藻化石の含有量が少なかったが、珪藻化石群集 D－Ⅲの主要な分類群が検出できた（珪藻化石群集：D－Ⅲ'）。このことから、水深の浅い沼沢湿地で堆積したと考えられる。ただし、D－Ⅲ' では珪藻含有量が 28 ～ 42 粒 /g と少ないことから、堆積時の乾燥（あるいは堆積後の化学反応）による 劣化消滅が示唆される。

植物珪酸体化石では、23a 層でイネが 9600 粒 /g を越える高密度で検出されるほか、22b 層、21a 層では 3200、2600 粒 /g の密度を示す。また、草本花粉ではイネを多く含むイネ科（40 ミクロン以上）や、イネ科（40 ミクロン未満）、カヤツリグサ科、タデ科、ナデシコ科、セリ科等の水田雑草に由来する可能

性のある種類が、検出される。これらのことから、調査地が水田であった可能性が指摘できる。

前述の様に、水田からは沼沢湿地環境を示唆する珪藻化石群種が検出されることから、本層は水田作土であったと考えられる。

調査地では１－１区の23層下、23層上、21a層、20b層堆積時期と同様にイネが栽培され、イヌビエ類（イネ科）、テンツキ類やホタルイ類（以上カヤツリグサ科）、ウナギツカミ類（タデ科）、ハコベ類（ナデシコ科）等の水田雑草が、生育していたと考えられる。一方植物珪酸体が検出されるササ類やウシクサ族Ａ型（チガヤ類）が、水田の周辺に繁茂していたと考えられる。このほか、花粉化石が検出されるタデ類や、アカザ類（あるいはヒユ類）、アブラナ類、ヨモギ類やタンポポ類（以上キク科）等も水田の周辺に繁茂していたと考えられる。

１－１区20b層

淘汰の良い砂が下位の21a層を削り込み、シルトから粘土がブロック状に含まれる。このことから、流れのある河川(?)環境下で、下位の地層を削り込みながら堆積したものと考えられている。

珪藻化石の含有量は少なく、*Pinnularia brandelii*、*Pinnularia* spp.のみが検出された（珪藻化石群種：Ｄ－Ⅱ'）。これらは淡水・底生種であり、水深の浅い沼沢湿地で堆積したと考えられる。この珪藻化石群集は、層相から推定できる河川環境とは異質なものである。一方、花粉化石含有量も、下位の23層上、21a層に比べ少なく、胞子の割合が高い。また、花粉化石含有量が少ないものの、木本花粉、草本・藤本花粉化石群集は、下位の23層下、23層上、21a層と類似している。層相と合わせると、これらの珪藻化石、花粉化石が、下位層の再堆積、あるいは河川周辺からもたらされた可能性が指摘できる。

植物珪酸体化石ではイネが検出されるものの、2000粒/gとやや密度が低い。一方、イネ科（40ミクロン以上）花粉は47％と高率である。また、イネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科、タデ科、ナデシコ科等の水田雑草に由来する可能性のある種類も、花粉分析で検出される。

前述の様に、水田からは沼沢湿地環境を示唆する珪藻化石群種が検出されることから、本層は水田作土であった可能性が指摘できる。しかし、本層は流れのある河川(?)環境下で堆積したものと考えられる。従って、作土を示唆する微化石は、下位層から再堆積、あるいは河川流域に広がった水田からもたらされたものと考えられる。

花粉化石が河川流域の植生を示していると仮定すると、調査地を流れる河川流域ではイネが栽培され、イヌビエ類（イネ科）、テンツキ類やホタルイ類（以上カヤツリグサ科）、ウナギツカミ類（タデ科）、ハコベ類（ナデシコ科）等の水田雑草が、生育していたと考えられる。一方植物珪酸体が検出されるササ類やウシクサ族Ａ型（チガヤ類）が、河川や水田の周辺に繁茂していたと考えられる。このほか、花粉化石が検出されるタデ類や、アカザ類（あるいはヒユ類）、アブラナ類、ヨモギ類やタンポポ類（以上キク科）等も河川や水田の周辺に繁茂していたと考えられる。

１－１区18－1a層、17－1a層

陸生種の*Hantzschia amphioxys*が高率で検出されるほか、*Pinnularia brandelii*、*Pinnularia* spp.等の淡水・底生種である*Pinnularia*属が多く検出された（珪藻化石群種：Ｄ－Ⅰ）。このことから、時折干上がる水深のごく浅い沼沢湿地で堆積したと考えられる。花粉化石含有量は100～200粒/gと少なく、胞子の割合が高いことからも、18－1a層、17－1a層上面が乾燥したことが示唆され、花粉化石の一部は劣化消滅したものと考えられる。

植物珪酸体化石ではイネが検出されるものの、700 ～ 1300 粒 /g と密度が低く、イネ科(40 ミクロン以上)花粉も 6 ～ 25%とさほど高くない。また、ヨシ属やウシクサ族 A 型の植物珪酸体が検出され、イネ科(40 ミクロン未満)花粉の出現率が比較的高いこと整合する。

僅かであるがイネ由来の植物珪酸体、イネに由来する可能性が高いイネ科(40 ミクロン以上)花粉が検出されることから、短期間の水田耕作、乾田、陸稲栽培等は否定できない。しかし、得られた珪藻化石群集、植物珪酸体化石群集、花粉化石群集を総合的に観ると、本層は時折干上がる水深のごく浅い沼沢湿地で堆積したと考えられる。また、周辺で稲作が行われており、稲作関連の微化石は、調査地に飛来あるいは水系を経由してもたらされたと考えられる。

調査地近辺の湿潤な場所にはヨシのほかスゲ類やホタルイ類等のカヤツリグサ科草本が生育していたと考えられる。また、干上がった場所にはササ類、チガヤ類のほか、花粉が検出されるタデ類、アカザ類(あるいはヒユ類)、ナデシコ類、アブラナ類、ヨモギ類、タンポポ類等が生育していたと考えられる。

1 － 2 区 18'a 層

珪藻分析では、*Pinnularia* spp.、*Cymbella* spp. 等の、恐らく淡水・底生種がほとんどを占め、陸生種の *Hantzschia amphioxys* が僅かに検出される(珪藻化石群集：D －Ⅳ')。含有量がやや少なく、完形率も 1%ほどと低いものの、検出できた分類群は比較的多かった。このことから、水深がごく浅く、時に干上がることもある、沼沢湿地で堆積したと考えられる。

植物珪酸体化石ではイネが検出されるものの、2400 粒 /g とやや密度が低いが、イネ科(40 ミクロン以上)花粉は 56%と高率である。また、イネ科(40 ミクロン未満)、カヤツリグサ科、タデ科、ナデシコ科等の水田雑草に由来する可能性のある種類も、花粉分析で検出される。さらに、1 － 1 区 18 － 1a 層、17 － 1a 層と異なり、花粉化石の含有量が多く、胞子の割合も低い。これらのことから、調査地が水田であった可能性が指摘できる。

前述の様に、水田からは沼沢湿地環境を示唆する珪藻化石群種が検出されることから、本層は水田作土であったと考えられる。

調査地では 1 － 1 区の 23 層下、23 層上、21a 層、20b 層、1 － 2 区 23a 層、22b 層、21a 層堆積時期と同様にイネが栽培され、イヌビエ類(イネ科)、テンツキ類やホタルイ類(以上カヤツリグサ科)、ウナギツカミ類(タデ科)、ハコベ類(ナデシコ科)等の水田雑草が、生育していたと考えられる。一方植物珪酸体が検出されるササ類やウシクサ族 A 型(チガヤ類)が、水田の周辺に繁茂していたと考えられる。このほか、花粉化石が検出されるタデ類や、アカザ類(あるいはヒユ類)、アブラナ類、オオバコ類、ゴキズル類、ヨモギ類やタンポポ類(以上キク科)等も水田の周辺に繁茂していたと考えられる。

(2) 水田耕作

前述のように調査地では、弥生時代後期に入ってから、水田耕作の痕跡が認められた。分析を行っていない層準があるものの、水田は作り直されながら、あるいは場所を変えて、弥生時代後期を通して連綿と続いていたことが分かる。20b 層、18 － 1a 層、17 － 1a 層の時期には、調査地点が水田であった可能性は低いが、周辺に水田が存在した可能性はある。

栽培種を含む花粉では、イネ科(40 ミクロン以上)が多量に検出されたが、裏作、あるいは休耕田で

の作物を含む、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科等、の検出量が少ない。このことから水田では、専らイネが栽培され、裏作や休耕田での栽培については、積極的に支持できない。

（３）周辺地域の森林植生

花粉分析結果では、年代測定結果から弥生時代中期に堆積したと考えられる27b層を含め、スギ属が高率を示し、マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴うという木本花粉化石群集が得られていた。このことは、分析対象とした層準の堆積期間を通して周辺地域の森林植生に大きな変化がなかったことを示す。

弥生時代中期の項で示した森林植生の詳細と同様になることから、ここでは割愛する。

３．古墳時代前期（１－１区241溝）

（１）遺構の年代観

年代測定は実施されておらず、出土遺物から古墳時代前期に形成されたと、考えられている。

（２）堆積環境及び近辺の植生

17、18層を切る連続性に乏しい溝で、等高線に垂直に流れていた。また、同様の溝がいくつか検出されていた。ガリーの可能性がある。

珪藻分析では、*Cymbella* spp.、*Pinnularia* spp. 等の、恐らく淡水・底生種がほとんどを占め、上部（1層）では陸生種の *Hantzschia amphioxys* が僅かに検出される（珪藻化石群集：D－Ⅲ'）。また、含有量は少なく、全てが破片であった。試料が溝内部の堆積物であることを踏まえると、241溝は、水深がごく浅く、時に干上がることもあったと考えられ、ガリーであったことが示唆される。

植物珪酸体化石ではイネが2700～3300粒/gとやや低密度で検出されるほか、イネ科（40ミクロン以上）花粉が上位の1層で108%、下位の2層で33%と高率を示す。また、イネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科、タデ科、ナデシコ科、セリ科等の水田雑草（湿性植物）に由来する可能性のある種類も、花粉分析で検出される。植物珪酸体化石群集、花粉化石群集からは、241溝が水田に関連した（あるいは水田近くを流れる）水路であったことを想像させる。しかし、241溝がガリーであったとすると、241溝が水田に隣接していたとは考えにくい。従って、得られた植物珪酸体化石、花粉化石の多くが、ガリーによって浸食を受けた地層から、二次的にもたらされた可能性が指摘できる。一方で、これらが調査地近辺から、飛来した（あるいは雨水と共にもたらされた）可能性も否定できない。

植物珪酸体化石、花粉化石が、近辺からもたらされたと仮定すると、近辺に水田が存在し、イヌビエ類（イネ科）、テンツキ類やホタルイ類（以上カヤツリグサ科）、ウナギツカミ類（タデ科）、ハコベ類（ナデシコ科）、セリ類等の雑草が生育していたと考えられる。一方植物珪酸体が検出されるササ類やウシクサ族Ａ型（チガヤ類）や、花粉化石が検出されるタデ類や、アカザ類（あるいはヒユ類）、アブラナ類、オオバコ類、ヨモギ類やタンポポ類（以上キク科）等が周辺に繁茂していたと考えられる。また、木本（広葉樹）花粉に分類した、クワ科－イラクサ科が高率を示す。通常ではクワ科－イラクサ科花粉が多量に検出されることがなく、ヤマグワ（あるいはヒメコウゾ）が近辺に生育していたことが分かる。

（3）周辺地域の森林植生

花粉分析結果でクワ科－イラクサ科が高率を示し、他の種類が相対的に低率になる。このため、弥生時代中期から後期にかけての森林植生から大きな変化があったように捉えられるが、クワ科－イラクサ科を除いた場合、変化に乏しいことが分かる。前述のように調査地（241溝）近辺にクワ（あるいはヒメコウゾ）等のクワ科の木本が生育していたことが指摘できるが、気高平野内や周囲の丘陵に分布した森林植生に、変化は乏しかったと考えられる。森林植生の詳細は、弥生時代中期の項で示した森林植生の詳細と同様になることから、ここでは割愛する。

第6項　まとめ

常松大谷遺跡の発掘調査に伴い、各種自然科学分析を行った。この結果、以下の事柄が明らかになった。

1．年代測定結果から、微化石分析を行った層準は、弥生時代中期から後期にかけて堆積したと考えられた。

2．133土器溜りからは6世紀中頃（σ）、竪穴建物1貼床からは4世紀中頃から5世紀初頭（σ）の測定値が得られ、出土遺物からの推定年代とほぼ一致する値であった。

3．調査地点での堆積環境について、弥生時代中期には、沼沢湿地であったと考えられた。また、沼沢湿地内にはヨシやマコモ（以上イネ科）、スゲ類やホタルイ類（以上カヤツリグサ科）等の湿性植物が生育し、沼沢湿地周辺にはササ類やタデ類、キク類等が繁茂していた。

4．弥生時代後期の23a層から21a層、18'a層の堆積時期に、調査地は水田であったと考えられた。ただし、イネの外に、栽培されていたと考えられる種類は検出できなかった。一方、20b層、18－1a層、17－1a層の堆積時期に、調査地が水田であった可能性は低かった。ただし、調査地周辺や、河川流域に水田が存在した可能性はある。

この時期の水田内には、イヌビエ類（イネ科）や、テンツキ類、ホタルイ類（以上カヤツリグサ科）、ウナギツカミ類（タデ科）、ハコベ類（ナデシコ科）、セリ類、チドメグサ類（以上セリ科）等の水田雑草が、生育していた。また、水田の周辺には、ササ類や、チガヤ類、タデ類、アカザ類（あるいはヒユ類）、アブラナ類、キク類やヨモギ類、タンポポ類（以上キク科）等が繁茂していた。

沼沢湿地環境であった際には、ヨシのほかスゲ類やホタルイ類等のカヤツリグサ科草本が生育していたと考えられる。また、沼沢湿地の周辺には、ササ類や、チガヤ類、タデ類、アカザ類（あるいはヒユ類）、ナデシコ類、アブラナ類、ヨモギ類やタンポポ類のキク科等が繁茂していた。

5．1－1区241溝近辺では、ヤマグワ（あるいはヒメコウゾ）が生育していたことが分かった。局地的な樹木の存在が明らかになることは、花粉分析では希な例である。

6．弥生時代中期から後期、古墳時代前期にかけて、気高平野周囲の丘陵を覆う森林植生は、変化に乏しかった。

丘陵上はカシ類やシイ類を要素とし、針葉樹を混淆する照葉樹林に覆われていたが、アカマツやナラ類を要素とする二次植生が点在した。また、丘陵を刻む谷筋や気高平野内には、鳥取県東部で既知の鳥取平野、青谷平野同様に、スギ林が分布していた。その外、平野内にはニレ、

ケヤキ、エノキなどのニレ科樹木を要素とする自然堤防林が観られた。

（渡辺正巳　文化財調査コンサルタント株式会社）

参考文献

安藤一男（1990）淡水珪藻による環境指標種群の設定と古環境への応用．東北地理，42, 73 － 88.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27, 10 － 20.

Bronk Ramsey, C. (2008). Deposition models for chronological records. Quaternary Science Reviews, 27(1 － 2), 42 － 60.

Bronk Ramsey, C. (2009a) Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337 － 360.

Bronk Ramsey, C. (2009b) Dealing with outliers and offsets in radiocarbon. Radiocarbon, 51(3), 1023 － 1045.

Bronk Ramsey, C., & Lee, S. (2013). Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, 55(2 － 3), 720 － 730.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0 － 50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869 － 1887.

中村　純（1974）イネ科花粉について，とくにイネを中心として．第四紀研究，13, 187 － 197.

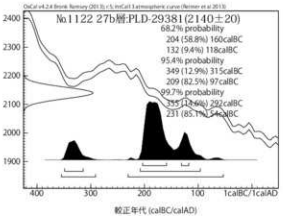
パリノ・サーヴェイ株式会社（2015）桂見鍋山遺跡の古環境解析．桂見鍋山遺跡，一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，16, 118 － 144. 鳥取県教育委員会.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9, p.15 － 29.

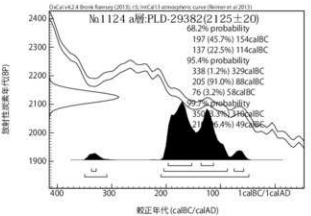
文化財調査コンサルタント株式会社（2012）放射性炭素年代測定および花粉分析．青谷上寺地遺跡 12，鳥取県埋蔵文化財センター調査報告，46, 173 － 183

渡辺正巳（2010a）花粉分析法．必携 考古資料の自然科学調査法，174 － 177. ニュー・サイエンス社

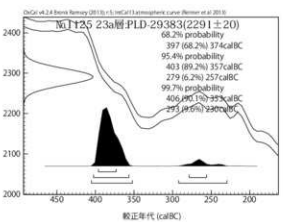
渡辺正巳（2010b）珪藻分析法．必携 考古資料の自然科学調査法，178 － 181. ニュー・サイエンス社



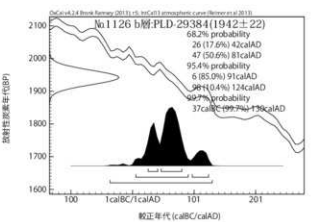
1-1区 №1122 27b層



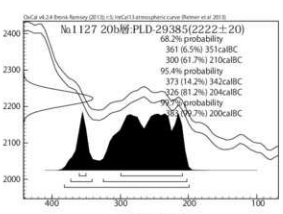
1-1区 №1124 a層



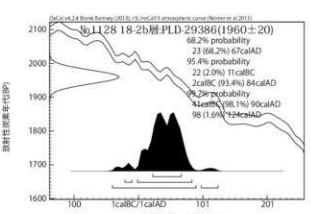
1-1区 №1125 23a層



1-1区 №1126 b層

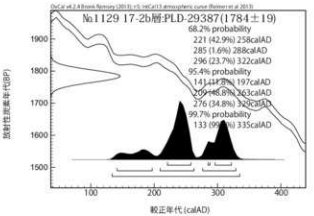


1-1区 №1127 20b層

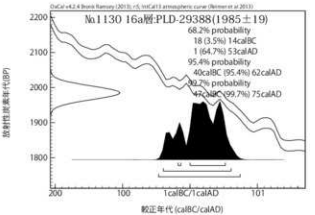


1-1区 №1128 18-2b層

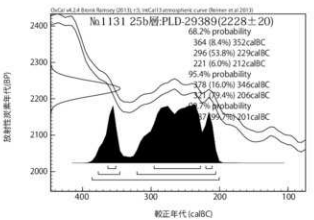
第 105 図　暦年比較正図 (1)



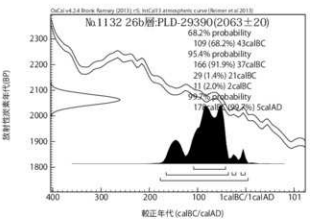
1-1区 №1129 17-2b層



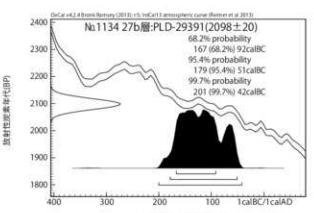
1-1区 №1130 16a層



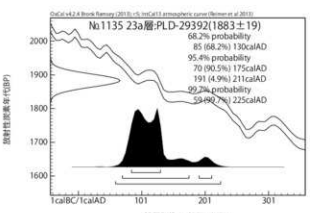
1-1区 №1131 25b層



1-1区 №1132 26b層

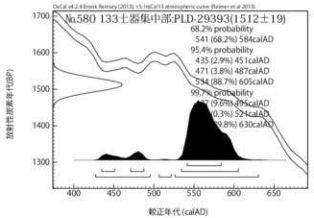


1-1区 №1134 27b層

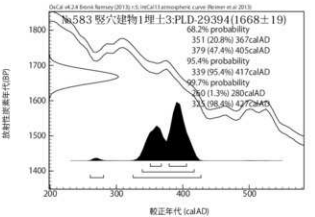


1-1区 №1135 23a層

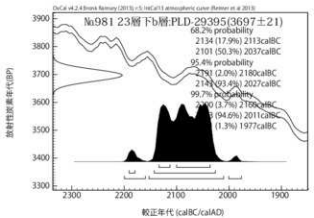
第 106 図　暦年比較正図 (2)



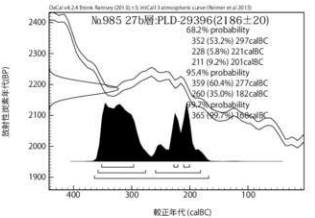
1-2区 №580 133土器溜り



1-2区 №583 竪穴建物1貼床

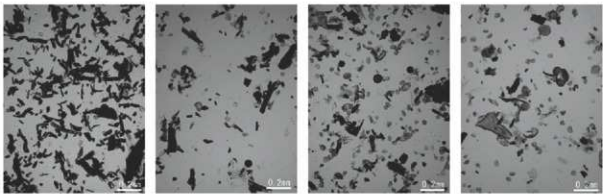


1-2区 №981 23層下b層

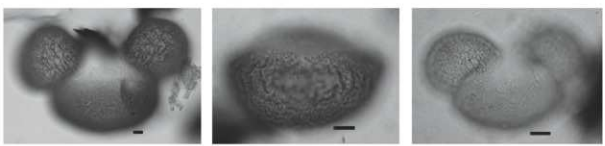


1-2区 №985 27b層

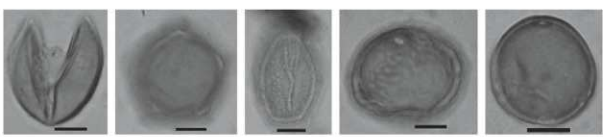
第 107 図　暦年比較正図 (3)



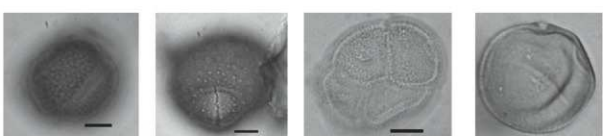
検出状況：1-1 区試料 1　検出状況：1-1 区試料 3　検出状況：1-1 区試料 6　検出状況：1-2 区試料 4



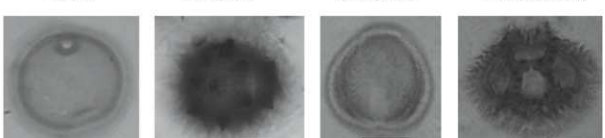
モミ属　ツガ属　マツ属(複維管束亜属)



スギ属　クマシデ属-アサダ属　コナラ亜属　ニレ属ーケヤキ属　エノキ属-ムクノキ属



アオキ属　スイカズラ属　ガマ属(4粒型)　イネ科(40ﾐｸﾛﾝ未満)

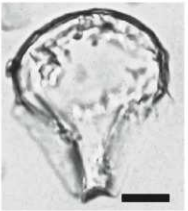


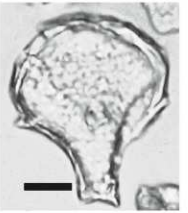
イネ科(40ﾐｸﾛﾝ以上)　キク亜科　ヨモギ属　タンポポ亜科

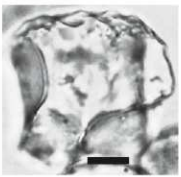
スケールはすべて 0.01mm

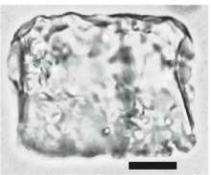
第 108 図　花粉分析

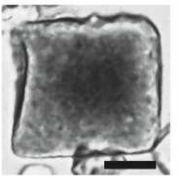
イネ

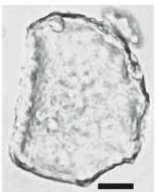

イネ

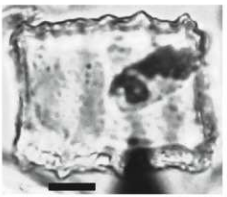

イネ

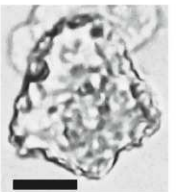

イネ側面

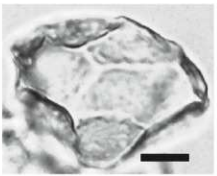

イネ側面

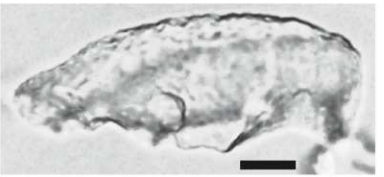

ウシクサ族Ａ


チマキザサ節型


ネザサ節型


ミヤコザサ節型

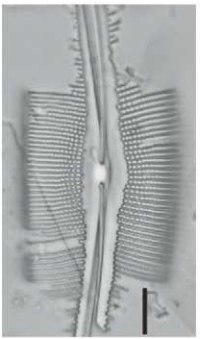

ブナ科（シイ属）


クスノキ科

スケールはすべて 0.01mm

第 109 図　植物珪酸体分析

Amphora ovalis

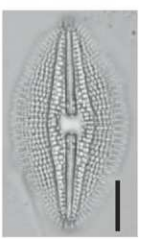


Cymbella aspera

Cymbella cuspidata

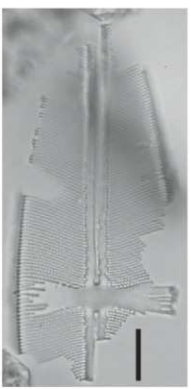
Hantzschia amphioxys

Melosira roeseana



Diploneis elliptica

Pinnularia hemiptera



Stauroneis phoenicenteron

Stauroneis acuta

スケールはすべて 0.01mm

第 110 図　珪藻分析

第5章 総 括

はじめに

鳥取西道路建設に伴う常松大谷遺跡の調査は2ヵ年で終了した。初年度の1－1区の調査では、小開析谷の中に、居住地と耕作地をくり返す遺構のあり方、2年次の調査では谷の開口部まで調査することができ、大きな成果をあげることができた。これら成果をまとめた総括を行いたい。

第1節 遺構の変遷

1 弥生時代から古墳時代前期 水田の営み

21～23a面では、連続して水田を検出した。弥生時代後期、23b層の堆積後に谷の開発が始まる。

23a面は、1－2区262溝を用水路とした水田を検出した。用水路は検出できなかった部分もあるが、1－1区の畦畔と平行すること等からも、同じように水田全体に延びていたと復元できる。水田は谷の南側斜面にまで広がり、ここでは等高線に沿って曲がり、または直交する様に畦畔を配置した。

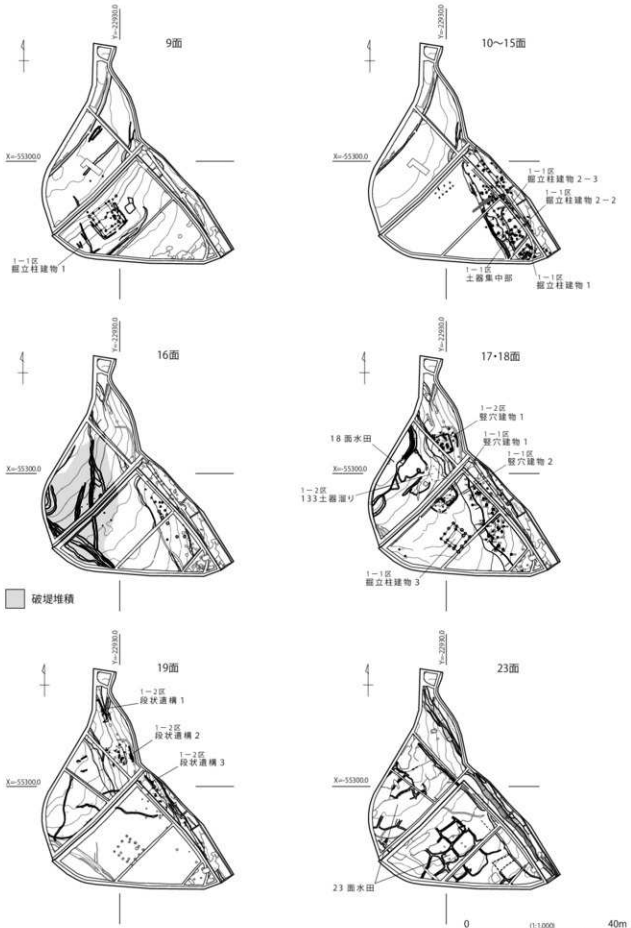
1－1区は遺存状態がよく、谷の中央ではほぼ同じ面積の水田が並ぶ。畦畔は部分的に屈曲する部分もあるが直線的で、谷の開口部に向かって整備したことが分かる。これに比べ、1－2区では水田の遺存状態が悪く、畦畔は蛇行する。しかし、東西方向の畦畔は開口部に向って一定の間隔を保っており、両調査区の畦畔を合わせると、1－1区から畦畔が続いていることが分かる。面積が小さく、畦畔が蛇行する原因は水配りだけではなく、開口部に向って谷底が先に低くなり、等高線が馬蹄形に変化することにもある。この乱れは水田開発当初からではなく、谷底で面積が小さくなる等があったとしても、当初は整然と直線的に配置したと復元できるであろう。水田が整然と配置された状態は22面で見ることができる。21面の水田は畦畔の乱れが激しいが、よく見ると東西方向、南北方向の畦畔が通っている部分があり、1－2区23面で見た原因と同じ理由でこの様な状態になったと考える。

丘陵斜面で検出した1－2区232・233土器溜りは、弥生時代後期の土器で構成する。これは遺構の崩壊過程を知らせる遺構で、丘陵上に存在した弥生時代後期の遺構が存在していたことが分かる。

2 古墳時代中期から後期

1－2区の19面で段状遺構3棟を検出した。遺構の残りは悪いが丘陵の中程に溝があり、柱穴は確認できなかったが建物と考えたい。遺構からの遺物はないが、これに対応する包含層、18a層には多くの古墳時代中期が出土したことから、この時期に該当すると考える。

18面では竪穴建物3棟、16面では掘立柱建物1棟を検出した。1－1区の調査では、掘立柱建物3を14～15層下面遺構と考え、16面は異なる時期の遺構が混在するとした。しかし、1－2区の調査では遺構面の時期に齟齬が生じたため、再検討を行った。その結果、16層は2回、ないしは3回の破堤により大きく削られ、最終の破堤が発生したときには1－2区掘立柱建物3の上には存在せず、



第 111 図　主な遺構と遺構面

17面に帰属することが分かった。18面の1－1区竪穴建物1・2は両棟とも壁溝のみの検出で、柱穴を確認することができなかった。時期は6世紀中頃から後半と考える。17・18面の1－2区竪穴建物1は比較的よい状態で検出できた。16面の1－1区掘立柱建物3は、内側に4つの柱穴がある特殊な配置で、内陣など仕切りがある建物である。時期は1－1区竪穴建物1・2と大差なく、6世紀中頃から後半と考える。なお、1－1区竪穴建物1・2と1－2区竪穴建物1の間で検出した133土器溜りは、これらの建物からの土器を廃棄した遺構と考える。

4 奈良時代

16面で検出した破堤堆積は、6世紀後半から7世紀の遺物が多くを占めるが、須恵器大甕や祭祀遺物をみると8世紀に破堤したことが分かる。削られた流芯しか残っていないため、破堤が起こった溝や流路の存在は明確でなく、土石流の可能性もある。しかし、水辺で行われる祭祀遺物の出土を評価するなら、溝や流路の存在が想定できる。この時期の遺物は後代の造成で散乱しており、土馬や墨書土器「大谷」が上層から出土している。

なお、この破堤堆積の上流は調査区より東側に延び、遺跡の範囲は谷の奥へ拡がる。

5 平安時代

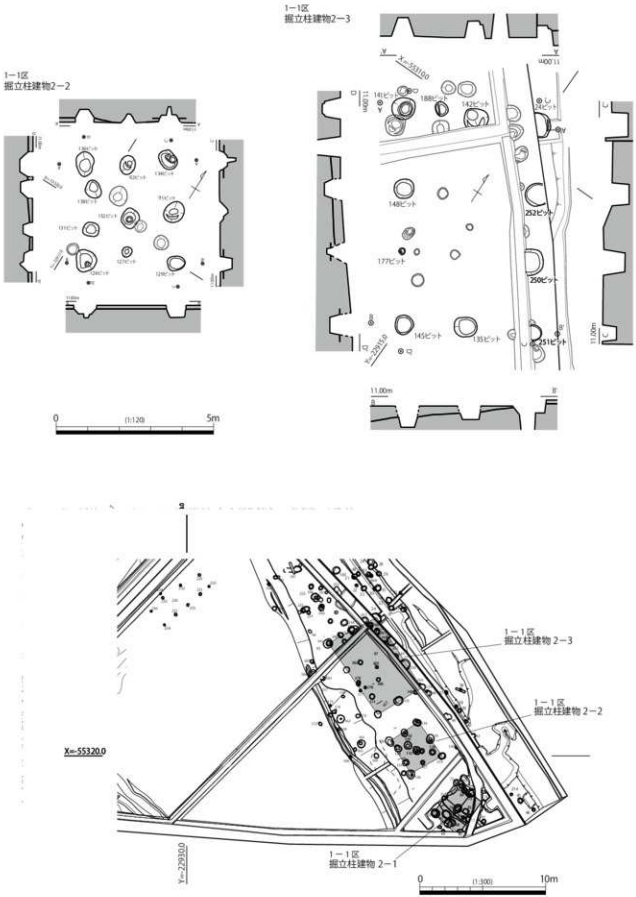
遺構は破堤堆積等を盛上げ、造成した平坦地の上にある。平坦地と谷1の境には1－1区143溝を設けた。10面で検出した1－1区掘立柱建物2－1は総柱建物で、柱根も残っており良好な状況で検出できた。調査後、多面に亘るピットの検討を行い、2棟の掘立柱建物を復元した。

1－1区掘立柱建物2－1･2－2はほぼ同じ規模で、建物中心に柱がある総柱建物である。しかし、1－1区掘立柱建物2－1は北東－南西に、掘立柱建物2－2は南東－北西側に長軸があり、建物の方向が異なる。1－1区掘立柱建物2－3は規模が大きく、柱間も2ｍを越える側柱建物である。小型建物と大型建物では、建物の性格は違うと考える。建物の柱穴から時期を示す遺物の出土がないため､時期は明確でない。谷側斜面下で検出した1－1区143溝は､平坦地自体が奈良時代の破堤堆積(15－3b･4b層）や北側尾根の土を使用して造成し埋土が堆積したため､時期差は遺物から確認できない。時期は柱穴からの出土遺物は混入が多いが、1－1区掘立柱建物2－3北東面の1－2区250ピットから出土した須恵器高台付杯より、8世紀末から9世紀前半頃と考える。

6 鎌倉時代

9面では1－1区掘立柱建物1を検出した。この建物から時期を示す遺物は出土しなかったが、北西側で検出した1－1区37土坑と軸線を揃えていることから、同時に存在した遺構と考え、建物の時期は土坑と同じ13世紀と考える。1－2区では顕著な遺構はないが、建物に並行する1－2区4溝を検出した。

この建物は古墳時代の1－1区掘立柱建物3とほぼ同じ位置にあり、極めて意味あり気である。建物と溝の間にはピットが2基しかなく一連の遺構と考えると、この空間を広場として捉えることができ、集会所的な機能を持つ建物ということになる。建物の性格に神社や仏堂等も想定できるが、瓦や信仰を示す遺物等は出土しなかった。



第 112 図　１－１区掘立柱建物２－２・３平面図・断面図、建物群配置図

第2節 常松大谷遺跡出土の墨書土器

1．はじめに

常松大谷遺跡では2ヵ年度の調査で、多文字を記した墨書土器（鳥取県2014）、および底部内外面に墨書し体部を打ち欠いた土器が出土した。わずか2点ながら、極めて特徴的な墨書土器が出土したといえよう。前者のような多文字墨書土器は、鳥取市気高町下坂本清合遺跡出土の「法華経方便品第二」の一節を記した古墳時代後期の須恵器甕体部片（鳥取財2015）、倉吉市伯耆国庁跡出土の習書と判断される非連続文字を墨書した土師器皿（倉吉市1979）や、底部外面に絵とともに多文字を記した高台付土師器皿（倉吉市2012）がある。

ここでは、後者の墨書土器の特質を明らかにするために、因幡・伯耆における墨書土器との比較検討を行う（墨書土器の時期、釈文は各報告書に依拠した）。

2．因幡・伯耆の墨書土器の概要

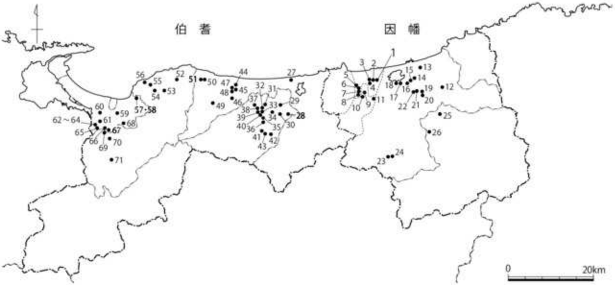
因幡・伯耆で墨書土器の出土を確認した遺跡は71遺跡、墨書土器の総点数は1162点を数える（第113図）。量的には因幡876点に対し伯耆286点と、因幡の方が圧倒的に多い。遺跡単位では、鳥取市岩吉遺跡（鳥取市1997）で567点、同市良田平田遺跡（鳥取県2014）や倉吉市大御堂廃寺（倉吉市2001）で各々出土点数が100点を超え、特定の遺跡でまとまった数の墨書土器が出土している。因幡で墨書土器の出土量が多いのは、岩吉遺跡の出土量の多さ（特殊性）に起因するもので、それを除けば両地域の出土量に大差はない。以下、各地域出土墨書土器の概要を述べる。

因幡では、875点中834点（約97％）が須恵器に墨書し、土師器はわずか26点（3％）に留まる。器種は杯（50％）、高台付杯（24％）、蓋（13％）、皿（11％）、壺、甕、高杯、陶製外筒がある。記載部位は底部外面（80％）、天井部外面（8％）、底部内面（4％）、天井部内面（3％）、体部外面（2％）、底部内外面（1％）等である。

これに対し伯耆では、281点中179点（約67％）が土師器に墨書し、須恵器は84点（30％）である。その他、黒色土器への墨書もある。記載器種は杯（63％）、高台付杯（17％）、皿（15％）、蓋（4％）と続き、壺、甕、鉢、風字硯にも記載する。記載部位は底部外面（66％）、体部外面（23％）、底部内面（3％）、天井部内面（2％）、底部内外面（2％）等である。

上記のように因幡・伯耆から出土した墨書土器は、他例と同様須恵器・土師器にかかわらず杯・皿といった食器類が100％に近い数値を占める。記載位置は、底部外面が最も多いという点で両地域とも共通するが、伯耆では体部外面に墨書する土器が一定量出土する。しかし底部内面墨書土器は因幡・伯耆とも3～4％、底部内外面墨書土器は1～2％とかなり低率である。

底部外面に墨書することは、食器としての常態の使用時を想定したもの、焼き物の機能を優先したものであり、底部内面の場合、祭祀行為等によるもの、食器としての機能を放棄し別の用途へ転用したという（平川2000、巽2003）。とすれば底部内外面墨書土器は、当初から容器としての機能を放棄するため底部内面に墨書したとは考えにくく、底部外面墨書ののち底部内面墨書に及んだか、同時に底部内外面墨書を施したか、となろう。



【因　幡】

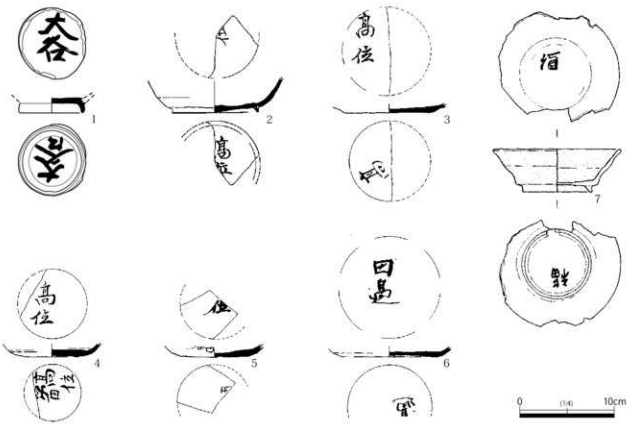
番号	遺跡名	所在地	主な記載内容　（）内の数字は出土点数
1	**常松大谷遺跡**	鳥取市	**大谷**、□
2	常松菅田遺跡	鳥取市	大垣、南、□井、□
3	下坂本清合遺跡	鳥取市	法華経の一節
4	勝見経塚	鳥取市	藤井□□敬テ□造候也（陶製外筒）
5	山宮茶山畑遺跡	鳥取市	□
6	山宮阿弥陀森遺跡	鳥取市	中（11）、郡家一（3）、大□、三町、上□、智□、田久美、記号
7	上原遺跡	鳥取市	大領、郡
8	上原南遺跡	鳥取市	大田、山、城、記号
9	中郷遺跡	鳥取市	栗
10	寺内廃寺	鳥取市	□
11	柄杓目遺跡	鳥取市	十門・□（白磁）
12	因幡国府	鳥取市	新、千、厨、丸ヵ、南□ヵ、
13	秋里遺跡	鳥取市	井、可ヵ、東出方ヵ
14	**岩吉遺跡**	鳥取市	草田（87）、**高位**（6）、角（5）、好（5）、草（4）、楊原（3）、**新殿**（2）、竹井（2）、草曹、楊垣、酒、田酒、**田邊**、与、**位**、□
15	**大桷遺跡**	鳥取市	**位能上**
16	桂見鍋山遺跡	鳥取市	筆慣らし
17	高住平田遺跡	鳥取市	深縁曹司、深縁、縁、中内、高ヵ
18	**良田平田遺跡**	鳥取市	円（5）、円上（4）、円宅（2）、円西（2）、荒田大内（2）、大内（2）、下内（2）、東大家、円東一、円東家二、円東、高郡、石井、清水、□見庄、馬津、馬、松、今主、越、田子、井、□
19	山ヶ鼻遺跡	鳥取市	中、□四石一、西田、後□、ト□、□用ヵ、□本、若□ヵ、高ヵ、乃ヵ
20	古市遺跡	鳥取市	古□、丸ヵ、月ヵ、△ヵ、
21	菖蒲遺跡	鳥取市	草路、□閑、□開
22	本高弓ノ木遺跡	鳥取市	□
23	大井聖坂遺跡	鳥取市	常盤、□縄友、南（3）、酒、石□、□縄、西□、□酒□
24	大井家ノ下モ遺跡	鳥取市	線・符号
25	山田遺跡	八頭町	□
26	丸山遺跡	八頭町	キヵ

【伯　耆】

番号	遺跡名	所在地	主な記載内容　（）内の数字は出土点数
27	長瀬高浜遺跡	湯梨浜町	長（3）、加和、長□、月ヵ
28	大原廃寺	倉吉市	□
29	旧倉吉町遺跡群一東町地区	倉吉市	生田
30	大御堂廃寺（松ヶ坪遺跡）	倉吉市	久米寺
	大御堂廃寺	倉吉市	久寺（14）、寺（6）、久米寺（2）、正□、広、廿、上、浄、吉、東、印、仏行、介、和大、浄私、井、器、福
31	不入岡遺跡	倉吉市	三宅
32	伯耆国分尼寺	倉吉市	□福、福、大一
	法華寺畑遺跡	倉吉市	萬、花、古、し
33	国分寺北遺跡（国府春日地区）	倉吉市	花
34	伯耆国分寺	倉吉市	大
35	下前田遺跡	倉吉市	東
36	大塊遺跡	倉吉市	東家ヵ
	大塊遺跡（長坂町地区）	倉吉市	東家ヵ
37	中峯遺跡	倉吉市	□
38	向野遺跡	倉吉市	保（2）、則天文字「天」
39	横田・矢戸遺跡	倉吉市	西ヵ
40	伯耆国庁	倉吉市	国（3）、川村（2）、事事（2）、南、井、汗入、山守酒殿、山、山守、八ヵ、構ヵ、久郡、主神□鎮位灌□、水、代代近、家、鳥、郷ヵ、総ヵ、新ヵ、米、請・論・語・言・十・千・年、久、夫、厨、五月、□院陶、人麻呂、荒、南□、命福、紙、坂、本、□
	国庁裏	倉吉市	井
	伯耆国府関連遺跡（古神宮地区）	倉吉市	□坏
41	中林遺跡（上古川地区）	倉吉市	記号（2）
42	立道東古墳	倉吉市	大
43	広瀬廃寺	倉吉市	□
44	向野遺跡	北栄町	塚ヵ
45	**水溜り・鷺籠掘場遺跡**	琴浦町	**福**
46	森藤第1・第2遺跡	琴浦町	大
47	下斎尾1号遺跡	琴浦町	東□ヵ
48	大高野遺跡	琴浦町	□
49	福永	琴浦町	小野または山野ヵ
50	八幡遺跡	琴浦町	□
51	南原千軒遺跡	琴浦町	五
52	樋口西野末遺跡	大山町	水ヵ、宮ヵ
53	門前鎮守山城跡	大山町	菅（3）、祖、土、庫ヵ
54	茶畑六反田遺跡	大山町	□□田ヵ
55	文珠領屋敷遺跡	大山町	是有、□
56	大塚塚根遺跡	大山町	□
57	**上淀廃寺**	米子市	□
58	福岡柳谷遺跡	米子市	琴
59	今在家下井ノ上遺跡	米子市	記号
60	博労町遺跡	米子市	息（2）、太（2）、息一食、息浄、奥、廣、厨、什、□子、中、記号
61	目久美遺跡	米子市	堤または掟ヵ、大乗または大家
62	陰田広畑遺跡	米子市	里宅ヵ
63	陰田小犬田遺跡	米子市	館□、舍、田知、記号
64	陰田荒神谷遺跡	米子市	十和田ヵ
65	山田遺跡1区	米子市	□
66	吉谷銭神遺跡	米子市	記号
67	吉谷中馬場山遺跡	米子市	□敷
68	上福万遺跡	米子市	奈
69	境矢石遺跡	南部町	線ヵ
70	天萬土井前遺跡	南部町	□
71	八金清水田遺跡	南部町	厨□

※　遺跡名・記載内容の太字は底部内外面墨書土器出土遺跡

第113図　鳥取県内墨書土器出土地



【図幅】1「大谷」「大谷」（常松大谷遺跡）、2「位」「高位」（岩吉遺跡）、3「高位」「高」（岩吉遺跡）、4　「高位」「高位□田」（岩吉遺跡）、5「位」「□」（岩吉遺跡）、6「田邊」「田邊」（岩吉遺跡）
【伯耆】7「福」「福」（水溜り・奥籠抱場遺跡）　※「内面」「外面」の順に記載。報告書を一部改変

第114図　当遺跡出土墨書土器と内外面墨書土器

3．常松大谷遺跡出土土器とその類例

「大谷」墨書土器の特徴　当遺跡出土資料は、第3章にて既述したように8世紀代の所産で、底部（高台部）内外面に「大谷」と大きく記す。底部外面の「谷」の字の7画目がやや高台部にかかるが、それ以外は高台内におさまる。字形は行書体で直筆、両面とも「谷」の2画目が左下がりながら全体的にバランスのとれた字で、筆跡から見て同一人の所作の可能性がある。

一般的に8世紀代の文字は小振りで端正、9世紀以降文字が大きくなり字形も崩れ稚拙な書体へと変化するという（高島2000）。文字の大きさのみに注目すれば、この土器の年代は下る可能性もあるが、良田平田遺跡から出土した8世紀前半の高台付杯のように、底部外面の高台内一杯に収めるべく「大内」と墨書する事例もある。

通常杯類の破片が出土した場合、底部と体部がある程度一体となっている場合が多い。ところが8世紀代に比定される「大谷」墨書土器は、体部をきれいに打ち欠くのみならず、打ち欠き残ったと思しき破断面の一部を、研磨して平滑に仕上げる。底部（高台部）のみを意図的に残そうとしたことは、全く疑う余地がない。ただ内外面墨書と体部打ち欠きが、どのような順序で行われたか、遺物から明らかにならなかった。

ちなみに隣接する常松菅田遺跡から出土した墨書土器には、体部を打ち欠いた壺底部内面に「大垣」と墨書したものがあった（鳥取県 2016）。これは、体部を打ち欠いた後に底部内面へ墨書を施したことがわかる事例である。

底部内外面への墨書（第 114 図）因幡の底部内外面墨書土器は、「大谷」墨書土器を含め 11 例を確認した。これらは 8 世紀から 10 世紀代に帰属する。岩吉遺跡では 567 点の墨書土器が出土したが、底部内外面に墨書したのは 7 点の須恵器杯である。それらは、吉祥句と思しき「高位」「高位・□田」（以下、「外面」「内面」の順）、「高位」「高□」、「高位」「□位」、「□位」「□」や、地名と思しき「田邊」「田邊」、その他に「□」「新殿」、「□」「□」があり、判読可能な文字は、内外面とも同筆の可能性がある。底部外面のみに「高位」あるいは「田邊」と墨書した事例はなく、底部内面に「高」もしくは「位」と記したものが 2 点、「酒」「角」「好」と墨書したものが 1 点ずつある。

ところで岩吉遺跡では、底部外面に「草田」（「□田」「草□」を含む）と墨書した夥しい数の土器が出土したが、確実に「草田」を底部内外面もしくは底部内面に墨書した事例は 1 例もなかった。墨書部位によって記す文字を使い分けた可能性がある。

良田平田遺跡では、全墨書土器 170 点中内外面墨書土器を 2 点確認したものの、ともに判読不能。鳥取市大桷遺跡では多数の墨書土器が出土したが、うち 1 点に底部内外面に「位能上」と記した土師器杯があった（鳥取財 2014）。

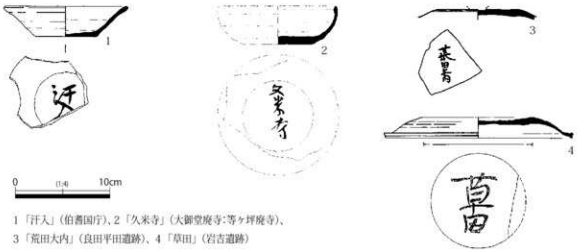
伯耆では現在のところ 1 例を確認。それは、東伯郡東伯町（現、琴浦町）水溜り・駕籠据場遺跡から出土した土師器高台付杯で、底部内外面に「福」と墨書する（東伯町 1988）。ただ内外面の筆跡が明らかに異なることから、内外面墨書に時間差があったか、あるいは別人による所産かもしれない。

以上の事例から底部内外面には、吉祥句（高位、位能上、福）や氏族名（田邊）、後述するように地名（大谷）を記したこと、因幡の場合確認したいずれの資料も、内外面の筆跡が似ており、同一人による所作と考えられること、が明らかとなった。また少なくとも岩吉遺跡では、内外面に概ね同一の文字を記し、底部外面に記す文字と使い分けていたことを想定した。

底部がある程度遺存し文字が判読できる 7 例の文字の記載方向に注目すると、「大谷」や岩吉遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡出土土器のように、横方向へ裏返すと同じ向きで読めるものと（1・6・7）、向きが異なるものがある（2・3・4）。

体部の打ち欠き　土器の体部を打ち欠く行為は、容器としての用途を破棄することで、日常雑器としての食器から異なるものに転化させる行為という（荒木 1999）。内外面に墨書し、土器の体部を意図的に打ち欠いたと思しき資料は、「大谷」以外では、管見の限り上記で紹介した岩吉遺跡出土の須恵器高台付杯 1 点、杯 4 点のみである。これらを実見したところ、底部が 1/2 以上残存する無高台の杯（3・4・6）は、いずれも体部下端を意図的に割ったと判断しうるものであった。ただし無高台のため、高台を目安に打ち欠くことができず、少々大雑把な感は否めない。残る 2 例（2・5）はともに底部 1/4 程度の破片で、杯は意図的に打ち欠いた可能性があるものの、高台付杯片は体部の一部が残るため、現状では判断しづらい個体であった。

大桷遺跡や水溜り・駕籠据場遺跡例は、体部が完形もしくはある程度遺存する底部内外面墨書土器である。一方、岩吉遺跡出土の底部内外面墨書 7 点中 4 点は、体部を意図的に打ち欠いたと見なせるものであった。「大谷」例を含め両面墨書と体部打ち欠きとの間には、少なからず因果関係があるのではないか。



1「汗入」（伯耆国庁）、2「久米寺」（大御堂廃寺：等ヶ坪廃寺）、
3「荒田大内」（良田平田遺跡）、4「草田」（岩吉遺跡）

第 115 図　地名墨書土器

「大谷」について（第 115 図）　最後に、底部内外面に墨書された文字について触れておく。遺跡名の一部でもある「大谷」は、調査地内の小字名と同一であることから、地名を記載した可能性が考えられる。

因幡・伯耆出土の地名を冠した墨書土器を整理すると、大きく次の 3 種類がある。①『和名類聚抄』（以下、『和名抄』）記載の郡名または郷名を記したもの、②『和名抄』に記載はないが、当時の文献資料から周辺にあったと思しき地名を記したもの、③『和名抄』や当時の文献資料に記載はないが、近世まで遡る地名（字名）と同一文字を記したもの、である。

①は、良田平田遺跡、伯耆国庁跡、大御堂廃寺で出土例がある。良田平田遺跡から出土した墨書土器『高郡』は、遺跡が所在する高草郡の「草」を省いたもの。伯耆国庁跡では、「久郡」「汗入」「山守」「八」「橋」と記した土器が出土。「久郡」は、国庁が所在する久米郡の「米」を省略したもの、「汗入」は、久米郡の西隣の汗入郡。「山守」は、伯耆国庁が所在する八代郷ではなく同郡内にある山守郷を指し、「八」「橋」は、久米郡に隣接する八橋郡を示すという（倉吉市 2008）。大御堂廃寺出土の「久米寺」「久寺」は、郡名またはその省略形に寺を付けたもので、出土量では後者の省略形が多い。

②は、岩吉遺跡から多数出土した墨書土器「草田」がある。延喜 5（905）年『東南院文書』因幡国高庭荘検田帳案に見える北三条草尾田里（竹内 1974）が、調査区周辺に比定されることから、「草田」と「草尾田」を関連づける。

③は良田平田遺跡に出土例がある。これは、8 世紀後半から 9 世紀前半の須恵器高台付杯底部外面、須恵器杯底部外面、須恵器蓋内面、土師器杯底部外面に「荒田（大内）」と墨書したものである。遺跡の所在する良田地域は、明治 4（1891）年以前「荒田」と称しており、もしこの「荒田」が地名を指すとすれば、古代まで遡る可能性を示唆することになる。その意味で、この墨書土器が出土したことは注目に値することである。

常松大谷遺跡の場合、8 世紀代の高台付須恵器杯の底部内外面に記された「大谷」が、天保 14（1843）年に描かれた『常松村田畑地絵全図』に字名として記載されており、この地名が少なくとも当該期まで遡ることは明らかであった。この土器に記載された「大谷」が地名を示すとするなら、良田平田遺跡例にならぶ成果といえよう。

4．まとめ

常松大谷遺跡から出土した、底部内外面に墨書し意図的に体部を打ち欠いた土器について、因幡・伯耆地域の事例を抽出しその特質を探ろうとした。一般的な底部外面墨書土器とは異なり、因幡・伯耆地域での底部内面墨書土器の出土量は全体の３～４％と少なく、底部内外面墨書土器はわずか１～２％と極めて少ない非日常的な資料である。

内外面墨書土器の特徴は、同一文字を同一筆跡で記すことが多い。さらに岩吉遺跡出土の底部外面墨書と底部内外面墨書の比較から、記載文字を使い分けていた可能性を指摘した。

一方岩吉遺跡の底部内外面墨書土器には、意図的な体部打ち欠きがあった。この行為は、高台付でかつ底部が完存に近いほど認識しやすいが、本例の場合大半が無高台にもかかわらず、体部がことごとく欠損していたためそう判断した。これが正しいとすれば、「大谷」墨書土器を含め底部内外面墨書と体部打ち欠きに、因果関係が指摘できそうである。今後、常松普田遺跡出土例のような体部を打ち欠いた底部内面墨書土器に加え、体部を打ち欠いた底部外面墨書土器を含めた総体的な検討に期待する。

本節冒頭でも記したように、因幡・伯耆地域では71遺跡から墨書土器が見つかっている。このうち地名を記した墨書土器は、良田平田遺跡、伯耆国庁跡、大御堂廃寺で見つかった『和名抄』記載の郡郷名の一部を記した土器、あるいは「草田」が多量に出土した岩吉遺跡がある。「大谷」墨書土器は、８世紀代の土器に調査地一帯の字名を記した良田平田遺跡の「荒田」墨書土器と同様、地名ならば土器の帰属年代まで遡る可能性が出た点で評価できる。

ただ土器に記された文字は、本来の名称等を省略したと判断される場合が少なくなく、記述文字への理解が十分深まっているとは言えない。「大谷」墨書土器の場合地名（字名）と判断したが、これまで因幡・伯耆地域から出土した資料の中には、字名の一部を記したものが含まれるかもしれない。今一度地名と資料との再検討が必要となろう。　（森本）

参考文献

竹内理三編　1974『平安遺文』古文書編第１巻　東京堂出版
倉吉市教育委員会　1979『伯耆国庁跡発掘調査概報（第５・６次）』
東伯町教育委員会　1988『水溜り・駕籠据場遺跡　森藤第３遺跡発掘調査報告書』
（財）鳥取市教育福祉振興会　1997『岩吉遺跡Ⅳ』
荒木志伸　1999「墨書土器にみえる諸痕跡について」『お茶の水史学』43号　お茶の水女子大学文教育学部人文科学科比較歴史学コース内読史会
高島英之　2000『古代出土文字資料の研究』東京堂出版
平川　南　2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
倉吉市教育委員会　2001『史跡大御堂廃寺跡発掘調査報告書』
巽淳一郎　2003「都城出土墨書土器の性格」『古代官衙・集落と墨書土器』（独行）奈良文化財研究所
倉吉市教育委員会　2008『史跡伯耆国府跡国庁跡発掘調査報告書（第８～11次）』
倉吉市教育委員会　2012『史跡伯耆国府跡国庁跡発掘調査報告書（第12次～14次）』
（公財）鳥取県教育文化財団　2014『良田平田遺跡』鳥取県教育委員会

（公財）鳥取県教育文化財団　2015『常松大谷遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会
（公財）鳥取県教育文化財団　2014『大桝遺跡の発掘調査』（現地説明会資料）
（公財）鳥取県教育文化財団　2015『下坂本清合遺跡の発掘調査』（現地説明会資料）
鳥取県教育委員会　2016『常松普田遺跡Ⅱ』

鳥取県内墨書土器出土地参考文献一覧

1　（公財）鳥取県教育文化財団　2015『常松大谷遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会
2　（公財）鳥取県教育文化財団　2016『常松普田遺跡Ⅱ』鳥取県教育委員会
3　（公財）鳥取県教育文化財団　2015『下坂本清合遺跡の発掘調査』現地説明会資料
4　気高町教育委員会　1978『勝見一五号墳発掘調査報告書』
5　気高町教育委員会　1985『逢坂地域遺跡群発掘調査概報』
6　気高町教育委員会　1985『逢坂地域遺跡群発掘調査概報』
　気高町教育委員会　1988『逢坂地域遺跡群発掘調査報告書』
7　気高町教育委員会　1979『鳥取県気高郡上原遺跡発掘調査概報』
8　気高町教育委員会　1985『逢坂地域遺跡群発掘調査概報』
　気高町教育委員会　1986『逢坂地域遺跡群発掘調査報告書』
　気高町教育委員会　1988『逢坂地域遺跡群発掘調査報告書』
9　関西大学文学部考古学研究室　1979『寺内廃寺発掘調査概報Ⅱ』
10　関西大学文学部考古学研究室　1979『寺内廃寺発掘調査概報Ⅱ』
11　鹿野町教育委員会　1988『鹿野町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
12　鳥取県教育委員会　1976『因幡国府遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
13　（財）鳥取市教育福祉振興会　1994『秋里遺跡発掘調査概要報告書』
　（財）鳥取市教育福祉振興会　1996『秋里遺跡』
14　（財）鳥取市教育福祉振興会　1997『岩吉遺跡Ⅳ』
15　（公財）鳥取県教育文化財団　2014『大桝遺跡の発掘調査』現地説明会資料
16　（公財）鳥取県教育文化財団　2015『桂見鍋山遺跡』鳥取県教育委員会
17　（公財）鳥取県教育文化財団　2012『高住平田遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会
18　（公財）鳥取県教育文化財団　2014『良田平田遺跡』鳥取県教育委員会
19　（財）鳥取市教育福祉振興会　1996『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』
20　（財）鳥取市教育福祉振興会　1998『古市遺跡Ⅰ』
　（財）鳥取市教育福祉振興会　1999『古市遺跡Ⅱ』
21　（財）鳥取市教育福祉振興会　1994『菖蒲遺跡』
22　（公財）鳥取県教育文化財団　2013『本高弓ノ木遺跡（５区）１』鳥取県教育委員会
23　佐治村教育委員会　1999『大井家ノ下モ遺跡発掘調査報告書』
24　佐治村教育委員会　1990『大井型坂遺跡』
　（財）鳥取市文化財団　2005『大井型坂遺跡・大井家ノ下モ遺跡』
　（財）鳥取市文化財団　2005『大井型坂遺跡２次調査〈Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区〉発掘調査報告書』
25　船岡町教育委員会　1981『丸山遺跡発掘調査概要報告書』

26　八頭町教育委員会　2013『山田遺跡』
27　（財）鳥取県教育文化財団　1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
（財）鳥取県教育文化財団　1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
（財）鳥取県教育文化財団　1999『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』
28　倉吉市教育委員会　1999『史跡大原廃寺発掘調査報告書』
29　倉吉市教育委員会　2009『倉吉市内分布調査報告書 15』
30　倉吉市教育委員会　2001『史跡大御堂廃寺跡発掘調査報告書』
倉吉市教育委員会　1984『倉吉市内分布調査報告書』
31　倉吉市教育委員会　1996『不入岡遺跡群発掘調査報告書』
32　倉吉市教育委員会　1974『伯耆国分尼寺跡発掘調査概報』
倉吉市教育委員会　2001『法華寺畑遺跡環境整備事業報告書』
33　倉吉市教育委員会　2001『倉吉市内遺跡分布調査報告書 11』
34　倉吉市教育委員会　2007『倉吉市内遺跡分布調査報告書 14』
35　倉吉市教育委員会　2003『下前田遺跡発掘調査報告書』
36　倉吉市教育委員会　2005『倉吉市内遺跡分布調査報告書 13』
倉吉市教育委員会　2005『大境遺跡発掘調査報告書』
37　倉吉市教育委員会　1975『中峯遺跡発掘調査概報』
38　倉吉市教育委員会　2003『向野遺跡第２次発掘調査報告書』
39　鳥取県教育委員会　1970『横田・矢戸遺跡発掘調査概報』
40　倉吉市教育委員会　1976『伯耆国庁跡発掘調査概報（第３次）』
倉吉市教育委員会　1977『伯耆国庁跡発掘調査概報（第４次）』
倉吉市教育委員会　1979『伯耆国庁跡発掘調査概報（第５・６次）』
倉吉市教育委員会　2008『史跡伯耆国府跡国庁跡発掘調査報告書（第８～ 11 次）』
倉吉市教育委員会　2012『史跡伯耆国府跡国庁跡発掘調査報告書（第 12 次～ 14 次）』
倉吉市教育委員会　2005『倉吉市内遺跡分布調査報告書 13』
倉吉市教育委員会　2007『倉吉市内遺跡分布調査報告書 14』
41　倉吉市教育委員会　2005『倉吉市内遺跡分布調査報告書 13』
42　倉吉市教育委員会　1993『立道東古墳群発掘調査報告書』
43　倉吉市教育委員会　1985『広瀬廃寺跡発掘調査概報』
44　大栄町教育委員会　1984『向野遺跡・後ろ谷遺跡発掘調査報告』
45　東伯町教育委員会　1988『水溜り・駕籠掘場遺跡　森藤第３遺跡発掘調査報告書』
46　東伯町教育委員会　1987『森藤第１・森藤第２遺跡発掘調査報告書』
47　東伯町教育委員会　1987『下斎尾１号遺跡・塚本８号墳発掘調査報告書』
48　東伯町教育委員会　1982『大高野遺跡発掘調査概報』
49　鳥取県埋蔵文化財センター　1985『鳥取埋文ニュース』10
50　（財）鳥取県教育文化財団　2005『八幡遺跡』
51　（財）鳥取県教育文化財団　2005『南原千軒遺跡』
52　鳥取県埋蔵文化財センター　2011『樋口西野末遺跡　下市天神ノ峯遺跡』

53　鳥取県埋蔵文化財センター　2007『門前上屋敷遺跡Ⅱ・門前鎮守山城跡』
54　（財）鳥取県教育文化財団　2002『茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡』
55　名和町教育委員会　2001『大塚塚根遺跡　古御堂遺跡　文珠領屋敷遺跡』
56　名和町教育委員会　2001『大塚塚根遺跡　古御堂遺跡　文珠領屋敷遺跡』
57　淀江町教育委員会　1995『上淀廃寺』
　　淀江町教育委員会　2004『上淀廃寺Ⅳ』
　　淀江町教育委員会　2002『福岡柳谷遺跡』
58　淀江町教育委員会　2002『福岡柳谷遺跡』
59　（財）米子市教育文化事業団　2002『今在家下井ノ上遺跡』
60　（財）米子市教育文化事業団　2011『博労町遺跡』
61　（財）米子市教育文化事業団　1998『目久美遺跡Ⅴ・Ⅵ』
62　（財）米子市教育文化事業団　1998『萱原・奥除田Ⅱ』
63　（財）鳥取県教育文化財団　1996『除田遺跡群』（本文編Ⅱ）
64　（財）鳥取県教育文化財団　1996『除田遺跡群』（本文編Ⅱ）
65　（財）米子市教育文化事業団　1994『萱原・奥除田Ⅰ』
66　（財）米子市教育文化事業団　2001『吉谷銭神遺跡Ⅰ』
67　（財）鳥取県教育文化財団　2003『吉谷遺跡群』
68　（財）鳥取県教育文化財団　1985『上福万遺跡　日下遺跡　石州府第１遺跡　石州府古墳群』
69　（一財）米子市文化財団　2015『境矢石遺跡』
70　（財）鳥取県教育文化財団　1997『天萬土井前遺跡』
71　南部町教育委員会　2005『八金小ブケ遺跡　八金清水田遺跡』

おわりに

常松大谷遺跡の調査は、平成25年度の1－1区、平成26年度の1－2区の2ヵ年に亘る発掘調査、内業整理を経て完了した。

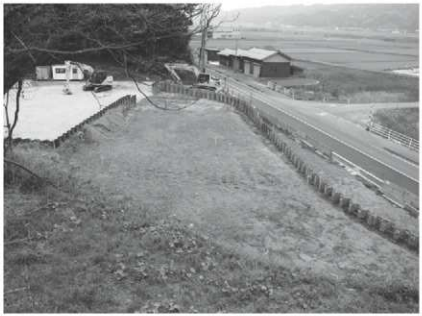
本報告書では2ヵ年の成果を踏まえ、検討を重ねながら遺跡の解明に努めた。弥生時代から古墳時代前期の水田を始め古墳時代・平安時代・中世の建物を調査し大きな成果を挙げることができ、これらの成果により小開析谷の利用に係わる人の営みを知ることができた。

しかし、これで遺跡の全てが解明された訳ではない。発掘調査は完了したが、この成果を歴史に載せる作業が残されている。本遺跡の西に広がる常松菅田遺跡や古墳時代の常松1号墳との関係、古代の建物群は気多郡衙の時期と重なり、中世の建物は古代律令制が解体した後に成立したと考えられる保との関連や南東側丘陵にある堤知光城跡との関係が考えられている筒見氏との関連等がある。さらなる遺跡の解明に努めて行きたい。　（西山）

写真図版

図版1

調査前、機械掘削



1　調査前（北東から）

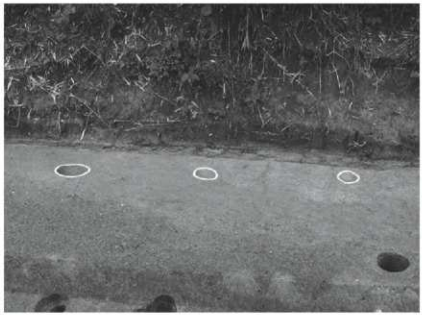
2　調査前（南東から）

3　機械掘削状況（北西から）

1　9面全景（北東から）

2　10面全景（南東から）

3　10面全景（南東から）

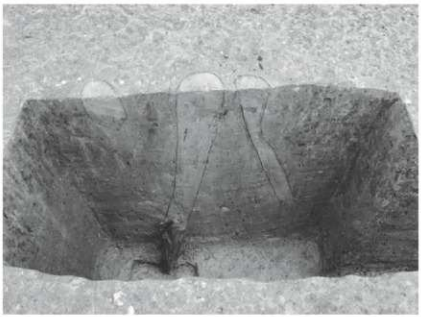


1　10 面ピット列 (1)（南西から）

2　10 面ピット列 (2)（南西から）

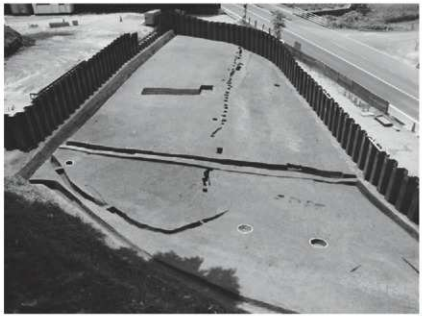
3　11 面全景（北東から）

1　杭列全景（北から）



2　53･55･56 杭跡（南東から）

3　59・61 杭跡（南東から）



1　14 面全景（北東から）

2　16 面全景（西から）

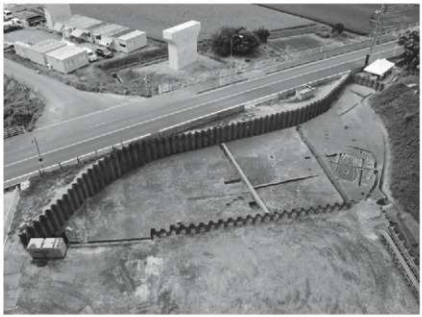
3　130・131 溝（南から）

1　130 溝遺物出土状況（東から）

2　132 溝（南東から）

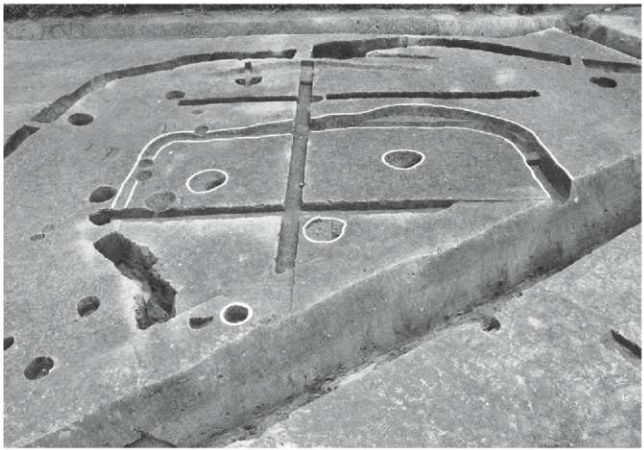
3　132 溝土層断面（北西から）

1　17・18 面全景（西から）



2　17・18 面全景（南東から）

3　竪穴建物 1 遠景（西から）



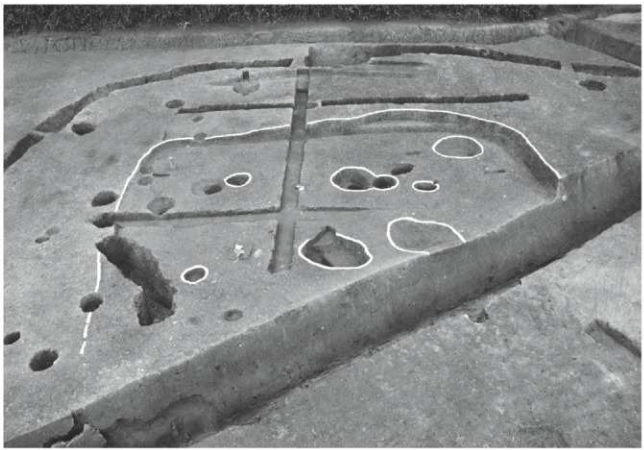
1　竪穴建物 1（貼床上面）

2　134 柱穴（東から）

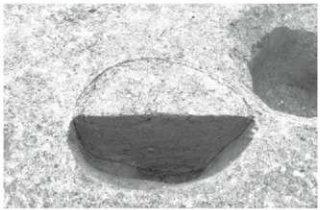
3　135 柱穴（東から）

4　157 柱穴（西から）

5　160 柱穴（東から）

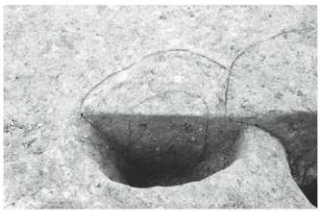


1　竪穴建物 1（貼床除去面）



2　169 柱穴（東から）

3　170 柱穴（東から）

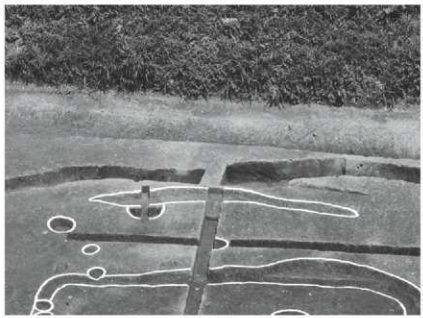


4　175 柱穴（東から）

5　168 柱穴（西から）

1　152 焼土坑（西から）

2　174 焼土坑（西から）



3　155 溝（西から）

1　133 土器溜り遺物出土状況（西から）

2　133 土器溜り遺物出土状況（北から）

3　133 土器溜り遺物出土状況（北西から）

4　133 土器溜り遺物出土状況（西から）

5　133 土器溜り遺物出土状況（南から）

1　133 土器溜り
遺物出土状況 1（北西から）

2　133 土器溜り
遺物出土状況 2（西から）

3　133 土器溜り
遺物出土状況 3（西から）

1　133 土器溜り
遺物出土状況 4（北西から）

2　133 土器溜り
遺物出土状況 5（北西から）

3　133 土器溜り
遺物出土状況 6（北西から）

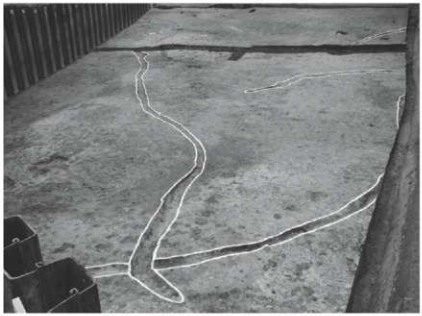
1　133 土器溜り
遺物出土状況 7（北西から）

2　143 土坑（北西から）

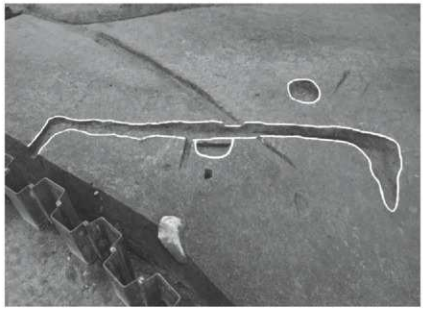
3　18 水田（北東から）

1　19 面全景（北東から）

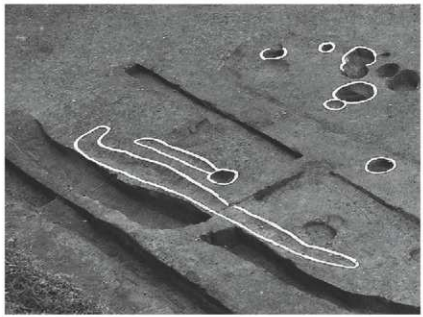
2　19 面全景 2（南東から）



3　19 面溝群（南西より）

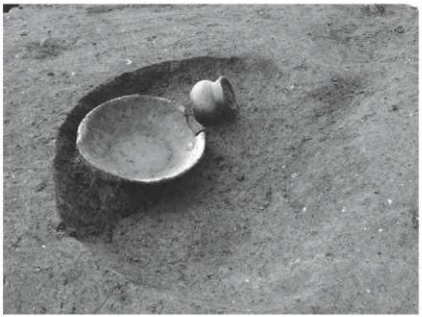


1　段状遺構 1（西から）



2　段状遺構 2（東から）

3　段状遺構 3（北西から）



1　219 土坑（南東から）

2　19 面遺物出土状況 1（南から）

3　19 面遺物出土状況 2（南から）

1　21 面全景（南西から）

2　21 面全景 2（北東から）

3　21 面直上（西から）

1　232 土器溜り（北西から）

3　233 土器溜り（北西から）

3　234 土器溜り（北西から）

1　22 面全景 1（南から）

2　22 面全景 2（南西から）

3　223 溝（北西から）

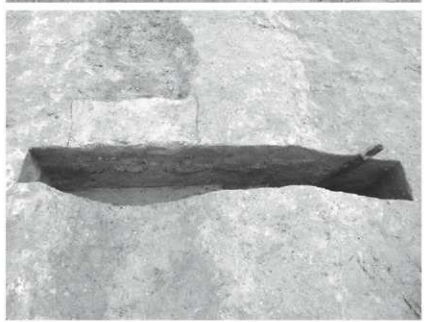
1　227 水口（西から）

2　228 水口（西から）

3　229 水口（北西から）

1　230 水口（北西から）

2　杭出土状況（北西から）



3　木造構造物（北西から）

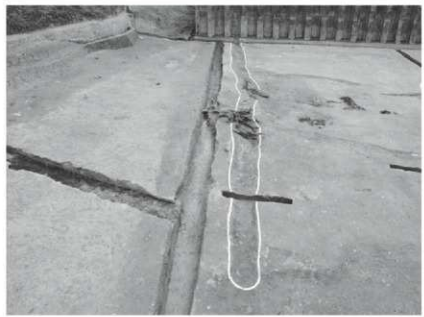
1　221 土坑（南から）

2　224 ピット（南から）

3　222 ピット（南東から）

1　23 面全景（西から）

2　23 面全景（南東から）



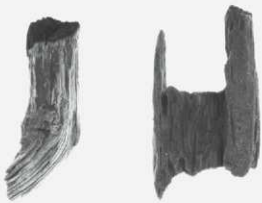
3　226 溝（北西から）

1　231 水口（西から）

2　完掘状況 1（南西から）

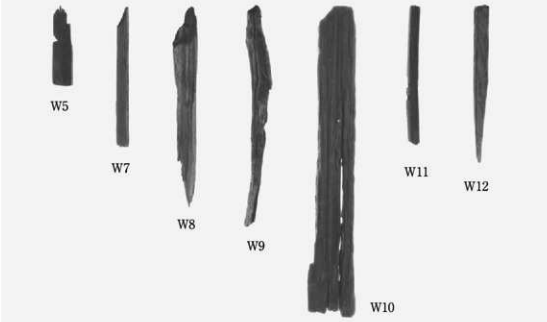
3　完掘状況 2（南東から）

Po8



W3

W4



W5

W7

W8

W9

W10

W11

W12

W18

W17

W13

W16

Po8、W3・4　130 流路
W5、W7 ～ 9、W10 ～ 13、
W16 ～ 18　132 流路

130・132流路出土遺物(1)

Po26

Po33

Po34

Po25

133土器溜り出土遺物(1)

Po32

Po23

Po21

Po29

Po20

Po39

Po37

133土器溜り出土遺物（2）

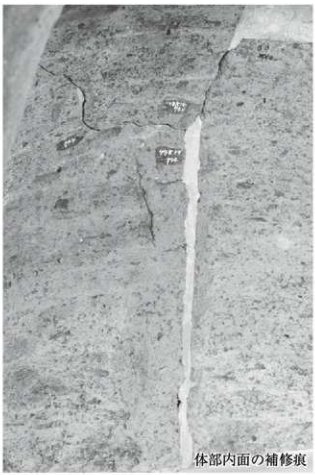
Po40

Po41

133土器溜り出土遺物(3)

Po42

底の貼り付け状況



体部内面の補修痕

133土器溜り出土遺物(4)

Po43

Po46

Po48

Po52

Po54

Po59

Po57

Po61

Po62

Po65

Po63

Po68

133土器溜り出土遺物（5）

Po70

Po73

S1

Po70・73、S1　133 土器溜り
Po82・83　219 土坑
Po84　21 面直上

Po82

Po83

Po84

133土器溜り出土遺物(6)、219土坑・21面直上出土遺物

Po92

Po93

Po94

Po97

Po99

Po100

Po102

Po92 ～ 94　232 土器溜り
Po97・99　223 土器溜り
Po100・102　234 土器溜り

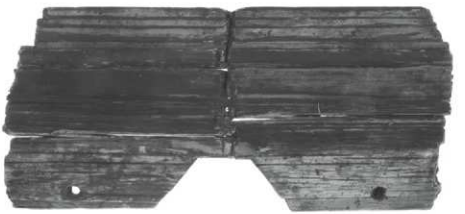
232・233・234土器溜り出土遺物

W23

W24

W25

W23　22 面水田
W24・25　223 溝
W26　222・224 ピット
W29　231 水口



W26

W29

22面水田・223溝・222・224ピット・231水口出土遺物

Po131

Po134

Po138

Po156

Po143

Po152

14a層、16a層、18a層出土遺物(1)

Po159

Po165

Po166

Po162

Po174

Po172

Po175

Po179

Po180

Po181

18a層出土遺物(2)

Po184

Po183

Po213

Po193

19a層出土遺物(1)

Po186

Po221

Po200

Po205

Po201

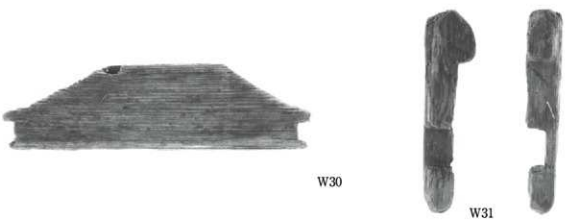
Po226

19a層出土遺物(2)

Po227

22a層対応層出土土器

包含層出石器



包含層出土木器

報告書抄録

ふりがな	つねまつおおたにいせき　に
書名	常松大谷遺跡Ⅱ
副書名	一般国道９号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	XXⅢ
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西山昌孝、森本のぞみ
編集機関	公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室
所在地	〒680－1133　鳥取県鳥取市源太12番地　電　話(0857)51－7552
発行年月日	2016(平成28)年12月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
常松大谷遺跡 (つねまつおおたにいせき)	鳥取県鳥取市 気高町 (けたかちょう) 常松字大谷 (つねまつあざおおたに)	31201	15-0591	35°30′4″	134°4′50″	20140401 ～ 20140922	800㎡	国道９号(鳥取西道路)道路改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物、特記事項
常松大谷遺跡	集落 生産	弥生時代	水田	弥生土器
		古墳時代	竪穴建物 土坑 水田	土師器、須恵器、石器など
		古代	溝	土師器、須恵器、土製品、木製品(祭祀具)など
		中世～近世	耕作遺構	陶磁器など

要約

常松大谷遺跡は、丘陵裾の小開析谷に位置する。遺跡が立地する小開析谷の開発は、弥生時代後期の水田造営にはじまり、古墳時代中期に段状遺構、後期には竪穴建物・土器溜りが構築された。

一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XXIII

鳥取県鳥取市気高町

常松大谷遺跡 II

発　行　2016年12月26日
編　集　公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室
発行者　鳥取県教育委員会
〒680-8570
鳥取県鳥取市東町一丁目271番地
電話(0857)26－7525
印　刷　株式会社矢谷印刷所